

ドラえもん「のび太のムー大陸伝説」

ノンちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夏休みの自由研究に「ムー大陸」をテーマにしたのび太、しずか、スネオ、ジャイアンの四人は、ドラえもんをお願いしタイムマシンでその存在を確かめに行くことになった。

その全てが謎に包まれた存在のムー大陸。
のび太たちは伝説のムー大陸の謎にどこまで迫ることができるのか。

(旧ドラえもんタイプのオリジナル大長編です)

目次

◆第一章 『夏休み』	1
◆第二章 『自由研究』	3
◆第三章 『出発』	7
◆第四章 『探索』	10
◆第五章 『決断』	20
◆第六章 『上陸』	28
◆第七章 『テラ』	33
◆第八章 『城門』	44
◆第九章 『迎賓館』	49
◆第十章 『グレートホール』	54
◆第十一章 『晩餐会』	58
◆第十二章 『アポロン』	63
◆第十三章 『苦悩』	70
◆第十四章 『護衛』	77
◆第十五章 『変貌』	88
◆第十六章 『昼餐』	102
◆第十七章 『遺跡』	112
◆第十八章 『ペンダント』	119
◆第十九章 『逃走』	126
◆第二十章 『謁見』	134
◆第二十一章 『合流』	151
◆第二十二章 『決意』	166
◆第二十三章 『対決』	173
◆第二十四章 『激戦』	195

◆第二十五章	『レムリア』	215
◆第二十六章	『親子』	229
◆第二十七章	『師弟』	243
◆第二十八章	『脱出』	252
◆第二十九章	『別れ』	259
エピソード『現代』	『過去』編	272
エピソード『?』篇		280

◆第一章 『夏休み』

強い夏の日差し。鳴りやまないセミの声。子供たちにとって待ちに待った夏休みが始まった。

終業式が終わった放課後の家に向かう帰り道。のび太は喜びと同時に気持ちが沈んでいた。理由は至って単純で、日常とは比べ物にならないほどの大量の宿題が控えていたからだ。

「じゃあ、後でぼくの家に集合ね」

スネオが別れ際に放った言葉を思い出す。のび太は歩きながら大きな溜息をついた。あ、と気がつくとき重たい雰囲気漂う自分の家はもう目と鼻の先だった。

玄関の前で息を呑み、物音一つ立てないように気を遣って動き出す。帰宅したことをママに気付かれないように玄関のドアを静かに開け、そーっと二階に上がっていく。部屋のふすまを開けると、そこにはいつものようにドラえもんが座っていた。

「おかえり、のび太君」

のび太は横目にその言葉を聞きながらランドセルを降ろして溜息をついた。

「どうしたの?」

「これからスネオの家に集まることになってるんだ」

「それで?」

「この通知表を見せたら、ママはきつと怒って「勉強しなさい!」って言うだろうからさあ……」

通知表をドラえもんに渡しながら、のび太はまた深い溜息をついた。

「これはまた……芸術的というか壊滅的というか……」

「のび太? 帰っているの?」

ドラえもんの顔が曇った直後、ママが階段を上がってくる足音が聞こえた。

「あわわ! ドラえもん! どうしよう? どうしよう?」

ドラえもんものび太と一緒に慌てながらも、何とかするべくジタバ

々と小回りしながらポケットに手をつ突っ込みひみつ道具を出す。

「わすれろ草！」

「いるんじゃないの。のび太、通知表は？」

ママがふすまを開けた瞬間、ドラえもんがママに“わすれろ草”のにおいがかがせた。

……ポワーン……

「……何をしてたのかしら？」

わすれろ草の効果で何をするのか忘れてしまったママに、ドラえもんはすかさず嘘の情報を吹き込んだ。

「さつき、これから買い物に出かけるって言ってたよ」

「そうそう、そうだったわ。ありがとう、ドラちゃん」

そう言っただけで下に向かおうとするママに、チャンスとばかりにのび太は話しかけた。

「あの、ママ！　これから自由研究の話し合いを……スネオの家で行うことになってるんだけど……」

のび太は勢いよく話し始めたが、最後の方は自身なさげなトーンで恐々とお伺いをたてる口調に変わっていった。

「あら、そうなの。遅くならないようにしなさいね」

ママは顔をのび太の方に向け、軽い笑みを浮かべてそう答えた。

「うん！」

ママが階段を降りて行ったのを確認してから、ドラえもんを抱きつくのび太。通知表のことは頭の片隅にもないママを見て、のび太は改めてわすれろ草の効果とドラえもんに感謝した。

「ありがとう！　ドラえもん！」

「ふふふ。のび太くん、気を付けて行ってらっしゃい」

「行ってきまーす！」

のび太は元気に階段をかけ降りて行った。

◆第二章 『自由研究』

「……それなら、こういうテーマなんてどうかしら？」

しずかがみんなに意見を言おうとした時、勢いよくドアが開きのび太が部屋に入ってきた。

「遅くなってごめん！」

「遅いぞのび太！」

後ろ頭をかき、申し訳なさそうな顔をしながら謝るのび太にスネオは軽く文句を言った。

「どうせ母ちゃんに捕まってたんだろー？」

「う、うん……まあね……」

スネオとジャイアンにからかわれながらも、強く言い返すこともできず、やや照れながらのび太は言葉を濁して腰を下ろした。

「ま、通知表を親に見せるのが怖い気持ちはわかるけどな」

「そうなんだよ……通知表を見せちゃうと、しばらく外に出してもらえなくなるんだよなあ……」

めずらしくジャイアンがフォローしてくれたことで少し気が楽になったのび太は、疲れ切った顔をしながらそう答えた。

「そりゃあ、頑張つて勉強して成績を上げるしかないんじゃない？」

ぼくなんか三つも成績を上げたから、今度ご褒美を買ってもらえるんだ！ いいだろ？」

「そんな簡単にはいかねえんだよ！」

「そうだ！ そうだ！」

「わ、悪かったよ、ジャイアン……」

間髪入れず怒鳴り返してきたジャイアンとのび太の反応で、スネオはすっかり萎縮した。

「そしたら今度、みんなで一緒に勉強会でもしましょうよ。その方が自分の苦手な部分がよりはっきりすると思うわ」

「しずかちゃん……」

しずかのやさしさにのび太は目を潤ませて感激した。

「いいね！ やろうやろう！」

ジャイアンの怒りの矛先を変えようと調子よく答えるスネオ。

「おれ、おやつが出るならやってもいいんだけどなあ」

「もう、たけしさんたら」

少し目的が違うジャイアンの言葉に全員が笑った。

「さあ、話を戻して、自由研究のテーマを決めましょう！」

「うん、そうだね！ それで、どういう話になっているの？」

「みんなをアツと言わせる大きな謎を解き明かすような、そんな大きなテーマってないかな？ って話してたところだよ」

「そんじやUFOとか宇宙人とかか？」

「ジャイアン……テーマとしてはいいんだけど、それだと、とっかかりの情報がなさ過ぎるよ……なんせ神出鬼没だからね」

「しんしゅつきばつ……ってなんだ？」

「いつどこに現れるかわからないってこと」

「そうか……確かにそうだなあ」

クスッとしずかが小さく笑った。

「ねえ、この間、テレビでやっていたんだけど……」

しずかの意見に対して全員が注目した。

「ムー大陸なんてどうかしら？」

「ムー大陸？」

「ムー大陸ってあの大昔にあったとされる巨大な国のこと？」

「そう！」

未知の存在に期待するしずかの瞳は、心なしかキラキラと輝いているように見えた。

「でも……あれこそ謎だらけなんじゃないの？」

「そうね。でも年代や存在した場所の情報は今でも大きくは変わっていないわ」

「確かに……」

しずかとスネオのやりとりを、のび太とジャイアンが興味深く見つめている。

「時期や場所ははっきりしてるのに、何も見つからないなんて不思議じゃない？」

「そうだけど……その矛盾が謎として残っているわけで……それこそ情報がないに等しいんじゃない？」

「そうね。だから、私たちで確認に行ってみない？」

「そうか！ タイムマシンだ！」

待っていましたとばかりののび太の発言に、みんなの顔が興味の色で包まれた。

「ドラちゃんに頼んでみて、ムー大陸があったとされる時間と場所につれてもらおうの」

「うんうん！」

「実際にあるかどうかはわからないけど、なかったという事実だけでも大きな収穫になると思うんだけど」

「でも……なかったら自由研究のテーマとしては使えないんじゃない……」

無駄足を踏むのが嫌なのか、スネオは少し否定的な心持ちになった。

「そんなことはないわ。見つからなかったら「ムー大陸は存在しない」ことを考察すればいいのよ」

「考察??」

のび太とジャイアンが声をそろえて言った。

「おいのび太、考察ってなんだ？」

「ぼ、ぼくだってわからないよ。読書感想文とかならわかるけど……」

「考察っていうのは、ある事実を元に自分たちでさらに深く考えることよ」

「へ、へ……?」

のび太とジャイアンは、明らかにわかっていないような弱々しい声を発した。

「でもよ、おれたちがムー大陸を発見したら、ものすごい大発見だよな！」

「世間があつと驚くだろうね！」

「こんなにくくわくすることなんて、なかなかないよ。絶対に見つかる！ いや、見つけてみせる！」

「珍しくのび太が頼もしいことを言っ^てやがる」「そうさ！ ぼくに任せてよ！」

「そんなこと言っ^て最初にへばるんじやないの？」

「ふふ、頼りにしてるわのび太さん」

「じゃあ、ドラえもん^に頼んでみるね。で、出発はいつにする？」

『明日ーっ！』

のび太が聞き終わる前に、力強い返事が一斉に返ってきた。

「わかった。じゃあ、明日の午前十時に僕の部屋に集合だ！」

『おー！』

◆第三章 『出発』

あいも変わらず疲れを知らぬセミの大合唱が聞こえてくる。今日も暑い日になりそうだ。

「そろそろみんな来るころかな……しかし暑いね。夏だから当たり前前だけど……」

うちわで仰ぎながらドラえもんはのび太の方に視線を流す。そこには勉強机にうなだれているのび太の姿があった。

「……さすがに昨日はすごかったようだね」

他人事のようにドラえもんは言った。昨日、スネオの家から戻った早々、ママのカミナリが落ちたのだ。わすれる草の効果は、そんなに長く続かないためである。

それでも、今日の午前中からみんなで集まって自由研究の課題をする件に関しては、勉強という一環で許してくれた。ただ、その許しを得るために、のび太は夏休みの宿題である算数のドリルを朝までに十ページ進めておく必要があったのだ。

「頭がどうにかなりそうだ……」

「のび太くんだって、やればできるじゃないか。まあ、ほとんど間違ってるけど……」

返事をしないのび太を見て、ドラえもんは一息ついてから言った。「しかし、ムー大陸の存在を確かめるなんて面白いじゃない。ぼくもあの大陸についてはよく知らないんだ」

「へ〜……そうなんだ〜……」

関心のないのび太の返事にドラえもんもさすがに、ダメだこりや、という表情になった。

「のびちゃん！ みんないらっしやっただわよ！」

「しずかちゃんたちだ！ はーい！」

ママからの言葉を聞いた途端、のび太は椅子から飛び降り、みんなを迎えに急いで階段を降りていった。その様を見てドラえもんは口を開けてやや呆れたように言った。

「なんだ。元気じゃない。さて……」

◇

「いらっしやい。さあ、あがって、あがって」

「おじやましまーす」

みんなが玄関を上がっているその時「ピンポーン！」という音が聞こえた。

「あら、また誰か来たのかしら？」

廊下を過ぎ二階にあがる子供たちを見送ったママが、その音に反応して再び玄関の方に向かった。

「……へんねえ、誰もいないわ？」

ママはそう言つて不思議がりながら居間に戻っていった。

◇

「やあやあ、みんないらっしやい」

「今日はよろしくね、ドラちゃん」

「大船に乗ったつもりでお任せください」

「ドラえもんにそう言われると、なんか少し不安なだけ……」

「ひみつ道具の故障とかな。ほんと頼むぜ？ ドラえもん」

「む？ なんだとー！ 失礼な！」

『あはははは』

「まったくもう。時間旅行の時はいつもトラブルに巻き込まれるから、今回はしっかりと準備してあるんだ。だから安心して自由研究に取り組むといいよ」

自信ありげなドラえもんの発言に、みんなは少し安心した。

「大体一週間位の滞在を考えてるけど、こつちに戻ってくる時間は、今から二時間後に設定しておくので親に心配をかけることもないからね」

「そこはいつもの時間旅行と一緒にね」

「そういうこと」

「じゃあ、みんな順番に机の引き出しに」

「オツケー!!」

しずか、スネオ、ジャイアンと、次々に机の引き出しに靴を持って飛び込み、全員がタイムマシンに乗り込んだ。

「ては、時間を一万二千年前にセットして……と」

「そんじやいつちよ、ムー大陸とやらを見つけてやつか！」

「そうだね！ ジャイアン！」

「素敵な大陸だといいわね」

「ぼくが絶対最初に見つけてやる！」

「よーし！ 出発ー！」

『おー！』

意気込む五人をその背に乗せて、タイムマシンは一万二千年前へと向かっていった。

◆第四章 『探索』

みんながムー大陸のことについて、あれこれと話をしている中、ゆつくりとタイムマシンが止まった。開いた出口の先がどうやら一万二千年前の世界のようなようだ。

「一番乗りー!」

「あ、のび太くん!」

言うが早いのか、のび太はタイムマシンの出口にさっそうと飛び込んだ。

「ん?」

出口から飛び出たのび太は、足元に地面がないことに気がついた。タイムマシンの出口の先は、あろうことか海のと真ん中で、周りは一画大海原が広がっていた。

「あわわわ……!」

『あははは!』

慌てて戻るのび太をみんなが大笑いで迎えた。

「まったくドジだなあ、のび太は。いきなり謎の大陸が足元にあるわけないだろう?」

「ほんとだよ。少し考えればわかりそうなもんだ」

「ちえーっ」

少しふくれるのび太。

「でも、海に落ちなくて良かったわ」

「やっぱりしずかちゃんは優しいなあ……」

「それではこれを……」

いつものようにポケットに手を入れゴソゴソと動かし、何かの道具を探すドラえもん。しばらくするとどうやら目当ての物が見つかったようで、自信ありげにその目を輝かせた。

「ただの帆船!」

海に投げ込まれた帆船はみるみる大きくなり、その甲板にドラえもんが真っ先に乗り移る。安全を確認すると、ドラえもんはみんなに呼びかけ迎え入れた。

「おおー！ けっこういい船だな！」

「帆船なんておしやれね」

「船ならクルーザーに乗ったことがあるほうが船長かな」

「そうだね。じゃあ船長はスネオくんに頼もうかな」

タイムマシンの出入り口にブイを浮かべ終わったドラえもんは、自慢家に胸を張るスネオに振り返りながら頼んだ。

「任せてよー！」

ドラえもんの言葉に気を良くしたスネオは、自分の胸を叩いてそう返事をした。

「おれは何をすればいいんだ？」

「ぼくは？ ぼくは？」

ジャイアンとのび太が間髪入れずにドラえもんに詰め寄るように質問を投げかけてきた。

「まあまあ、細かい役割分担は後にして、とりあえずこの大海原を見ながらお昼ご飯にしようよ」

『さんせーい！』

「そうと決まれば……グルメテーブル掛け！」

ドラえもんによって甲板の床に広げられたグルメテーブル掛けの周りを囲むように、のび太たちも次々に腰を下ろした。

「さ、みんな。好きなものを頼んで」

「ぼくカレーライス！」

「ぼくは上うな重！」

「おれはカツ丼が食いてえ！」

「あたしはナポリタン！」

「じゃあ、ぼくはどら焼き……と」

みんなが食べたいものを言い終えると、目の前に美味しそうな食べ物次々と現れた。食べ物からあがる湯気と、風に乗って漂う美味しそうな匂いが、全員の食欲を大いにそそった。

「ではー！」

『いただきまーす！』

塩の香りがする大海原での食事という、とても贅沢な環境が手伝っ

てか、みんなすごい勢いと早さで食べ終えた。

和む雰囲気の中、のび太たちを乗せた帆船は、ムー大陸があつたとされる方向へ舵を切り、タイムマシンの出入り口のあるブイからどんどん離れていった。

◇

ドラえもんたちが出てきたタイムマシンの出入り口から少し離れたところに乗り物の姿が一つあつた。その乗り物は船のように水に浮き、やや大きめで白く丸みを帯びた形をしていた。

翼のように見える場所の上にある手すりの傍には一人の男が立っていた。その男はドラえもんたちを見送るかのように、徐々に離れていく帆船をジツと見続けていた。帆船も小さくなり、その目視も難しくなつた頃、もう一人の男が乗り物の中から現れ、見送っている男の近くに寄つていった。

「上官殿。タイムマリンの計器チェック完了致しました」

「ご苦労」

「……」

「なんだ？」

何か言いたげな素振りを見せる部下に対して上官は切り返して質問した。

「あの帆船を追跡しなくてもよろしいのですか？」

上官と呼ばれるその男は、部下の方を振り向くこともせず、手すりに乗せた肘に体重を預け遠くの帆船を見ながら答えた。

「ああ。我々はその時が来たら動けば良い。それまでは待機だ」

「ハッ！」

指示を受けた部下は敬礼の後、持ち場に戻るべくタイムマリンの中に戻つていった。

「さて……彼らにとつて忘れられない大きな経験となるのかな……。あのような子供たちが歴史を大きく変える存在だとは……」

上官は船の中に戻る間際、もう一度ドラえもんたちの帆船の方に顔を向けた。

(彼らの旅の無事を祈ろう……)

そう心で呟いた上官は船の中にその身を運んだ。扉が閉じられてから程なくしてタイムマリオンも静かにその姿を消した。

◇

昼ご飯を食べ終わったのび太たちは、ドラえもんによって決められた各役割を果たすよう行動していた。と言つても目的がムー大陸の発見のため、操舵を握るスネオ以外は皆、双眼鏡を使って周囲を見回して報告するという単純なものだ。

ジャイアンはマストに登り高台から遠方全周を。のび太、ドラえもんはそれぞれ左右を。しずかは後方を見回していた。

存在が不明なものを探し続けるというのはかなりの苦痛を伴うもので、三時間程度でみんなに少しづつ飽きが出始めてきた。太陽も沈みはじめ日が暮れてきたため、全員甲板に集まり報告会を行った。

「本当にあるのかな……」

船首に居ながらも何の変化も感じ取れなかったスネオが思わずボヤいた。

「きつとあるよ」

最初の勢いがどこかへ消えてしまったかのように覇気を感じられないトーンでのび太は答えた。

「見渡す限りずーっと海でつまらないんだよなあ。クジラとか恐竜でもいいればなあ」

「ジャイアン！ 恐竜なんて出たら大変だよ！ これはただの帆船で、防御対策とか何もされてないんだから！」

慌ててドラえもんが制止した。

「存在しないことを証明するのって……具体的にどうすればいいのかしら」

困った顔をしながら、しずかさらに続けた。

「存在したそれらしい形跡でも見つければ、存在したのかもしれない、で終わる話なんだけど……存在しないことを証明するのって、とても難しいことなのね」

「一週間探して何もなかった。だから存在しない……だと、何もしてないのとあまり変わらないね……」

初日からみんなの意気消沈ぶりを見かねたドラえもんは、一つの提案を行うためにポケットに手を入れた。

「マルバツうらない！」

「なんだいそれは？」

「この道具はどんな質問でもマルかバツで答えてくれるんだ。今回の場合、ムー大陸が存在するかを聞けばいい」

みんな息を飲んだ。

「じゃあ、聞いてみようか」

ドラえもんが質問しようとした時、全員がドラえもんを止めた。

「待って！ ドラちゃん！」

「そんなのダメだよ！」

「やめろ！」

「そうだ！ そうだ！」

ドラえもんは意外な反応に驚いて振り向いた。のび太たちも全員、自分たちをとった行動に驚いて互いに向かい合っていた。

「どうしたの？」

ドラえもんの問いかけに対して誰も答える様子もなく、少しの間沈黙が続いた。

「存在するとわかれば、やる気も出ると思っただけど……」

「そうかもしれないねえ」

ジャイアンが答えた。

「じゃあ、どうして？」

全員が顔を見合わせてうなずき、発言をジャイアンに委ねた。

「あるとわかってる宝探しは、もうその時点で宝探しじゃねえ！ っ
てこった」

みんな、真剣なジャイアンの発言にうなずいた。

「言い出したわたしが弱気なこと言って……ごめんさい」

「しずかちゃんが謝ることなんてないよ。軽く考えていたばかりが悪
いんだ」

「すぐに結果が出ないからって飽きてるんじゃない、世紀の大発見なんて
できっこないもんね！」

「おう！ やるしかねえな！」

「偉い!!」

ドラえもんが大きな声でそう言うと、のび太たちは虚を疲れたのか全員が一瞬身を動かすほど驚いた。

「そこまで考えているのはとてもすごいことだよ！ 実のある苦労というものは、これからきつとみんなの大きな力になると思う！」

「……ドラえもんに褒められるってのもなんだけど……悪い気はしねえな」

「ふふふ、たけしさんたら」

「じゃあぼくは、きみたちが大陸探しに集中できるような状態を作ることには専念しよう」

「と言つと?」

「ただ探すだけじゃ辛いのは当たり前なんだ。だから楽しみながら探すすべしよ」

「どうやって?」

「それは明日のお楽しみ。今日はもう暗いから、夕飯を食べて早めに休もう」

そう言いながらドラえもんは、船を停泊させるためにいかりを沈めに行った。船のいかりを沈めながらドラえもんは、みんなの「答えを聞かない」という姿勢を喜んでいた。

実はドラえもんは出かける前にマルバツうらないを行い一人その答えを知っていた。答えを教えることもできたし、みんながそれを望むのならばそうしようとも思っていた。それだけ「あるかどうかかわからない」ものを探すというのは強い心が必要だからだ。みんなの真剣な気持ちを確認でき、ぼくもサポートを頑張らなくっちゃ、と改めて思うドラえもんだった。

「おまたせ。さあ、ご飯にしようか」

『さんせいー!』

「お腹ペコペコだよ」

みんなはドラえもんの言うとおりに夕ご飯を食べ、早めに寝ることにした。

「日が昇るのも早いから、明日は早朝から行動しよう！」

「おう！」

「わかった！」

「じゃあ、おやすみ〜」

そして二日目の朝が来た。昨日に続き快晴の今日もまた、日中は暑くなりそうな予感がした。探索の前にドラえもんから集まって欲しいと要請を受けていたのび太たちは、朝食を手早く済ませドラえもんの下に集合した。

「みんな集まっまたね？ それじゃ……家の感じ変換器！」

「それって家じゃなくても大丈夫なの？」

「住居として扱われるものなら何でも大丈夫。楽しい家のプレートを入れて……と」

ガタンゴトゴト……。

何か変化が起きたように帆船が大きく揺れた。

「これで？」

「うん。楽しみながら探せると思うよ。じゃあみんな！ 今日の探索も頑張ろ〜！」

ドラえもんの掛け声でみんなはムー大陸の探索を開始した。望遠鏡で物探しゲーム、楽しいトイレ遊び、操舵の操作調整遊びなど、色々な遊びが「家の感じ変換器」によって提供された。遊びながらも大陸の発見はできるし、何よりそんなに突然接近してきたりする対象でもないため、比較的ゆとりを持って探すことができる点は恵まれていた。

各自の遊びに飽きが来たら、みんな役割を交換し、別の遊びをしながら大陸の探索を続けた。しかし、結局大陸は見つからないまま、二日目が終わろうとしていた。

「結局、今日も見つからなかったかあ。残念」

「でもドラちゃんのおかげで楽しく探すことができたわ。ありがとう、ドラちゃん」

「いやあ」

頬を赤らめ頭を撫でながら照れるドラえもん。

「しかしよ、ムー大陸って確かすつごく大きいんだよな？」

「うん、日本よりも大きいとされてるね」

「そうだね」

ジャイアンの言葉を聞き、ドラえもんがポケットから一枚の地図を出して広げた。

「これがこの時代の世界地図。で、これがムー大陸……と予想されるものだね」

「大きいなあー！」

「それでドラえもん。俺たちは今、どこら辺に居るんだよ？」

「えーっと、タイムマシンの場所がここで……進んだ方向、距離を計算すると今いるのは……ここだね」

ドラえもんが地図にしるしをつけた。

「え!？」

みんなは驚いた様子だ。それはしるしをつけたドラえもんも例外ではなかった。その二つの場所を結び、ムー大陸の海岸線と重なるからだ。

「どういうこと?」

「何かの間違いじゃないの?」

「だって何にも見えないぜ?」

「……そ、そうなんだよね……」

ドラえもんも少し困った顔になった。ドラえもんは、最初から海岸線に沿って移動すれば比較的に見つけやすいんじゃないかと考えていたのだが、どうにもアテが外れた格好となった。

「この大きさなら、見落としなんてないだろうしなあ……」

のび太の言うことももつともだ。

「じゃあ、何で何にも見えないんだよ?」

誰かに向かつてというわけではないが、ジャイアンは少しいらつきながら問いかけた。その問いに全員が口を閉じ、うーん……と唸って答えた。

「でもさ、そんな簡単に発見できるなら謎になんてならないんじゃない?」

「スネオさんの言うとおりでわ。きっとその謎があるから発見できないのよ」

「どんな謎なんだろう？」

「消えることができるのか？」

「そんなことができる大陸なんて発見できっこないよ」

「例えだよ、例え」

落胆したのび太を心配するかのようには、スネオは自分の意見を自ら打ち消した。

「でも、さすがに謎の大陸と言うだけあって簡単には行かないね」

真剣な顔つきで何かを考えているドラえもんを夕日が横からさしていた。

「明日は少し探し方を変えてみよう。空や海の中も調べた方が良さそうだ」

「うん」

「そうね」

「だな」

「そうするしかないか」

できることは何でもやってみよう。みんなそう考え、ドラえもんの意見に同意した。

「じゃあ、明日また頑張るといふことで、今日も夕ご飯を食べて早く寝ようー」

「明日に備えなくちゃね」

「意地でも見つけたくなってきたな！」

「ほんと、ほんと」

「よーし！ 絶対に僕が見つけてやる！」

「お!? 大きく出たなのび太。なら競争といくか？ 望むところだ！」

「その意気だよ、のび太くん！ みんな！」

探索方法を変えることで明日への期待を膨らませたドラえもんたち一行は、早々と夕食を済ませ眠りについた。一面満天の星に埋め尽くされた夜空は、明日の天気も快晴であることを語っていた。

こうして二日目は終わった。

◆第五章 『決断』

三日目の朝が来た。太陽を遮るものが何もない海のと真ん中のため、陽が射すと共に全員が目を覚ました。

とはいえこの目覚めも二回目だから慣れたものである。各自が部屋で着替えた後、甲板に集合。全員そろったのを確認したら早速朝食をとった。今日は広範囲を探索するため、みんないつもより多めに食事を摂るよう心掛けていた。

「じゃあ、みんな準備はいいかい？」

「おう！」

「しずかちゃんとスネオくんは海の中の探索をお願いします」

「わかったわ」

「任せてよ！」

「そしたら、いつもの道具を……と」

ドラえもんはいつもより長くポケットの中に手を入れ、色んなものを探している素振りを見せた。

「きせかえカメラ！」

「エラチューブ！」

「深海クリーム！」

「真水ストロー！」

のび太たちは感心しながらドラえもんが次々と道具を出す様子を眺めていた。

「そして忘れちゃいけない……通信機！」

「と、トレーサーバッチ！」

「あ、ドラえもんも持ってるんだ、通信機」

「いや、ドラミから借りてきた」

のび太がズッコケる横で照れながらベロを出すドラえもん。

「きせかえカメラは僕の出番だね」

スネオが自信ありげに前に出る。

「今度はちゃんと女の子用の水着も描くんだよ？」

ドラえもんがジーツと疑いの目をスネオに向ける。しずかはドラ

えもんの発言から白亜紀の時を思い出し、赤面しながら胸を隠すポーズをとりスネオを睨んだ。

「あ、あれは、わざとじゃないよ！　　というか撮ったのはドラえもんだろー！」

のび太、ジャイアンもその時のことを思い出しニヤついた。

「もーっ！　みんな知らない!!」

怒って機嫌を損ねてしまったしずかにみんなは平謝りをし、全員なんとか無事に水着への着替えを終えた。

「じゃあ、行ってくるわね」

「空は頼んだよ！　ジャイアン！」

「おう！　任せておけ！」

そう言うのと、しずかとスネオの二人は同時に海に飛び込んでいった。

「さて、次はジャイアンか。と言っても、これと言って特別なものではないけど……タケコプター！」

「待ってました！」

「あ、通信機とトレーサーバッチを忘れずに」

「おう！　じゃあ、行ってくるぜ！」

「よろしく」

勢いよく空に上がったジャイアンの姿はみるみる小さくなっていった。

「さて、ぼくたちは、いつも通り周囲を見渡そう」

「ちえーっ。でも、ぼくらが基地の役割をしないと、みんなが迷子になった時に大変なことになるからね」

「そうだよ。ある意味ぼくたちは一番重要な役割なんだよ、のび太くん」

「……そっか。そうだよね。よーし！　頑張ってみんなよりも早く大陸を発見してやるぞー！」

『おーっ!!』

のび太は船首に、ドラえもんは船尾に向かいそれぞれ監視を始めた。

◇
ピピピピ……ピピピピ……

小一時間程経過したころ、ドラえもんにしずかから連絡が入った。「もしもしドラちゃん……聞こえますか?」

「はいはい、こちらドラえもんです。聞こえますよ、どーぞ!」

「しずかです。スネオさんと海の中を探索したけれど、今のところまだ何も発見できていません。今度は船の進む先の方を探索します。どーぞ」

「了解です。引き続き探索をお願いします」

通信機の鳴る音を聞いて、船首で周囲を観測していたび太がドラえもんの下に駆け寄ってきた。

「何にも見つからないって?」

「そうみたい。まあ、海は広いからね。今度は船の先を調べてみるって」

「そうかあ」

ピピピピ……ピピピピ……

間髪入れずにジャイアンから連絡が入った。

「おう! 俺さまだ!」

「はいはい、こちらドラえもんです。何か発見できた? ジャイアン」

「上空から全周囲を眺めちゃいるが、今のところ変わったものはねえな。見渡す限りぜんぶ海だ。少し船から離れて探索するぜ」

「了解です。気をつけて」

「やっぱり何にも見つからないって?」

「……うん」

「そうかあ、でも、頑張るしかないね! よし!」

そうやって自分を奮起させのび太は自分の持ち場である船首に戻っていった。海中は仕方ないとして、ジャイアンからの情報に収穫がないのはドラえもんとしても意外だった。少し不安を感じたその時、のび太が大声でドラえもんを呼んだ。

「ド、ド、ドラえもん!!」

「どうしたの? のび太くん!」

大きな生物でも現れたのかと思い、ドラえもんは急いで船首にいるのび太のもとに駆けつけた。

「あ、あれ！ あれ！」

「一体どうした……うわっ!!」

驚くドラえもんとのび太の目の前には、なんと島の姿があった。しかもそれはほんの数メートル先にあり、船ですぐに上陸ができる距離であった。あまりに突然の出来事に二人は立ち尽くしボーゼンとした。

「すごいじゃない！ のび太くん！ 大発見だよ！」

ドラえもんはのび太を褒め称えた。が、のび太はイマイチ乗ってこない。

「のび太くん？ 嬉しくないの？ ジャイアンとの競争に勝ったんだよ？」

「え？ あ、うん……。でもドラえもん……この島、突然現れたんだ……」

「え!!」

「ずっと前方を見てたら、つい飽きが来始めて、ついあくびをしたんだ。そしたら次の瞬間、目の前にこの島が……」

「なんだって!? そんなバカな!?!」

ドラえもんは突然現れたという不思議な島を見ながら色々と考えた。だが、これだけの規模の島に、誰一人気付かないというのはかなり異常な状況と判断し、すぐに考えることを止めた。

「ともかく、みんなを呼び戻そう！」

「うん！ そうだね！」

「しずかちゃん！ スネオくん！ 聞こえますか？」

「なくに？ どうかしたの？ ドラちゃん」

「船の前方に大きな島が現れたんだ。二人とも急いで戻ってきてくれる？」

「え!?! わ、わかったわ！ スネオさんと一緒に戻るわね！」

「お願いします！ 次はジャイアン……と」

ドラえもんはしずかとの通信を切り、すばやくジャイアンとの通信

を開始した。

「もしもし、ジャイアン？ 聞こえますか？」

「お、なんだ？ どうした？」

「船の前方に島が現れたんだ！ 急いで戻ってきて！」

「なんだと!? ほんとうか？ ちくしょう！ のび太に負けたか！

やるじゃねーか！ のび太！」

「う、うん……」

「あれ？ なんだよドラえもんが見つけたのか？」

「い、いや、ぼくだけ……」

「なんだよ！ じゃあもつと喜ぶってんだよ！ まったく！」

「と、とにかく急いで戻ってきてくれ！」

「あ？ わかったよ」

ジャイアンとの通信を終えると船の右前方の水面から泡が立ち始めた。しばらくすると、その泡の中から船の前方探索から戻ったしずかとスネオが一緒に顔を出した。

「船の前方って何にもないじゃん……うわ!!」

「え……？ きゃあ?!」

しずかとスネオは、まるで初めて見たかのような驚きぶりをドラえもんとのび太に見せた。

「？ なんで今驚くの？」

「だ、だって……」

「……ねえ」

「とにかく甲板に上がっておいでよ」

「う、うん」

のび太に促され、しずかとスネオは不思議そうに現れた島を見ながら甲板に上がった。

「それで、なんで驚いたの？」

「それは……」

ドラえもんの問いにしずかが答えようとした時、上空から急降下してきたジャイアンが大きな着地音と共に甲板に降り立った。

ドンッ!!

なんだ!? と驚きながらその音の方を向いたのび太とドラえもんに対して、ジャイアンは走ってきて二人に強烈なげんこつをお見舞いした。

「いてっ!!」

「いきなり何するんだよ! ジャイアン!」

のび太とドラえもんは同時に怒ると、ジャイアンは間髪入れずに言い返してきた。

「どこにも島なんてねえじゃねえか!」

「ジャイアン……あれ……」

「あ? うわっ!」

スネオが指差す方向を見てジャイアンは驚いた。

「なんだ! いつの間に!」

のび太とドラえもんはブスくれてジーツとジャイアンを見た。

「あ、ああ! わりいわりい! へへへ」

「まったく乱暴なんだから……」

「わ、悪かったよ。すまねえ。このとおりだ!」

拜むように謝るジャイアンを見て、状況が状況だけに二人は仕方なく許すことにした。

「でもよお、上から降りてたときには何も見えなかったんだがな」

「え?」

「そうそう」

「私たちも水中から船の前方を見て……ううん、前方から戻ってきたのよ」

「なんだって!」

ドラえもんはすぐさまタケコプターを全員分出した。

「確かめよう!」

みんなタケコプターを手に取りうなずいた。さっそく全員で上空に上がり、船の前方を見てみると、なんとそこには島の姿はなく、あたり一面海になっていた。

「なんだって!」

「島が、島が消えた!」

「どうなってるの?」

「な? ほんとだろ?」

「こんなことって……」

「もう一度、船に戻ってみよう!」

全員、島を見ながら甲板目指して降下し始めた。しかし目に映るのは、波に揺られ陽ざしがキラキラと反射する海面のみだった。やっぱり幻覚か? と皆が感じ始め、もうすぐ甲板に降り立つというその時、島は突然その姿を現した。

「島だ! 島が現れた!!」

「これは一体……」

「どうなってるんだ?」

「なんだか怖いわ」

「な、なんなんだよ、これ……」

甲板に降り立ったドラえもんたちは、突然姿を現したその島をしばらく眺めていた。

「おそらく、水平からしかその姿が見えないんだ。しかも近くじゃないと見えない……。これは……高度な文明を持っている島と考えた方がいい!」

「これがムー大陸なのかな?」

「わからない。単純に見てもこれは地図にあるような大陸と呼べる大ささじゃないし……上から全体が見えないから何とも言えないけど」

しばらく沈黙が続いた後、ジャイアンが口を開いた。

「なんだよ、ここに来てビビってるのか? いいじゃねえか。元々謎の島を探してたんだ。これくらいのことではいちいち驚いてられっかよ!」

「で、でも……」

「これは得体がしれないなんてもんじゃ……」

「まったく! だらしねえなあ!」

ジャイアンはズカズカとのび太とスネオの間に割って入り、そのまま船首の先へと進んでいった。

「どうするの? ジャイアン」

「決まってんだろ！ あの島を探検するんだよ！」

「本気なの!？」

「危険な島かもしれないのに！」

「だからだよ！ 冒険の血が騒ぐってもんじやねえか!? え!？」

こういう時のジャイアンは頼もしいな、のび太とスネオは素直に感心した。

◆第六章 『上陸』

目の前に姿を現した島はとても美しかった。

ドラえもんたちはその未知の島に上陸するための準備に取り掛かっていた。まずは体力を回復するためにしっかりと食事を終え、その後、各自各様の装備を念入りに確認していた。

「みんな！ 準備はいいかい？」

「いつでもいいぜ！」

「うん！」

「いいわ！」

「オツケー！」

滞りなく準備を整え元気よく返事をしたのび太たちは、自分の道具を構えながらドラえもんに返事をした。

「今回は故障はないんだよな？ ドラえもん」

「当たり前だ！ ちゃんと点検に出したんだから！」

「あはははは！」

「もう……じゃあ、そろそろ行こうか！」

「おーっ!!」

ドラえもんたちを乗せた帆船は上陸するべく、白波を立てながら徐々に未知なる島へとその距離を縮めていった。接岸できるほどの距離に近づいたとき、しずかが何かに気づいた。

「あ、あそこを見て！」

「どっ？」

「海面との境目よ！ 浮いてるのわ、あの島！」

『ええ!?!』

確かにその島は海面から少し浮いていた。ホバークラフトのようなものかと一瞬ドラえもんは感じたが、それでも海面に一切の影響がないのはおかしいと思い直した。

（光学迷彩といい、どうやら、かなりの科学技術を持っている島らしい……これは油断できないぞ）

ドラえもんたちは上陸する場所として、浜辺から少し離れたところ

の船を隠せるくらいの高さがある崖を選んだ。船を島へと近づけるに連れて周囲は徐々に霧に包まれていった。

「この霧は助かるな」

警戒心を強め、密かに上陸しようとしていたドラえもんは、この偶然の霧に感謝した。船を崖の壁際につけ、全員が上陸したのを確認したドラえもんは、見つからないようにすばやく船をポケットの中にした。

上陸した彼らの目の前には立派な木々が立ち並ぶ広大な森が広がっていた。環境が良いためなのか、高さも十メートル近い木々がほとんどだった。

空に近いほど葉っぱも生い茂るため、森の中にはあまり日が差し込まず、やや暗い印象を受ける。耳を澄ますと、かすかに鳥や動物の声がか聞こえてくる。何かしらの生態系はいるようだ。それは全員が感じ取っていた。

スーパ―手袋のジャイアン、二丁空気銃ののび太、ショックガンのしずかにひらりマントときびだんごのスネオ、そして空気砲のドラえもんという布陣で森に挑む。いつになく攻撃色が強い布陣なのは、それだけドラえもんが相手を警戒しているという現れだった。

「それじゃみんな、行くよー！」

「おうー！」

ジャイアンを先頭に、のび太、スネオ、しずか、殿にドラえもんという直線陣形をとり、とにかく島の中央を目標そうと目標を立ててゆつくりと歩みを進めた。

「今のところは……何もないね」

「『普通の森』という感じね」

「油断しないで……何が起きるか全くわからないんだから」

全員が意識を集中しながら慎重に歩みを進めていたその時、斜め前方から女の子の悲鳴が聞こえた。それを聞いたジャイアンとのび太は、いち早くその声の元へと駆け出した！

「ぼくたちも行こうー！」

反応が遅れた三人も慌ててジャイアンたちを追いかけた。

小道に飛び出したジャイアンの目の前には、オオカミの群れに追われ一生懸命逃げている女の子の姿があった。

足がもつれた女の子は、ついにつまづいて転んでしまった。そこをオオカミが襲いかけたその時、ジャイアンのストレートがそのオオカミの頬に炸裂した。突然勢いよく吹き飛ばされた仲間のオオカミを見て、他のオオカミは動きを止め一斉にジャイアンの方を睨んだ。

仲間がやられたのに萎縮もせず、そのオオカミたちはジリジリと警戒しながら徐々に距離を詰めてきた。十秒近くならみ合っている状況が続いたが、オオカミたちは自分たちが飛び込める射程に入った途端、次々にジャイアンへと飛びかかった。

「きやがれ！ ぶっ飛ばしてやる！ おらーっ！」

右フック、左アッパーと機敏な動きで次々と襲い来るオオカミを殴り飛ばすジャイアン。しかしオオカミの数が多かつたためジャイアンの反応にも限界があった。虚を突いて二匹のオオカミがジャイアンの背後から同時に襲いかかってきた。

背後からの攻撃に気付いたジャイアンもさすがにダメージを受けるのを覚悟した時、空中の二匹のオオカミが悲鳴を上げてバランスを崩し、突然地面に落下した。ハッと横を向くとそこには、空気ピストルの指先に息を吹きかけているのび太の姿があった。

「ジャイアン大丈夫？」

「助かったぜ！ 心の友よ！」

「ジャイアンはその子を守って！」

「お、おう！ わかった！ だけどお前は どうするんだよ！」

そうジャイアンに言われたのび太は両手をピストルのように構え振り向き、自信の笑みをもって答えた。

「ここはぼくに任せてよ」

ジャイアンはのび太の射撃の腕前を思い出し、少し嬉しそうに笑った。

「頼むぜ、のび太ー！」

オオカミはのび太を警戒してか周りを囲みはするがなかなか襲っては来なかった。襲い掛かるタイミングを見計らっているその時間

が少しづつ経過していく中、草むらからのび太たちの名を呼ぶ声が聞こえた。

「のび太くん！ ジャイアン！」

ドラえもんたちが草むらから飛び込んできたその音を合図に、全てのオオカミがのび太とジャイアンに襲いかかった！ ……と、ほぼ同時に全てのオオカミがさつきと同じように次々と地面に落下した。それは正に“一瞬”というにふさわしいほどののび太の早撃ちがオオカミたちを捉えたのだ。オオカミたちはよろめきながら起き上がった後にのび太を睨みつけた。だがのび太は構えを解くことなく警戒を維持していた。

相手が悪いと感じたのか、オオカミたちはしばらくのび太を睨んだあとに一匹、また一匹と逃げ出していった。

周囲からオオカミたちが居なくなつたことを確認した後、ふう…とのび太が一息ついた。ドラえもんたちはしばらくその光景に呆気にとられていたが、最初にスネオが感嘆の声をあげた。

「すげえ……」

「かつこよかったわ、のび太さん！」

「さすが、のび太くん！」

「ほんと助かったぜ、のび太！ ありがとよ！」

「い、いやあくそれほども」

みんなに褒められて体をくねらせながら照れるのび太。

「あ！ それよりジャイアン！ その子、大丈夫？」

「あ？ ああ、気絶してるみたいだが大きな怪我はなさそうだ……な！？」

ジャイアンは気絶しているが故に自分に身体を預けてくる女の子に対してかなり戸惑った。しずかはその様子を見てクスツと笑い、その女の子の傍に寄って行った。

「女の子なら私が見ないとね。たけしさん、素敵なナイト役ご苦労さま」

「ナ!? ……そ、そんなんじゃないよ！」

しずかにナイトと言われ赤面したジャイアンは、ぎこちない動きで

女の子をしずかに預けその場からさつと離れた。

「あれ？ ジャイアンが照れてる」

珍しく照れるジャイアンを見て、ここぞとばかりにスネオが茶化した。当然スネオはジャイアンのげんこつを食らうことになった。

「いつてー！ って、スーパー手袋は外してよ！ もうー！」

「だからすごく軽く触れただろ？」

「ちえっ」

「あはははは」

「……と、そんなにゆつくりしてはいられないな。さて、これからどうするか……」

「それなりの騒ぎだったからね。他の誰かが気づいたかもしれない」

「そうだね。とにかく見つからない安全な場所が必要だな……えーつと……」

ポケットの中を覗き込みながらドラえもんはゴソゴソと手を動かした。

「かべ紙ハウス！ と……片付けラッカー！」

まずはかべ紙ハウスを木にかけて……。さ、みんな急いで中に入つて！」

みんなが入ったあとに片付けラッカーをかべ紙ハウスにかけると、かべ紙ハウスはすぐに透明になり全く見えなくなった。ドラえもんは周囲を見回して誰からも見られていないことを確認すると、すばやくかべ紙ハウスの中に入っていった。

◆第七章 『テラ』

「う、うん……」

ベッドで寝ていた女の子は、瞼を動かし目を覚ました。横にいたしずかは彼女が動いたことに気が付き、優しくゆつくりと話しかけた。「目を覚ましたのね。熱とかは大丈夫かしら？」

しずかが寝ているその子の額に手を当てようとしたとき女の子は怯えて上半身を起こし、後ろに身体をずらして少し距離を取った。

「あ、驚かせてごめんなさい。私は敵じゃないわ。大丈夫よ」

しずかは軽いジェスチャーを交えて真摯に訴えかけながら優しくにこりと笑った。慣れるまで少し時間が必要かな……そうしずかか思った時にドラえもんたちがドカドカと大きな音を立てて部屋に入ってきた。

「あー！ 目を覚ましたの？」

たくさんの男の子が一度に押し掛けて来た様を見て、女の子は怖がって頭から布団を被ってしまった。

「もう！ 女の子の部屋には静かに入るものよ！」

「ご、ごめんなさい……」

しずかに思いつき怒られたのび太たちは、その場でシュン……と小さくなった。

周りが静かになったのを感じ、そっと布団から顔を出した女の子に對して、しずかは再び優しく微笑んだ。しずかのその様子を見てドラえもんたちも真似ようと思いつきぎこちない笑みを一齐に作った。「!?」

ドラえもんたちのその笑みが絶妙な気持ち悪さだったのか、女の子は再び布団の中に隠れてしまった。

「もー！」

「ど、どうすれば良いんだよ……」

またもやしずかに怒られ、ドラえもんたちは困り果てた。フウツと短くやや強いため息をつくしずか。

「ドラちゃん、ホンヤクコンニヤクをもらえないかしら？」

「あ、そうだね！ ホンヤクコンニヤク！」

しずかは受け取ったホンヤクコンニヤクを食べてから軽く布団をポンポンと叩き、隠れている女の子に呼びかけた。

「驚かせてごめんなさい。怖くないわ。顔を見せてもらえないかしら？」

しずかの声を聞き恐る恐る顔を出す女の子。周りを見て安全な空気が伝わったのか、ややうつむき加減でその上半身をゆっくりと起こした。

身長は僕と同じくらいかな？ 年は……ぼくらより少し下な感じに見えるな。のび太は女の子の外見からそう感じた。

「わたしはしずか。あなたとお友達になりたいの。あなたの名前を教えてくださいる？」

「……テラ」

「テラ……すてきな名前ね。よろしくね、テラ」

しずかは手を出し握手を求めた。テラはしばらく考えたあとにしずかの顔を見ながら握手に応じた。二人は互いに見つめた後、軽く微笑んだ。

「みんなわたしのお友達よ！」

しずかはドラえもん達みんなの方を向き、手のひらで示した。

「ぼくドラえもんです！」

「ぼくのび太！」

「ぼくはスネオ！」

三人が自己紹介した後少し間があいた。あれ？ と期待した流れにならず妙な空気になったと思つた三人は、残つたジャイアンの方をのぞき見た。ジャイアンは腕を組んで入り口の壁に寄りかかり、半身の姿勢でテラの方をちらつと見ていた。

「ジャイアン？」

この状況がわかっていないジャイアンにのび太が声をかけると、はっ！ と我に返つたジャイアンは顔を赤くして慌てふためいた。が、すぐに照れを隠すように取りつくろつた。

「お、おれはジャイアン……だ」

わざとらしい咳払いをする見慣れぬジャイアンの振る舞いにみんなはポカンとした。その慌てふためいたジャイアンの姿を見てテラはクスツと軽く吹き出し、その顔は笑顔に包まれた。

みんなもテラにつられるように笑い、一気に場が和んだ。当の本人であるジャイアンも、後ろ頭を掻きながら自分の振る舞いに思わず笑ってしまった。少し心が落ち着いたのか、テラは自らその口を開き、少しづつ話し始めた。

「あの……わたしはどうしてここにいるのでしょうか？ たしか、オオカミの群れに襲われていたと思うのですが……」

「あなたがオオカミの群れに襲われていたところをみんなが助けてくれたのよ」

「えへへへ」

そうしずかに言われてみんなはやや照れた。

「特にジャイアンは必死だったよね」

スネオがここぞとばかりにからかうようにジャイアンに言った。もちろんげんこつが返ってきたのは言うまでもない。

しずかはテラとの会話を続けようとしたが、突然何かに気付いたような表情を見せ、みんなに確認した。

「みんな！ テラの言葉がわかるの!？」

「あれ？ そういえば……」

「ホンヤクコンニヤクも食べてないのに?」

不思議に思ったしずかは、テラに自分たちの言葉が理解できるのかを尋ねてみた。

「はい。みなさんの話している言葉はわかります」

「そうなの……てつきりここでは違う言葉が使われているかと思ったわ」

「はい。違います。え……と、This is the language here」

「英語だ!？」

スネオが思わず叫んだ。

「え？ 英語なの?」

しずかはホンヤクコンニヤクの効果で、テラの話しした英語も自動的に日本語に変換されていた。そのため、スネオに言われるまでテラが違う言葉を話していたことに気付かなかった。

「テラ……あなただってすごいのね。色んな言葉が話せるなんて……」
「そうなんですか？　ここでは普通のことなのですが……しばらく会話を聞いているうちに理解できるようになっていくんです」

「へー……頭いいんだなあ、うらやましい〜」
のび太はテラのその能力を素直にうらやましがった。

「あ、あの……」ジャイアン〃というのは……？
テラが少し首をかしげながらしずかに聞き返した。

「あ、〃ジャイアン〃というのは、たけしさんのことよ」

「たけし？」

「ええ。みんなたけしさんのことをそう呼んでいるの。ややこしくてごめんなさい」

そう言いながらしずかは、壁に寄りかかっているジャイアンの方を手をかざし、彼がたけしさんよ、とテラに改めて紹介した。

「たけしさん……助けてくれてありがとう」

テラはその上半身をジャイアンの方を向けて軽くお辞儀をした。

「い、いや、まあその……なんだ、ひ、人が困ってれば助けるのは当然だからな……」

頬を赤くしたジャイアンの言葉は、照れのせいか後半はよく聞き取れなかった。

「へえー……」

本当に〜？　という疑いの表情でジャイアンの顔を覗きこむ、のび太、スネオ、ドラえもんの三人。

「な、何だよ？」

「今度はぼくたちも助けてもらおうね」

「そうだね」

「たしかに」

ゴゴゴン！　と低く豪快な音と共に、げんこつ三発が綺麗に決まった。

「俺にもあの子みたいな”かわいい”妹がいるから、つい身体が勝手に反応しただけだ！」

たしかにジャイアンは妹にすごく優しい、いや、優しすぎると言っても過言ではないお兄ちゃんだということとはみんな知っていた。だからそのジャイアンの発言の中で”かわいい”という点以外にはみんな納得した。

「あ、ところでテラ。ここは一体どんな……」

ドラえもんがテラに問いかけようとした時、しずかが質問をかき消すように割って入った。

「ドラちゃん待って！ わたしたちの質問はあとにしましょ？」

そう言われたドラえもんはハツとした。

(そうか……この女の子は全くの未知の空間にいるんだった……)

「たしかにそのとおりだね。ごめんね、しずかちゃん」

「ううん、わかってくれてありがとう。テラ、わたしたちに聞きたいことがあったら遠慮なくどうぞ」

しずかのやさしい声掛けにより、テラは少しホツとした表情を浮かべ、いくつかの質問をみんなに投げかけた。

「あなたたちはどこから来られたのですか？ 見たところ、この島の方々ではないようですが……」

「わたしたちはこの島の外から来たのよ。航海中に偶然この島を発見したの。それで上陸してこの森を探索したら、あなたの悲鳴が聞こえたの。そこにみんなで駆けつけて……今のこの状況よ」

ドラえもんたちはしずかの発言にうなずきながら二人の会話を見守った。

「そうだったんですか、島の外から……服装もみたことないものですし、間違いなさそうですね」

テラは瞼を半分ほど閉じ、遠くを見るような目で少し悲しそうな表情を浮かべた。

しずかは、なぜ悲しそうな顔をしたのか気になり、思わず聞き返そうとしたが、今はダメ！ とグツとこらえた。

「他には？」

「あ、あの……ここはどこなんでしょう？ あ、森の近くに、こんな部屋のある建物があったという記憶はないのですが……」

「ここはドラちゃんが作った特別な部屋なの」

「えへへ」

「この部屋を……!?」

「ドラちゃんはいろんな便利な道具を持っているの。この部屋もその道具の中の一つなのよ」

「こんなに大きいものを!？」

ドラえもんは待つてましたとばかりにヒョイと一歩前に飛び出した。

「見ててー!」

そう言つてドラえもんは“もしもボックス”をポケットから出してみせた。小さなポケットから意外なほど大きなものが飛び出した様子を見て、驚きのあまりテラは両手を口にあてた。

「このポケットには、どんな大きなものでも入るんだよ。もちろんこれくらいの部屋もね」

ドラえもんは“もしもボックス”をポケットにしまいながらそう説明した。実際にはかべ紙ハウスなので大きさなんてないに等しいのだが、不思議な力を持つているという説明には十分だった。

テラは、その不思議な光景にビックリした様子ではあつたが、すぐに冷静さを取り戻した。

「ドラちゃんさんは王族に匹敵するような不思議な力を持つてるんですね」

「でへへ、それほどでも」

少し間を置いた後、テラはまた悲しそうな顔をした。みんな、さすがに質問したくなつてきたが、テラが口を開くまで待とう、とその気持ちを懸命に抑えた。

「あ、すみません……わけがわからないですよね……。みなさんがとても優しくして……できればお友達になりたかつたんです」

「その何が問題なの？」

「それは……昔からこの島のことは島の外の人たちには知られてはい

けないという教えがあるのです」

「なるほど……あれほど発見されなかったための仕掛けがあったのはそういうことか」

「はい。だから島の外から来た人たちは皆、牢屋に連れて行かれてしまうのです……それが辛いのです……」

「牢屋かあ……」

やや困った素振りを見せるドラえもんを見て、みんなも少し眉を歪めた。

「できればみなさんに助けて頂いたお礼をしたいのですが……衛兵がみなさんの格好を見たらきつと捕まえられてしまうと思います」

自分達の身の上を心配する発言をしたテラを見て、敵意よりも好意を持つてくれたと感じ取ったしずかは、そろそろこちらから質問しても大丈夫かな、と思った。

「テラ。私たちのことを心配してくれてありがとう」

「そんな。私の方こそ危ないところを助けて頂き、本当にありがとうごじました。お礼を言うのが遅くなってしまつてすみません」

いいのよ、という感じでしずかは首を小さく左右にふつた。

「私たちからも少し質問させてもらつてもいいかしら?」

「はい」

しずかは、あたしが最初でもいいかしら? という確認をするような表情でドラえもん達の方に振り返った。いいよ、という意を込めてみんなはうなずいた。

「ここには、どれくらいの人たちがいるのかしら?」

「そうですね……人口は大体二千人くらいだと思います」

村の規模ではあるが、一つの種族が一統制下において暮らすには適している人数であった。

「この島にはとても偉い方っているのかしら?」

「はい。全島民を統率している王族が存在します」

先の会話でテラから「王族」という単語が出ていたため、この返答はしずかの予想通りだった。そしてこれは、この島に階級や秩序が存在しているという証でもあった。

「この人たちは毎日何をして暮らしているのかしら？」

「みんな自分たちに割り当てられた仕事をしています。食べ物を作る人、狩りをする人、品物売る人、民を守る人、島を守る人、あと、病気を治してくれる人もいます」

「へえー、色んな役割の人がいるんだなあ」

「小さな国みたいだね」

スネオの発言に、そうね、と答えてしずかは少し考えた。

（本当に現代とそこまで変わらないわ。となると警察みたいなものが組織としてあるわけで……）

「じゃあ、牢屋に連れていかれた人たちはどうなるのかしら？」

テラの顔が少し曇った。

「わかりません……ただ、島の外から来た人とわかった場合は、二度と牢屋の外には出られないのではないかと思います……」

「……」

「できればお礼をしたいのですが、こんなに優しいみなさんが捕まってしまうのは……」

「牢屋かあ、牢屋に入れられるのは困るなあ……」

ドラえもんが思いがけないことを言うものだから、のび太たちはドラえもんを不思議そうな顔で見た。しずかだけはドラえもんのその言葉の意味を理解しているようで同意するようにならずいた。

牢屋は正直、通り抜けフープがあるので大した問題ではなかった。それはみんながわかっていた。ドラえもんとしずかが困っていたのは、自分たちが牢屋から脱出した後のテラの処遇だった。

テラが自分たちと一緒にいるところを見られ、しかもその後にはぼくらが牢屋に連れていかれたとする。当然、ぼくらは牢屋から脱出しなければならぬし、そうするだろう。だがそうすると、ぼくたちを連れてきたテラは周りから非難され、挙げ句疑われるかもしれない。テラに迷惑がかからないように、テラと仲良くなる方法はないものか。ドラえもんがやや長い時間一人で悩んでいると、ふと、のび太が一声発した。

「でも、テラも僕たちと同じ黒髪だし、服装以外はそんなに変わらない

じゃないか。それを外見だけで判断されるなんて……」

「服装、外見……そうか！ ドラえもん、着せ替えカメラを出してくれる？」

スネオはのび太のつぶやきからヒントを得たらしく、得意気になって前に出た。

「あ、そうか！ わかった！ スネオくん、お願い！」

「サンキュー！」

スネオはテラを見ながらその場でサラサラとデッサンを行い、着せ替えカメラにセットした。

「さてそうになると、まずはしずちゃんかな」

「カシャ！」

シャッターを切る音がした直後、しずかの服がテラと同じデザインのものに変わった。

「髪飾りは少しアレンジしておいたよ」

ステキ！ と言いながらくるりと一回転するしずかを見て、テラの顔は驚きながらも少し明るくなった。

「さ！ 次いくよ！」

スネオはテラの服のデザインを元に男物の服をササツとデザインし、次々とみんなの服装を変えていった。

「これでどう？」

スネオも含めて全員の服装がこの島の住民の服装に変わった。男性陣はテラの方を向いて、各々が軽くポーズをとった。

「すごい！ みなさんはとてもすごい方たちなんですネ！」

「ふふふーん」

「これなら怪しまれなくて済むかしら？」

「はいー！」

テラは元気よく答えた。これならぼくたちが慎重に行動すればテラに迷惑をかけることはないだろう、とドラえもんも少し安心した。

「しずかちゃん！」

「なあに？ ドラちゃん」

「ぼくからも一つ質問させてもらってもいいかな？」

しずかはテラが軽くうなずくのを確認してから、どうぞ、とドラえもんに手を差し出した。

「ありがとう。テラ、この島では悪いことをした人たちは牢屋に連れていかれるの?」

「悪い人……」

テラの顔がまた少し曇った。

「……テラ?」

「あ、すみません。そうですね……目に余る行為を行うものがいた場合はすぐに牢屋に連れていかれます。ただ、なにぶん小さい島ですから悪事はすぐに報告されてしまいます。こういった環境が抑止力となり、ここには悪い人なんて殆どいないのです」

「すごい平和な島なんだなあ……すごいね」

「うん」

(でも……だとしたら何で困るような顔をしたんだろう?)

ドラえもんはテラの顔の陰りが気にはなったが、何となく訳ありな雰囲気を感じ取ったため、ひとまず納得した。そしてしずかの方を向き、ぼくはもういいよ、と手で合図を送った。しずかはそれを受け、テラに最後の質問を投げかけた。

「最後にもう一つだけ。ここはなんて名前の島なのかしら?」

「ここですか? ムーと言います」

『ムー!』

みんなは思わず揃って大きな声を出した!

「は、はい……あの、ムーだと何か……?」

テラはかなり驚いた様子で聞き返した。

「い、いやいやいやいやー!」

「何でもないです、はい」

「え、えへへ……」

下手なごまかしではあったが、そんなみんなの様子をテラは気にせずクスツと笑った。ドラえもん達の妙な笑いが部屋の中でしばらく続くのを見守っていたテラは、何かを思い出したかのように慌ててしずかに尋ねた。

「そういえば！ 外はまだ日が出てるのでしょいか？」

「夕方になったところね。もうしばらくすれば夜になるわ」

「良かった。わたしが気絶していたのは、ほんの少しの間だったのですね」

「ええ」

「ではこれからわたしと一緒に、うちの方にいらしてくださいませんか？ 先ほど助けて頂いたお礼をぜひさせて頂きたいのです」

衛兵に捕まる問題もなくなり、色々な情報もきつと聞けるであろうその誘いを断る理由もないドラえもんたちは、テラの案内に引かれ森を後にした。

◆第八章 『城門』

ドラえもんたちはテラのあとに続いて森の道を歩いていった。先程のオオカミの件もあり、移動陣形はテラを囲むようにとられた。

ただテラの話によれば、獣はいても盗賊のような悪い事をする人たちはこの島にはいないとのことだったので、ドラえもんの道具を身につけている彼らにしてみれば警戒の軽い護衛という程度のものであった。

「そういうえば、テラはなんで一人で森なんかに行ったんだい？」

「ある場所に向かっていたんですけど……途中でオオカミに襲われてしまつて」

「そうだったんだ……その用事はもういいの？」

「はい。今日じゃなくても大丈夫ですので。あ、森を抜けますよ」

森を抜けるとそこには、田畑、民家、街並みと行った景色が広がっており、中世を彷彿させるような優美な情景がみんなの目に飛び込んできた。

地形は緩やかな傾斜の丘状になっていて、その傾斜にそって街並みが立ち並ぶ。その街並みの中央を、頂きにくく一本の道が蛇のようにながら走っており、その終点となる頂きには気品漂わせる王城がそびえ立っているのが見えた。

「うわあー！ きれいな街だなあ！」

「お城があるなんて素敵ね」

「テラの家はどのへんなの？」

「こつちです」

そう言つてテラは嬉しそうに街の方に歩き出した。ドラえもんは、怪しまれないように急いでみんなから道具を回収した。

夕方ということもあり、街中は商店の賑わいを見せていた。テラはフードを被って顔を隠し、ついて来ると促すようにドラえもんたちの方を振り返り、その賑わいの中に溶け込んでいった。ドラえもんたちもテラを見失わないように街中に入つていった。

街の中央通りは活気で満ちていた。商店があり、街の人たちは通貨

を用いて物を購入していた。その風景はとても一万二千年前とは思えないほど、ごく身近に感じる日常の様相に見えた。

「おい見ろよ！ うまそうな肉があるぜ！」

かぶりつきたくなるような肉を目の当たりにしたジャイアンは、その肉を指差してのび太たちに言った。

「たけしさんはお肉が好きなんですか？」

「ああ！ やっぱし男は肉だよな！ なんつーかこう、パワーがみなぎってくるぜ！」

「ジャイアンらしいよね」

「他にも色々な食べ物があるのね」

「見て、見て！ あの果物、おいしそうだね！」

「みなさんの好みがわかって嬉しいです」

土地の活気に興奮しながら、ドラえもんたちはテラを先頭に歩を進めていった。

しばらく進むと街の賑わいも途切れ、一同はずいぶんと丘の上の方にまで来ていた。もうそろそろ完全に日が暮れる。家並み、人影も次第に少なくなり、ドラえもんたちはやや不安になってきた。

「テラのお家ってこの辺なの？」

「はい、もうすぐです」

「もうすぐって……ここは……」

目の前には、高さ三メートルはある巨大な王城の正門が立ちはだかっていた。正門から横に伸びる外壁も二メートルはあるだろう。侵入を阻むように外壁の上には鋭利な装飾も施してある。みんなが驚いて正門を見上げてみると、正門横の小さな扉が開き、数人の衛兵たちがドラえもんたちに駆け寄ってきた。みんなは驚きながら身体を寄せ合い、あつという間に取り囲まれてしまった。

「You guys, what is it like here!
! (お前たち、ここになんのようだ!)」

衛兵は背丈ほどの槍を構えてドラえもんたちに質問した。

「あわわわ！ あ、怪しいものではありません！」

両手を上げて無抵抗をアピールするドラえもんにみんなその身を

寄せた。みんなは震えながらこの場の流れに身を任せていると、扉から出てくるもう一つの姿があった。その男は両手を腰の後ろで組み、胸を張る堂々たる姿勢でこちらにゆっくりと近づいてきた。風格からしてどうやら上官のようだ。

(牢屋に入れられるわけにも行かないし、どうしたら……)

みんなが怯える中、何とか助かる方法をドラえもんが考えてるとき、テラが手を横に伸ばし衛兵に命令した。

「槍を引きなさい！」

「何だと！　ここを王城正門と知ってのことか！」

「この方たちはわたしの命の恩人です」

テラはフードを取って衛兵に顔を見せた。

「こ、これはテラ王女!?　し、失礼しました！」

相手が王女とわかった途端、衛兵たちは機敏な動きで槍を引き直立姿勢を作り、テラに向かって力強く敬礼した。

『王女!?!』

「黙っていてごめんなさい。私が外に出ていることが住民に知れ渡るのを避けたかったんです」

「い、いや、それは別に……」

「ご友人の方々とは露知らず、大変失礼致しました！」

「い、いえ、そんな！」

全衛兵がドラえもんたちに向けて深々と頭を下げ謝罪しているその最中、遅れて出てきた男がテラの前で立ち止まった。

「これはどういうことですか？　テラ様」

「タミアラ。この方たちはわたしを救ってくれた恩人なのです。その御礼にと城の晩餐会にご招待したく、ご同行願った次第です」

「この者たちが？　そうでしたか。この度はテラ様をお救い頂き感謝申し上げます」

「い、いえ！　そ、そんな大したことでは！」

ドラえもんたちは立て続けの感謝の言葉に、ただただ慌てふためいた。

「タミアラ。くれぐれも丁重に迎賓館までのご案内を頼みます。私も

身支度を整えましたらすぐに赴きます」

「承知致しました。ときにテラ様。ミヨイが探しておられましたぞ。あまりご心配をお掛けなさらぬよう、どうかご配慮のほどお願い申し上げます」

「そうですね……皆に心配をかけて申し訳なく思っています。ミヨイにはわたしの方から……」

そうテラが言いかけたところに一人の女性が別方向から走り寄ってきた。

「テラ女王！」

「ミヨイ!？」

「またそのような身なりに変装なさって……砦に行かれたのですね……そちらの方々は？」

「紹介するわ。わたしを救ってくださった恩人のみなさんです」

「恩人……」

そう言ってタミアアラの顔を伺うミヨイに、タミアアラは特に何も言わずただ目を閉じて応えた。

「そうでしたか……この度はテラ様を身の危険からお救いくださり本当にありがとうございます」

「あ、い、いえ……そんな本当に、大したことではないので……」

次から次へと感謝されるこの状況は、テラの高貴な育ちを証明するものだった。しかしドラえもんたちはこの感謝のループにそろそろ疲れ始めていた。

「それでねミヨイ。タミアアラにも言っただけ……」

「承知しております。迎賓館の手配と晩餐会のご準備でございますね」

「そう！ さすがミヨイね。それじゃお願い！」

「かしこまりました」

「それではみなさん、また後ほどお会いしましょう！」

そう言ってテラはタミアアラと、タミアアラ率いる衛兵たちと共に正門横の通用門をくぐり城の中へと入っていった。ドラえもんたちはあっけにとられてその場にたたずんでいた。

「それでは皆さま、わたくしについて来ていただけますか。お疲れを癒やして頂くためのお部屋にご案内させていただきます」

『は、はい!!』

ドラえもんたちは恐縮しながらミヨイの後をついていった。この時代に来て冒険を始めてから三回目の夜を迎える一同であった。

◆第九章 『迎賓館』

ミヨイに連れられ迎賓館に案内されたドラえもんたちは、晩餐会用の正装が用意されるまでの間、とある一室で待機するように言われた。その部屋は中世ヨーロッパを彷彿させるようなデザインで、大きな窓にカーテンやテーブル、ソファーにキュリオケースなどから文化の高さが伺えた。

「すごい部屋だなあ……」

「ほんとね……現代と殆ど変わらないわ」

みんなは一通り部屋を観察したあと、ここまでの疲れを取るべくひとまずソファーに座りくつろいだ。

「しつかし、テラが王女様だとはなあ……」

「ほんと驚いたよね」

「タミアラさん、ミヨイさんがリーダーのような感じだったね」

「二人共この執事か何かじゃないかしら」

「執事かあ……流石のぼくも執事までは雇えないな」

「まあ、スネオさんたら」

これだけのスケールの豪邸を見たにもかかわらず、敢えて張り合おうとしたスネオの言葉は、みんなの肩の力を抜くにはとても効果的だった。のび太たちは安らかな気持ちと共に普段の笑顔を取り戻していった。

「それにしても……とても一万二千年前とは思えないところだ」

気持ちが悪く落ち着いたところでドラえもんがこの島の存在に対する考えを改めて口にした。

「街並みから考えると数百年前ってところよね」

「ってことは……江戸時代？」

「日本ではその頃になるわね」

「ふーん……それだけ高度な文明を持っているということか」

「テラはここをムーと呼んだ。ってことは、やっぱりここがムー大陸なのかな？」

スネオとしずかの会話をまとめるようにのび太は言った。

「この文明は明らかに他の大陸よりも進んでいるからね。まずムー大陸と違って間違いないんじゃないかな」

「そっか。でも思ったより文明も普通な感じだね」

「ああ。ちよつと拍子抜けだよな」

「ほんとほんと」

「いや！ そんなことはない！」

皆の発言を否定するようにドラえもんはソファーから立ち上がり強く言った。

「たしかに生活面においてはそう思えるけど、ぼくたちは見たじやないか！ この島全体を隠していた高度な技術を！」

みんなは島を発見した時のことを思い出し、ゴクリとツバを飲みこんだ。

「島を隠すあの技術は、現代の技術を遥かに凌駕している。むしろぼくがいた未来の世界に匹敵するものだ。それだけの技術がありながら、なぜこの島の暮らしがこのレベルの文明で留まっているのか……真相はわからないけど、この後、何が起きてもおかしくないよ。油断はできない！」

ドラえもんの真剣な言葉を聞いて、みんなは気を引き締めてうなずいた。

「それにしても……」

少し沈黙を挟んでからしずかが話し始めた。

「時折、テラが悲しい顔をしたのが気になるわ」

『え！ そうなの!?!』

ドラえもんもしずかと同じ考えだったのでうなずいて応えたが、他の三人は全く気づかなかったようだ。

「でも……何となく直接聞ける雰囲気じゃなかったし……わたしの勘違いかもしれないわ」

「しずかちゃんになら、そのうち話してくれるかもしれないよ」

「ありがとうのび太さん」

「それにしても……」

ドラえもんは少し腑に落ちない感情を込めて、一つの違和感を伝え

た。

「ぼくが道具を出した時、あまり驚いてるようには見えなかったなあ。どこか他でも見たことがあるような感じで」

「たしかに……ぼくたちがドラえもんの道具に麻痺しているだけで、普通は驚くよね？」

「うくん……ここにもひみつ道具のような不思議な力を持つ何かがあるのかも知れない」

「あ、不思議といえば……」

「どうしたの？ しずかちゃん」

「うん。ここがムーだとすると、滅んでしまったという歴史が不思議で……」

「たしかに、これだけの科学力があるのに……何でだろ？」

「この時代の人間がムーを脅かす存在とはとても思えないしね」

「悪いやつとかがいるのかな？」

「そのび太が言ったすぐ後に部屋の扉をノックする音が鳴り、扉が開いた。」

「お待ちせ致しました。お召し物のご用意ができました」

扉にはミヨイが立っていた。会話が聞かれたかな？ と少し不安なのび太だったが、ミヨイはそんな素振りを見せず微動だにしなかった。

「ここで着替えるの……着替えるんですか？」

「いえ、こちらはお控えていただく部屋となっております。お着替えをして頂く部屋は、こことは別に個室をご用意しております」

そう言つてミヨイは何かを選別するかのようにドラえもんたち全員にゆっくりと視線を流し、しずかのところでその視線を止めた。

「最初はそのちらのお嬢様からお着替えの方をお手伝いさせていただきます。どうぞこちらへ」

ミヨイはスツとしずかに近づき、自分の手を優しくしずかの腰元に添えて部屋の外までいざなった。

「他の皆さまは、しばらくここでお待ちくださるようお願いします」

ミヨイは振り返りドラえもんたちにそう伝えた後、扉の外で待機し

ていたメイドに紅茶の用意をするよう指示し扉を閉めた。

ドラえもんたちはソファアームに座り、メイドが用意してくれた紅茶を飲んでミヨイを待った。程なくしてミヨイと着替えを終えたしずかが部屋に戻ってきた。

「うわあ——すごいドレス！」

しずかのドレス姿を見てみんなは感嘆の声をあげた。

「しずかちゃんはやっぱりかわいいなあ」

「ほんと。とつても似合ってるよ」

「ジャイ子にも着せてやりてえな」

みんなにベタ褒めされたしずかは、さすがに頬を赤らめて照れた。

「みんなありがとう。すごいドレス。夢みたい……」

クルリとその身を一回転させると、ドレスのスカートが柔らかく宙に舞う。しずかはちよつとしたお姫様気分浸っていた。

「さ、次は殿方たちの番です。どうぞこちらへ」

どうやら男性陣は全員一緒に着替えるらしい。まあ、そりやそうか、とみんな素直に納得してミヨイに続いて部屋を出た。

しずかはみんなの着替えが終わるまで部屋で待機していた。部屋にはしずかの他にはメイドが一人いるだけだった。しずかはメイドに話しかけようとしたが、その内容のどれもが異国から来た人間と疑われそうで、今はまだ疑われるようなことはしない方が良く、と思いとどまった。メイドはしずかに話しかけてくることはなく、お茶を注いだ後は扉の傍に立ち待機していた。沈黙がしばらく続いた後、徐々に廊下のほうが賑やかになり、みんなが部屋に戻ってきた。

「えへへ」

「なんかくすぐったいね……」

「ふふん、ぼくは慣れてるからね」

「なんかスースーする……はっはっハックション！」

みんなは白いタキシードを着ていた。さすがスネオは着慣れているようで様になっていた。

「みんなステキよ、とつても」

しずかに褒められ、こそばゆくクネクネと身をよじらせ照れている

ドラえもんたち。

「い、いやー……そんな」

「ええ。本当にみなさんステキですよ」

そう言いながら扉の向こうからドレス姿のテラが現れた。

「わたしの思ったとおり！ みなさん、とてもステキです！」

『テラ?!』

ドラえもんたちは王女の品格漂うテラの姿を見てしばらく呆けた。同性のしずかもテラの持つ高貴なオーラに目を奪われ、ただお姫様に憧れる普通の女の子の姿になっていた。

「今夜はみなさんにせめてものお礼としてお食事のご用意をさせていただきますました。どうぞグレートホールの方へ」

ドラえもんたちはミヨイとテラの案内によりグレートホールに向かって歩みを進めた。しずかはテラと並んで歩いていたが、廊下を歩いてしばらくすると、テラがこっそりとしずかに耳打ちをした。

「みなさんは、山向こうのイスタ街の住人」と伝えてあります。みなさんにもお伝えください」

姿勢を崩さず先頭を歩くミヨイの眉がほんの僅かに歪んだ。

◆第十章 『グレートホール』

グレートホールは食事だけでなく多目的な用途で使用される王城内の大ホールである。天井はとても高く優に十メートルは超えている。ホール中央上部には円形のステンドグラスが圧倒的な光の芸術を演出していた。

「うわ——……すごいなあ……」

突然現れたその輝かしいゴシック格調美を前に、ドラえもんたちは思わず見上げたまま立ち止まった。ミヨイは席への案内を進めるべく、さ、こちらへ、と一人一人にやさしく声をかけ、各々の席へと誘導していった。

みんなが席に着いたのを確認した後、テラはミヨイと共に自分の席に向かった。目の前のテーブルの上には、一般的なコース料理のための食器類が整然と並べられていた。

「おれ……こういうの苦手なんだよな、ナイフとかフォークとか……」

「ぼくも。なんかこう……緊張するよね」

「ふふん、ぼくは慣れてるからね」

「失礼のないようにできるかしら……」

しずかたちの困った様子を見て、ドラえもんは手をポケットに入れた。

「うふふ、そんな時は……ソノウソホント！」

ドラえもんが突然ひみつ道具を出した瞬間、テラの後ろに立っていたミヨイはすぐさま右腕を上げた。すると周囲の扉が一斉に開き、衛兵たちがテラの周りを囲み防御の構えをとった。他の衛兵も次々とグレートホールに現れ素早くドラえもんたち全員を囲み陣形を組んだ。

「あわわ！」

ドラえもんはたまらず道具を持ったまま両手を上げた。みんな席を立ちドラえもんのところを集まった。その姿は衛兵の威嚇に怯えたものであったが、ジャイアンだけはファイティングポーズを取り戦う姿勢を見せていた。

「全員！ 警戒を解いて待機！」

テラが席を立ち、制止するように右腕を横に伸ばし命令すると、全衛兵はその場で背筋を伸ばして直立し、すぐさま待機の姿勢をとった。

「テラ女王！」

「大丈夫よ、ミヨイ」

「しかし……着換えの際の身体検査のときには、あのようなものは確認できませんでした」

怪しげな道具を突然出したドラえもんを警戒し食い下がるミヨイにテラは落ち着つくよう念を押すように、大丈夫、と言葉を添えた。

「ドラちゃんさん、それはどんな道具なのですか？」

「え？ こ、これは……おまじないのようなもので……え、えへへ」
「そうですか。ただみんなが驚いてしまうから、城内で道具を出す場合は私に一声かけてくださいね」

「は、はい！ ついいつもの調子で……ごめんなさい。気をつけます」
ドラえもんにしがみついていたのび太たちは、ホッとして自分たちの席に戻った。

テラはミヨイにうなずいて合図を送るとミヨイは全衛兵に目配せした後 ゆっくりとうなずいてみせた。すると衛兵たちは一礼してから一斉にグレートホールから退室していった。

テラは物音が静かになるまで待つてから自分の席に再び腰を下ろした。

「それで、その道具はどう使うのですか？」

「あ、ああ、これはですね……」

ドラえもんはソノウソホントを装着し、みんなの方を向いて一言、きみたちはテーブルマナーを知らない、と言い放ち、ソノウソホントをポケットにしまった。

「これだけです」

「それだけですか？」

「はい。これはみんなが料理を美味しく食べるためのおまじないなんです」

「そうなんですか」

ドラえもんは何か平静を保っていたが、のび太たちは少し萎縮した様子だった。城門で体感したものは全く別の気迫ある威嚇、いや殺気のようなものをその身に感じたのだから当然のことといえる。

(せっかくのお礼の場なのに……困ったわ)

テラが食卓のやや暗い雰囲気を感じている中、それを払拭するかのように後方の扉が開き、次々と豪華な料理がホールに運ばれてきた。それら料理はとても良い匂いをホール中に漂わせ、全員の鼻腔をくすぐり緊張で硬くなっていたみんなの意識を和らげた。

「なんか美味そうな匂いがする」

「いったい何が入ってるんだろう？」

のび太たちはクロツシユ(料理に被せる蓋)の中身が気になって仕方がないようだった。不本意にも恩人たちを萎縮させてしまったテラは、みんなをリラックスさせるために立ち上がり誠意を込めて話し始めた。

「みなさん、驚かせてしまつてごめんなさい。少し窮屈な思いをさせてしまうかもしれないけど、心よりお礼をしたい気持ちは本当です。今夜はみなさんに満足して頂けるよう精一杯のおもてなしをさせていただくつもりです。どうか肩の力を抜いて楽しんでください」

テラが言い終わると同時に全てのクロツシユが取り上げられ料理の中身があらわになった。肉類を始め海産物、サラダ、フルーツの面々を綺麗に盛り付けられたお皿たちが、テーブルの上に所狭しと並べられていた。

「うわあ！ 美味しそう〜！」

「ほんと！ これほどとは！」

「フルーツもおいしそう！」

「肉だ！ でっかい肉があるぞ！」

「さすがにドラ焼きみたいなのはないか……」

『ドラえもん！』

「じよ、冗談だよ！ 冗談！ でへへ」

緊張が薄れ、ドラえもんたちにいつもの笑顔が戻った。その様子を

見て少し安心したテラの顔には、良かった、と笑みが浮かんでいた。「お待ちせしました、みなさん！ どうぞ召し上がってください！」
『いただきまーす！』

一 波乱あつたものの、ドラえもんたちを歓迎するという名目の晩餐会はようやく開始の運びとなった。

外は日も沈み、徐々に漆黒の闇に包まれ始めていた。その暗闇の中、何かを運んでくるかのように、風が不規則に木々を揺らしていた。

◆第十一章 『晩餐会』

晩餐会が始まってからしばらくは少しの会話もなく、ただひたすら食器の鳴る音と口にものをほお張る際に漏れる言葉が聞こえるだけだった。

「うめえ！ この肉うめえな！」

「この魚も美味しいよ、ジャイアン！」

「うーん！ あまーい！」

「うわっ！ このサラダ、ピーマンみたいな味がする！」

「好き嫌いはだめだよ、のび太くん」

ソノウソホントの効果もあり、みんなは上品に食事を行っていた。みんながとても美味しそうに食べている姿を見てテラは心から嬉しそうだった。

ある程度お腹も膨れてきて食べる速度が遅くなってきた頃、ホール奥の大きな扉がゆつくりと開き、髭をはやした恰幅のよい老人が入ってきた。その老人が姿を見せるや全使用人が姿勢を正しその老人に對して一礼をした。

「お父様！」

テラはそう言つて立ち上がった。

『お父様?! ……ということとは……王様?!』

ドラえもんたちは驚いて口に含んでいるものを吹き出しそうになったがグツとこらえ、すぐさまテラに続くよう立ち上がって王様、すなわち国王の方にその身を向けた。

国王はやさしく笑いテーブルの方に向かいながら、ラクにラクに、と言うかのように軽く右手を上げ、手のひらを小さく上下に動かした。その合図を受け全使用人は顔を上げ、元の待機の姿勢に戻った。

「みなさん、どうぞご着席ください」

手のひらでみんなの着席を促しながら、テラも自分の椅子に腰を下ろした。

「テラ。この方たちがお前のお友達かね？」

国王はそう言いながらゆっくりと自分の席に腰を下ろした。

「はい。私を窮地から救ってくださった方たちです。山向こうのイスタ街から商いに来ているそうです」

「ほう、発掘の街イスタから。それはそれは……道中うちのお転婆娘が、さぞご迷惑をお掛けしたでしょうな」

「お父様！」

「はっはっはっ」

むくれたテラを見て国王は笑いながらあご髭を数回撫でた。ドラえもんたちは国王の容姿を見て、お父さんと言うよりはお爺さんという感じだな、と心の内で思っていた。

「大体の報告はミヨイから聞いている。無事で良かった。客人の方々、テラを救ってくれて本当にありがとう」

国王直々にお礼を言われたドラえもんたちは、しどろもどろになりながら恐縮した。その様子を見て国王は静かに笑い、ゆっくりとした動作で食事を始めた。

「……砦に行ったのか？」

その問いかけにテラの食事をする手が止まった。無言のまま視線を落とし食器を置くと、その両の手を膝上においた。

「申し訳ありません……」

「良い。お前を止めたわしにも責任はある。次からはもう止めはせん。ただ、今後は護衛と共に行動しておくれ」

「はい、お父様……ありがとうございます」

国王とテラのやりとりを聞いて、ドラえもんたちは何となく状況が掴めた。つまりテラは“行ってはいけない”と釘を刺されていた砦に向かっていたんだらう。しかも周囲には内緒のため護衛を付けず単独で。その途中オオカミに襲われた、ということらしい。

みんなはテラがなぜ砦に向かったのか気になったが、それを質問することはしなかった。テラは自分のことを気にかけているドラえもんたちをみて困ったような微笑みをつくった。

「ごめんなさい。せっかくの会食だというのにまた暗くしてしまつて。今夜の料理はうちのシェフが特別に作ってくれた自慢の品々な

の。遠慮なんてしないでドンドンお替りしてくださいね」

言われたとおり、やや食することに遠慮気味になっていたジャイアンが最初に口火を切った。

「じゃ、じゃあ……おれ、このお肉のお替りを……」

その様子を見てスネオ、のび太、しずかも待つてましたとばかりに続いた。

「じゃあ、ぼくはこのスープを!」

「ぼくはこのラーメンみたいなものを!」

「わたしはフルーツの盛り合わせを!」

みんなの勢いに目を点にして驚いたテラは、一息おいた後、穏やかな表情でミヨイに合図を送った。ミヨイは軽くお辞儀をし、扉付近に立つメイドに対して何かしらの指示を送ると、メイドは一礼をしてから部屋を出ていった。

「美味しいからいくらでも入っちゃうね! しずかちゃん!」

のび太は幸せそうにしずかに話しかけたその時、遠くで何か重く響く音がしてホールが軽く揺れた。

ズズ……ン……。

「なんだろう? ……地震かな?」

ふと呟いたのび太の言葉に国王の眉がピクつと動いた。

「まさか爆発とか!」

「やだ! スネオさん」

しずかの怖がる声を充てられ、スネオはすぐさま、冗談だよ、と機嫌を取るように両手のひらを振って自らの発言を否定した。

「はっはっは。心配しなくても大丈夫じゃ。あれは、遺跡の崩落じやよ」

国王がみんなを安心させるよう大きく笑いながらいった。

「崩落……ですか?」

それでも不安そうなしずかは、詳しい説明を欲しがるように聞いた。

「うむ。この城の裏には古代からの遺跡があつてな。長い年月を経たために老朽化し、しばしばこういった崩落が起きるのだ。心配するこ

「とはない」

それを訊いたドラえもんたちは互いに顔を見合わせ安心した。

「ところで……そなたたちは商いをしにこの城下街に来たとのことだが、どのようなものを売りに来たのかね？」

「え!？」

ドラえもんが一瞬止まった。そこに助け舟を出すようにテラが割って入ってきた。

「こちらのドラちゃんさんは、様々な効果を持つ発掘道具をお持ちなのですよ、お父様」

「ほう!・発掘道具を使えるのか!? それは興味深いな。ぜひ一つ見せてくれまいか!」

「お父様は珍しいものが大好きなの。何か見せては頂けないでしょうか」

興奮する国王を横目にテラは、やや困り気味の苦笑いをしながらドラえもんをお願いした。

「任せといて!」

そういつてポケットに手を入れたドラえもんは、あつ! と思いつまりその体勢のまま恐る恐るミヨイの顔を伺った。ミヨイは右手を口元にあて咳払いを一つし目を伏せるとテラはクスと笑い、大丈夫ですよ。お願いします、とドラえもんに告げた。ドラえもんは安心してひみつ道具を探し始めた。

「あれ?・なかなか取れないな……えい! マルバツうらない!」
「ほお!」

不思議な形の道具を見て国王の目が輝いた。

「これは、どんな質問にもマルバツで答えてくれるという道具です。例えば……このホールの天上は高い!」

ドラえもんの言葉の後にピンポーン! と勢いよくマルが空中に浮いた。その様を見て、国王を始めホールの使用人全員が、お……と感嘆の声をあげた。

「うふふ、それじゃ次は……ぼくは背が高い!」

一瞬バツがピクツと動き空中に浮こうとしたが、すぐさまテーブル

の上に落ちた。

「あれ？ おかしいな？」

「なんだ？ また故障かよドラえもん」

「しようがないなあ、まったく」

「大事な時はいつもこうなんですよ」

「もう、みんな！ 今日調子が悪いのよね」

「うーん……何でだろう??」

しずかにフオローを入れて貰ったドラえもんだが、当人はイマイチ納得してない様子だ。

「そんなスゴイ道具なら故障もいたし方あるまい。いや、良いものを見せてもらった。ありがとう」

国王がそう言うのと、ドラえもんは照れながらマルバツうらないをポケットにしまおうとした。ところがしまったと思っただ道具がポケットからピヨコンとはみ出した。ドラえもんがおや？ と思っただ道具を押ししてみると、今度は素直にポケットの中へと入っていった。

「今度調子の良い時に、別の道具をお見せします」 「それは楽しみだ」

国王はゆっくりと椅子の背に身体を預けドラえもんには微笑んだ。場が落ち着きを取り戻し一段落したところに、扉が開く音がホール中に響き渡った。

ドラえもんたちは、自分たちの背後からゆっくりと誰かがホールに入ってきているのは感じ取れた。振り向いてその姿を確認しようとした時、国王とテラの表情がやや緊迫していることに気が付いた。

◆第十二章 『アポロン』

突然ホールに現れたその人物は、美少年という形容がよく似合う、少し年上の雰囲気を漂わせる男の子だった。

「お兄様！」

「アポロン！」

『え!? テラのお兄さん!?!』

ドラえもんたちは驚いてその男の子の方をまじまじと凝視した。テラの兄となれば、すなわち王子様である。その王子は姿勢正しく流れるように国王の傍に近づいていった。

「お父様、只今戻りました。失礼ですがこの方たちは？」

アポロンが言葉を発すると同時に、国王とテラは一瞬ホツとする表情をみせた。しずかはその様子に違和感を覚えた。

「テラの友人の方々だ。ずいぶんと危ないところを助けて頂いたようだな。お礼をさせて頂いているところだ」

「テラを!? そうでしたか」

スツと自然な所作でのび太たちの方に身体を向き直したアポロンは、自己紹介と共にお礼の言葉を述べた。

「みなさん、はじめまして。テラの兄のアポロンと申します。この度はテラを救ってくださりありがとうございます。本日はどうぞ心ゆくまで楽しんでいってください」

アポロンの立ち振る舞いをみていたしずかは、気がつけばその瞳を輝かせ、王子様に憧れる乙女の姿になっていた。きつと「素敵な王子様」とか心奪われているんだらうな、とのび太は少しふてくされて輝く目をしたしずかを横目で見ていた。

「お兄様も一緒にいかがですか？」

アポロンを食事に誘うテラのその言葉は、心なしか少し嬉しそうに思えた。

「いや、今宵は遠慮しておくよ。来賓の方々に余計な気を遣わせてしまうだろうからね。ミヨイ、ぼくの分は部屋の方に運ぶよう伝えてもらえるかい？」

「かしこまりましたアポロン様」

ミヨイにそう告げたアポロンはドラえもんたちに一礼しホールから立ち去ろうとした。爽やかな空気を残しながら扉へと向かっている中、国王がアポロンを呼び止めた。

「アポロンよ、レムリア卿は一緒ではないのか？」

その言葉を聞いたアポロンは、歩みを止めスツと振り向いた。

「はい。レムリアは残務があるとのことと今夜は砦の方にて過ごされるとのことですよ」

「そうか」

「何か急ぎお伝えすべきことでも？」

「いや、大したことではない」

「そうですか。では、失礼します」

そう言つてアポロンは再び一礼をしホールから退室した。扉の閉まる音が鳴ったしばらく後、国王が大きくため息をついた。その様子を横目にテラも軽く目を閉じながら小さくため息をついた。二人の様子はホツとしているとも困っているとも受け取れた。

(ドラえもん。「卿」って何?)

(宰相のことだよ。王様の側近で政治を行う人のこと)

(あ、そういう意味なんだ、へー)

ドラえもんとおび太のヒソヒソ話を横目に、国王の様子が気になつたしずかは、気遣うようにやさしく話しかけた。

「あの……大丈夫ですか？」

「ああ……心配をかけたようだね、大丈夫だ。ありがとう」

「お力になれるかどうか分からないですけど、よかったですら王様の抱えている悩みを話してくださいませんか」

しずかのその言葉を聞いたテラは、懇願する眼で国王の顔を見た。その意を察した国王は、ゆつくりと髭を撫でながら頷いた。

「恥ずかしながら、悩みというのは先のアポロンのことだな……どうも……最近、あいつの心の内が見えなくてほんと困っておるのだ……」

国王のその言葉にテラも頷いた。その予想外な言葉にドラえもん

たちは驚きながら顔を見合わせた。

「あんなに紳士的な彼のどこに不安があるんですか？」

しずかは完璧なまでの王子様を見たせいか、いつもより強い口調で質問した。「その問いには私が」と言うようにテラは会話に割って入ってきた。

「はい。さっきのお兄様が、私たちの知っている”優しい”お兄様です」

「え？」

しずかは二人が言っている意味がわからなかったが、先刻アポロンが現れた時に、国王とテラがホツとした瞬間があったことを思い出した。

「ここ最近ですが、お兄様の様子がおかしいのです。いえ、おかしい時がある、というのが正しいのかも知れません」

「それはどういう？」

「それは……攻撃的な面を強く見せる時があるのです。抵抗するものには容赦しないというような荒ぶりを見せたり、と……。優しかったお兄様とはとても思えないような時があるのです」

そういつて目を閉じたテラの手は少し震えていた。

「なんだかんだで男だからなあ……でもやりすぎは良くないよな」

「なんか悩みでもかかえてるとか？」

「でも、何でも自分で解決しちゃうような雰囲気のある人だよ？」

「うーん、何でだろう??」

「彼のようなステキな方が……とても信じられないわ……」

無理もない、というように国王は肩を落としゆつくりと瞼を閉じた。

「信じてもらえないのも無理はありません。兄の変わり様を実際に見た私でさえ、そう認めるまでには時間がかかりましたから……」

やるせない気持ちを込めたテラの言葉を聞いて、ドラえもんたちも何も言えなくなってしまうた。

その後しばらく続いた沈黙を破ったのはホールの扉が開く音だった。みんなが頼んだ追加の料理たちが芳醇な香りを乗せ次々とホー

ル内に運び込まれてきた。

「どうしても場を暗くしてしまうわね……本当に申し訳ありません。この話はここまでにしましょう。さあ！今夜はお腹いっぱい召し上がってください！」

テラは場の空気を変えようと精一杯の笑顔をつくった。ドラえもんたちもその気持ちを汲んで、今は目の前の豪華な食事を楽しもうと気持ちを切り替えるのだった。

その後、終始明るい話題で盛り上がった晩餐会は、当初の目的であった御礼という目的を無事に果たし、和やかに終わりの時間を迎えた。食卓の上に残され、やや煩雑な配置になった食器たちは、そこにあった料理の美味しさを物語っているようだった。

◇

食事を終えたドラえもんたちは、ミヨイに案内され迎賓館の客間に再び移動していた。寝室の準備が整い次第、お迎えが来てくれることになっている。お腹も満たされた面々は、椅子に座ってメイドが用意してくれたお茶を飲んでくつろぎ、その時が来るまで話をしながら待っていた。

「すごい美味しかったね！」

「中華とかフランス料理に似てたね。でもこの時代であの味はスゴイよ！ ホント！」

「フルーツも食べたことがない味があつて、とっても新鮮だったわ！」

「俺はやっぱ肉だな！ 肉がうまかった！」

「美味しかったけど……ドラ焼きも食べたいな……」

『ドラえもん！』

談笑の中、しずかは視線を窓に向けた。窓からは城が見え、部屋と思わしき幾つかの場所から灯かりが漏れていた。その灯かりを見えずかはずかと、アポロンのことを思い出した。

「アポロンさんのこと……気になるわね……」

窓の外を眺めて発したしずかのつぶやきがみんなの談笑を止めた。

「でも……想像できないよ、あんなに頭の良さそうな人が」

「そうそう。出木杉くんタイプに見えたもんね」

「確かにそんな感じだったよな」

「うん」

「テラの話を知っていると、ただ感情的になって態度が変わったというような印象ではなかったわ。そう、別人になってしまうかのような……」

「まさか二重人格とか!？」

「のび太にしてはいい線いってる。ありえる話だね」

スネオはのび太の推測に素直に賛同した。

「でもさ、二重人格って言っても、それもアポロンさんの性格なんだよね?」

「それはそうだけど……王様とテラが困るほどの変貌というのが気にはなるわ。せつかく仲良くなれたんだもの。何とか力になれないかしら」

「やっぱりしずかちゃんは優しいなあ……って待って!? まさかしずかちゃん!? アポロンさんのことが気になってるの?」

「そ、そんなこと!」

とつきに否定したしずかではあったが、その頬は赤くなっていた。乙女に王子様という組み合わせは伊達ではないらしい。

「まあまああのび太くん。実際、かっこいいんだから仕方ないよ」

「フオローになってないよ! ドラえもん!」

「のび太。あの王子様と張り合うのか? 大変だな」

「ほんと、無謀を通り越してるよ」

「なんだよ、みんなまで! ふーんだ!」

「もー! そんなんじゃないってば!」

『アハハハ』

大きな笑いに割り込むように扉が開き、ミヨイが部屋へと入ってきた。

「大変お待たせいたしました。寝室の準備が整っております。どうぞこちらへ」

ドラえもんたちは男性と女性、それぞれ別々の寝室に通された。そこには人数分のベッドが用意されており、とても一万二千年前とは思

えない錯覚に陥りそうになった。みんなが感心している中、ミヨイは速やかに退室するべく扉の傍に立ち、ドラえもんたちの方を振り返った。

「それでは明日の朝、またお迎えに上がります。

夜分何かありましたら廊下に巡回しているメイドがごぞいます故、そちらにお申し付けください。それではどうぞゆつくりとお休みくださいませ」

そう言つてミヨイは軽くおじぎをし、静かに扉を締めた。足音が徐々に小さくなつていくのを感じると、ドラえもんたちは島を発見してから今に至るまでの疲れにドツと襲われた。さらに満腹感も手伝つて、みんなベッドに入るや否や深い眠りに着くのだった。

◇
ズズ……ン……。

ドラえもんたちが眠りについてからだいぶ時間が経つた深夜。国王のいう崩落が起きたのか、晩餐会の時のようにまた部屋が少し揺れた、のび太は目を覚ました。月は雲に隠れていて窓の外はかなり暗かった。部屋にはいつの間にかロウソクが灯されていた。肌寒さを感じておしっこをしたくなつたのび太は、その灯かりを頼りに扉を開け廊下に出た。

「たしか巡回しているメイドが居るとかミヨイさんが言つてたけど……その人にトイレの場所を聞こう」

不安を感じながら暗い廊下を歩いていると、何やら城の方が騒がしくなつていた。なんだろう？ と窓から城の方を見ると、誰かが城の窓から庭に飛び降りた様子が見えた。

「まさか泥棒!？」

のび太はその人物を懸命に目で追っていると、その人物はみるみるうちにこちらに近づいてきた。

ドラえもんたちの寝室も一階にあるため、このままだとぼくたちも危ない！ と判断したのび太は、とっさに窓下の壁の部分に身を隠した。なるべく気配を消すように慎重に呼吸を整えてからそつと顔を出し、窓の外を覗くような姿勢へと移り変える。

城の方はところどころ明るかった。そのため迎賓館の方が暗がりになっていった。その状況から、相手にはぼくの姿が見えないはず、とのび太は安心してしていたが、不運にも雲が晴れ月の光が辺りを照らし始めた。月の光はのび太の姿とその怪しい人物の姿を徐々に露わにしていった。やや逆光であったが、城から出てきたその人物は、眼つきが鋭く獯猛さを感じさせるオーラを持ったアポロンその人であった。

(アポロンさん!?)

のび太はアポロンと眼があつたが、その変貌ぶりに驚いてピクリとも動けなかった。

のび太に気付いたアポロンは一瞬足を止め、不敵な笑いを見せてからすぐにその場を立ち去った。

◆第十三章 『苦惱』

窓にかかったカーテンの隙間から朝日の光がわずかにこぼれ、にわかには鳥のさえずりが聞こえてきた。

「みんな！ 朝だよ！」

のび太はドラえもんに起こされ、眠い目をこすって身支度を整え始めた。スネオ、ジャイアンは既にベッドから起きて着替えているところだった。のんびりとした動きで着替えているのび太は、ハッと昨晚のことを思い出した。

「そうだ！ みんな聞いて！ 昨日の夜遅くにアポロンさんが!？」
『え?』

その慌てた声を聞いたドラえもんたちは、急いでのび太の近くに集まった。

「アポロンさんが城を抜け出したようなんだ。この近くを通ったときに目があったんだけど……すつごく怖い顔をしてて別人のようだった」

「ほんとかよ?」

「寝ぼけてたんじゃないの?」

「違うよ！ 本当だってば！」

その会話を遮るように扉をノックする音が割り込み、失礼致します、と断りながらミヨイが部屋に入ってきた。

「のび太くん、その話しはまた後で」

ドラえもんはのび太をなだめるようにいった。

「みなさま、おはようございます。昨晩はゆっくりとお休みになりましたでしょうか。朝食の準備ができておりますのでホールまでお越しくださいませ」

昨晩の騒動は無かったかのように振る舞うミヨイにのび太は違和感を覚えた。それはドラえもんたちも感じ取っていた。隣の部屋のしずかとも合流し、一行はミヨイのあとに続いてホールへと向かった。

「おはよう、しずかちゃん」

「おはよう！ のび太さん」

「しずかちゃん、昨日はよく眠れた？」

「ええ、もうぐっすりよ」

のび太は先頭を歩くミヨイの背中をしばらく眺めてから小声で話し始めた。

「昨日の夜、また地震があったんだけど気付いた？」

「ええ。揺れたことは覚えているわ。それがどうかしたの？」

しずかも のび太に合わせて小声で答えた。 のび太は再びミヨイを警戒し、話すタイミングを伺った。

「その時にアポロンさんが城から抜け出したらしいんだ」

「え!？」

思わず漏れたしずかの声にミヨイは足を止めて振り向いた。

「どうかされましたか？ どこか具合でも？」

ミヨイは心配している様子で話しかけてきた。しずかとのび太はいえ大丈夫です、と取り繕うように身振り手振りで応じた。

「そうですね。それならばよろしいのですが……。皆さまはテラ王女の大事な客人。その客人にもしものことがありますたら、テラ王女に申し訳が立ちませぬゆえ、何か気にかかることがございましたら、些細なことでも遠慮なく私ミヨイ、引いては周囲のメイドにお申し付けくださいませ」

ミヨイはそういつて一礼し、踵を返して再びホールの方に歩みを進めた。

「のび太さん、その話はまた後にしましょう」

「うん、そのほうが良さそうだね」

二人が話を終えた時、一同はちようどグレートホールの扉前に到着した。

メイドが開けたホールの扉を通ったミヨイは、すぐに扉の端に寄って待機の姿勢をとり、ドラえもんたちに中に入るよう手を差し出して促した。みんなは恐縮しながら次々にホールへと入っていた。長テーブルには既に用意された朝食が並んでいた。そこには着席して待っているテラと国王の姿があった。

「みなさん、おはよう。昨日はよく眠れたかしら？」

テラは立ち上がってドラえもんたちに挨拶をした。

「はい。とつてもステキなベッドのおかげで、それはもうぐっすりと！」

「うん！ とつても気持ちよかったよ……です」

「俺んちの布団と違って、ふわふわでとても気持ちよかったぜ……あ！ です！ でへへへ……」

『プツ。あははは』

ジャイアンの慌てぶりに一同から笑いが起き、ホールの空気を和ませた。その笑いにつられてテラと国王の表情も柔らかくなり口元が緩んだ。

「さ、どうぞおかけになって。朝食だつて美味しいんだから。ね、お父様！」

「ああ、そうだな」

「ほんと！ 美味しそう！」

「俺、お腹ペコペコなんだよ」

「へ？ ジャイアン、昨日あんなに食べたのに？」

そのスネオのツツコミについて、何を！ といつもの調子でげんこつを振り上げたジャイアンだったが、テラの視線を感じて、すぐさまその拳を引つ込めた。反射的に目を閉じたスネオは、いつまで経つてもげんこつが飛んで来ないため、そつと目を開けてみてその理由を把握した。

「のび太、どうやらテラがいるとジャイアンは優しくなるようだぞ」

「ホントだね」

ジャイアンとテラはそれを訊いて驚きと共に二人共頬が赤くなつた。そしてクスクスと笑つたスネオとのび太の頭をジャイアンは軽く小突いた。

「あまりお待ちせしてはいけないわ。みんな、席に座りましょ」

しずかの呼びかけでみんな急いでそれぞれの席についた。

「それでは、いただきますー！」

朝食のメニューは晩餐会ほど形式張つてなく、いわゆる洋食のブ

レックファストのような馴染みのあるものだった。今回はソノウソホントは使わなくても大丈夫だね、とみんなは安心して普通に食事を進めた。

皆が食事を進めてからしばらくした後、ふと、しずかの脳裏にアポロンの姿が浮かんだ。

「あ、あの……アポロンさんは朝食を取られないのですか？」

しずかの問いかけに国王とテラの動きが止まった。

「あ、お兄様は急ぎの用事が入りまして、朝早くからお出かけになられたのです。みなさんによろしくとおっしゃっておりました」

テラは困っているような表情をうまく隠せず、ややぎこちなく答えた。

「そ、そうですか……」

しずかはアポロンに会えないと分かれると、少し残念そうに視線を落とした。

「みなさんは商いのため、城下町に滞在するのでしょうか？ でしたら、ぜひまた城の方に遊びに来てください。兄も喜ぶと思います」

「は、はいー」

しずかは目の中に輝きを取り戻し喜んで返事をした。アポロンに好意を寄せるその姿を見て、のび太は少し面白くない気分になった。しかしこのモヤモヤとした感情とは別に、のび太もテラがアポロンのことを隠しているのは気になった。聞くべきか聞かざるべきか悩んだのび太であったが、若い好奇心は前に進むことを選択した。

「あ、あの……そのアポロンさんのことなんですが……」

国王とテラの顔色が再び変わったのを感じたが、止めるまいとのび太はそのまま続けた。

「見たんです、ぼく。昨日の夜、アポロンさんが城から抜け出すところを……」

「!?」

「……そうでしたか……」

驚く国王を横目にテラはややうつむき加減で答えた。国王は手の平で目を覆い、そのまま顔をなでおろすように手を下ろした。

「では、あの兄を見たんですね……攻撃的な兄を……」

「……はい」

のび太がそう答えた後、ホールにはしばらく静寂が漂った。

「あの、よろしければお話ししてはもらえませんか？　もしかしたら何かお役に立てることがあるかも知れません」

しずかの申し出にテラはやや困ったような表情で返した。深入りし過ぎたかしら、と反省の色をみせるしずかを見た国王は、テラに話すことを許した。

「お話して差し上げなさい」

「お父様!?　でも!」

「良いのだ。私が彼らなら信頼できると判断したのだ。だから気にせず話しなさい」

「……はい」

そう国王に促されたテラはひと呼吸ついでからドラえもんたちに話し始めた。

「兄の様子がおかしくなり始めたのは、ここ数ヶ月のことなのです。機嫌が悪いとかそういう類のものではなく……まるで別の人間になってしまったような……そんな印象を受けます」

「王様やテラの記憶はあるんですか?」

「はい。周囲に関する記憶の乖離は全くないようです。ただ……」
「ただ?」

「優しい兄の時に、怖い兄の時の行動について聞くとおぼろげな感じでした。怖い兄の時の記憶は優しい兄に戻った時にやや薄れるようです。しばらくした後、そういった記憶が兄の中で徐々に鮮明になっていくようで……苦しんでいる様子もありました」

「アポロンさん……さぞ辛いでしょうね」

「何かのキツカケで人格が入れ替わる、ということなのかな?」

「キツカケかあ……なんだろうね」

「のび太は直接見たんだろ?　その時に何か手がかりらしいものはなかったの?」

「そ、そう言われても……あの時は地震で部屋が揺れて目が覚めただ

けで……」

黙ってみんなの会話を聞いていた国王は組んでいた両手に少し力を入れドラえもんたちを改めて観察するように見つめた。

(地震……か)

思考はここにあらずというような表情で国王は心の内で小さく呟いた。そんな中、テラは昨日のことについて話し始めた。

「昨日のことも実は、兄のことが心配だったので砦に向かったのですが、父からは反対されていたもので、こっそりと抜け出して……」
「だから護衛も付いていなかったんだ」

「はい。その節は助けていただき本当にありがとうございます」

テラは深々と頭を下げた。

「いや、そんな気にしないでよ!」

「そうよ。おかげでこんなステキな王女様と友達になれたんだもの」

「ほんとほんと! ね? ジャイアン」

「そ、そうだな」

少し返答に戸惑うジャイアンを見てスネオの口元が歪んだ。

「あれ? 素っ気ないな。一番喜んでるはずなのに」

ゴチ!

(スネオく今回はやけに絡むじゃねえか)

(じよ、冗談だよジャイアン。へへへ)

スネオのおでこに自分のおでこを押し付け、小さな声でジャイアンは怒った。さすがに調子に乗り過ぎたとスネオも少したじろいだ。まあまあ、と二人をなだめたしずかは、気持ちを切り替えるようにキツと顔を引き締めて口を開いた。

「あの、アポロンさんのこと、一度私たちに任せてもらえないでしょうか!」

「え!?!」

突然のしずかの申し出に国王とテラはあ然とした。

「解決とまでは行かないにしても、話すことで何かしらの情報が得られるかもしれませんし、何よりドラちゃんのだ道具が役に立つかも知れません」

「例の発掘道具か、なるほど……」

国王はしばらく考えた後にゆっくりと立ち上がり、その身体をドラえもんたちに向けた。

「実の息子ということでも牢屋への監禁を躊躇うという甘い裁定を下してきた私が言うのは恥ずべきことと重々承知しておるのだが……諸君、どうかアポロンのことをお願いできないだろうか」

そういつて国王はドラえもんたちに対して深くお辞儀をした。テラもその姿になぞらえ同じ姿勢をとった。

「そ、そんな！ 頭を上げてください！」

「まだ何の役に立つかもわからないんですから！」

国王はしずかの元に歩み寄り、よろしく頼む、というようにしっかりと手を握った。

「でも……アポロンさんは今どこに居るんだろう？」

方針は決まったが、どこに向かえば良いのかわからないのび太は、ふと感じた疑問を口にした。

「多分……砦だと思います。今までの経緯からも砦にはよく訪れていたので」

「砦……そこに何かあるのかな？」

「わからないけど、今の状況じゃあまず砦に向かうのが良さそうだね」

ドラえもんの意見にみんな賛成し、おー！ と勢いよく腕を上げるみんなを見てテラが割り込んできた。

「私も行きます！」

『えー!?!』

「また危険な目に会うかもしれないよ？」

ふふ、とテラは笑いその身をクルツと翻し国王の方を向いた。

「いいでしょ？ お父様。だってこんなにスゴイ護衛の方たちがついてるんだから！」

まあ、確かに……とドラえもんは困りながらも納得したような素振りを見せた。国王は軽く一息ついてから、この娘は言い出したら聞かない性格だからな、と心の内で思い、テラの同行を許可するのであった。

◆第十四章 『護衛』

ドラえもんたち一行は、アポロンが居るであろう砦に向かうことにした。それはつまり、テラと遭遇した例の森にまた入っていく必要があるということだった。テラの情報によると、砦に向かう途中にある森は、肉食系の動物が多数徘徊する場所とのことだ。

ドラえもんたちは全員、上陸の際の装備を再び身にまとい、テラを中心に配置した陣形で歩みを進めた。とはいえ上陸時と違い、人のような知的生命体の出現は皆無とわかっているため、ドラえもんたちの歩く速度は普通のそれと同程度だった。

「しかし、こんな危険な場所に……よく一人で乗り込もうと思ったね」「お恥ずかしい……兄のことでつい感情的になり……後先考えぬ行動だったと反省しております」

のび太の言葉にテラは照れくさそうにうつむきながら答えた。

「あ、ご、ごめん！　そういうのじゃなくて……ぼくなら怖くて飛び込めないなあ、と思つて。本当にお兄さんを大切に思つてるんだね、テラは」

「はい。本当は優しい兄様ですから……」

そんな会話をしているのび太たちを警戒する眼が多数、周囲に光っていた。その気配をいち早く察知し歩みを止めたジャイアンの背中に、テラと話をしていたのび太がぶつかった。

「あいた！　もー、どうしたんだよ、ジャイアン！」

「……あんまり気い抜いてんなよ？　のび太」

そう言つてジャイアンは後ろののび太を横目で見ながら、周囲を見る、と言わんばかりに顎でサインを送った。

「ん？　……ああ！」

全員が状況を理解した。気がつくやうに昨日テラを襲ったオオカミの群れが周囲を囲んでいた。

「のび太、数は昨日の倍ほどか？」

「うん、そんな感じだね。しずかちゃん、テラを守つてあげて」「わかったわ！」

「ジャイアンは前、ぼくは後ろ、のび太くんは左右をお願い。スネオくんはしずかちゃん、フオローをよろしく！」

「任せて！」

グルルル……

「性懲りもなくまた来やがるとはな」

「アポロンさんはこの森を一人で抜けられるだけの力を持っているということだよな？」

「そうなるね」

「はい。兄は武術にも長けておりますので、この程度の状況なら難なく切り抜かれると思います」

「ひえー……本当にスゴイお兄さんだなあ」

「おしやべりはその辺にして！ 来るよ！」

グワオオーツ！

オオカミは吠えると同時にドラえもんたちに襲いかかった。

「行くよ！ 空気砲ドカン!!」

その砲撃でオオカミが三匹吹っ飛んだ。周囲のオオカミは一瞬萎縮したが、そんなことはお構いなしにドラえもんは二発目、三発目を発射した。

「ドラえもん、派手にやるじゃねえか！ よおし！ 俺も！」

ピシッ！ ガンツ！ ビシイッ！

ジャイアンは同時に襲いかかってきたオオカミ三匹をジャブ、アツパー、ストレートと派手かつ華麗に葬った。

ピシッピシッピシッ！

ウオン！ キャン！ クーン……。

ジャイアン程の派手さはないが、のび太は全弾一寸の狂いもなくオオカミの急所である鼻先に命中させていた。

ビビビビッ！

ギャウンツ！ ギャウンツ！

しずかのショックガンがオオカミたちに命中した。しかし、もともと射撃は得意ではないため、全弾命中とまではいかない。

その様子を見てオオカミたちは標的をすぐにしずかに変えた。

ジャイアンとのび太ではなく、しずかとドラえもんに標的を絞ったオオカミたち数匹が隊列後方から迫る。ドラえもんもそれに気付き、しずかと共に攻撃するが、二人の放つ攻撃はオオカミたちの華麗な左右ステップによって空を切った。三匹のオオカミがドラえもんとしずかに襲いかかる。

グワオオツ！

「うわーっ！」

「きゃーっ！」

「しずかちゃん！ ドラえもん！」

絶体絶命かと思ったその時、涼しい顔をしてスネオが襲い来るオオカミの前に立ちはだかった。

「ほい！ ジャイアン！」

スネオはひらりマントでオオカミたち三匹を軽く上空へいなした。意味も分からず宙を舞うオオカミたちは、最も行きたくなかったであろうジャイアンの元に運ばれた。

「おうよ！ ほらよ、のび太！」

ビシッ！ バシッ！ ズドツ！

ジャイアンは、ジャブ、アツパー、ストレートと丁寧にオオカミたちにお見舞いし、のび太の前方に吹き飛ばした。

「任せて！ ……バババン！」

のび太の三発速射は空中のオオカミたちの鼻を正確に捉えた。悲鳴ともつかぬうめき声をあげ地面に落下した。

『ナイスコンビネーション！』

みんなは勝利を称えハイタッチした。

「スネオさん、ありがとう！」

「ありがとう、スネオくん！」

「ふふん。たまには良いとこ見せないとね」

「スゴイ！ みなさん、とてもお強いのですね。城の衛兵でもここまでの連携はできませんわ」

いや〜それほどでも、とテラに褒められて力の抜けかかったドラえもんたちの前に、大きな身体をしたボスオオカミらしき獣が、数匹の

オオカミを押しつけ奥からその姿を現した。

グルルル……

その身体は他のオオカミよりも二周りほど大きく、風貌はライオンにも見える。毛は銀色で片目は傷ついていた。

「いよいよボスの登場か！ 腕がなるぜ！」

興奮冷めやらぬジャイアンの横から、ドラえもんが何ともゆるい感じで飛び出した。

「なーんだ、やっぱりボスがいるんじゃないか。あ、ジャイアン、しばらく睨みを効かせててね」

おっと？ と拍子抜けしたジャイアンを尻目にドラえもんはテラを呼んだ。

「何でしようか……？」

「これを使ってみてよ……えくと、桃太郎じるしのきびんご！」

「おだんご……ですか？」

「そう。それをボスオオカミに食べさせてごらん」

「え!? で、でも……」

そんなに上手くいくかしら、とテラは心配そうな顔を見せた。ドラえもんは、大丈夫、と言わんばかりにニッコリと笑った。

「そういうわけで、ジャイアン、みんな、協力よろしく」

「勝手なこと言いやがって、わかったよ！」

「今すぐ投げたらダメかな？」

「まあ警戒するだろうね。野生なら特に」

「やっぱり意表をつくしかないか」

そんな話を進めている最中、子分のオオカミたちがドラえもんたちの周囲を取り囲む。両陣営が互いに準備が整った頃合いに、ボスオオカミが開戦の合図とも言える雄叫びをあげた。

ワオ——ッ！

「まずは雑魚の掃除といこうぜ！」

「おっけー！」

ジャイアンとのび太の攻撃は安定したもので、全周囲の半分程度は二人だけで防衛していた。その逆の位置、すなわちドラえもん、しず

かの方面に隙があると見るや、ボスオオカミは素早い動作で二人のエリアまで回り込み、ものすごい勢いで突進してきた。

「空気砲！ ドカン！」

「あたしも！ ええい！」

ドラえもんの空気砲としずかのショックガンがボスオオカミに向けて放たれた。しかしその巨体とは裏腹に高い敏捷性を持っていたボスオオカミは、華麗に全弾を避けてドラえもんたちに飛びかかってきた。

「ふふ、飛んだらダメでしょ」

飛び込んだ先にはスネオのひらりマントが待っていた。ひらりといなされたボスオオカミは、今度はのび太の前方へと飛ばされた。

「撃つなよ！ のび太！」

「え!？」

つい反射的に撃とうとしたのび太は、スネオの声に反応し慌てて前に向けていた手を引っ込めた。

「今だ！ 着地を狙って！」

「え!？ は、はい！」

スネオからの指示を受けたテラは、言われた通りボスオオカミの着地に合わせてきびだんごを投げた。ボスオオカミが振り向くタイミングに合わせてつもりだった。ところがボスオオカミは、その巨体とは思わせぬ柔軟さを見せ空中で半ひねりをし、こちらに身体の正面を向けた体勢で地面に着地をした。着地した眼前にテラのきびだんごが放られてきたが、ボスオオカミはそのきびだんごを避けてかわし食べることがなかった。

「猫みたくに身軽な奴だな」

「案外おいしいのに。もったいない」

「へ？ のび太、食べたことあるの？」

「気をつけて！ もう一度来るよ!!」

ボスオオカミは、軽く吠えて周囲のオオカミたちに命令を送った。命令を受けたオオカミたちが一斉に飛びかかる。それと同時にボスオオカミはドラえもんたちの隊列を分断させるように猛烈な突進を

仕掛けてきた。

「こいつ！ なかなか考えやがる！」

「とりあえず一旦左右に別れた方が良さそうだね」

「いや、その必要もないでしょ」

そう言つてスネオは再びひらりマントを構えた。

「また着地されるよ」

「いいんだよ」

そう言つてスネオはさつきと同様にひらりマントを振った。ただし、今度は向かつてきた方向にそのまま返すようにマントを制御した。吹き飛ばされたボスオオカミの巨体は空中でまた身体を捻り体勢を立て直す。

「ドラえもん！

着地する地面をめいっばい撃つて！」

「地面!？」

わ、わかった！ 空気砲ドカン！ ドカン！ ドカーン！」

空気砲の着弾により、辺り一面が土煙で覆われた。煙の中に着地したボスオオカミは、周囲が見えないとすぐに判断すると、イタズラにその身を動かさず警戒体勢をとっていた。

シ——ン……

視界を遮る土煙だけが緩やかに動き、何も起こらない状況がしばらく続いた。警戒の緊張も限界に達した頃、ボスオオカミの耳に突然人間の声が飛び込んできた。

「こつちだよ」

スネオの声に反応し目標の位置を掴んだボスオオカミは、子分たちに攻撃対象の居場所を伝えるように、その方向に吠えながら突進を開始した。猛スピードで土煙から身体を出したと同時に何かが前方から飛来し口の中に入った。

モグモグゴクン！

ボスオオカミはテラの投げたきびだんごを思わず食べてしまった。

「ま、吠えるにしたって、噛みつくにしたって口を開けなきやね。あとは頼んだよ」

スネオは何事もなかったようにテラの方を向いて軽く言った。

「さ、命令してみて！」

「え？」

「何でも言うこと聞くよ。もう子犬より大人しいんだから」

ドラえもんの言葉をやや信じられないような素振りです、テラはボスオオカミの方を見た。そこには尻尾を振りながらちよこんと目の前におすわりの姿勢で命令を待っている可愛らしいボスオオカミの姿があった。ドラえもんはきびだんごの効果をテラに教えた。

「大体効果は一日程度だけど、きびだんごが効いている間に学んだことはそのまま記憶として受け継がれるから、自分のことをよく覚えさせておくのが良いよ」

説明を聞いたテラは接触を試みようとしてボスオオカミに近づいていった。周囲の子分たちがテラを警戒して威嚇したが、ボスオオカミが子分たちを逆に威嚇し黙らせた。

「大丈夫だよ！ ほら！」

のび太がボスオオカミの首元に抱きついてみせた。ボスオオカミは嬉しそうにのび太の顔を舐め始めた。

「わ！ くすぐりたい！ あはは！」

その光景を見てテラは安心した。自分も撫でてみようと近づき、右手を優しく差し出してみた。するとボスオオカミはその手に頬を擦り寄せて舐め始めた。

「ね？ 大丈夫でしょ」

「ええ。ドラちゃんさんの道具つてすごいんですね」

「いやーそれほどでも」

やはり褒められるのは嬉しいらしく、ドラえもんのニヤケ顔は止まらなかった。

「あら？ 腕が……」

ふと見るとボスオオカミの右腕に傷ができていた。あれだけ派手に戦ったんだから当然か、とのび太たちは思うと同時に、大人しくなった今を見て少し罪悪感も感じていた。

「ちよつと待ってね」

そう言つてテラは身に着けていたスカーフを外し、傷のある右腕に優しく巻き付けた。

「とりあえずはこれで大丈夫かしら」

ボスオオカミはスカーフの匂いを嗅いでから、テラの顔に鼻を寄せ、改めて匂いを嗅いだ。しばらくして匂いを覚えたのか、テラの頬を嬉しそうに舐め始めた。

「わ！ くすぐつたい！」

「君のご主人さまだからね。ちゃんと覚えておくんだよ」

「うふふ、かわいいわね。何だかペロを思い出すわ」

「そうだ！ 名前をつけてあげようよ！」

「へー、のび太にしてはいいアイデアじゃない」

テラはのび太たちの盛り上がりに対し戸惑い、しばらくはその成り行きを見守ることにした。

「守り神とかなら、ガーディアンとかはどう？」

「何だか可愛くないわ。シロとかの方が馴染みやすくない？」

「それじゃありきたり過ぎるよ。ピョートルとかグリゴリーとかは？」

『全然馴染まない！』

名前候補を上げたスネオに一斉に否定意見が浴びせられた。

「ジャイアンは何かないの？」

木によっかかり腕を組んで場を静観していたジャイアンは、突然ののび太の声がけにやや驚いた。

「い、いやあ、おれは特には……ないな」

人差し指で顎元を軽くかきながら、そう答えた。

「そういえばジャイアンのところにも犬がいたよね」

「あ？ ムクのことか？」

「そう！ ムクがいいんじゃない！ ね？」

のび太は自信ありげに振り向きながらみんなに提案した。

「ジャイアンの代わりにテラを守るという意味でピッタリだ！ いいんじゃない？」

「ナヌ!? 俺様の代わり？」

やや顔を赤くしてスネオに切り返すジャイアンを見て、しずかはクスと笑いながらその意見に同意した。

「そうね。確かにピッタリだわ」

「!? ☆」

「でしよ〜!」

「じゃあ、ムクで決まりだね」

しずかは成り行きをキョトンと見守っていたテラの手を取り、さあ、とその手をボスオオカミの首元に持っていた。

「今日からあなたはムクよ。ムク、これからはテラを危険から守ってあげてね」

そう言っただけでしずかはムクから少し離れ、テラとムクの二人だけの空間をつくってあげた。ムクは再びテラの顔を舐め始めた。テラは喜びながらも、周りのオオカミたちの不安そうな雰囲気を感じ取っていた。

「ムク、あなたは仲間たちと自分の住処におかえりなさい」

「え!? 護衛として連れて行かないの?」

テラの決断に驚いたのび太は思わず聞き返した。

「ええ。ムクは群れのリーダーです。こちらの都合でリーダーを奪っては、きつとお仲間たちが路頭に迷ってしまうかと」

「……たしかに」

「それもそうね」

テラはドラえもんたちの方を向いて小さく頷き、ムクの首元にそつと手をあて語りかけた。

「さあ、お行きなさい。もう人間に悪さしちやダメよ?」

ムクは寂しそうに顔をテラの頬に擦り寄せた。テラはムクの頭をよよしと優しく撫で、ゆっくりと自らの身体を一步引いた。ムクは名残惜しそうな素振りをしながらも、仲間たちを引き連れて森の奥深くへと帰って行った。

「行っちゃった。これで良かったの?」

「ええ。ムクが居なくなったら、他の子たちが暴れてしまうかも知れませんが。それよりも、この辺一帯が安全になる方が良くないと思いま

す」

「でも、あんな頼もしい護衛もなかなか居ないよ?」

「大丈夫です! 私にはみなさんという、これ以上ないくらい頼もしい護衛が付いていますから!」

テラに讃えられたドラえもんたちは、少し照れくさそうに笑った。

「それじゃあ改めて、砦に向かおう!」

『おー!』

「……で、砦はどっちだっけ?」

定番のドラえもんのボケにみんなズッコケた。

「ドラえもん!」

「ごめんごめん! こういう時は……人探し傘! アポロンさんはどこにいるの?」

ドラえもんの呼びかけで、傘の上の矢印がアポロンのいる方向を指した。

「ごっちだつて。みんな行こう!」

「ドラちゃんさんの道具つて本当にすごいんですね」

先程のきびだんごの効果を体感したせいもあり、テラは改めて心から感心した。

「でへへ。もつと褒めてください」

「また、調子にのつて」

「冒険つていうと大体故障してるもんね」

「だから! 今回はしっかりと点検に出したの!」

「ちゃんと動いてるでしょ! もう!」

むくれたドラえもんをなだめるように、のび太たちはごめんごめん、と謝りながら道を歩いていった。

一行は人探し傘の指す方向にひたすら進み、かれこれ二十分程が経過した。周りは木々ばかりでなかなか景色は変わらなかったが、潮の香りを少し感じ取れるようになった頃から道が開けてきた。すると突然、人探し傘が動かなくなった。

「あれ? どうしたんだろう?」

「矢印……動かないね」

「やっぱり故障なんじゃないの？」

「そんなバカな！ 何の前ぶりもなく動かなくなるなんて……」

ドラえもんは納得行かない顔で傘の矢印部分をチョンチョンと触ってみたが、特に何かおかしいようにも思えなかった。

「うくん……動かないな……」

「でも、ここまで来れば砦はもうすぐです。ほら！」

テラは遠目に見える砦を指さした。

「ここまで全く迷わずに連れてきてくれたんだもの。とてもスゴイ道具だわ。ありがとう、ドラちゃんさん」

「うう……テラ、ありがとう」

目を潤ませたドラえもんを先頭に、アポロンの居るであろう砦を視野におさめた一行であった。

◆第十五章 『変貌』

森を抜けると平地が広がっていた。雑草もなく、土があらわになっている場所が続く。その先は崖になっており海も見える。ここは島の外周に位置する場所なのだろう、とドラえもんたちは認識した。少し高台になっていく崖の先に砦があった。ドラえもんたちはまっすぐ砦の入り口へと歩いていった。

砦へと近づくと、何やら見張り台のようなものが複数視認でき、その上には衛兵が周囲の監視を行っている様子が見えた。衛兵はこちらに向かって歩いてくるドラえもんたち一行に気が付くと、他の衛兵たちと何やら連絡を取り合いながら徐々に砦入り口付近の見張り台に集まりだした。

「止まれ！ お前たち！ こんなところで何をしている？」

頭上から投げかけられる衛兵の言葉を聞き、全員足を止めた。

「私は王女テラです。兄、アポロンに伝えたき要件があり参りました」

テラはみんなの前に出て、そう衛兵に呼びかけた。

「テラ王女!? し、失礼致しました！ しばらくお待ちください！」

「お、おい待て！」

下に降りようとした衛兵を、もう一人の衛兵が呼び止めた。

「レムリア様からは、何人たりとも入れてはならぬ、と命ぜられたではないか」

「そうだが……テラ王女を締め出すわけにもいくまい」

「うむ、一度レムリア様にご連絡すべきか……いや、今は会議中だったか……」

「何を騒いでおるか」

二人の衛兵が問答を繰り返している場に一人の男が割って入ってきた。

「タ、タミアアラ様！」

二人の衛兵はすぐさま敬礼した。タミアアラは見張り台からドラえもんたちを見下ろし状況を察すると振り向きながら命令した。

「私が迎え入れます。門を開けなさい。レムリア様には私からご報告

しておきます」

『はっ！ 承知致しました！』

見張り台の階段を降りていくタミアアラを衛兵たちは敬礼で見送った。タミアアラの命令により、しばらくした後、砦の門がゆっくりと開かれた。その中央にはタミアアラ当人がテラ王女一行を迎えるために立っていた。

「さあ、行きましょう」

そう言ってテラは歩き出し、ドラえもんもその後が続いて一行は砦の門をくぐった。

□

「こちらの部屋でお待ちください」

タミアアラに案内され、一行は十二畳程の部屋に通された。殺風景なその部屋は、日差しよけの付いた窓が複数あり、あとは最低限のテーブルと椅子が置かれているだけだった。作戦会議用の部屋かな？とのび太は思った。

「テラ様、なにぶんこういう場所ですので十分なおもてなしもできませんが、どうぞおくつろぎくださいませ」

「ありがとうございます。迷惑をかけてごめんなさい」

問題ありません、と言うようにタミアアラはゆっくりと一礼して退室した。ほどなくして部屋の外から足音が近づいてきた。やや早歩きのようにも感じるその足音は、部屋の入り口の扉の前で止まった。外で待機している衛兵の声が聞こえた後、ドアが開き誰かが部屋に入ってきた。それはアポロンその人だった。

「待たせたね、テラ」

「お兄様」

「みなさん、このような遠方まで足を運ばせてしまい申し訳ありません」

アポロンはドラえもんたちにお辞儀をして挨拶をした。みんなは恐縮しながら各々頭を下げた。テラは優しいアポロンを見たからか、少し嬉しそうだった。

「しかし、ここは大事な客人の方々をお連れするような場所ではない

ように思えるが？ テラ」

アポロンはやや困り顔でテラをたしなめた。

「おっしやる通りです……返す言葉もございません」

「テラは悪くないよー」

テラの謝罪を打ち消すのび太の勢いに二人は少し驚いた。

「ぼくたちがアポロンさんと話がしたい、とわがままを言ったから……テラが案内してくれるって言うてくれたんです！」

本当なのか？ という表情を浮かべ、アポロンはテラの顔を見つめた。テラは目を閉じ小さく首を振った。

「経緯は何であれ、みなさまにこちらに向かう道中の警護を依頼をしたのは他でもない私です。お兄様に会いたいという私のわがままのために、大切なお客様であるみなさまを危険な目に合わせてしまった事を深くお詫び申し上げます」

そういつてテラは椅子から立ち上がり、ドラえもんたちに深々とお辞儀をした。

「そんな！ やめてよ、テラ！」

「そうよ。テラが居なかったら、私たちはこうしてアポロンさんに会えたかどうか……」

「俺たちなら全然平気だぜ！」

「ほんとほんと」

「みなさん、ありがとうございます」

両者共に言っていることはおそらく本心なんだろう。その上で互いを思いやっているんだな、とアポロンは目の前でのやりとりを見てそう理解した。そして、確かに経緯は何であれ、今回も大切な妹を守ってくれたことには変わりはないという気持ちからアポロンも頭を下げドラえもんたちに改めて感謝の意を込めてお礼を伝えた。

「さて、私にお話があるとのことですが……」

アポロンは、みなさんもおかけください、と恐縮するドラえもんたちを促すように手のひらを前に差し出しながら席に着いた。

「……そうだね、まずはテラの方から聞こうか」

「は、はい。あの……わたしはいつものようにお兄様の様態が、その

……心配で……」

アポロンは、やれやれまたか、と肩を上下に小さく動かし軽いため息をつきながらも優しい視線をテラに向けた。

「見ての通り元気だよ。相変わらず心配性だな。とはいえ、昨晚は城を抜け出してしまったからな……心配をかけて悪かったね」

「い、いえ。お変わりなければそれで良いのです」

そう答えながらも不安が残るような表情を浮かべるテラであった。それは、踏み込みたくても踏み込めないようなもどかしさを感じるものだった。二人のその様子を見ていたのび太は、アポロンも心なしか苦しい表情のように見えた。ここに来るまでは昨晚のことを質問しようか迷っていたのび太であったが、解決の糸口を掴むべきと口を開くことを決心した。

「あのー、アポロンさん！」

語気の強いのび太の呼びかけに、アポロンは少し戸惑い気味に応答した。

「えと……のび太くんだったかな。何でしょう？」

「はい。昨晚のことです！」

「!？」

その言葉は部屋全体を緊張で埋め尽くした。アポロンは目を細めてのび太を凝視した。

「昨晚のこととは？」

試しているのか本当に質問しているのかがにわかには判断つかない素振りでもアポロンは聞き返した。だが、そんな駆け引きなどはお構いなしに、のび太はただ素直に質問をアポロンにぶつけていった。

「ぼくは昨日の夜、アポロンさんが城から抜け出すところを見ました」「ほう」

アポロンは目を細めゆっくりと組み合わせた両手をテーブルに乗せ、続けて、と言わんばかりに少し前のめりの姿勢をとった。こちらを見続けているその鋭い眼光に押し負けないように、のび太は続けた。

「ぼくは、アポロンさんと目が会いました。覚えていますか？」

「……会っている？ 昨晚……」

何かを思い出そうとするように、アポロンの視線がゆっくりと下に流れた。そして右手で目を覆い隠し、少しの沈黙のあとにつぶやいた。

「……記憶の共有は不完全ということか……」

「え？」

アポロンは改めてドラえもんたちを見定めた。そしてテラの方を見たあと何かを警戒するように視線を背後のドアにやった。しばらく考えた後、彼らこそが相談すべき真の相手か、と心で呟き話をきり出した。

「突然のことで大変恐縮ですが、みなさんにご相談したいことがあります」

「!？」

「お兄様……？」

「おそらく、みなさんは既にご存知かと思いますが、私にはもう一つの人格が宿っています」

「え!？」

「なんだって?」

「ど、どういうこと?」

「お兄様……」

唐突な展開と告白にドラえもんたちは豆鉄砲を食らったような表情へと変わった。アポロンは人差し指を口にあて、静かに！という仕草をし、後ろの衛兵を目で気にする素振りを見せた。みんなハツとして、慌てて口を手で覆った。

「やはり……私の身に起きている異変をご存知だったのですね。父やテラから話しが伝わっているとは思いました。そうでなければ、わざわざこんな場所にみなさんが来る必要もないですからね」

みんなは目線を下げて沈黙した。

「みなさんは父やテラから私の様子を伺うように頼まれたというところでしょうか……そして「頼まれた」ということは、わたしの危惧していたことが今起きているのですね……」

アポロンは背筋を伸ばし、ひと呼吸してから続けた。

「もう一人の私が外界侵攻を企んでいるということですか?!?」

みんな、アポロンの推論をただ黙って聞いていた。のび太はこうも素直に自分の非を認めて話すことが出来る人がいるのかと感心していた。しかし、攻撃性があるとは聞いてはいたけど悪いことをしているという話は特に聞いてはいない。ましてや外界侵攻なんて大きな話もつてのほかだ。何を思っそう言ったのかはわからないけど、そこまで自分を責めなくてもいいんじゃないだろうか、と思ったのび太はアポロンを擁護するように否定した。

「ううん、それは違うと思う!」

一同の視線はのび太に集まった。

「ぼくには、アポロンさんが悪いことをする人だなんて思えない。王様やテラも、最近のアポロンさんをただ心配していただけなんだと思う!」

のび太の発言を聞きながら、しずかも大きく頷いた。アポロンは困りながらも少し嬉しそうな顔をした。

「本当に君たちは優しい心を持っているんだね。ありがとう」

真っ直ぐな心が乗ったアポロンのお礼の言葉を聞いたのび太たちは思わず赤面した。

「しかし……情けない話ですが、事実である以上対策は行わなければなりません。ある程度想定はしていましたが、私一人の力ではどうにもならないというのも歯がゆいところでした」

「自分の意思での制御は難しいんですか?」

のび太の問いにアポロンはゆっくりと頷いた。

「意識してはいましたが、難しいと言わざるを得ません。先程のお話で言えば、城を抜け出したことは私も覚えているのですが、のび太さんにお会いした記憶がないのです。これは、もう一人の私の記憶が共有されていないことになります」

「そんな……」

「切り替わるきっかけとかはわからないんですか?」

堪りかねてしずかが割り込んだ。

「すみません。それもまだわかつていないのです。わたしも今、そのきっかけの解明を急いでいるところなのですが、残念ながら現状はいつ入れ替わってもおかしくない状況にあります。そこで……」

そういつてアポロンは次に続く言葉を一瞬飲み込んだが、意を決してドラえもんたちに懇願するのだった。

「そこで、テラが友人として見込んだあなた方にどうか私の動向を監視してもらえないでしょうか」

『ええ!?!』

「そして異変、つまり害ある行動を取った場合、もしくはそう感じた場合は、手段を選ばず止めて欲しいのです」

「お兄様!」

「あなた達は不思議な道具を持っているとミヨイから聞きました。それは王族でも知らない効果だと聞いています。できればそれら道具を使って、私を止めて欲しいのです」

そう言いながらアポロンは頭を下げた。いつ入れ替わっても、という事実を聞いて場は騒然としたが、解明を急ぎたいというアポロンの要望もあり、遠慮した質問をしている場合でもないドラえもんたちは考えた。

「あのーすみません……これから少し踏み込んだ話をします」
「どうぞ」

おそるおそる手を上げたドラえもんに対してアポロンは、当然のことです、というように受け入れた。

「なぜ、別の人格が現れるようになったのですか？」

ドラえもんの鋭い質問に息を呑んだアポロンは、どこを見つめるでもない目をしながら答え始めた。

「思い当たる節はありません。私が島の外の人間に対して殺意を抱いていた……いや、おそらくは今でも心の奥底では殺意を抱いているのだと思います」

語尾をやや強め、アポロンはキッとドラえもんの方に視線をやった。

「そんな!？」

「とてもそんな風には感じないよ!」

「ああ!」

みんなの優しい返答を聞き、アポロンは哀しく遠い目をしながら一度目を閉じた。そして震え始めた手を強く握りながらゆっくりと口を開く。

「一年程前……私のせいで、ある方が命を落としました……」

「お兄様! その話は!」

「いいんだ!」

アポロンは激しい口調でテラを制止した。

「私には兄のように慕っている人がいました。名をアレスと言います。一年前、そのアレス兄さんの外海調査に同行し、ある大陸に上陸していた時のことです。私達は大陸に住む人間たちの襲撃を受けました」

そう話した後、アポロンは少し間をおいた。気を落ち着けていたのか、一息深呼吸をし再び話し始めた。

「アレス兄さんは私をかばい……逃がすために……大陸の人間に命を奪われました」

『ええ!?!』

ややうつむいて無念そうに哀しみの表情をしたままアポロンは続けた。

「私は……アレス兄さんのおかげで命を取り留め、何とか島へ戻って来ることができました。ですが……」

「ちよ、ちよつと待って! そんなのおかしいよ!」

「そうだよ! この島の人が大陸の人間に負けるなんて!」

思わずのび太たちは声を荒げた。これだけの文明の開きがあるのに、大陸の人たちとの戦鬪で優位に立てないはずがないと、ドラえもんたちはそう思っていた。その思いがアポロンの話を中断させてしまった。

「……掟です」

哀しい表情をしながらテラがポツリとつぶやいた。

「掟？」

「はい。この島の掟です。外界の人間に決して手を出してはならない、と……」

「そんな！ 自分の身を守るためでも？」

「はい」

のび太は確認するかのようにはアポロンの方を見た。だがアポロンも納得の行かない様子でただ頷くだけだった。

「アレス兄さんを失い、怒り狂う感情に襲われた私は、この島の掟を呪いました。その憎悪の制御ができず、怒りに身を任せた私は破壊衝動に駆られ、手当たり次第の破壊を繰り返しました……」

ここまで話すとアポロンの手の震えはおさまった。

「私は、自分の中でその私怨の件は解決したものだ……打ち勝ったものだと思っております。ですが、人の心はそんなに強くはないようです。心に憎悪が残っているのに気付き、自分で何とかしようと試みているうちに精神が分離し、結果、二重人格という現状を招いてしまいました。自分で自分の嫌な面に蓋をしてしまったのです。おそらく……改善には向かわないでしょう」

それを聞いたドラえもんたちは思案を巡らせたが、そんな都合良く解決策など思いつくはずもなく、しばらく沈黙が続いた。

「そうなるやっぱり、監禁とかしかないのかなあ？」

「スネオさん!!」

「だ、だってさ……」

みんなも失礼だとは感じていたがスネオの意見ももつともだとは感じていた。そのせいもあって、このスネオの発言の後、のび太たちはしばらくアポロンとテラの顔が見れなかった。場に気まずい空気が漂う中、ふふふ、とアポロンが軽く笑った。

「いや、あなたの言うとおりです。そしてやはり、監視はあなた達に頼むべきと確信が持てました」

「え？ それはどうして？」

「お兄様……」

みんなはおそろおそろアポロンに視線を集めた。

「王子である私に言いづらいことをみなさんはハッキリと言ってください。テラ。監禁はおそらく父も考えていたはず。そうだね?」

アポロンの視線に耐えきれず、テラは一度視線を反らしたが、頑張って再度アポロンと視線を合わせた後、コクリと頷いた。

「やはり……息子に対して、という甘さもあつたとは思いますが、王子が監禁というのは民に示しがつかないというのと、罪状が不明確というのが理由でしょう」

父親の身内への甘さにやや困り顔となつたアポロンはひとつため息をついた。

「昨年の破壊行動後ならいざ知らず、これから悪いことをする可能性がある、という根拠の薄い予測だけで監禁というのは、そもそもの秩序を乱す恐れがあります。使い方次第ではただの恐怖政治となりますから」

「疑わしきは罰せず、ね」

アポロンはこのしずかの知的発言に少し驚き、その学の高さに敬意を払うように、そのとおりです、と答えた。

「あの……もう一人の人格は、何をしようとしているのでしょうか?」

「おそらく外海の人間を攻撃しようと考えているはずです。私怨に染まった私ならきつとそうする」

躊躇せず断定し、なおもアポロンは話を続けた。

「ただ、それに関する情報、記憶は今の私には見えていません。自分のことなのに情けない話です……」

「うーん……なるほど……」

ドラえもんたちは今までの情報を整理した。そんな中、のび太は気になってきたキーワードのことを質問した。

「あの……さっきの「掟」についてなんだけど……」

その間にはテラが答えた。

「古くからこの島にあるしきたりで、この島の外の人間を支配、殺傷することを全面的に禁じているのです」

「……? 特に悪いしきたりとは思えないんだけど……?」

「はい……あの、この件は後ほどご説明しますので、今は許していただけないでしょうか」

テラはアポロンの方を横目に気にかけてながら、のび太にお願いした。

「え!?! あ!?! うん、わかった。ごめん!」

「すみません……」

テラは申し訳なさそうに頭を下げた。

「……なるほど。大体わかりました。そういうことでしたら、今すぐにも監視装置をつけさせて頂きます!」

ドラえもんが椅子から降りて、ポケットから道具を出そうとした。しかしいつも以上に道具の取り出しに時間がかかっていた。

「どうしたんだよ? ドラえもん」

「あれ? ちょっと待ってね……えーっと……あつた! スパイ衛星!」

……と言ってもその道具は誰にも見えていなかった。この道具はスゴイ小さいため、目を凝らさないと見えないためだ。

「おい、ドラえもん。何にも見えないぜ? 大丈夫かよ?」

「これは本当に小さい衛星なの! 大体、大きかったらすぐに発見されちゃって困るでしょ!」

「そ、そうだな、わりいわりい」

「まったくもう! じゃ、衛生を……と……あれ? あれ?」

「どうしたの?」

「衛生が飛ばない……」

「またあ?」

「故障ばかりじゃねえか!」

「せっかく頼ってくれてるんだよ? 何とかならない?」

「そうは言っても……あ!?! 動いた! 良かったあ……」

スパイ衛星が動いたようで一瞬は安堵した。もともと一番安心したのはドラえもんだろう。スパイ衛星はアポロンの身体を旋回し始め軌道に乗った。

「これで大丈夫。あとはどこからでも様子を見ることのでき……」

得意げになって話しているドラえもんの言葉を遮るようにアポロンは勢いよく席を立った。突然のその行動にみんなは一瞬固まり、アポロンの顔を見て驚いた。そこには優しさの微塵も感じられない表情が浮かび上がっていた。

「テラ！ 俺はこれから大事な用事がある。今すぐ友人たちを連れて帰るんだ」

「そんな！ 兄さん！ 待って！」

「アポロンさん！」

部屋の異常な雰囲気を感じたのか、突然部屋の扉が開き、慌てた表情の男性が一人入ってきた。

「アポロン様！ どうかなされましたか？」

その男は中年風の容姿をしていて、背には紫のマントがなびいていた。その外観からは、よく居る優しい雰囲気叔父さんという印象を受けた。

「レムリアか。例のものはどうなっているか」

「あ……は、はい。あと二時間程です」

「そうか。では少し確認するでしょう」

「ははっ！ ……あの、この御方たちは？」

「テラの友人だ。要は済んだ。お引き取り頂くところだ」

アポロンはそう一方的に話したあと、誰の言葉にも耳を貸さず、部屋から出ていってしまった。

「何だっつてんだよ、一体……」

不満そうなジャイアンの顔を見てレムリアが言葉を添えた。

「みなさま、大変申し訳ありません。アポロン様は本当は心優しい御方なのですが、たまに気性が荒くなる時がございまして……」

レムリアからアポロンの振る舞いに対する謝罪を受け、ドラえもんたちは言葉を発せられなくなった。

「わかってるわ、レムリア。兄様をお願いね」

「はい。不肖ながらご尽力致しますゆえ、本日のところはどうかお引き取りを」

テラとドラえもんたちに深々と頭を下げながらレムリアは懇願し

た。

「よ、よしてくださいよー!」

「別に何とも思ってませんから」

のび太が頭を上げてくださるとあまりに一生懸命なので、レムリアはその身体をゆっくりと起こした。

「タミアラよりお話は伺っていましたが……そうですか、あなた方がテラ様のご友人でしたか。どうかテラ様のこと、よろしくお願い致します」

「大丈夫よ、レムリア。この方たちはとても不思議な力を持つてて強いのよー!」

「なんと! そうでしたか。いやはや頼もしい!」

「だから私の方は大丈夫。心配しないで」

「承知しました。では私は引き続きアポロン様のご様子に目を光らせておきます」

「お願い」

テラは切望するような眼差しでレムリアに言葉を送る中、先程アポロンが口にした言葉が気になっていた。

「……ねえレムリア。「例のもの」って?」

レムリアは、ああ……と思い出したかのように答えた。

「実は……アポロン様から造船の命を受けておりました……」

「造船!? 外界調査は向こう十年は中止となったはずでは……目的はわかっているのですか?」

「名目としてお聞きしているのは、中長期間の海洋漁業用の船だとのこと。ただ……あまりにも突然の造船依頼……アレス様の一件が絡んでいるのではないかと危惧しております」

「……お父様への報告は?」

「既に。しかし造船そのものは兵器の製造でもなく、さらには侵攻を決定付けるものではないゆえ、国王様も動けないご様子です」

「確かにそうね……」

「ただ、アポロン様自身が兵器のようなものでございますので、急ぎ何らかの対策は必要かと思えます」

「わかりました。ありがとうございます。引き続き兄様のこと、よろしく願います」

「かしこまりました。では、わたくし実務がありますゆえこの辺で失礼とさせていただきます。みなさま、テラ様の帰路の護衛、何卒よろしくお願い申しあげます」

「任せてください！」

胸を叩き自信満々に答えるのび太を見て安堵したレムリアは、静かに退室していった。

「……しかし、アポロンさんは一体どうしたってんだ？」

「ほんと。人が変わったようだった」

そんなみんなの会話を聞いて、のび太は少し警戒するような口調でつぶやいた。

「あの顔だよ……昨夜見た、もう一人のアポロンさん」

『ええ——っ!?!』

◆第十六章 『昼餐』

アポロンのことは気になるが、会ってもらうことも難しい状況だったため、後のことはレムリア卿に任せてドラえもんたちは一旦砦を後にすることを決めた。

「しかし驚いたなあ。あれが、もう一人のアポロンさんか」

「かなりコワイ感じだったよね」

「信じられないわ……」

「……」

テラは何もしゃべらなかつた。少し落ち込んでいるように見えるテラに、のび太は優しく話しかけた。

「テラ、元気出して。アポロンさんならきつと大丈夫だよ」

「ありがとう、のび太さん」

そう励まされたテラは少し顔を上げ、のび太に微笑んだ。

「スパイ衛星も付いてるしね。これでアポロンさんの行動は監視できるよ」

ドラえもんがまた得意気になって言った。テラは、まだ事情がよく掴めないのか、微笑むもののその印象は暗かった。

「少し覗いてみようか」

そういつてドラえもんはポケットから受信テレビを出し地面に置いた。みんなはどれどれ、というように屈みながらドラえもんの近くに集まった。

「まずは衛星を打ち上げて……と」

ドラえもんがスイッチを押すと、ロケットが天高く飛び上がった。

「これでオツケー。さ、見てみよう」

ドラえもんがテレビの横のダイヤルを操作すると、

そこには何だかわからない映像が映し出された。

「何だこりゃ？ おい、ドラえもん！」

「何だかわからないわ」

「どうなってるんだよ！」

「まあまあ、慌てないで。きつと衛星の距離が近すぎるんだよ。こう

して半径を広げて……と」

ドラえもんが機械のダイヤルをひねると、徐々に対象物がはつきりとしてきた。そこには椅子に座り、部下と思わしき相手に指示を出しているアポロンの姿が映し出された。

「これは？ 兄さん！ これはいったい……」

「さっすがドラえもん！」

「これは故障してないようだね」

「しつこいなあ！ もう！」

相変わらずの嫌味なスネオのツツコミに、ドラえもんはさも付き合うように憤慨して返した。

「何を話してるんだろう？」

「あ、待って。音声は……つと」

ポチツ。

「……で……てる？」

「お、聞こえてきたぞ」

「何か聞き取りづらいな……」

「声が反響してるのかしら？」

「洞窟のような場所ってこと？」

「うーん、砦の中には……見えないね……」

受信テレビの画面には、小さめのテーブル、そして椅子に座って話をしているアポロンの姿が表示された。向かいに立って話を聞いているのは、さつき砦であったレムリアらしき人物のようだ。

「では、残るは最終調整のみということだな？」

「はい」

「わかった。ならば俺は部屋で待機している。終了次第連絡せよ」

「はっ！」

そう言うアポロンは席を立ち、待機するための部屋に向かって歩き始めた。

「……ちよつと遅かったかな？」

「何を待ってるんだろう？」

「うーん、ここから先はあまり情報は期待できそうじゃないね」

部屋についたアポロンはおもむろに上着を脱いだ。どうやらベッドで横になるようだ。

「きゃっ!」

「あわわ!」

しずかの声に反応してドラえもんはすぐさま画面を消した。そこは王子様に憧れる女の子だけあって、少々刺激が強い映像だったようだ。

「ま、まあ、こんな感じでアポロンさんの監視については問題ないかな。またしばらくしたら見てみよう」

「そうだね」

「何かあったらテラにも連絡するよ」

「はい! お願いします!」

テラは何かしらの情報に期待するように、元気に返事をした。

「さて、それじゃあ……これからどうするか話し合おうか」

「グゥ」

『?』

ドラえもんの話しが終わるとほぼ同時にジャイアンのお腹がなった。みんなの視線を一身に受けたジャイアンは照れくさそうにえへへと笑った。

「俺が言う前にお腹が答えた」

「ぷっ!」

『あはははは!』

「たしかにそろそろお昼だね。ご飯にしようか」

「賛成!」

「テラ、この辺に景色の良いところってある?」「この辺にですか?」

……ちよつと難しいですね……城の近くならとても素敵なお花畑があるのですが……」

遠いから時間がかかるといふ旨を伝えようとしたら、ドラえもんが自信ありげに答えた。

「じゃあ、そこに行こう!」

『ええ!』

困惑しているみんなをよそに、ドラえもんはポケットから道具を引っぱり出した。

「どこでもドア！」

「おいおい、ドラえもん」

「そうだよ。どこでもドアは地図がなければ使えないって以前、白亜紀の時に言ってたじゃないか」

ドラえもんはみんなから一斉クレームを受けたが、フフンと鼻をならし微動だにしない。

「たしかに行つたことがない場所には地図が必要です。みんなよく覚えてたね」

「だったら……」

「だけど一度行つた場所なら自動でインプットされるのです。僕たちは一度城に行つたから……」

そう言いながらドラえもんはどこでもドアを開けた。そのドアの先にはたしかにドラえもんたちが訪れた王城が見えた。

「すげえー！」

「やるじゃねえか！」

「これは……!? どういう!?」

「ドラちゃんの道具の一つなのよ」

驚くテラにしがすがドラえもんの道具について軽く説明をした。道具には役に立つ不思議な効果があること。そしてそれら道具は無数に存在することを。テラは感動を覚えたように、すごい……とため息混じりに言った。

「さあ、行こうか！」

ドラえもんたちはどこでもドアを通り、城近くのお花畑に出た。緩やかな傾斜となつている広大なお花畑は、この島の穏やかさを雄弁に語っているようだった。ドラえもんたちは、その景色が一望できそうな丘の上に行き、昼食を取るための椅子とテーブルを用意した。

「さ、みんな座つたかな。それじゃあ、いつものやつを……」

そう言いながらドラえもんがポケットを探っていると、ポツリポツリと水滴が肌に当たり始めた。ふと上を見ると、暗雲という程ではな

いが雨雲が広がっていた。

「ありやりや」

「雨が降ってきたね」

「また壁紙ハウスかな……」

「それじゃあせつかくのお花畑が見えないわ」

「外じやなきや意味ないもんね」

「うーん、どうしようか……」

ドラえもんも雨よけの道具はいくつもあるが、屋外で屋根、壁なしという条件に少し困っていた。そんな中、テラが静かに祈りを始めた。

「あれ？」

「お！」

「まあ！」

「すげえ！」

するとみるみるうちに上空の雲は晴れ、ついには眩しい太陽が顔を出した。お祈りを止めたテラの手には、首から下げていたペンダントが握られていた。

「これ、テラがやったの？」

のび太は空を見上げながらテラに聞いた。

「はい。王族に代々伝わるこのペンダントには、天候を制御する力があるそうです。このおかげで、私たち一族は短期間で大きく繁栄することができたとか」

「たしかに、農作物にしたって台風の被害がないだけでずいぶん違うよね」

「いやー驚いた。僕のお天気ボックスみたいだね」

「え？　じゃあ、それを出せば良かったんじゃないの？」

「いや、その……実はお天気カードを切らして……ゴニョゴニョ……」

「なんだ、テラの方が優秀じゃん！」

「うむむ……言い返せない……」

またもやスネオに痛いところを疲れ、ドラえもんは閉口した。そん

な様子を見てテラは慌ててドラえもんを擁護した。

「そんな！　これは一日に一回しか使えないという制限がありますからとてもかかいません！　それに、ドラちゃんさんはもつとたくさんの道具をお待ちではないですか。私なんかより遥かにすごいと思いますー！」

想像以上に激しく擁護するテラを見てみんなは少し驚いた。

「……だつてさ」

「良かったなドラえもん！」

「ありがとう、テラ。それに比べてきみたち！　少しはぼくに感謝というものがないのかね！　まったくー！」

「わりいわりい！」

「感謝してるわ。いつもありがとうドラちゃん」 「ほんとほんと」

「ちゃんと感謝してるからさ！　ドラえもん、そろそろアレを出してよ」

「ん、天気も良くなったことだし、そろそろアレを出しますか！」

『待つてました！』

「もう、調子いいんだから……グルメテーブルかけ！」

ふわっとテーブルに広げられたグルメテーブル掛けを見てテラは「またも不思議な顔をした。そのテラの顔が新鮮だったため、ドラえもんたちは含み笑いをした。」

「おれカツ丼！」

「ぼくカレーライス！」

「わたしはナポリタン！」

「ぼくはフィレミニヨンスステーキをレアで」

「ぼくはどら焼き」

ドラえもんたちが勢いよく喋ったあとすぐに、目の前に食べ物が続々と現れた。テラは見たことのない食べ物や並ぶ様に驚くのと同時に美味しそうなおいに興味津々だった。食べ物に目がないあたりは王女とはいえやはり女の子だな、と少しは思うのだった。

「テラ、よかつたらこれ、食べてみて」

テラはしずかからナポリタンを手渡された。少し酸味を感じる不

思議な香りに戸惑った様子を見せたが、それよりも美味しそうな雰囲気の方が勝っていたようで、おそるおそるながらも、食べてみようとしてフォークを手を取っていた。

「!? 美味しいー!」

「でしょ?」

自分の好物をテラに喜んでもらえて、しずかは嬉しそうに笑った。

「それじゃあ私の分も、ナポリタン! あ、あと粉チーズも!」

しずかは、こうするのよ、というように粉チーズをナポリタンにかけてからテラに粉チーズを渡した。

「コクが出て、味もまろやかになるわ」

テラも真似して粉チーズをかけた。また違った味を感じたようで、何とも可愛らしい至福の笑顔がこぼれた。

「うふふ」

「ふふふ」

「あはは」

みんなの笑い声を聞いて我に返ったテラは赤面してうつむいてしまった。

「ごめんなさい。あまりに幸せそうに見えてつい微笑ましくて」

「美味しいんだもん、仕方ないよ」

「そうそう。遠慮なんてしないでどんどん食べてよ」

少し恥ずかしそうにしていたテラだったが、食欲には勝てないようで、食べては笑みがこぼれ、また食べては微笑んで、と頬に手をあてながら繰り返した。

「ドラえもん、紙ナプキンあるか?」

「ん? あるよ、はい」

「それ、テラに渡してやってくれ。食べ慣れてないだろうから」
「え?」

そう言われてテラを見てみると、幸せそうに笑う王女の口の周りには、美味しさを証明するかののようにケチャップによる芸術的な絵が描かれていた。

「ふふ。気が利くのね、たけしさん」

「い、妹がそうだったからな」

少し顔を赤くするジャイアンを見て、しずかはクスッと笑った。そろそろみんな食べ終わりそうな時に、のび太がふと遠目に見える建物に気が付いた。

「ねえ、テラ。あの建物は何？」

城の裏側に見える老朽化した廃墟のような建物をのび太は指差した。

「あ、あれはこの島に古くからある遺跡です。王族が先祖代々受け継いできたものです」

「へー、伝統的な建物なんだね。でも、ずいぶんと壊れているように見えるよ」

「はい。昔はあの遺跡が城の役割を担っていたそうですが、現在の城が建設されてからは、あまり建物の存在自体に重要度はなくなりまして……修理等も後回しになっているのが現状です」

「ふーん……そうなんだ」

のび太は最後のカレーを口に運び、もぐもぐと噛みながら遺跡をじっと眺めた。

程なくして全員が食事を終え、ドラえもんたちは今後の行動を決める話し合いをしよう、という流れになった。

「さて、これからどうしようか？」

「あ、あの……」

テラがおそろおそろ手を上げて発言した。

「わたしはこの後に公務が控えているためお城の方に戻らなければなりません。本当はもつとみなさんと一緒に居たいのですが……ごめんなさい」

「そんな！ 謝る必要なんてないよ！」

「王女様ですもの。大切な仕事があるなら仕方ないわ」

「また今度、島を案内してね」

「はい！ みなさん、ありがとうございます。頼ってばかりで申し訳ありませんが、兄のこと、よろしくお願いします！」

そういつてテラは城の方に向かって走っていった。

「何か進展があつたらお城に連絡しに行くよー!」

「お願いしまーす!」

テラは立ち止まって振り向き手を振った。それを見送ったドラえもんたちは、再び今後の行動について話し始めた。

「さて、これからどうしよう?」

「ぼくは、あの遺跡が気になる」

「そうだね、ぼくも行こうと思つてた。この島の歴史に関わるヒントがありそうだからね。じゃあ、ぼくとのび太くんはあの遺跡を探検かな」

「俺たちは少し森の中を警備してみる」

「俺たちって……? ぼくも!?!」

「なんだ? スネオ。行くよな?」

「も、もちろんだよ、ジャイアン……」

「しずかちゃんは?」

「わ、わたしは……その……」

しずかは少し照れながら話し始めた。

「ここのお花畑をもつと見ていたんだけど……だめかしら?」

「全然いいよ!」

「ここならお城も近いから安全そうだしね。いいんじゃない」

全員の意見がまとまったところで、ドラえもんは切り株形状の椅子から飛び降りた。

「じゃあみんな、念の為、身を守るためにさつきまで使つてた道具はそのまま持つててね」

「おう。あとドラえもん、きびだんごはまだあるか?」

「え? きびだんご? あるよ……えーと、はい」

「サンキュウー」

「でも……なんでまた?」

「あ? この森を確実に安全にするためだよ」

俺がずつと護衛することはできないからな、という言葉が続くんだらうなど、みんなはジャイアンの言葉を聞いてそう思った。

「なんだ、テラのためか。ウフフ」

そんな中、ドラえもんは今までの鬱憤を晴らすかのように嫌らしく笑った。

ゴスツ！

「この街の人のためだよ！」

頬を赤くしたジャイアンの鉄拳がドラえもんの頭部に真上から突き刺さった。

「まったく……冗談が通じないんだから……」

「あははは」

「あとは、通信機を渡しておくね、はい」

「それじゃあ、大体二時間後くらいにもう一度ここに集まろうか」

『オツケー！』

「じゃあ、行ってくるぜ！」

「とほほ……」

「みんな、気をつけてね！」

「行ってきまーす！」

「じゃあしゅかちゃんはどこで待っててねー！」

「はーい！」

◆第十七章 『遺跡』

のび太とドラえもんはこの島の歴史ともいえるであろう遺跡の前に立っていた。老朽化も激しく壁はツタで覆われ、以前に人が住んでいたという生活感の面影はどこにも見当たらない。正門らしきものも半壊し、二人の侵入を阻むようなものもこれといってなかった。

「なんか、すごい有様だね……」

「うん」

「勝手に入っちゃって良いのかな？」

「テラも特に何か言おうとはしてなかったからね。大丈夫じゃないかな」

ドラえもんは閉ざされた門に向かって歩きながら答えた。高さ二メートルほどの鉄製の門は傾き錆びていた。こじ開けるのは難しそうだが、この高さなら何とか登れそうだ。

「崩落があると言っていたから、そもそも立入禁止だとは思うけど……」

門に触れながらその奥を覗き込むと、所々に新しい崩壊の後が散見された。崩れた壁や粉碎された石の位置や形をよく見ると、自然的なものではなく人為的な破壊によるものに思えた。苔が付着している床の上に散らばっていることから、少なくとも一年以内のものだと予想できる。そんなことを考え、ジツと奥を見ているドラえもんの横にのび太が歩み寄ってきた。

「あれ……アポロンさんがやったのかな？」

「たぶん……そうじゃないかな」

「アポロンさんはなんで遺跡を破壊したんだろう？」

「さあ……あ！　そういえば掟のこと、テラに聞きそびれちゃったね」

「うん……でも、何か聞きづらかったから……」

「……そうだね」

「うん」

二人は何かを確かめるべく、門をよじ登り遺跡の中へと入っていた。遺跡の中央には大ホールがあったが、屋根と呼べるものは頭上に

はなかった。おそらく経年劣化により崩落したんだろう。元住居と思わしき場所に繋がる通路は絶たれ、その先にも崩落の跡があった。

「あんまり調べられそうな場所はなさそうだね」

「うん。あ、奥に何かあるよ?」

「なんだろう?」

「石板……?」

二人は大ホール奥にある大きな壁画の前に設置されている台座の前に立った。台座の上に配置された石板には何か文字が刻まれている跡があったが、表面のほとんどが破壊されていたため、それらを読むことはできなかった。その破壊の様はところどころにくぼみがあり、やはり自然的というよりは人為的なものに見えた。

「……これ、アポロンさんが?」

「うくんどうだろう? でも、そうだとしたら何で石板を?」

「ただの破壊衝動かな?」

「でも、どうやったら石板にこんなくぼみがつくんだろう?」

「何か特別な道具とか……まあそれは考えてもしょうがない。とりあえず削れている部分を復元してみようか」

「そうだね」

「タイムふろしき!」

ドラえもんは石板を覆うようにタイムふろしきをかけた。

「どれくらいかな?」

「数年前程度ならすぐだと思うよ。ほら」

ドラえもんがタイムふろしきをめくると、そこには文字が復元された石板があった。石板には何か文字らしきものが記されているが、何て書いてあるかはわからなかった。

「読めないね」

「こんなときは……ほんやくコンニャク!」

二人はどれどれ? と石板を覗き込む。

石板には島の掟が二つ記されていた。

ムーの掟

ひとつ：この島の外に生息する知的生命体に対して、我々の持つ文明を伝授することを禁ずる。

ひとつ：この島の外に生息する知的生命体への攻撃、並びに侵攻による支配を禁ずる。

「なんか……普通のこと書いてあるような気がするんだけど」

「たしかに。でも、この島の文明は明らかにこの時代の世界よりも遙かに進んでいる。鎧も武器も中世並みのものがあるし、やる気になればこの時代の全世界を支配できるだけの力は持っている」

それはたしかにそうだ、とのび太はドラえもんの言うことに納得した。

「だから、二番目の掟はそれを抑制するための掟なのかも知れない」

「テラの言っていた掟というのは多分これのことだよな？」

「だろうね。この掟をアレスさんは頑なに守って……」

「アポロンさんが怒るのもわかる気がするなあ」

「うん」

「でもさあ、アレスさんは良い人だから掟を守れたのであって、そもそも悪いことを考える人が一人でもいたら、この掟を守るのってすごい難しいことじゃない？」

「そうなんだよね……おそらく大侵攻が起きるだろうね。でも、そんな大事件が起きていたら歴史がずいぶんと変わっていると思うし……そもそもムー大陸は滅ばない気がする」

「うーん……」

答えの出ない問題を考えながら、のび太は奥の壁画に目をやった。すると壁画の一部が光ったように見えた。

「ん？ 何だろう？」

不思議に思っただけで石板の台座の後ろに周り込み、壁画を調べようとグツと顔を近づけた。色の着いたガラスのような素材でできた壁画を見て、その綺麗さに思わず手を伸ばし指先が触れた。その途端、老朽化が進んでいた壁画の一部が剥がれて地面に落ちていった。

「あー！」

ガシャ……キン……

石畳に落ちた壁画の破片から妙な金属音がした。剥げた石畳の部分を覗き込むようにしゃがんでみると金属のような床が顔を出していた。

「ドラえもん！ これ！」

「ん？ これは鉄？ ……いや……違う！ この材質は……まさか！？」

ドラえもんものび太の横にしゃがみ、自分の手でその床を触ってみて驚いた。

「間違いない……これは、ぼくが居た二十二世紀の未来にしかない材質だ！」

「え!? だって、この遺跡は伝統的なものだって！」

「わからない……なんでこの時代にこんなものが……」

二人はその床の周辺にある石畳を剥がし始めた。徐々に未来の材質でできた床があらわになり、床下収納のような蓋の形状が確認できるようになった。大ききからいつて地下への入り口だろうと二人には推測できた。

「開ける取っ手もなさそうだけど……どこかにスイッチとかあるのかな？」

「いや、正常に動作するかどうかとも怪しいからここは……通り抜けフープ！」

ドラえもんが通り抜けフープを床に置くと、フープの中に地下に降りる階段が現れた。階段の先は真っ暗で何も見えない闇が奥へと続いていた。

「地下に続いているのか。このままじゃ暗くて見えないな……ヘッドライト！」

「あ、それ水中用ってわけじゃないんだ」

「ただのライトだからね」

ヘッドライトを付けた二人はゆっくりと階段を降りていった。階段は曲がりくねりもせず、素直に真っ直ぐ下に続いていた。階段は地下二階程度まで続いており、降りた先には頑丈そうな扉が一枚あるだけだった。

「潜水艦とかで見ると立派な扉だね。かなり厚みがありそうだ」
「この扉は明らかにこの時代のものじゃない。ぼくたちの時代レベルのものだ。材質は……やっぱりさつきと同じ二十二世紀のものだ」
のび太はハンドドル形状になっている取っ手を掴んで回してみた。崩落などで砂汚れはあったものの、サビというものとは無縁の材質のようで、かなり軽い力で回すことができた。回すたびに天井から少量の砂がパラパラと落ちてくる。取っ手を回しきった状態で扉を押してみると、分厚いその構造とは似ても似つかない軽さで、のび太が身体を預けるだけで素直に開いていった。

「うわっ！ 軽い！」

「そうだよ、頑丈で軽いんだ」

「すごいなあ……」

ドラえもんたちが扉を開け部屋に入っていくと、そこにはたくさんモニターや計器類が並んでいた。壁にひびが入っている箇所はあったが、崩落の影響はあまりないようにも思えた。ただ、それら計器類には電気は流れておらず、全ての計器は沈黙を保っていた。

「ここは何をする部屋なんだろう？ 何かの操縦席のように見えるけど……」

「それにしても、このコンピュータは明らかに未来の世界のものだ。のび太くんたちの時代よりも遙か先の……」

「そうみたいだね。……このコンピュータ、動かないのかな？」

「うーん、無理みたい。電源の問題もあるだろうけど、何より基盤が故障していると思うよ」

ドラえもんはひびの入った壁を見ながら言った。

「そうだ！ タイムふろしき！ ……は、石板か。ちよつと取ってくる！」

「お願い！」

のび太は急いで階段を登り、タイムふろしきを手に戻ってきた。そしてメインとなる操作盤の上にフワツとかけてしばらく待った。

「……何も起きないね」

「きつとずいぶんと前の年代のものなんだよ。もう少し待ってみよ

う」

ブ……ン……ピッ……

いくつかのランプが点滅した。

「やった！ 動いた！ ……あれ？」

「少し前の状態に戻ったのかな。まだ故障してる所があるみたい」

「もう少しかあ」

しばらくかかるかなあ、と思った矢先、ドラえもんたちの後ろが突然明るくなった。振り返ってみると入り口付近の壁のモニターが復活していた。

ドラえもんたちは表示されているその内容を見るべく、そのモニターに近づいた。モニターには文字が表示されており、一番上のタイトルらしきものには「ムーの掟」とあった。

「ムーの掟って、さっきの石板の？」

「そうみたいだね」

「なーんだ」

「!? ちょっと待って！」

のび太が興味をなさそうに目を背けた瞬間、ドラえもんが興奮気味に語気を強めた。

「どうしたの？」

「これは……書かれている内容が違う！」

「え!? ほんと？」

ひとつ：我々はこの惑星に住まわせてもらっている立場だということを決して忘れてはならない。

ひとつ：我々はこの惑星が本来迎えるべき未来に対して干渉してはならない。

「ほんとだ、違う。でも、何だかふわっとした内容だね」

「たしかに石板はこの内容をもっと明確に置き換えた表現になってたけど、重要なのはそこじゃない！」

「え？」

「惑星という言葉が使われているんだ」

「あ！ ほんとだ！ じゃあ……」

ドラえもんはのび太の顔を見てうなずき話を続けた。

「ムーの人たちは地球外から来た異星人ということだよ！」

「そうだったのか……それでこれだけの文明を」

「でもおかしい……街並みやお城にしても文明レベルはこのコクピットのレペル程高くない。一体なぜ……？」

考えるドラえもんをよそにのび太はモニターを覗き込んでいた。

「あれ？ 掟がもう一つあるよ？」

「え？ ほんとだ。ナニナニ……」

『……………』

『え———!?!?』

遺跡の石板にはなかった第三の掟を読み、二人は驚愕した。

◆第十八章 『ペンダント』

しずかは目の前に広がる一面の花の海に感激していた。四季折々の花が一同に介するその花園は、まさにしずかが夢見た景色だった。しずかは幾多もの香りを楽しんでいる最中、ふと 髪飾りなどを作りにたくなりもしたが、あまりにも素敵なこの花園を傷つけるような行為と感じたため、残念ではあったが思いとどまった。

広大な花園で両手を広げてはしゃぐしずかのその姿は、まさに映画で言うところのお姫様のそれだった。そんなしずかに見惚れたかのように遠目で見つめている一人の男がいた。しゃがんで花に囲まれていたしずかは、その男の存在に気付き振り向いた。しずかと目があつたその男は、微笑みながらゆっくりとしずかの傍に歩み寄って来るのだった。

「アポロンさん!？」

「こんにちは。たしかテラの友達の、え……と」

「しずかです」

アポロンは名前を知らなかったことを申し訳なさそうにしながら頭を掻いた。しずかは優しいアポロンと認識するよりも早く、その様を見てクスッと笑った。

「ちゃんと自己紹介してませんでしたね。わたし、しずかといいます。どうぞよろしく」

深々とお辞儀するしずかの気品さを前に、アポロンもつい反射的に儀礼の際の挨拶を行った。

「アポロンと申します。こちらこそよろしくお願いします。しずかさ
ん」

王子という言葉が似つかわしいその美形に、しずかは乙女心をあらわに感動していた。

「ステキ……」

「え?」

「あ、いえ! なんでもないです!」

思わず言葉に出してしまった恥ずかしさと、憧れの男性像を前にし

ずかの顔は真っ赤になっていた。

「!? 顔が赤いようですが、熱でもおありですか？」

ゆっくりと額に伸びてきたアポロンの手を、しずかは反射的に身を引きかわしてしまった。

「いえ、これはそういうのではなく……その……だ、大丈夫です！」

「そうですか。それならば良いのですが。もし体調が優れないようでしたら遠慮なく言ってください。城の方で手当をさせますので」

「は、はい。ありがとうございます」

「テラを助けてくださった恩人にもしものことがあつたら申し訳が立ちませんので」

(あ、あー……そういう……そうよね)

しずかはその言葉に少しがっかりしたが、同時に現実に戻されリラックスもでき落ち着くことができた。向かい合った二人の間には、しばらく沈黙が続いた。

(しかし本当に母上の面影を感じさせる人だ……)

アポロンはしずかを見つめながら、ふと子供の頃のことを思い出していた。王妃、すなわちアポロンの母親が重い病にかかり亡くなったときのことを。

◇

「母上……やだよ……ずっと一緒にいてよ……」

「泣かないで、アポロン……母はこれからもずっとずっとあなたを見ているわ。本当よ」

ベッドで横になっている母の胸元に抱きつき、泣きじやくった顔を押し付けている幼いアポロン。その傍には国王と、泣いているテラを優しく抱いているミヨイがいた。

「アポロン、手を出してご覧なさい」

「……うん」

王妃は枕元にあつたひし形のペンダントを、差し出された小さな手のひらの上に乗せた。そのペンダントは王妃が常日頃愛用していたアクセサリであった。

「なあにこれ？」

「それはね、あなたを救ってくれるお守りよ」

「お守り？」

「そう。あなたはこれから色々なことを経験していくでしょう。楽しいこともあれば辛いこともあるでしょう。そしてそのうち、家族以外に大事にしたいと思える人がきつと現れます。そのときにこれを……あなたが心から大切にしたいと思うその人に渡しなさい」

「どうして……？ 母上からのプレゼントなのに？ ぼくあげたくない！」

「言ったでしょ？ これはお守りなの。きつとあなたを救ってくれるわ」

◇

「……さん？ アポロンさん？」

しずかの呼びかけにハッと気付いたアポロンは、薄っすらと涙を浮かべた眼を急いで腕で拭った。

「大丈夫ですか？」

下からアポロンを覗き込むしずかと目が合い、意表を付かれたアポロンは驚きのあまりすばやく身を引いた。が、あまりに慌てて後退りをしたため、かかどが草に引っかかり、バランスを崩しそのまま豪快に尻もちをついた。周囲の草花が勢いよく空中に舞い上がり、王子の身へふわりと舞い降りていった。

「こ、これは失礼……」

しずかは、自分を見上げる姿勢になった王子を見てキョトンとした。そのおどけるアポロンの姿が意外だったのか、しばらく眺めた後にクスクスと笑い始めた。

自分の慌てっぷりを思い出したアポロンは、その無垢な微笑みに誘われてしずかと一緒に笑うのだった。

(こんなに笑ったのはいつ以来だろう……)

アポロンは楽しそうに笑っているしずかを見て小さな幸せを感じていた。

自分の中にもう一人の人格が現れてからは周りが自分を見る目が明らかに変わった。ご機嫌を伺うものは変わらざだったが、親しきも

のは減り、怯えるもの、忌避するものが増えた。もう一人の自分の攻撃性を考えれば仕方のないことだったが、その現実を受け入れることと寂しいことは別だった。

身内とですら心から笑ったのは、ここしばらくはなかった。身内であるほど気を遣うがゆえ、どうしてもはれもの扱いとなり心に溝ができていくのを薄っすらと感じていた。そのせいもあり何とか自分一人で解決しなければ……と、より孤独な選択へと陥っていた。

(そんなもう一つの人格を抱えている自分に怯えもせず、あまつさえ心配までしてくれるこの人は……ぼくにとってはまさに救いの女神だな……)

いつにない和やかな気持ちになれたアポロンは首にかけたペンダントを外そうと手を首の後ろに回した。

「それ、とても綺麗なペンダントですね」

しずかはアポロンの隣に座りながらペンダントの輝きに目をやった。

「ご覧になりますか？」

そう言つてアポロンは外したペンダントを隣に座っているしずかに手渡した。

「これにも……何か特別な力があつたりするのかしら？」

「力……ですか？」

「ええ。テラのペンダントには、天候を変える力があるとのことだったので」

「ああ、そういうことですか」

アポロンは今の晴れた空がテラのペンダントによるものだと知つてか、ふと空を見上げた。

「確かにテラのペンダントにはそういう力がありますね。でも、わたしはどうもそういった特別な力はないみたいですよ」

残念ながら、という感情を含むような表情で答えたアポロンは昔の母の言葉を思い出し、そういえば、と続けた。

「……お守り……とのことです」

「え？」

遠い目をしながらアポロンはそうつぶやいた。

「それは母から譲り受けたものなのですが、母が言うには、私を救ってくれるお守りなのだ……」

「そうなんですか。テラのペンダントがあれだけすごい力を持っているんですもの。このペンダントのお守りの力も、きつとすごいんでしょうね」

「そうかもしれません」

アポロンはふふ、と自然に笑みがこぼれた。と同時にそんな振る舞いができている今の自分に驚いた。たったひと時だとしても、久しぶりに心からの安らぎを与えてくれたし、感謝をしながら、ペンダントを覗き込むしずかを優しく見つめた。

「さて、わたしはそろそろ行きます。突然お邪魔して申し訳ありませんでした」

スツと立ち上がり軽く腰を払うアポロンを追うようにしずかも立ち上がった。

「いえそんな！ 私の方こそ、アポロンさんの邪魔をしてしまったのではないかと……」

「はは、そんなことはありませんよ。むしろ救われました。ありがとうございます、しずかさん」

「救われたって……何もしてないのに大げさです」

「いや本当に……」

そう言ってアポロンはしずかを真剣な眼差しで見つめた。その視線にしずかは耐えられず赤面し、つい目をそらしてしまった。

「あ、すみません！ ペンダントお返ししますね！」

しずかは照れながらペンダントを差し出した。だが、アポロンはそれを制止するよう手のひらを前に出し軽く首を振った。

「いえ、それはしずかさんが持つていてください」

「え!? だってこれはお母様の形見だって……」

「そうですが、母にはそうするように、とも言われていました」

「そうするようには？ ですか？」

「はい。自分にとって心から大切な……」

そう言いかけてアポロンは赤面した。つい何の躊躇もなく話そうとしていたが、自分が好意を抱く女性に対して気持ち告げることが、とても勇気がいることなのだ、今この瞬間に体感したのだった。

「大切な……？」

「あ！ いや、た、大切な……そう！ この大切なペンダントは、他の者に譲ることにより更に強い効力を発揮するとも言っております」

「そうなんですか!？」

「え、ええ」

(かなり無理があるけれど一応嘘ではないな。まあ所詮、言い伝え程度の加護だから信憑性がなくとも問題あるまい)

アポロンは視線を大きく横にずらし、照れを隠すように右手で口元を覆いながら、そう思った。

「じゃあ、わたしが持つことでアポロンさんにもっと大きな加護が?」

「はい。煩わしいかもしれませんが、どうか持っていて頂けないでしょうか」

「そんな！ 煩わしいだなんて……こんな素敵なペンダント……すごく嬉しいです!!」

思いもよらぬ素敵なプレゼントをもらったしずかは大いに喜んだ。

「でも、本当にいいんですか……？ 私ではなく、それこそテラに渡す方が良いでしょう?」

しずかは手のひらに乗せたペンダントの輝きを見ながら、やや罪悪感を感じアポロンに訊ねた。

「問題ありません。譲渡の対象は身内以外ということでしたので」

「そうなんですか……」

譲渡対象に関しては本当のことだったのでアポロンは動揺することなく伝えることができた。しかしそれでもしずかはあまり納得していない感じの様子だったのでアポロンは少し言葉を添えた。

「何か妙な条件ですよ。でも、言い伝えとはそういうものかと」

アポロンは笑いながらそう答えた。その笑顔を見てしずかも素直にアポロンの好意として受け止めようと決めた。

「わかりました。では、このペンダントは大切に預からせていただきます。ペンダントさん。どうかアポロンさんに大いなるご加護をお願いします」

しずかはそう言って、両手でペンダントを握りしめ祈った。アポロンはしずかに対して片膝を付き、よろしくお願いします、と告げた。それは中世の騎士が王族に対し忠誠心を示すポーズであり、現代ではプロポーズの際に用いられているポーズでもあった。

◆第十九章 『逃走』

ジャイアンとスネオは再び森の中にその身を投じていた。街から砦に向かう通路を重点的に警備し、危険な動物を発見したら桃太郎じるしのきびだんごを与えるという、地味だが重要な任務をこなすためだ。だが今のところ、人間に危害を加えそうな獣とは遭遇せず、森は安全そのものだった。

「な、何も出ないね……ジャイアン」

「なんだスネオ、何か出てきて欲しいのか？」

「そ、そそ、そんなわけないよ！」

ズカズカと大きな歩幅で堂々と歩くジャイアンの後ろをキョロキョロと周囲を警戒しながらスネオがついて行く。スネオは怯えるあまり、ジャイアンのシャツを握ろうかという中腰姿勢になっていた。

「なんだよ！ くつつくなよ、歩きづれえだろ！」

「だ、だって……」

ジャイアンはスネオを追い払うように腕を大きく振り上げた。

「うーん、やっぱ、道じゃなくて少し外れたところを歩くか」

「ええ!? あ、危ないよ！」

「そうだな。ま、それを排除するために来てるんだからな」

そう言いながら道を外れ、ガサガサと草をかき分ける音を出しながら淡々と奥に進むジャイアン。おいて行かれないように慌ててスネオも後についていった。

「ま、待ってよ！ ジャイアンー！」

「スネオ、お前は逆側に行ってもいいんだぞ？」 「じよ、じよ冗談でしよ？ もうー！」

散々テラのことイジられたので、ここぞとばかりにやり返すジャイアン。ふふん、と少し気が晴れるかのような顔を見たスネオは流石に少しボヤいた。

「ちえつ……テラのためだからって張り切り過ぎなんだよな……」

「ああ！ 何か言ったか？」

「な、なにも！ えへへ」

そんないつものやり取りをしている二人の前に突然驚異がやって来た。身の丈ニメートルはあるクマが目の前に現れたのである。一瞬何が起きているのか分からず互いに静止した状態が続いたが、クマの雄叫びにより二人は我に返った。

「ゴアア——ッ！」

『出たー！』

二人は一目散に逃げ出し、その二人をクマが追いかける。とはいえ速度はクマの方に分があるため、徐々に二人とクマとの距離が詰まってきた。

「スネオ！ こっちだよ！」

そう言つてジャイアンは急に方向転換をした。垂直に移動方向を変えることで俊敏さの勝負に持ち込んだのだ。慌てて向きを変えようとするとクマを見て、更に垂直に移動し背後を取った。ジャイアンの行動が早すぎたのかスネオはついてこれてはいなかった。そのためクマは動きの早いジャイアンよりも、動きの鈍っているスネオの方に焦点を定めたままだった。

「こっちだよ！」

不意に発せられた声に反応したクマは、首だけを動かし、すばやくジャイアンの姿を捕捉した。クマが身体を切り返そうとしたその瞬間、桃太郎じるしのきびだんごがクマの口に放り込まれた。

「ふう……なんとかあったな。もう人に悪さすんじゃないぞ？」

そう言つてその場を立ち去ろうと背を見せたジャイアンに、なんとクマが襲いかかった。

「ゴアア！」

「なんだ!？」

「ジャイアン!!」

スネオは即座にジャイアンにタックルして突き飛ばした。その勢いで二人はクマの攻撃を無事かわすことができたが、勢いあまってもつれ草藪の中に転がっていった。

「サ、サンキュー、スネオ」

「いてて……とりあえず助かった」

「なんだ？ きびだんごが効いてないのか？」

「また故障？ ドラえもんめく！」

クマは周囲を見回し二人を探していた。ジャイアンとスネオはクマから離れようとそーつと移動をしていた。クマが二人に背中を向けた瞬間、スネオはチャンスとばかりにショットガンの引き金を引いた。だがショットガンからは何も発射されず、カチツという引き金の音が小さく響くだけだった。

（やつぱり故障か、ドラえもんめく！）

心の中で怒りながらスネオは再びクマから離れようと向きを変えた。その時、足元にある枝を踏んでしまい、乾いたパキツという音が周囲に漏れた。

「あつー！」

思わず声を出してしまったスネオはとっさに両手で自分の口を塞いだ。クマは声が聞こえた方向に振り返った。このままじゃまずい、と思ったジャイアンは、わざと音を出しながらスネオから離れるように移動した。当然クマは大きな音を出しているジャイアンに気付き身構えた。

「こつちだ！ クマやろう！」

ファイティングポーズをとったジャイアンの手にはスーパーグローブが装備されていた。しかしドラえもんの道具は故障している可能性がある、いや、おそらくだが故障していると考えたジャイアンは途端に怖くなった。

それもそのはず、ドラえもんの道具がなければクマに立ち向かうなどという行為は自殺行為以外の何者でもないからだ。恐怖からくる凄まじい緊迫感。しかし、ジャイアンから決死の覚悟とでも言うべき気配でも感じ取ったのか、対峙したクマはすぐには襲って来ず、そのままジツと様子を伺っていた。

（勝てる見込みなんてねえ……どうやって逃げる？）

とても長いようで短い時間が流れた時、先に緊張のピークに達したのはスネオだった。

「う、うわー！ 助けてー！ ママー！」

スネオは叫びながら一目散に逃げ出した。クマは新たに声が発せられた方向に顔を向け、怯えて逃げるスネオを見て目標を変えた。

「スネオー！」

スネオは泣きながら逃げる。クマがそれを追い、そのクマをジャイアンが追いかける。

「待てー！ このやろうー！」

そんな言葉が届かないことはわかっている。だが言わずにはいられなかった。獣と人では走力が違いすぎる。結果、ジャイアンとクマの距離はどんどん開いていった。このままだとスネオが追いつかれるのも時間の問題だ。

「うわあー！」

スネオは逃げながら追いかけてくるクマにショックガンを向けた。何度も何度も引き金を引くが、ショックガンはなんの反応もなかった。

「ちくしょう！ なんで弾が出ないんだよー！」

余計な動作を行った分、逃げる速度が下がり、クマに一気に追いつかれた。捕獲距離に入ったクマは、その巨体を空中に放ちスネオに向かって飛びかかった。

「うわー！ー！」

「止めるー！ー！」

ヒョウツ！！

その時、ジャイアンの横を何かが猛スピードで通り過ぎて行った。

ガウルルルツ！

ガアアアツ！

その素早く通り過ぎた銀髪の獣は、クマの喉元に喰らいついた。たまらないクマは仰け反りながらもその獣を振り払おうと暴れ出した。

「ムク!?」

「へ!？」

ムクはクマの攻撃をかわして着地した。二匹の獣は互いの間合いギリギリのところまで対峙し睨みを利かせていた。しばらくしてクマ

は分が悪いと踏んだのか、諦めて森の奥へと静かに消えていった。

「ムク、おまえ……俺たちを覚えているのか？」

ジャイアンの言葉に反応したムクは、クルツと振り向き二人の元へと走り寄ってきた。二人の匂いを嗅いだムクは、ジャイアンとスネオの頬を交互に舐め始め、尻尾を愛らしく揺らした。

「わかった！ わかったから！」

さすがのジャイアンも大きな身体のムクに甘えられ、少々たじろいだ。

「まったく……身体のデカさといい甘え方といい、うちのムクとは偉い違いだな……」

「でも、助かったよムク。ありがとう」

スネオの素直な感謝の気持ちに喜んだのか、ムクはスネオの顔に頬を擦り寄せた。

「ははは、くすぐったいよ。……しかし……きびだんごの効果は切れてる……ということとは、これはムクの素の性格として定着したということか……」

ムクの喉元を優しく撫でながらスネオはつぶやいた。

「ああ、そういうやそんなことをドラえもんが言ってたかもな」

「道具が効いたり、効かなかつたり……ONとOFFか……」

「さっきのクマには全然効かなかつたのにな！」

ええい！ とかんしゃくを起こしたように、ジャイアンはその場にあぐらをかいて座り、地面を軽く殴った。

ドズ——ン……。

スーパ―てぶくろの効果によって、軽い地震が起きたように地面が揺れた。スネオとムクが軽く地面から浮き上がり、その出来事にムクは目をパチクリしてジャイアンの方を見た。

「あ？ 何だ？」

ジャイアンは突然効果を発揮したスーパ―てぶくろを見ながら疑惑の視線を送った。

「……」

何かに気付いたのか、スネオは真横にある木に向けて突然シヨック

ガンを撃った。

ビビッ！ ピシャン！

スネオの放ったショットガンは、軽く木の幹の表面の皮を剥ぎ、焼き焦げたあとを残した。

「なんだ？ お前のも治ったのか？」

「やっぱり……」

スネオはショットガンを見つめて何かに気付いた様子だった。

「やっぱりって？ どういうことだ、スネオ」

「うん、多分だけどこれは……」

スネオがそう言いかけた時、ムクが何かに反応し、上空に向かって威嚇し始めた。

グルルル……。

「どうしたの？ ムク」

スネオはムクの睨む先に人影を確認した。この島でまだ空を飛べる人間は見えていない。嫌な予感がしたスネオは咄嗟に叫んで指示を出した。

「隠れて！」

そう言っただけ早く草藪の中に隠れたスネオは、はやくはやく、とるように手招きをした。ジャイアンとムクは、訳もわからぬままその指示にただ従い一緒に草藪に駆け込んだ。

「おい！ どういうことだよ！」

「シート！ あれを見て！」

スネオが指指す先には、高貴な王族の正装を身にまとったアポロンの姿があった。アポロンは空中を移動してきたのか、上空から現れフワッと着地した。

「アポロンじゃねえか！ こんなところで何やってんだ？」

そう言っただけ話しかけに行こうと草藪から身を出したジャイアンの腕をスネオは慌てて掴んだ。

「ダメだって、ジャイアン！」

「なんでだよ？」

「よく見てよ、あのアポロンはもう一人の人格の方だよ」

「え？　そうか？」

目を凝らして見ると、確かに目つきの鋭さや立ち振る舞いに鋭利な雰囲気を感じる。それに正装をまとっているせいか、ただならぬ風格も漂ってくる。その独特のオーラを感じ取ったジャイアンは、すぐに元の草藪の中に身を隠した。

「たしかにそんな感じだな。どこかに向かっているのか？」

「さあ……あ、ここって砦の近くだったんだ」

スネオの言葉に反応してジャイアンが周囲を見回すと、確かに百メートル程先に、自分たちが昼前に訪れた砦の入り口が見えた。道を外れてきたつもりが逃げ回った結果、元の道に戻るよう移動していたらしい。

「あれ？　アポロンは砦に向かっているんじゃないのか？」

着地したアポロンはそこから砦には向かわず、逆に少し離れた崖の方に向かっていった。そしておもむろにその崖から飛び降りた。その柔らかな動作からはむしろ「舞い降りた」という方が適切かもしれない。

「なんだ？　今少しこう……フワツとしなかったか？」

「したね。少しだけどフワツとした」

二人はアポロンが飛び降りた崖の場所まで急いで進み、ゆつくりとその崖下を覗いてみた。その後を続くようにヒョッコリとムクも顔を出す。

「ムク、目立つから」

スネオはムクの腕をポンポンと叩き、見つからないよう身を低くするように言った。

「おい、スネオ！　あれは!？」

「ん？　レムリアさんだね。……アポロンさんを迎え入れてる？」

崖下にはレムリアも居た。アポロンと何やら話した後、どうぞこちらへ、と迎え入れるように手を差し伸べアポロンを導き、その後にくように歩いていった。その顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

「……笑ってた？」

「ああ、そう見えたな」

「レムリアさんも外界侵攻を考えているアポロンさんには反対してたよね？」

「だな。よくわからねえ人だな」

「立場的にそう振る舞う必要があるのはわかるけど……どうも嫌々やっているようには見えなかったな」

「あの二人はどこに行っただ？」

「さあ、降りてみないことには……」

そう言っただけで崖下に降りる場所を探そうとジヤイアンたちが動き出した時、ドラえもんから通信が入った。

◆第二十章 『謁見』

ドラえもんとおび太の二人は、遺跡で見たムーの第三の掟の内容を国王やテラに伝えようと城門前まで来ていた。高くそびえ立つ城門の両端には衛兵が不審者を寄せ付けぬよう目を光らせている。そんな中、息せき切って城門に向かった二人は、当然のように衛兵たちに囲まれるのだった。

『止まれ！ 何者だ！』

『あわわわ！』

突然目の前に槍の矛先を突きつけられたドラえもんたちは驚きの声と共に急停止した。

「あ、怪しいものではありません！」

「そうです！ どうしても王様にお伝えしなければならぬことが！」

「王様に？ 怪しいな、どこの街のものだ？」

「ま、街？ えー……と、テラが何か言ってたような……」

「自分の住んでる街がわからないだと？ いやいよ怪しい！」

「連行する！ 大人しくしろ！」

「わー！ 待ってください！ テラに……せめてテラ王女に会わせてください！」

「テラ王女にだと!? 馬鹿言え！ そんなこと叶うわけ無いだろう。」

「よくもぬけぬけとそんなことが言えるもんだ。ほら！ 来い！」

「待ってください！ 本当に怪しいものじゃないんです！」

「何事ですか!? 騒々しい！」

城門の騒ぎをピタリと止めたその声は、鋭さがあり、それでいて規律の正しさを伺わせる凜としたものであった。

『ミヨイさん！』

衛兵の後ろには一糸乱れぬ姿勢で立つミヨイの姿があった。

「ドラえもん様にのび太様？ この騒ぎは一体……どうなされたのですか？」

「ミ、ミヨイ様のお知り合いでおられますか？」

「テラ王女のご友人で、イスタ街から来られている商人の方です」

唾然とする衛兵に拘束を解くようにとミヨイは軽く頷いた。衛兵たちは急いでドラえもんたちの縄を解き、ミヨイの両脇で待機の姿勢をとった。

「ありがとうございます！」

「助かりました！」

「いえ、それよりもどんなご要件でしょうか？」

「はい。実はムーの掟のことで急ぎ王様にお伝えしたいことがあります」

「掟……ですか？」

「はい。第三の掟のことです」

「第三の……それはどこで知ったのですか？」

ミヨイは全く動じずにドラえもんたちに聞き返した。

「城の裏手にある遺跡です」

そう聞いたミヨイはしばらくの沈黙の後、意を決するようにドラえもんたちに答えた。

「わかりました。国王様にお取り次ぎ致しましょう」

「ミヨイ様！」

「よろしいのですか？」

「あなたたち。ここでの件は一切他言無用です。よろしいですね？」

『ハハッ！』

踵を返し衛兵たちにそう告げたミヨイは二人を城へといざなうように城門横の通用門に向かって歩き始めた。衛兵たちは敬礼の姿勢を保ったままミヨイとその後を追う二人を見送った。

◇

ドラえもんとのび太は国王の部屋と思われる扉の前まで案内された。木製で三メートルほどの高さがあるその扉の表面には見事な彫り物が施されていた。

随所には金と思われるもので象られた装飾も見られる。まさしく王道の「王の元へ通じる扉」という雰囲気である。

「お二人はここでしばらくお待ちください」

ミヨイはそう言って扉に着いているドアノッカーをせわしくない間隔でコンコン、コンコンと計四回叩いた。すると扉の向こうから国王と思われる男性の声が返ってきた。

「誰か？」

「ミヨイです」

「何用か？」

「至急、お伝えしたいことがございます」

「わかった。入れ」

「失礼致します」

ミヨイは大きな扉を人ひとり入れる程度に開けた後、その姿勢を殆んど崩さずにスツと身体を部屋の中へと運んだ。扉を閉める際にドラえもんとおび太の方に「お待ちください」というように軽く視線を流した。

ドラえもんたちが部屋の外で待機してから二分程経過した後、その大きな扉が再び開いた。

「どうぞお入りください」

ミヨイは二人が入室するに十分な程度に扉を開け待機していた。扉の向こうには玉座ではなく、おそらく公務をするであろう豪華な社長長の席のようなものがあつた。

国王はその席に座っており、こちらを伺うような眼差しを向けていた。ミヨイからの報告によるものなのか、その眼は鋭く光っているように思えた。ドラえもんとおび太はやや恐縮しながら国王の部屋へと入って行った。

『失礼します……』

入室の挨拶をしながら二人は国王の前まで歩を進めた。ミヨイも扉を閉めた後、二人に続いて進み、国王の右手後方に辿り着くと二人の方に向きを変えて控えめな待機の姿勢をとった。

「さて……ミヨイから話は聞いた。ムーの掟について話があるのとこのだが？」

「はい！ ムーの第三の掟のことです！」

「城の裏にある遺跡で見つけました！」

「ふむ……石版には掟が二つしか書かれていなかったと思うが？」

「はい。その石版の後ろの床に地下室への入り口を見つけたんです！」

「そこで第三の掟のことを知りました！」

「地下室に!? 入れたというのか!？」

突然の思わぬ報告にやや前に身を乗り出した国王は、しばらくして我に返り、ゆっくりと身体を後ろに倒すと椅子に深く腰掛けなおした。

「……あそこは王族でも極一部の者しか存在を知らない場所だ。それにしても、床が開くことはないはずだがどうやって……」

やや下を向いて腕を組みながらそう呟いていた国王は、改めてドラえもんたちに視線を戻した。

「いや、仮にその先の地下室に入ったとしても何もなかったはずだ。明かりさえ届かないあの部屋は、先祖の墓のようなものだからな」

そう言って良い答えに辿り着けず眉間をつまみ悩んでいる国王を見て、二人はなんだか申し訳ない気持ちになり、その辺はドラえもんの道具で解決したという旨を伝えた。

「なるほど、そんな道具が……しかし、きみの道具はこの島から発掘される道具の域を超えているな」

『あははは……』

苦笑いをする二人を見て、国王は何か気付いたかのようにフツと軽く笑った。

「話を戻そう。それで第三の掟にはなんと?」

あ! と思い出したようにのび太とドラえもんは慌てて話し始めた。

「はい。第三の掟は……島の行く末に大きく関わることでした」

「と言うと……」

「第一、第二の掟が侵された場合、この島は消滅する、と」
「!？」

「ムーの祖先がなぜこんな掟を作ったのかはわかりませんが……十分に警戒する必要があると思います王様にお伝えにきました」

「ふーむ……」

目を閉じてしばらく考え込んだ後、国王はゆつくりと目を開き二人の方を見つめながら語り始めた。

「警戒とは……アポロンのことだな？」

『……はい』

国王はため息を一つつき、姿勢を正すべくハンドレストに手を掛けゆつくりとその上体を起こした。

「国王様、私は席を外したほうがよろしいでしょうか？」

ミヨイの問いかけに国王は軽く手を掲げ、その必要はない、と小さく首を振った。国王の瞳はどこか遠くを見つめるような、それでいて確固たる決意を秘めているような雰囲気醸し出していた。

ドラえもんとのび太も、国王のその真剣な眼差しを感じ取っていた。

「さて、ここから先を話す前に君たちに聞きたい。君たちは一体何者だ？」

『え!?! あ、あの……その……』

国王からの突然の鋭い問いかけに二人は激しく動揺した。しかしのび太は重要な内容だということを信じてもらうためにも、ここはごまかさずに素直に話そう? とドラえもんに同意を求めたのだ。ドラえもんもそうするしか信じてもらえないだろうと考え、のび太の提案に賛成した。

「まずぼくたちは、この島の住人ではありません。今まで隠して……」

『すみませんでした!』

二人は深々と頭を下げ誠意をもって謝罪した。

「よい。それはわかっておったことだ。問題はない」

『え!?! なんて……?』

驚く二人の顔を見て、国王は大したことではない、と小さく笑いなから言った。

「晩餐会の時、君たちは『地震』という言葉を使っただろう。地面が揺れたから地震だと」

「はい」

「この島の外の世界では頻繁に起きている現象だろうが、そもそもこの島には地震という現象そのものがないのだ」

「あ!?! (そうだ! 島は浮遊していたんだ)」

「当然民はそんな言葉も知らない。にもかかわらず君たちはその言葉を知っていた。だから島の外からの来訪者だとわかったわけだ」

二人は国王の洞察力に啞然とした。

「すごい……ってぼくたち簡単にボロを出してたんですね……なんか、せつかく庇ってくれたテラに申し訳ないな……」

「ははは。あの子は優しい子だからな。きつと牢屋に投獄されないようにするための配慮じゃろうて」

テラの動向までも見抜くあたりは流石に親だなあ、と二人は感心した。

「だが、それだけではないだろう?」

再び国王は鋭い眼差しを二人に向ける。

「先に言ったように、君たちの持つ道具はこの、いや、この世界の技術をも超越しているものだ。性質はこの島のものととても似ているようだが……なぜだ?」

これだけ洞察力が高い人を前に隠すことはできないと観念した二人は、正直に本当のことを伝えるべきだと考えた。その方が真実味は増すだろうというのも大きな理由だが、その消滅装置がいつ作動するかわからない状況にあるため、事を急ぐ必要があったというのが本音でもある。

「実は……ぼくたちは未来から来ました」

「なんと!?!」

(!?)

そうのび太が答えた瞬間、後ろの扉からドアノッカーが当たる音が聞こえた。その音は意図的に叩こうとして鳴るものではなく、驚いて手を離してしまったが故に生じた音だった。国王は誰がそこに居るのがわかってるように目を細め、入りなさい、と扉の向うに立つ人物に入室の許可を出した。ゆつくりと開いた扉の先には、申し訳な

さそうにやや顔を伏せ、上目遣いでこちらの様子を伺うテラが立っていた。

「今の話を聞いていたね？」

「はい……申し訳ございません……お父様……」

「全く……行儀の悪い子だ」

そう言つて国王はこちらへ来るようにゆつくりと手招きをした。テラは恐縮しながら国王の前まで進み、横に立つのび太の方に顔を向けた。

「盗み聞きしてごめんなさい」

「そんな、こつちこそ……ずつと黙つててごめんね」

謝るテラにドラえもんとのび太も謝り返す格好となった。

「テラよ。どのみちお前には伝えるつもりであった。また今は状況が状況なだけに今回の盗み聞きの件は不問とする」

国王はテラとミヨイの方を伺う。ミヨイは、国王様の望むがままに、と軽くお辞儀をし、その裁定を受け入れた。

「話を戻そう。第三の掟に関してだが、本来これは王族内でのみ語り継がれてきたものだ。この島の民が知った場合は問題だったが、今回は君たちのような外界の、そして心の優しいものたちが知るに留まっている。この点は本当に幸運だった」

そう国王に言つてもらえて喜ぶ二人だったが、少し気になる点があった。

「あのう……一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「なんだね？」

「はい。第三の掟がもし発動した場合、とても不幸な結果になるのはみんなが理解できると思うんです。だったら第三の掟は隠さない方が、第一、第二の掟をみんな一生懸命守ろうとするのではないのでしょうか？」

こののび太の意見にはテラも賛同し頷いた。

「そうかも知れない」

「ではどうして？」

「そうならないかもしれないからじゃ」

「え!？」

「どういうことでしょうか? お父様」

「人は善人だけではない、ということだ」

そう言って国王は皆の顔を今一度見回した。

「君たちはこの第三の掟がどのようなにして実行されるか想像がつくかね?」

「多分……あの遺跡に何らかの装置があるんだと思います」

「そのとおりだ。この島で未知のものとは遺跡のものと同義じゃからな。では、その遺跡を破壊したらどうなるかね?」

『あ!？』

「そうじゃ。きつと第三の掟は発動しなくなるじやろう。そして第一、第二の掟が邪魔だと感じる連中は、きつと遺跡を破壊しようとするだろう」

「……」

「第三の掟はそういった連中を外界に出さないための……この星の未来を守るための隠された抑止力なんじや」

「この星の未来を守るため……」

第三の掟が隠されていた真の狙いが明かされたことで場はしばし沈黙が続いた。そんな中、最初に口を開いたのはのび太であった。

「でもそれって……こここのムーの人たちが外の世界に侵攻しようとした場合、遺跡は……ううん、ムーの祖先たちはムー一族の滅亡を選ぶということですよね?」

「……その通りだ」

「そんな!？」

国王が躊躇なく肯定したことに驚き、テラは思わず手で口を塞いだ。

「なぜなんですか? お父様! なぜ祖先はそうも頑なに外界との接触を禁じるのですか?」

「落ち着きなさいテラ。……のび太くんとドラえもんくんだったか?」

『はい』

「君たちは未来から来たとのこと。ならばなぜそうしなければならぬいかも知っているのではないかな？」

テラは答えを求めようのにび太たちの方を見た。

「……歴史が大きく変わってしまう恐れがあるからです」

「そのとおりだ。良い方向に導ける場合もあるが、その逆もまた大いにある。科学力は均衡していればそこまで大きな問題にはならないが、大きな差があると得てして悪い方向に行きやすいのだ」

『科学』……ですか？」

テラは不思議そうに国王に聞き返した。

「テラには馴染みない言葉だったな。すまない。科学とはドラえもんくんの道具のようなものを指すのだよ」

「あの不思議な力ですね」

「そうだ。ここムーでも王族のみが持つ不思議な力だ。お前のペンダントもそうだな」

国王はテラの胸に輝くペンダントを指しながら言った。テラは改めて自分のペンダントを手に取り、目を凝らして眺めてみた。

「この島ではたまにこういった道具が発掘される。それらは全て王族に託すというのがこの島の決まりとなっているのだ」

「隠したりする人はいないんですか？」

のび太から投げかけられた問には、国王に代わってミヨイが答えた。

「国王様より報奨金が授けられますので、それを目当てに納めに来るという風習になっております」

「そうだな……しかしのび太くんの言うとおり、中にはそうする者もいるかもしれないな。ただそれでも大きな問題にはならない」

「なぜですか？」

「先のテラのように、ムーの人々は王族以外「科学」というものの知識を持たないためだ。これは祖先が意図的にそうしてきたようだ」

「それも外界への接触を防ぐためですか？」

「おそらくはそうだろう。そのため、道具の効果を予想することができない。また何よりその使い方を解明することが難しい。結果、ただ

の置物として扱われるのが関の山だろう。ならば金銭にしよう……と。表向きはこういう流れを期待しての政策じゃ」

国王が淡々と説明をする姿にテラは納得がいかなかった。

（外界との誤った接触が一族の消滅につながるかも知れないなんて……私達ムーの一族とは一体なんの為に存在しているのか）

そんな疑問が頭によぎった。

「お父様！ 外界の人たちと共存する道はないのですか？」

「テラ……」

「そうですよ！」

「きつと道はありますよ！」

ドラえもんとおび太はテラを励ますように擁護した。だが国王の表情は暗かった。

「たしかに……あるかもしれない」

「じゃあー！」

「だが、それは今ではない。外界の文明や科学が同程度になるまで待つ必要があるのだ。それがアレスの一件で感じたことだ……」

「アレスって……確かアポロンさんが慕ってた……」

「はい、そうです。とてもやさしく、そして強い御方でした……」

右手でゆつくりと髭を細めるしぐさを繰り返しながら国王は浅く長いため息をついた。

「友好関係を築こうとするならば、強者は弱者の取る行動に寛容であり続けなければならない。しかし人には感情というものがある。ゆえに、それはとても難しいことなのだ」

国王は両の手を組み合わせ、机の上に両肘を付き話を続けた。

「アレスは最後まで私の、いや、このムーの思いを……その精神を貫いてくれた。だがその結果、アポロンのもう一つの人格を生んでしまった。アレスを外界への調査にやったのは時期尚早だったのだ……これは私のミスだ。彼には本当に申し訳ないことをした」

「……アレス兄さんが外界へ出向いたのは文明の調査が目的だったのですね……そしてお父様も共存の道をお考えに……」

「テラよ、その意思をお前が持つてくれていて父は嬉しく思うぞ」

そう言われてテラの哀しみに覆われていた表情が少し明るくなった。

「でも……それでもこの掟は何かおかしいと思う」

何かに納得のいかない表情ののび太に国王が問いかけた。

「……なぜ、そう思うのかね？」

「だって……あまりにも自分たちに厳しすぎるじゃないですか！ 王様のような素晴らしい人がいて、その時期を待てるんだったら、こんな掟なんていらないうじゃないですか！」

のび太は興奮気味に言った。感情が先走っていたためか、自分でも驚く位に饒舌になっていた。

「なのに……守れなかったら滅亡だなんて……わざわざ島を沈める装置まで造って……そんなの……何かおかしいよ！」

国王は真つ直ぐなのび太の物言いに驚き、聞き終わると共にゆっくりと深呼吸をした。そして目が潤んでいるのび太に向かって諭すように話し始めた。

「きみは本当にやさしい子だね。テラ、良い友人を持ったね」

「はいー」

のび太のムー一族への思いやりのある言葉を聞いて潤んでいた目を拭いながら、テラは元気よく答えた。

「では、その間に答えるでしょう」

『え!?!』

「なぜ、そこまで我々一族は、自らを戒める掟を作らなければならなかったのかを」

そう言つて国王は席をたち、ゆっくりと背後にある窓の方に向かって歩いた。窓に手を掛け懐かしむように外の景色を見渡したあと、ドラえもんたちの方に振り返った。

「まず、我々ムー一族は、この星の住人ではない。別の惑星から来た異星人なのだ」

「!?!」

(やっぱり……)

テラはその真実に驚いた様子だったが、のび太たちは既にその事実

を遺跡で知っていたため、大きく戸惑うこともなく素直に受け入れられた。

「ムー一族は、とても優れた科学力を持つ一族だった。だが、長い年月をかけて培われたその科学力は、あるちよつとしたきっかけで悪しき方向に使われた。なんの事はない。この星でも争いは起きるだろう？」

のび太たちは一瞬考えたが、すぐにその答えがわかった。

「そう、戦争だ。ただし、科学力を用いた大規模の……だ」

ドラえもんやのび太にはどういった内容のものかはすぐにわかった。その反面、テラは想像するのが難しそうな表情を見せていた。

「たぶん……」瞬でこの島が吹き飛ばんじやうような、それくらいの大きな戦争だと思うよ」

「そんな!？」

国王はその発言に領き、テラはその壮絶な内容に驚いた。のび太はやさしい言葉遣いで説明したつもりだったが、衝撃を与えないように伝えるのはやはり難しかった。

「無益な戦いにもかかわらず、愚かにもその戦いを続けたムーの祖先たちの人口は半分にまで減った。それでも互いを殺し合うことを止めはせず、むしろエスカレートしていったとのことだ」

「そんなことが……なぜ」

テラの問に国王は人は愚かであるとしか答えられなかった。そして、欲望というものは際限なく、時に人を狂気に走らせるものである、と付け加えた。

「資源の奪い合いから始まったその戦争は、母星の残り少ない資源を使つて行うという思慮のかけらもない愚かな行為だった。結果、資源は無駄な浪費を続け当然ながら枯渇した。我々の祖先は、母星そのものの寿命を伸ばす道を自ら閉ざし、寿命を短くし破壊する道を選んだのだ」

ドラえもんとのび太はその話を聞きながら、自分たちの住む地球が辿るかもしれない一つの未来の印象を受けた。

「そんな中、科学者の中にいた平和主義者を筆頭に数百人が母星から

脱出した。何十、何百のワープを重ね、ようやくこの惑星に辿り着いたのだ。そして二度と同じ過ちを犯してはならない、という厳格な意思を込めて、この三つの掟を造ったのだ」

そこまで話した国王は、自分の指輪を口元付近まで持っていき、まるでマイクに何かを吹き込むように合言葉らしきことをつぶやいた。すると指輪の中から一冊の本が空中に現れ、国王はその本を手を取った。

「その本は……？」

「先祖代々、王族に継承されているムーの掟が記されている教典じゃ。先程までの歴史も記されておる。我々が紡いでいくべき意思の結晶とでも言うのかのお……」

そう言つて国王は本を開き、ムーの掟一つ一つの真意を語つていった。

■
一) 我々は、この惑星が本来迎えるべき未来に対して決して干渉してはならない

この惑星は本来、先住している生物たちのものであり、外部から来た我々が、その歴史、生物の進化に影響を与えることは、先住生物たちの従来の進化を阻害してしまう行為である。

今、我々が彼ら現住生物よりも遥かに優れているとしても、長い歴史の後もそのままとは限らない。我々が進化を経て獲得した今日の幸福を得る権利は、現住生物にも平等に存在している。

そのため、余計な干渉、ましてや支配により、それら生物の進化を妨げることは、知識を高めることによりくらしの豊かさ求める知的生物の行う行為として最も愚かなことである。この先我々が、この惑星の現住生物が進化した後に生み出す知識の恩恵を授かる可能性は十分にあり得るのだから。

二) 我々は、この惑星に「住まわせてもらっている」立場であることを決して忘れてはならない

現住生物にとって我々は所詮、外部から来た知識を有した厄介者である。惑星の持つ生命、そこから生まれた生物、及びその未来という

ものはそれだけ尊いものである。ゆえに我々は、自分たちの立場を常に自覚する必要がある、決して第一項を犯すような愚行に及んではない。

三) 我々がこの惑星の生物進化に影響を与える行為を及ぼした場合、またはそうと判断された場合、今、我々が住んでいるムー大陸全土は消滅する。

この第三項は王族以外に公にすることを固く禁ずる。これは、遺跡の破壊を未然に阻止すると同時に、この惑星の尊い未来を守るためである。

■ 王様の読み上げた掟に関する情報をのび太たちは黙って聞いていた。それは、自分たちの母星だけではなく、他所の惑星までも滅ぼしてしまうという最大の愚行を侵さぬように造られた、とても厳しい掟であった。

テラは複雑な心境ではあったが、祖先がこの厳格な掟を造った気持ちには少なからず共感していた。

「しかし人間の思考や感情というものはそんなにうまく統率の取れるものではない。それで祖先たちは遺跡に「ある機能」を備えたのじゃ」「ある機能ですか?」

「洗脳装置じゃよ」

「え!?!」

「遺跡には、脳波に対しての洗脳操作(送信)と同時に、各ムー人の脳波の管理(受信)も行っている。そのため、先のような侵略思想を民が抱いていると遺跡のマザーコンピュータが判断した場合、大陸消滅プログラムが動作するようになってる」

「穏やかな気性にするために全国民を脳波コントロールしてたということですか!?!」

「そういうことじゃ。また、こころも記されておる」

・ 惑星を脱出できる程の推進力に関する科学技術

・ ワープ技術

・ 破壊兵器の製造技術

これらに関する技術を伝承することを禁じる。これは「惑星が滅びるならば、脱出して新たな惑星を探せば良い」という安易な考えを子孫に持たせないためである。その惑星の環境を大切にし、共に生きていくという思想を持つことが、ムー人が真に健全に繁栄していくためには必要なのだ、と。

そう語り国王は本を閉じた。その本をポンと軽く空中に放ると、指輪の中に再び吸い込まれていった。

「これがムー一族の秘密であり真実だ」

のび太たちは得られた情報を整理しているせいで一言も発することができず、王室にはしばし静寂の時が続いた。だが、その静けさを消し飛ばすように王室の扉が突然大きな音を立てて開かれた。

「何事だ！」

「タミアラ!?!」

王室内の全員が扉の方を見ると、そこには重症を負ったタミアラの姿があった。左腕、左足を負傷しているようだが、その服には一切血は付いていなかった。

「アポロン様が王家の宝具を持ち出されました」

「何だと!」

負傷しているにもかかわらず、タミアラの声は平常心そのもので、言葉からは疲労感のかけらも感じなかった。ただ、ややかすれている声のように聞こえた。

「危惧していたことが……やはり外界侵攻の準備を整えておったのか。この星のため、ムーのためにもアポロンを止めなければならぬ。

ミヨイ! ワシの宝具を準備させい!」

「はっ!」

「あ! あの! 早くタミアラさんの手当を!」

国王やテラ、ミヨイがあまりにもタミアラへの配慮が希薄すぎており、のび太はこらえきれずに声を上げた。

「ん? おお、そうだな。ミヨイ、あとは頼むぞ」

「承知しました」

「え!?! そ、それだけですか!?!」

「だってあんなにケガをしていますよ！」

「ケガ？ なるほど、そういうことか。案ずるでない。タミアラは人間ではない。アンドロイドじゃ」

『ええー!!』

「動くのは困難かもしれんが痛みはない。そして、そのミヨイもな」
『ええー!?!』

驚きを継続したままドラえもんとび太はミヨイの方へ顔を向けた。廊下のメイドへ指示出しを終えたミヨイは二人の視線に気づき、国王の言を肯定するようにお辞儀をした。

「驚くことでもなからう？ ドラえもんくんだってそうではないか。この王城内のメイドたちもそうじゃ。王城内で王族以外の人間はレムリアしかおらぬ」

(たしかに国王やテラはドラえもんを初めて見たときでも驚かなかつたな、普通なら青ダヌキだ何だとイジられるのに……)

「国王さま、王家の杖のご用意が整いました」

「うむ。では行くとするか」

『ぼくたちも行きます!』

国王はのび太の申し出を背で聞き、少し迷う素振りを見せた。だがすぐにのび太の方を振り返り丁重に断るのだった。

「君たちの気持ちはありがたいが、今回は危険過ぎる。そのような場所に大切な客人を赴かせるわけにはいかん」

「でもー」

国王は食い下がるのび太の肩に手を置き、奥のテラの方に顔を向けた。

「君たちにはテラをお願いしたい。頼まれてくれるか？」

そう言われたのび太は国王の視線の先にいるテラの方を振り返った。テラは様々な思考を巡らせ迷っているようだった。兄であるアポロンを助けたいが、非戦闘要員である自分が足手まといになることも理解している、そんな様子だった。

「さて、愚かな息子を止めに行くとするかの」

国王はそう言いながらのび太の肩から手を離し、いざアポロン討伐

へと出陣していった。

◆第二十一章 『合流』

王室にはテラとのび太、ドラえもんの三人が残っていた。ミヨイはタミアラの修理を行うために既に退室していた。

「王様にはああ言われたけど、そうも行かないよね？」

「もちろんだよ！」

のび太とドラえもんは、アポロンを止めに行く気満々で意気込んでいた。その様子を見てテラも気持ちを抑えられずにはいらなかった。

「あの！ 私も連れて行ってはもらえないでしょうか！」

ドラえもんと のび太は顔を見合わせ、ニーツと歯を見せ合って微笑んだ。

「行こう！ アポロンさんを止めに！ ううん、助けに！」

「はいっ！」

「さて、そうと決まったらまずはみんなと合流しようか。戦力は多いほうがいい」

そう言ってドラえもんは無線機でしずかと連絡を取った。

「……でこういう状況なんだ。とにかくアポロンさんを止めないと」

「わかったわ。そうするとあたしが城門に向かった方がいいわね」

「うん、お願い」

しずかとの連絡を終えたドラえもんは、間髪入れずにジャイアンとスネオに連絡を入れた。

「あ、ジャイアン？ 実はかくかく云々で……」

急いで状況を説明するドラえもんの声を引き裂くようにジャイアンの怒鳴り声が聞こえてきた。

「コラア！ ドラえもん！ また道具が動かなかったぞ！ こっちは命掛けだったんだからな！」

「まあまあジャイアン、とにかく助かったんだから」

「なんだよスネオ、やけにやさしいじゃんか」

「まあね、道具が使えなくなる状況はつきとめた感じ？ ふふん」

「え!? スネオくん、今なんて？」

「だから、ドラえもんの道具が使えなくなる状況がわかったんだって」
「じゃあ、故障じゃなかったのか!？」
「多分ね」

「ど、どうして道具が使えなく……」
「ドラえもん！ それよりも今は！」
「あ、そうか」

ドラえもんはテラの心配そうな顔を見て我に返った。

「実はかくかく云々で、アポロンさんを止めなきゃいけないんだ。それで一度みんなと合流してからアポロンさんを探そうと思うんだけど、二人は今どこにいるんだい？」

「アポロン？ ならさっきまで俺たちの目の前にいたぜ」

「ええ!？」
「ど、どこに!？」

「おれたちは今、砦から二百メートルほど離れたところにいる。そんな急にアポロンが現れたと思ったら、いきなり崖から飛び降りてよ。驚いてすぐ追いかけたんだが見失っちゃまってさ」

「わかった、砦付近だね。しずかちゃんとか合流したらそっちに向かうよ」

「おう」

「今はまだどこでもドアも使えるだろうから急いでね」

「うう道具が使えなくなる理由も聞きたいけど……」

「使えなくなる『状況』だけだね……まあ、合流したら話すよ。みんなで聞いた方がいいでしょ」

「……そのとおりです……じゃあ！ またあとで！」
『おうー!』

通信機を切った後、ドラえもんたち三人はしずかとか合流するために城門に向かうべく急ぎ王室を後にした。

□

(のび太さんたち、もう来てるかしら……)

花畑から急いで城門に向かっているしずかとかは心の中で呟いた。やや急な勾配の先に見える城門には、ドラえもんたちらしき人影が確認

できる。しずかは手を振りながら声を掛け、さらに足を速めた。

「はあはあ……お待たせ！」

「しずかちゃん、大丈夫？」

「これくらい平気よ。それより急ぎましょー！」

「うん！ それじゃあ、ジャイアンたちと合流しようか！」

しずかと無事合流することができた一行は、早速どこでもドアで砦に向かうことにした。スネオの言うように、確かにどこでもドアは使える状態だった。

□

海に面した崖の端に建つ砦を、暑い日差しがジリジリと照らしていた。わずかに吹くこち良い風が潮の香りをジャイアンとスネオに届けていた。自分たちがじつとしてれば波の音しか聞こえない、そんなのどかな風景の中に突然一枚のドアが空間に現れ、ドラえもんたちが足早に出てきた。

「さて、スネオくんやジャイアンはどこかな？」

「おーい！ こつちだよー！」

どこでもドアから現れたドラえもんたちを、スネオとジャイアンが発見し、手を振りながら呼びかけていた。

「いたいた。あれ？ ムクもいる」

「ほんとだ」

「何かあったのかしら」

ドラえもんたちはジャイアンたちのいる崖の方に急いで駆け寄っていた。

「まったく！ こつちは危なく死にかけたんだぞ！」

「ご、ごめんよ、ジャイアン……」

「でも、ほんと無事で良かったわ」

「そうだよジャイアン。それに多分ドラえもんのせいじゃないよ」

「なにい？ それでも危険だったのは本当だろうが！」

「ま、まあ、そうだけど……」

さすがにスネオも、まくし立てるジャイアンは抑えきれず、怒りが収まるまでしばらく待つか、と皆が諦めかけていたその時、場の空気

をものともせずテラの声がそつと入り込んできた。

「たけしさん……そんなに危ない目に会っていたのですか？ よくご無事で……本当に良かった」

すこし哀しげでもあり、それでいて安堵も感じられるテラの親身な言葉にジャイアンはピタツと止まった。

「いやあ、大したことはない、ありませんでしたよ。ちよつと暴れてたクマと闘った程度です」

「まあ、クマと！ お強いんですね！」

「いや、まあ……へへへ」

ジャイアンの手のひらを返したテラへの対応にドラえもんたちはさすがにずっこけた。

「まったくテラには調子がいいんだから……大体、追い払ったのはムクでしょ！」

「うっ……ま、まあそうだけだよ……」

さすがのジャイアンも今回のスネオのツツコミにはバツが悪そうだった。

「まあ、あなたがお二人を守ってくれたの？ ありがとう、ムク」

テラは優しくムクの頬を撫でながらお礼を言うと、ムクはテラに会えたのが余程嬉しかったのか、テラを身体で囲うように一周して顔を擦り寄せた。

「ふふふ。ムク、嬉しそうだね」

「ほんとだね。あ、それでアポロンさんは？」

「ああ、この崖を飛び降りた後に見失ったんだ」

スネオは近くの崖を指差した。ドラえもんたちはその崖の端に立ち、ぐつと下を覗き込んだ。

「この高さから……普通に考えればただの怪我ではすまないね」

「でもアポロンさん、いつもの格好じゃなかったんだよね。正装……というのかな？ マントも羽織っていた。そのせいかどうかはわからないけど、なんかフワツと浮いて移動してた感じがしたよ」

「それは……王家の宝具です」

『え?! 宝具?』

みんなの疑問に答えるようにテラは説明を始めた。

「私のペンダントのように不思議な力を持つ道具のことです。ただ、王家の宝具はさらに強大な力を持っています。そのため固く使用を禁じられています」

「今回、アポロンさんはその宝具を持ち出した、と……」

「ドラえもんの道具みたいなもんか」

「はい。ですが、ドラちゃんさんの道具には、攻撃的なものにも優しさがあるように感じました。相手の生命を奪わないような措置とでも言うのでしょうか……」

「うん、それはそのとおり。ぼくの道具には生命を奪わないようにするプロテクト、つまり制御する装置が備わっているんだ」

「そうだったんだ」

「たしかに言われてみれば……」

のび太たちは今までのビックライトやショックガンでの戦闘を思い返してみても納得した。

「やはりそうでしたか……道具の性質は同じような感じを受けましたが、効力の制御という点ではドラちゃんさんの道具の方が優れているようですね」

「どういふこと?」

「王家の宝具には、その制御がありません。つまり人を殺傷するだけの力を持っています」

「何だって!？」

「そ、それじゃ、ドラえもんの道具で殺し合いになるといふことか!？」
「はい……」

「だから王様はぼくたちを連れて行かなかったのか……ってじゃあ!

王様はアポロンさんと!？」

そののび太の言葉の意味することを誰よりも早く認識していたテラは、目を閉じてゆっくりと頷くのだった。

「でも、ドラえもんの道具があれば大丈夫だよな?」

みんなの不安を代弁するかのように、のび太はドラえもんに聞いた。しかしドラえもんからの返答は期待に反して暗いものだった。

た。

「……わからない」

「わからない？」

「未来の道具同士での戦闘は本来禁止されているんだ。もちろん、万が一のためにプロテクトもかかっているんだけど……でも、今回の相手はそのプロテクトがない道具を使ってくる。こっちがダメージを受けるようなことがあれば、それは本当に命取りになってしまう」

「そんな……じゃあ、ぼくたちはアポロンさんを止めれないの？ 王様も助けられないの？」

「正直、危険過ぎる。今回は王様に頼るしかないと思う……」

「それに、道具が使えなくなるリスクもあるしね……」

追い打ちをかけるようにスネオがつぶやいた。

「そうだ！ それは何が原因だったの？ スネオくん！」

「原因まではわからないけど……多分、アポロンさんの状態に関係していると思うんだ」

「え？ アポロンさんと？」

「わかりやすく言えば、アポロンさんが別人格になっている時には道具が使える、ということ」

『何だつて？』

思いがけぬ発言をしたスネオの周囲を取り囲むようにみんなが集まってきた。

「なんで？ アポロンさんと道具と何の関係が？」

「だから原因はわからないって！ 使えなくなる『状況』だつて言ったでしょー！」

興奮していたドラえもんは、反論されることで少し落ち着きを取り戻した。スネオは、やれやれ、と軽くため息をついたあと、なぜ自分がその考えに行きついたのか、その経緯を説明し始めた。

「思い返してみても、ぼくたちが道具を使えなかったとき、アポロンさんは優しかったでしょ？」

「そう言われてみると……」

「そうかも？ しれないけど……」

「でも、アポロンさんとはあまり一緒にいる機会がなかったから偶然かも知れない。スネオくんは何でそう思ったの？」

「砦の一件があつたからね」

「砦の一件？」

「そう。あのとき、アポロンさんはぼくたちの目の前で人格が変わつた。それとほぼ同時に、ドラえもんの道具が使えるようになったじゃない」

「そういえば……たしかに」

「切り替わるタイミングが同じというのは見過ごせないでしょ」

「うーん、仮説としてはたしかに信憑性があるね」

「……スネオさんのおっしゃることはおそらく正しいと思います」

『え!?!』

アポロンに関するやりとりを聞いていたテラは、スネオの仮説を裏付けるように自らの考えを伝えた。

「この島の遺跡には洗脳装置が備わっていると父は言っていました」
『洗脳装置!?!』

スネオ、ジャイアン、しずかの三人は、その情報を知らなかったため、その事実には驚愕した。

「い、今も俺たちを洗脳しているってことか？」

「い、一体どんな洗脳を？」

「そんな……怖いわ……」

「まあまあ落ち着いて。そんな恐ろしいものじゃないから……」

「のび太！ お前知ってたのか！」

「ま、まあね。でも今は、とりあえずテラの話を聞こうよ……」

ジャイアンは申し訳なきような顔をしているテラを見て荒ぶる気持を抑えた。

「す、すまねえ……」

「いえ、怖がらせてしまって申し訳ありません。遺跡による洗脳というのは、争わず平和に暮らすことを唱えるものです。ですので元々優しい皆さんには何も影響を与えることはありません」

「なんだ……それならまあ……」

「良かったわ」

スネオ、しずか、ジャイアンは洗脳の内容を聞いて少しホッとした。「ですが、この洗脳装置がおそらく正常に動作していないのではないかと思います」

「なんだって?」

「あ! 遺跡が破壊されたことで装置が故障したのか!」

のび太はテラの説明を聞いて、遺跡の破壊された状況を思い出していた。

「そうです。私も洗脳装置に関しては今日初めて父から聞きました。洗脳は兄にも働いていたはずです。ただ、あのアレス兄さんの一件で、不幸にも兄が遺跡を破壊する行動に出てしまいました」

「たしかに……そんなことを言ってたね」

「実際石版も破壊されていたし……」

のび太とドラえもんはその破壊された遺跡を見てきたため、しんみりとした気持ちで同情した。

「遺跡にそんな装置があることは、今日まで父しか知るものはいませんでしたから、兄も知らずに取った行動なんだと思います。ただそのせいで遺跡の洗脳装置に何かしらの異常が生まれたのではないかと思えます」

「正常だったり異常だったり……ON/OFFの繰り返しか」

「たしかにそれならアポロンさんの性格が不規則に切り替わるのもうなずける」

みんなは行き着いた一つの結論に納得し頷いた。

「ん? ということは……何故かはわからないが、装置が正常に動作をしているとき、つまりアポロンさんが優しいときはドラえもんの道具が使えなくなるといふことか」

「タイミングを考えればそういうことになるね」

自分の推理を確かめるようにスネオはしばし沈黙し、ふともう一つの仮説を思い付いた。

「……まさか遺跡の装置に、ドラえもんの道具を使えなくするような機能もあつたりして」

冗談混じりのスネオの仮説を聞いて、みんなの視線は一斉にスネオに集まった。そのみんなの顔から深刻な雰囲気を感じ取ったスネオは、ハッと我に返った。

「え？ ……ま、まさかでしょ？」

「……遺跡の科学力を考えると……あり得る」

「そう考えるのが自然ね……」

「でも、何でそんな機能がここに？」

考えても答えは出ない問題に皆が行き詰まっていた時、テラだけは辿り着いた一つの答えがあった。

「……おそらくは、発掘道具の抑制機能ではないかと思えます」

「発掘道具？ ……あの王族に返納する道具のこと？」

「そうです。父の語った内容だけでは、完全に発掘道具の機能を民衆に気付かれないようにするためには不十分です。わたしはその……科学というものに疎いたため詳しくはわかりませんが、それら発掘道具の効果を発動させないための妨害する何かを発生させているのかもしれない」

「そんなことができるんだ……」

「推測ではありませんが、遺跡の持つ不思議な力を考えれば、ありえない話ではないと思います。そういった保険があるならば、父が発掘道具を厳格に取り締まらなかった理由にも納得がいきます。それにドラちゃんさんの道具は、ここの発掘道具にとっても似ていますのでもしかしたら……と」

ドラえもんはテラの話の話を聞くにつれて徐々に冷や汗をかき始め、その顔はさらに青さを増していった。そしてテラが話し終えると同時に小さく一言つぶやいた。

「……ひみつ道具キャンセラー……」

「え？」

「何だって？」

「ひみつ道具キャンセラー。ひみつ道具の殆どを使用できない状態にする信号を発する電波のことだよ」

『ええー!?!』

みんなが驚き慌てふためく中、ドラえもんは一人苦悩の表情を浮かべていた。

「そ、そんな電波がなんでこんなところにあるんだよ!？」

「わからない……でも未来の世界では当たり前のように存在する電波なんだ」

「そ、そうなの?」

「当然さ。ひみつ道具はどれも強力な効果を持っているからね。取り締まる側がいなければ秩序が乱れてしまう。そのためのものなんだ」

「な、なるほどな……」

「たしかに……」

「そして、ぼくの道具の全てがその対象となっている……未来デパートで売ってるものなんだから当たり前だね。そのプロテクトを外した道具を使って良いのは取り締まる側、つまりはタイムパトロールのような治安維持組織だけなんだ」

「納得の理由ね」

「と、いうことは……?」

「……ぼくの道具はいつ使えなくなってもおかしくない状況にある、ということ」

ドラえもんは言いづらそうに少し間をおいてから、目を閉じてつぶやいた。

「で、でもさ! それならその不思議な力を持つ宝具とかも使えなくなるんじゃないの?」

スネオの言うことももつともだったが、その希望はテラの一言により消えた。

「いえ、王家の宝具は……そのプロテクトが外されていると思います」

「そんな!？」

「外敵からこの島を守る時のみ、その使用が許されていましたから……きつと使用するにあたっての制約はないと思います」

いつもはドラえもんの道具でいくつもの難関を超えてきた彼らにとって、道具が使えないというこの状況は、彼らをただの子どもに変貌させた。

「星の未来のため遺跡を破壊してはいけない……」

「そして道具が使えなくなるタイミングは運……か」

「……」

「……アポロンさんが別人格の今なら……ドラえもんの道具は使える。それなら何とか攻撃を凌ぐことくらいはできるかな？」

「ダメ！ 危険過ぎる！」

何もできないもどかしさをなんとかしようと懸命に絞り出したのび太の提案にドラえもんは強く反発した。

「でも！ このままだと王様とアポロンさんが戦いを始めちゃうよ！

親子なのにそんなことさせちゃいけないよ！」

「それでも、ダメなものはダメーッ！」

「わからずや！」

「わからずやで結構！ ぼくは、きみたちを無事に未来に返すという約束だけは絶対に守る！」

『!?!』

ドラえもんならそれでも何か対策を考えてくれると信じていたのび太たちは、頑なに拒むドラえもんの姿勢に驚いた。

「ぼくは、みんなの親から大切なお子さんを預かっている立場なんだ。

ぼくを信頼してくれているママさんたちを裏切るようなことは絶対にできない！」

「あ……」

なぜドラえもんがそこまでして拒んでいたのかを、のび太たちはようやく理解した。

「ましてや、ぼくの道具が使えなくなるという危険まである……今回旅は、僕にとって今までで一番危険な旅なんだ。道具があるからこそ、使えるからこそ旅は続けられるんだ。その前提が崩れている今、これ以上の無理は絶対にできない！」

「ドラえもん……」

「ドラちゃん……」

「……」

ドラえもんの抱えている心の重さを知り、のび太たちは何も言い返

せず、焦点も定まらぬまま肩を落とし地面を見つめていた。

さつきまで晴れていた空は陰りを見せ、またたく間に暗雲が広がっていった。しばらくすると頭上からポツポツと雨が降り注ぎ、水滴がみんなの頬をゆっくりと伝って地面に落ちていった。

「……ありがとう、みなさん」

重く沈んだ静寂の中にテラの一言が注ぎ込まれた。ドラえもんたちは合わせる顔がないと思いつつも、テラの方にゆっくりと顔を向けた。

「ここまで親身に考え、そして悩んでくださって……本当にありがとう」

「テラ……」

「ドラちゃんさんの言うことは正しいと思います。みなさん、そんなに自分を責めないでください。そして、ドラちゃんさんも責めないであげてください。これはわたしたちムーの一族が解決しなければならぬことです。ですからどうか、お気に止むことなきように」

ズズズ……ン、ドン……ドンドン……

地面が突然、深い轟音と共に大きく揺れた。明らかに不自然なその揺れから、ついにアポロンと国王との戦いが始まったのだとみんなは感じとった。テラは響く音の鳴る方にゆっくりと目をやりながら答えた。

「……わたしはこの戦いの行く末を見届けなければなりません」

「テラ!？」

「そんな！ 危ないよ!!」

「わかっています。ですが、わたしも王族です。王族である以上、兄を止めなければならぬ責務があります。ムーの未来を守ってきた祖先たちのように……」

「テラ……」

降っていた小雨が次第に強く肌に当たるようになってきた。徐々に強くなっていく風は、嵐の予感を運んできていた。ドラえもんたちがテラにかける言葉を探していたその時、森の茂みの方から二つの影が飛び出した。その影はまるで忍びを思わせる軽快な半円の軌道を

複数描き、みんなの近くに瞬時に移動してきた。

「テラ王女、こちらでございしましたか」

「ミヨイ！ タミアラ！」

『ミヨイさん！ タミアラさん！』

「どうしてここに!?!」

テラに跪き顔を伏せていたを二人は、スツと立ち上がりドラえもんたちの間に答えた。

「無論、アポロン様を止めるためでございます」

「わたしたちは、王族に使える身でありますので」

一切の迷いが無いその言葉に、のび太は行動できずにいる自分に罪悪感を感じていた。それはのび太だけではなく、他の全員もそう思っていた。そして、これから強敵アポロンに立ち向かうという覚悟を持ったミヨイとタミアラの姿は、いつものそれとは違っていた。

「ミヨイさん……格好がいつもと少し違うんですね」

「はい。戦闘モードに切り替わっております。活動限界は三十分程になります。通常の三倍の能力向上が期待できます」

「すごい！ それなら！」

期待する発言が来るのがわかっていたかのように、ミヨイはのび太の発言に被せて話を続けた。

「それでもアポロン様を止めるのは難しいかと思いますが……」

ミヨイの言葉からは、状況を好転する期待は感じられなかった。ただ、止めなければならぬという使命感だけが強く伝わってきた。

「ミヨイ、わたしも行きます」

「テラ王女ならばそう決断するであろうこと心得ております」

そう言ってミヨイは空間に「はごろも」と「盾」という二つの道具を出した。

「それも宝具なの？」

「はい。わたしに割り当てられているものは、兄のように攻撃するものではないのですが……兄の攻撃は防ぐことができます」

「すごい……」

のび太はさっそうと装備を身にまとうテラを見て、思わずそう声が

漏れた。

「みなさん、こんなことに巻き込んでしまい本当にすみませんでした。わたしはこれから兄を止めに行きます」

『……』

「みなさんは巻き添えにならないよう、どうか速やかに元の世界にお戻りください」

「テラ……」

場の空気を察してか、ムクはテラに付いていこうとする素振りを見せた。

「ムク……あなたも森の仲間のところへ帰りなさい。お二人を助けてくれてありがとう」

そう言つてテラはムクの首元に軽く抱きついた。ムクはテラの想いを感じ取ったのか、悲しそうな目をしてその場にとどまった。

「みなさんと出会えてとても嬉しかった。ありがとう」

そつとムクから離れたテラは、みんなの方を振り向きチラツとジャイアンの方を気にかけて。そのジャイアンは腕を組み、背中を向けたままテラの話の黙って聞いていた。深刻に何かを考えているように見えるその姿からは、振り向いてくれるような雰囲気は微塵も感じられなかった。

(……最後にもう一度、お顔を見ておきたかったな……)

そう望んでいたテラではあったが、ジャイアンの心中を察し、振り向かせるための言葉をかけることはせず、黙ってその背中をしばらく見つめるに留めた。

「……テラ王女、そろそろ」

「うん……ではみなさん、さようなら。お元気で」

ミヨイが瞬時に高くジャンプした。それに続くようにはごろもを纏ったテラも追従し、二人は崖下に消えていった。その場に一人残ったタミアアは、ドラえもんたちに一礼をしてから、すぐに二人の後を追って崖下に消えていった。

ドラえもんたちは何の言葉も発することができず、ただその場に立ち尽くすだけだった。

空は完全に暗雲で覆い尽くされ、空の所々に雷が走り始めた。そんな中、テラたちを見送るムクの遠吠えだけが暗い空に哀しく響き渡っていた。

◆第二十二章 『決意』

なす術なく崖上に残されたドラえもんたち一行は、しばらくその場で呆然と立ち尽くしていた。

のび太も今回ばかりは勝算が薄いと感じてか、無茶なことをいう気にはなれないでいたが、気持ちを抑えようとすればするほど、心の奥底から何もできないという自分の不甲斐なさが強くこみ上げてきた。

「わ———！」

突然のび太は空に向かって大声を出した。行き場のない気持ちを少しでも晴らすための、今できる精一杯のことだとみんなは理解していた。そののび太の声を聞き、しずかの目も潤み始めた。

ジャイアンは微動だにせず腕を組んだまま、ひとりどこか遠くを見つめていた。しかし、二の腕を掴むその手には、自らの腕をキツく締め付けるほどに力が入っていた。

元の世界に戻ろう。そう言いかけたドラえもんを制止するようにジャイアンは話し始めた。

「……俺は行くぜ」

「ジャイアン……気持ちわかるけどダメだ。危険過ぎる」

「ダメージを受けなければいいんだろ？ なら、そうするまでだ」

「相手の攻撃手段だってわからないのに？ そんなことできるわけが……」

「それでもだ!!」

ジャイアンの気力溢れる一括で場が一瞬にして静まった。その言葉にはテラと同じように何かを守ろうとする決意のようなものが感じられた。

「俺は妹を悲しませるバカな兄貴を殴りに行く。おまえらはタイムマシンに戻ってな」

「待ってジャイアン！」

崖に向かって歩き始めたジャイアンをのび太は呼び止めた。

「ぼくも行くよ！」

「あたしも行くわ！ アポロンさんを助けたいの！」

「え!? ええ〜……」

スネオは一人あたふたしていた。ドラえもんはみんなが勢いづいたこの状況はどうにもならないと判断し、砂男式催眠機でみんなを眠らせて強制帰還しよう、とポケットに手を入れた。

「何をやる気? ドラえもん」

のび太はポケットに入れているドラえもんの腕を掴んだ。

「そんなことをしたら、みんなドラえもんを恨んじゃうよ……お願いだよドラえもん! 力を貸してよ!」

「ドラちゃん、お願い!」

「ここで何もできないなんて……悔しいよ……」

のび太とせずかの懇願とジャイアンの真剣な目を見てドラえもんは悩んだ。スネオは依然として黙ったままだった。

「……みんな、これだけは約束して。絶対に無茶はしないと」

そのドラえもんの言葉を聞いて、のび太はドラえもんに勢いよく抱きついた。

「ありがとう! ドラえもん!!」

しずかは抱き合う二人を見て、涙を浮かべながら微笑んだ。ジャイアンも、そうこなくっちゃ! と言わんばかりのガッツポーズをとった。

「あーあ、やっぱりこうなるのか……やりますよ、やりやあいんでしょー!」

「スネオ、別に来なくなっただっていいんだぜ?」

ジャイアンがスネオに嫌味を言うように横から顔を近づけた。だが事のほかスネオは冷静で、やれやれと両手を腰に当てため息をついた後、ピシッと人差し指をジャイアンに向けて淡々と言葉を返した。

「何言ってるの! この中じゃジャイアンが一番心配だからだよ!」

「う……?」

「大体、テラのこととなると見境なしに行動してばっかでき……付き合うぼくの身にもなってよ!」

「く! この、お、おまえなく!」

「ほんとのことですよ!! 何か言いたいことある?」

「……ありません……」

照れを隠そうとスネオにくっついてかかるジャイアンであったが、今回ばかりは強く言い返してきたスネオに軍配があがった。

「はいはい、今回はスネオくんの勝ち。言い合いはそこまでにして作戦を立てるよ」

「な!？」

「ふふ」

「うふふ」

「……うゝ……」

言い負かされた内容が内容だけに、やや腑に落ちないジャイアンであった。

「みんなの安全を最大限に確保するために作戦はぼくが立てます。そして絶対に守ってください。これがぼくのできる最大限の譲歩です。いいね?」

全員がドラえもんの提案を受け入れ領いた。

「まず、攻撃担当はジャイアンだけにします。一番の危険を伴うけど……大丈夫かい?」

「聞くまでもねえ! 任せろ!」

力強い返事にドラえもんはうなずいて返した。

「ジャイアン以外は援護担当です。ぼくらはできるだけジャイアンをサポートする立場になります。だげど基本、自分の身を守ることを最優先としてください。これはジャイアンもです」

「うん!」

「わかったわ!」

「任せて!」

「おう!」

ドラえもんは、みんなの真剣な思いを感じ取り少し安心した。

「サポート側はぼくを入れて四人いるので、防御とサポートの意識割合は七対三位で十分です。ただ、アポロンの注意を引くことを目的とするので、その都度狙われる可能性があります。そこは十分に注意してください」

『りようかい!』

「次に装備なんだけど、基本は上陸したときのものでいこうと思う。使い慣れてるしね。他に欲しいものがあれば言って」

「なら、ラジコンねんどをくれる? ぼく、あれも使い慣れてるから」
スネオはいとこの影響を受け、天才的なラジコンさばきができる、いわばラジコン操作の達人だった。のび太とドラえもんは以前のラジコン対決の時の記憶が蘇った。

「そうだったね。はい、スネオくん」

「サンキュー。これは陽動にも使えるし、何せ姿を隠せる利点があるからね」

「たしかに」

「さすがスネオさんね」

「まあ、ジャイアンのためだからね……」

「嬉しいこと言ってくれちゃって! 頼んだぜ! 心の友よ!」

「痛い! 痛いよジャイアン! わかったから!」

ジャイアンが強い力でスネオの肩を抱いたため、スネオは思わず悲鳴を上げた。その光景は、久しぶりにドラえもんたちに訪れた場の和みだった。

「ゲホゲホッ! まったく……そんなじゃしずかちゃん、これ」
「え?」

首元をさすりながらスネオはひらりマントをしずかに投げて渡した。

「これって?」

「ぼくは影からの援護になるから捕捉はされにくいと思うんだ。それにしずかちゃんにはアロンさんを説得するんでしょ?」

しずかは受け取ったマントを握りしめ、スネオにありがとうと伝えた。

「さて、次は防御面だけ……安全ガス!」

シューッ! シューッ!

「これで殆どの怪我は防げるはず……あ、ムクにもかけてこうね」
「ワンッ!」

ムクはテラの元に連れてってもらえる喜びを表現するかのよう
に元気な返事をした。

「すごいや！ こんな便利なものがあるんじゃない！」

「ほんとほんと！ 何とかなりそうじゃん！」

のび太とスネオは一筋の希望を掴んだかのように喜んだ。しかし
ドラえもんの顔は明るいものではなかった。しずかとジャイアンに
はドラえもんの顔が、効果があることに期待したい、そんな顔に映っ
ていた。

「たしかに……石や岩、落下の衝撃なら大丈夫だと思うけど……アポ
ロンさんの攻撃に対してだけは、正直わからない……」

『え!?!』

「これはせめてもの保険。だからこそ、アポロンさんの攻撃だけは絶
対に受けてはダメなんだ。そこだけはみんな、本当に注意してね」

「うん！ わかった！」

「わかったわ」

「そ、そんなに脅かさないでよ……」

「……」

ジャイアンの無言の返答に気付いた面々は、ハッとジャイアンの方
に振り返った。いつにないドラえもんの緊張から、今回の戦闘の危険
さを一番感じているのは他でもない。最前線に身を投じるジャイア
ン自身だった。ドラえもんはキツと目を張りジャイアンに歩み寄っ
ていった。

「ジャイアン……一番危険な役を頼んでごめんね」

「なあに、おれが言い出したんだ。それより、協力してくれてありがと
よ」

ジャイアンはドラえもんに向かってニカツと笑った。ドラえもん
は申し訳なさそうな顔をしながら微笑した。

「最前線で戦うジャイアンには、もう一つこれを……安全カバー！」

「これは……?」

「これは安全ガスよりも高性能の防御力を持ったものなんだ。タケコ
プターとスーパーてぶくろを着けた状態で安全カバーの中に入って

もらう」

「お！ 思ったより動けるな！」

「上の口を塞げば完璧な防御になるんだ。ただ……」

「わかってるよ、アポロンの攻撃には効くかわからないってんだろ？」

「……ごめん……」

「何言ってるやがる！ 俄然、戦う気力が湧いてきたぜ！」

「あまり無理しないようにね」

「ジャイアン、気をつけてね。サポートは任せてよ！ ぼくは射撃で

援護するから！」

「あたしは、ショックガンとひらりマントで！」

「ぼくはラジコンねんどで！」

「ぼくはいつもの空気砲で！」

「バウツ！」

「ありがとよ！ 見てろ！ 必ずこの拳でアポロンをぶん殴って目を
覚まさしてやつからな！」

ドラえもんたちは戦場へおもむく覚悟が整い、互いに士気を高めなが
ら円陣を組んだ。

「ぼくのできることはここまでだ！ でもみんな、くれぐれも無茶は
しないでね！」

「おう！」

「はい！」

「うん！」

「やっぱ怖いなく」

「ワンツ！」

「行こう！ テラや王様が危ない!!」

フル装備状態の一行はタケコプターで空に上がり、そのままテラた
ちが降りていった崖下に向かった。ムクはほぼ垂直な崖の節々に見
られる僅かに突出した踏み場を器用に利用し、華麗なステップで崖下
まで到達した。

「わっ！ ムク、すごい！」

感心するのび太をよそにドラえもんは崖の側壁にある洞穴に目を

やっていた。その穴は奥が見えないほど長く続いており、中から時折大きな衝撃音や地鳴りが聞こえてきた。

「この奥に……」

「アポロンさんや王様が……」

激しい揺れと轟音を肌で感じたのび太たちは、その戦いの規模を想像し、思わずツバを飲み込んだ。

「じゃみんな、準備はいいかい？ 行くよー」

『おう！』

ドラえもんたちは、ただならぬ雰囲気の中へ身を投じ、その奥で展開されている壮絶な戦いの場へと進んでいった。

◆第二十三章 『対決』

「アポロンー!!」

「ラ・ムーツ!!」

ガギツ!

ギィ——ン!!

アポロンの王家の剣と国王の王家の杖。二つの王家の宝具が激しくぶつかり火花を散らす。互いに距離を取るように後方に飛び退くと、両者はすぐさま宝具から飛び道具を放った。

「ハァーッ!」

「ヌエイツ!!」

ガガ——ンツ!!

飛び道具同士が衝突し衝撃波が生じ二人は吹き飛ばされた。国王は壁に打ち付けられダメージを追ったのに対し、アポロンは空気を纏うように空中で体勢を立て直し、そのまま剣を国王の方に向け構えた。

「どうした? ラ・ムーよ。もう終わりか?」

「くっ……よる年波には勝てんか……」

片膝をついた姿勢から杖を地面に突き刺し、ゆっくりと立ち上がる国王であったが、体力の差が歴然としているこの状況では好機を見出すのは難しいと考えていた。

「殺しはしないが、少し眠っててもらおうか。その杖は何かと厄介だからな」

「ヌウ……」

「受けよ我が雷を! 雷光ー!!」

バシユシユツ!!

ガガガ——ン!!

ドドン! ドン!!

国王のいた場所は雷の弾丸による攻撃で辺り一面土煙が充満していた。その煙が晴れようとしたとき、アポロンの後方の壁が何かの攻撃を受けたかのように崩れ落ちた。

「なにつ!？」

(直撃したはずの雷光が、俺の右頬をかすめていった……これは……) 薄っすらと消えかかる煙の中からは盾を構えたテラと、テラに守られている国王の姿があった。

「術を反射する王家の盾……テラ、やはりおまえか……」

「兄さん……止めてください。どうか考え直してはいただけませんか」

「お前はわかってくれると思っていたんだがな……アレス兄さんの一件を忘れたのか!」

「覚えています!」

精一杯の思いを込めてテラは答えた。

「とても哀しく、そして悔しい思いを嫌というほど抱きました。だから兄さんの思いは痛いほどわかります」

「ならば!」

「ですが! ……アレス兄様の気持ちもわかるのです……」

「アレス……兄さんの……?」

間接的にアレスの気持ちを問われたアポロンは、一瞬目元を陰しくした。

「はい……アレス兄様はそれこそ武術の達人でした。そんな方が襲撃にあつた中で、なぜ兄さんの脱出を優先させたのか……なぜ払えたはずの襲いくる火の粉を払おうとしなかったのか」

「それはあの馬鹿げた掟のせいだ! あんな教えがなければそれこそ躊躇なくアレス兄さんは!」

「違います!!」

「!？」

テラは激しく首を振り、涙を浮かべアポロンを見上げた。

「違います……教えは、所詮教えでしかありません。強い意志があれば、そう、今の兄さんのように掟を破ることもできます」

「……」

「アレス兄様は最初から戦う気なんてなかったんです。いえ、戦わないと決めていたんです!」

「何を馬鹿なことを……戦わないと決めていたただと？ 何のために？」

「ムー一族のためです！ あの教えは……ムーの祖先の願いであり、私たちが未来へと繋げる希望なんだと知っていたからです！」

テラの強い申し出に、アポロンは少したじろいだ。アレス兄さんは自分の意思で戦わなかった。アポロン自身、そう考えなかったわけではないが、そう信じたくもなかったからだ。

「馬鹿な！ あの掟のどこに希望がある！」

「兄さん……」

「外界の野蛮人共は、自分たちの恐怖を打ち消すためにアレス兄さんを殺したんだ！ 自分たちが勝手に思い描いた脅威を！ 敵を！」

アレス兄さんが何をした？ 何もしていない！ 危害を加えてもいない！ なのに……それなのに!!」

「兄さん……」

テラは目に涙を溜めながら、震えて憤り叫ぶアポロンを見つめていた。憎悪に包まれた兄の心に自分の想いを届けられないもどかしさと、兄の抱える憤りへの同情とが混ざり、溢れるように大粒の涙を流すのだった。

「……もういい……誰が何と言おうと俺は俺の道を行く」

「兄さん！」

「俺の邪魔をするというのであれば、お前にも容赦はせんぞ！ そこをどけ！ テラ！」

「どきません！」

「ならば！ 共に受けよ！」

アポロンが王家の剣を構えた瞬間、テラの横から人影が一つ飛び出した。その人影は目にも止まらぬ速さでアポロン目掛けて突進していった。攻撃の途中だったアポロンもその人影の接近に瞬時に気づき、急遽照準をテラからその人影に切り替えた。

「雷光!!」

バリーツ！

バシユシユツ！

「なに!?!」

その人影は雷光が直撃する瞬間に上下に分離し雷光を交わした。二つに別れた影は前方への勢いを殆ど殺すことなく、それぞれがそのままアポロンの上半身、下半身へと向かっていった。

「くっ!」

ババツ!

ガシイッ!

アポロンは咄嗟に身体をひねりオーバーヘッドキックの体勢で上方から来たネリチャギを右足で受け止め防ぎつつ、ボディへのストレートも同時に背面飛びの格好で回避した。

「ミヨイとタミアラか」

「流石ですアポロン様。我らの攻撃をこうもたやすく防ぐとは」

「無礼とは存じておりますが、今は緊急事態ゆえ、どうかご容赦を!」
「邪魔立てするやつは何人たりとも許さん!」

会話を終えると同時に凄まじい速さでの攻防が空中にいるアポロンに対して行われた。ミヨイとタミアラには空を飛ぶ道具はなく、地面、壁、天井を蹴った反動で突進する時間差攻撃が主な攻撃手段であった。

しかし、空中を自由に動けるアポロンに対しては、予測可能な直線移動では圧倒的に不利である。にもかかわらず、ミヨイとタミアラが善戦していたのは、空中で互いを踏み台にするように軌道を変えるところというトリツキ、かつ不規則なタイミングの攻撃を仕掛けていたからである。

その二人のコンビネーションによる攻撃は、アポロンを防戦気味にするほどの効果をもたらしていた。しかし……

「ハッ!」

「ハアッ!」

高速なコンビネーションで左右両側から同時に攻撃を仕掛けられたアポロンは、動揺する素振りも見せずその身を反らし、いなすように半回転して両者の攻撃を紙一重でかわした。

シュピント!

一筋の円形の閃光が見えたかと思ったその直後、時間差で二人の腹部にアポロンの強烈な蹴りが入れられた。

ドドツ!!

ズドドーン……!!

勢いよく吹き飛ばされたミヨイとタミアアは、正反対の方向の壁にそれぞれ激突した。

「さすがは我が師範たち。なかなか良い動きだったぞ。だが、余興もこれくらいでいいだろう」

二人は崩れた壁から上体を起こした。が、ミヨイは左腕を、タミアアは右足をアポロンの鮮やかな剣技の一太刀で失っていた。

「流石にその姿ではもう戦えまい」

「アポローンーッ!!」

「!?」

二人を見下ろしているアポロンの背後から国王が攻撃を仕掛けるために飛び込んできた。雷を纏った杖をアポロンに直接叩き込むように頭上から大きく振るう。アポロンは咄嗟にその攻撃を王家の剣で受けとめた。

バリバリバリッ!!

ガガーン……

ドドドン!

重なった二つの王家の宝具の接点から強烈な雷が周囲に飛び火した。それら小さな落雷は周囲に弾け落ち、所々地面をえぐっていった。

「奇襲をかけるのに声を荒げるとは、老いたカラ・ムー!」

「愚かな息子よ。わしはお前に気付いてもらうために攻撃したのがわからんか」

「なに!?!」

ハッと状況に気づいたアポロンは、咄嗟にラ・ムーと距離を取ろうとしたが、その瞬間、背後から強烈な攻撃を受けた。

バリリリッ!

「グッ! 又又……又アアアッ!!」

バシ——ン!!

「なに!？」

アポロンは身の回りに強烈な衝撃波のようなものを発し、自分にダメージを与えていた雷の術を弾き飛ばした。近くにいた国王はその衝撃波によつて吹き飛ばされ壁に激突し、地面へと落下していった。「はあ……はあ……なるほど、反射か。咄嗟にしては上出来だな、テラ」

振り向いて見下ろしたアポロンの視線の先には、王家の盾を構え国王の雷を弾き返したテラの姿があった。しかし攻撃を跳ね返したことで身体に衝撃を受けたテラは肩で息をしていた。

「たしかにその盾の防御力は高い。だが、使うお前が戦闘向きではないからな。まさに宝の持ち腐れと言うやつだ」

アポロンの言うことを自覚しているテラは、息切れをしつつも、あと一回だけでも！ と意識を集中していた。

「ふっ。盾だけのお前など無力なだけよ！ ハアツ!!」

掛け声とともに振り下ろされた剣から、雷光がテラ目掛けて発射された。テラはその雷光を反射するために見極めようと意識を集中して構え直す。が、その思いは空虚なものな変わりつつあった。

「そんな……」

「無駄だ」

雷光はテラの構える盾の前方の地面に着弾し、その地面の粉碎衝撃でテラは吹き飛ばされた。

ド——ン！

「あぁーっ！」

吹き飛ばされ横たわるテラの手には王家の盾はなかった。王家の盾はテラから五メートルほど離れた場所に無造作に放り投げられていた。

「その程度の衝撃に耐えることのできないお前はここに來るべきではない。しばらくそこでおとなしく寝ていろ」

そう言い放ったアポロンは、再び雷をまとった王家の剣を軽く一振りし、テラに向けて迷わず雷光を放った。立ち上がろうと上体を起こ

したテラは、迫りくる雷光を見て思わず目を閉じた。

バシィ——ーン！

「なに!？」

「……えっ?」

テラの前で何かが雷光を防いだ。防がれた雷光は四散して弾け飛び空中で暴れる糸のように消えていった。雷光が四散した場所には、安全カバーに包まれたジャイアンとムクが立っていた。

「おまえは!？」

「たけしさん!? ムク!」

「大丈夫か? テラ!!」

もう会うことはないと思っていたジャイアンの登場に、テラは言い知れぬ感情が心の内から湧き上がるのを感じていた。彼の参戦は決して良策ではない。むしろ悪手。そう言い切れる選択をしてくれたジャイアンに返事をしながら思わず涙ぐんだ。

「ジャイアン! いきなり無茶しないでよ!」

一足遅れてドラえもんたちが洞穴の通路の中から現れ、テラとジャイアンの元に駆け寄ってきた。

「ああ? 防げるってわかったんだからいいじゃねえか!」

「全くもう……こつちがハラハラしたよ……」

「でも、あの攻撃にはドラえもんの道具は効くみたいだね」

「うん、少しは抵抗できそうだ」

予期せぬ助っ人の登場に国王は驚いた。しかし彼らが来なければ、テラは重症を負っていたに違いない。

(今の狂気に満ちたアポロンを止めるためには彼ら未来人の力を借りるしかないのか……)

壁への激突、そこからの落下による負傷により、国王は身体を起こすのに必死だった。

「君たち……す、すまない……テラを助けてくれてありがとう」

「王様!？」

「大丈夫ですか?」

ドラえもんとのび太は瀕死の状態である国王のもとに駆け寄って

いった。

「正直、キミたちにあれだけの力があるとは思っていなかった……ウツ！」

「王様！」

「無理しないでじっとしててください！」

「そもいかん……あの愚かな息子を止めねばならぬのでな……」

そう言つて鋭い眼光を向けてくる国王をアポロンは上空から警戒した。

（国王はもう虫の息だ。大した驚異にもならないだろう。だが……あいつらは一体何者だ？ おれの攻撃を耐えられるものが王族以外にいるだと？）

アポロンは現状を冷静に把握するために、しばし周囲の観察に注力した。アポロンはその瞳に映る対象をゆつくりと変えていった。その中には王家の盾を持ち上げようとするしずかの姿があった。

「テラ、大丈夫？」

「しずかさん！」

「今、持っていくわ！ うん……あ、あれ？ 持ち上がらない？」

「しずかさん、その盾は……」

テラがそう言いかけた時、しずかの横には片腕を失ったミヨイがしずかを見下ろすように立っていた。

「お貸してください」

「は、はい」

しずかはスツとその場を離れ、片腕のミヨイに場を譲った。盾の持ち手を掴んだミヨイは、何事もないように軽く盾を持ち上げた。

「え!? すごい！」

「この盾は、テラ王女が羽織っているあのはごろもがないと人間には重くて持つことは出来ないませぬ」

「そうだったんですか……」

盾を持ったミヨイは顔を上げアポロンを威嚇するように睨んだ。それに気付いたアポロンは一瞬ミヨイと目を合わせたものの、どうでもいい、とでもいうようにすぐにその対象を隣のしずかに移した。

(アポロン様……しずか様を見ている?)

ミヨイは予想外のアポロンの行動を見て不思議な違和感を感じた。
(この方の面影は王妃様のそれに似ているとは思ったが……もしや、しずか様は激情の渦中におられるアポロン様を救う一筋の光なのか……?)

少し懐かしさを感じるアポロンの表情を見て、ミヨイには昔の思い出が浮かび上がってきた。だが今は思い出にふけている場合ではない、と自分を現実へと戻し気を引き締めた。

「では、しずか様。テラ王女のもとへ参りましょう」

「あ、はい」

アポロンはテラの元へ移動する二人への攻撃は行わず、行動の監察を続けた。

(少なくとも雷光が効かないとわかった今はイタズラに攻撃すべきではない。それに王族以外に俺と対等かそれ以上の力を持った相手がこれだけ揃うのは想定外だ。警戒し確実に個別撃破と行きたいところだが、その前にある程度相手の能力を知りたい。迂闊に仕掛けるよりもしばらくは様子見が良いか……)

そう考えていた矢先、ドラえもんたちの方に動きがあった。アポロンはその様子を見て驚愕すると同時に背筋が凍った。

(なんだと!?)

そこには全快した国王が立っていた。

「こ、これはどうしたことだ? 動けるぞ!」

「良かった。お医者さんカバンが効いたんだ」

「これって子どもたちの遊び道具とかじゃなかった?」

「そうだけど簡単な症状なら治せるんだ。打撲や疲労の類だったから効果あったんだと思う。あとはタミアラさんか……」

ドラえもんは走ってタミアラのもとへ向かった。アポロンはドラえもんを目で追い続けた。だがやはり攻撃はしなかった。

(ジャイアンの登場と攻撃の無効化、お医者さんカバンによる国王の治療。立て続けの異常事態にアポロンさんはこちらの戦力を警戒しているはずだ。攻めるタイミングを迷っている今のうちに戦力の増

強をしないと！)

「タミアラさん！ 大丈夫ですか？」

「ドラえもん様。私は大丈夫です！ それよりも国王様、テラ様を頼みます！」

「そうは言っても戦力は多いほうがいいから……斬られた足はどこに？」

「あそこに」

ドラえもんが斜め後方を見ると、切断されたタミアラの右足がやや遠い場所に無造作に落ちていた。

「良かった。ちゃんと存在してるね。アンドロイドにはお医者さんカバンは効かないから……」

ゴニヨゴニヨと言いながらドラえもんはポケットに手を突っ込んだ。

「復元光線！」

ドラえもんは取り出した復元光線をタミアラの右足に照射した。すると切断された右足がみるみるうちに元に戻っていった。

(タミアラまでも!?)

「おお！ 何ということだ！ これは一体……?」

「未来の科学の力です」

「未来の……何にしても助かりました。おかげで再び国王様、テラ様を守ることができます！ 感謝致します、ドラえもん様！」

「いえいえ。むしろ……ここからが本番です！ さあ！ 王様の元へ！」

回復したタミアラとドラえもんは急いで国王の元へと走って合流し、ここにドラえもん・のび太・国王・タミアラの四人のチームが構成された。

そこから少し離れた場所には、テラ・ジャイアン・ムク・しずか・ミヨイの五人のチームが構成され、それぞれのチームが空中に佇むアポロンの姿を見上げるように戦闘態勢をとった。

「役者は揃ったな」

「兄さん！ 今一度考え直しては頂けませんか？」

「くどい！ 見れば強力な助っ人が参戦したようではないか。理想の未来が欲しければ、兄を倒す以外に道はないぞ？ テラ」

「未来……彼らはその未来から来た外界の方達です！」

「何だと!? 外界の……未来からだど？」

「そうです！ 彼らがとても優しい心の持ち主なのは兄さんだって知っているでしょう？ 私たち一族が外界の人達と仲良くやっていけるといふ未来が、今ここに示されているのです！ どうか考え直してください！」

アポロンは冷ややかな目でテラの言い分を聞いていた。そんなに上手く行くものではない……アレスの一件からアポロンは外界との共存という道は疑惑にしか映らなかった。

「……そうか未来から……ならば我らムー一族の未来の顛末も知っていような？ 申してみよ未来人」

「!?」

「そ、それは……」

「……」

ドラえもんたちの反応を見て、国王はフー……と深く息を吐き、心の内でつぶやいた。

(やはりそうか……)

「……たけしさん？ みなさん？」

『……』

驚き慌てふためくテラのその様子をアポロンは上空から愚かしく眺めていた。

「答えられないか……ならばそれが答えだな。滅んだのだろうか？ 我らムー一族は」

「そんな!？」

アポロンの言葉に思わずテラは驚きの声をあげた。国王はじつと目を閉じたままだった。

「たけしさん!? しずかさん!」

「……」

「……」

(どうして黙っているの？ 私たち一族は皆さんと仲良く共存はできないの？ ……聞きたい……聞き正したくても……怖くて自分からは……とても……聞けない！)

テラが苦しい葛藤を続けている中、ドラえもんが口火を切った。

「そんなことはない！ この島の存在は確かに確認できていないが、ムーの子孫とはちゃんと交流があつてみんな仲良くやっている！」

(ここはでまかせを言つても皆の士気を下げるわけには行かない……頼む！ ぐまかせてくれ！)

「仲良くやつている、と？」

「そうだ！」

「ならば、俺を止めなくても問題ないのではないか？ 俺が外界に侵攻した結果がその未来ならな」

「それは！」

そう言いかけたドラえもんの肩に手を置き、国王は前に出た。

「ありがとう。あとはワシが話そう」

「王様……」

「アポロンよ、よく聞け！ お前が外界に侵攻すれば、この島は滅びるようになっていっているのじゃー！」

「フツ。何を馬鹿げたことを」

「本当じゃ。祖先たちはお前のような考えを持つものが現れたときの為に、そういう装置を予め仕掛けておいたのじゃー！」

国王の発言が嘘ではないことをアポロンは察していた。掟などという信憑性のないものを守るためよりも、島の安全を確保しムー一族を守る、という理由の方が、国王自らが命を懸けるに相応しい理由だからだ。それにただ自分を止めれば良いだけなら理由など必要ではない。

「つくづく愚かな祖先だな……それならば、我々は外界の野蛮人からの攻撃をただ待つばかりではないか！」

「遠い先の未来のことだが、この島が滅びる原因がこの島の装置によるものか、外界からの侵略かはわからん。だが、今お前が外界に侵攻すれば、お前が原因でこの島が滅びることだけは確かだ」

「……」

「そうさせないために、この島を救うために、彼らは未来から来たのだ！ アポロンよ！」

「お父様……」

「王様……」

（未来が変えられないものなら、俺がどう行動しようが放っておけば良いはず。だが今、目の前に未来人が現れたということは……）

「……結局のところ、未来は己の手で掴めということだな。俺も！

お前たちも！」

「兄さん！」

「話はここまでだ。どのみち戦いは避けられまい。勝ったものが未来を手に入れられるのだ！」

「愚かな息子よ……安心せい！ 我が手でお前の野望を止めてやろう！」

「戦うしかないの？」

「仕方ねえ！」

「みんな！ 気をつけて！」

ゆつくりと腕を上げるアポロンを見上げながら、全員警戒態勢をとった。

「行くぞ!! 雷龍翔覇!!」

バリバリバリ! ……

アポロンの眼前に構えられた王家の剣は大気から大量の電気を集め強大な力を蓄えていった。

「これは……とんでもない電気の量だ！」

大量の電気エネルギーを蓄えたアポロンは、両手で剣を頭上に掲げ、剣先から一斉に放出した。

「ハア——ッ!!」

ガガガン! ガン! ガン! ガン!

狙いなどお構いなしに大量の落雷が無差別に発生し、地面をえぐり取っていった。その様は正に雷龍が地面を喰い削るように見えた。削られた地面から大量の石礫が周囲に飛び散ったが、ドラえもんたち

は安全ガスのおかげでダメージはなかった。国王は防壁のようなものを張って身を守り、テラは盾で防いでいた。

「みんな！ 大丈夫だとは思うけど、なるべく直撃は避けてね！」

降り注ぐ雷を避けながらドラえもんが叫ぶ。

「行くよ！ 空気砲！ ドカン！」

「空気ピストル！」

「俺は接近戦だ！」

「援護するわ！ ひらりマント！」

ジャイアンとじすがアポロンに向かって飛び出す。

「あの野郎！ どうしても俺たちとは仲良くできないってのか！」

（大事な妹を怪我させようとするだけでなく、願いすらも聞き入れないとは……）

そう考えながらジャイアンはテラの姿を見た後、再びアポロンを睨みつけた。

「バカ兄貴め！ ぶん殴らなきゃ気がすまねえ!!」

ドラえもんとのび太の空気の弾丸は落雷に阻まれアポロンには到達できていなかった。時間が経過し、徐々に落雷の量が減っていったその時、ジャイアンがアポロンに飛び込み攻撃を仕掛けていることにドラえもんたちは気が付いた。

「のび太くん！ ジャイアンの援護を！」

「わかってる！ 空気ピストル！ バンバンバン！」

「空気砲！ ドカン！」

空気砲、空気ピストルがアポロン目掛けて飛んでいく。誰もが命中したと思ったその時、アポロンの身に異変が起こった。

パキキ——ンンン………！！

「え!?!」

「何だっつて!?!」

アポロンは両手で剣を掲げたポーズのままだった。術の発動中は意識がないのか、ドラえもんたちから攻撃を受けたという意識も無ければ気にもしてない様子だった。にもかかわらず、ドラえもんたちの攻撃は安全ガスに守られているかのように弾かれ消し飛んだ。

「ひみつ道具キャンセラー!？」

「あの服に？ まさか!？」

少なくとも自分の道具ではアポロンにダメージを与えられない。そう思った瞬間、ドラえもんは全身に言い表せぬ不安を感じ反射的に声をあげていた。

「ジャイアン！ しずかちゃん！ 逃げて！」

「え!？」

その声を聞いたしずかは、すぐにその場を離脱した。が、ジャイアンは進むのを止めず、そのままアポロンに殴りかかっていた。

「たけしさんっ!？」

「ダメだ！ ジャイアン!!」

「ここまで来て止められっか！ そらよっ!!」

パキ——ン……!？」

確実にヒットしたと思われたジャイアンの右拳は、アポロンの顔面に触れる直前に眩い輝きを放ちピタツと止まっていた。

「な、何だ？ 手応えがねえぞ？」

「やっぱり！ 早く離れるんだ!!」

「まだまだ！ もう一発!？」

次の左の一撃を構えたジャイアンはゾワツと寒気を感じた。術を終え正気に戻ったアポロンと至近距離で目があったためだ。剣を振るわれたらまずい！ そう判断したジャイアンは急いで後退した。だがアポロンはその動きを読んでいたのかのごとく、ほぼ同時に前に踏み込みながら剣を構えた。

(やべえっ!)

『ジャイアンー!!』

「惜しかったな」

アポロンが剣を突き出したその瞬間、高速で移動する物体がアポロン目掛けて飛び込んできた。

「何っ!？」

いち早くその物体を察知したアポロンは、スツと身を引きジャイアンから離れ距離をとった。

「あれは!？」

「スネオのラジコンねんど!!」

ブ——ーンツ!!

割り込んできたのは三機のラジコン飛行機だった。ジャイアンはこの隙に一気に距離を取り、しずかと一緒にテラの元に戻った。

「サンキュー!・ スネオ!」

スネオからいつもの調子の良い返事はなかった。おそらく居場所を悟られないための考えなんだろう。従兄弟譲りのラジコンの腕前は伊達じゃねえな、とジャイアンは思った。

アポロンは即座に気持ちを切り替え、現在の置かれた状況を見極めた。

(個体数三。独立かつ不規則な軌道。味方のいるあの至近距離で突撃しにきたということは爆発はしない可能性が高い。攻撃力は小。陽動、攪乱が目的か)

「邪魔だ!・ 雷光!」

バリバリバリ!

『うわっ!』

一瞬みんなは雷光の放つ激しい閃光に目を閉じてしまった。しかしスネオのラジコンは一機も落ちずにアポロンの周囲を旋回していた。その軌道はアポロンを挑発しているようにも見えた。

「こしゃくな奴らめ!・ 喰らえ!」

アポロンの雷光が放たれるよりも前に、スネオの操るラジコンたちは洞窟の奥へと向かって行った。

「逃がすか!」

アポロンは剣先をラジコンに向けたが、その瞬間、雷光による攻撃を止めた。ラジコンの向かう先には配備されているアポロンの調査船があった。

「!？」

スツと剣を下ろしたアポロンの口元には自然と笑みが浮かんでいた。

「船を盾にするとは……なかなかやるな、未来人。さて……」

すぐに冷静さを取り戻したアポロンは周囲を眺め神経を研ぎ澄まし思考を巡らせた。

(確か……未来人はもう一人居た。そいつがああ物体を操っている可能性が高い。だが居ない……見えないというのが正しいのか。この一帯で隠れる場所は船の方向しかない。ならば船に?)

アポロンはそう考えた自分に失笑した。

(いや……あわよくば俺に自分の船を攻撃させようと考える奴だ。わざわざ自分の居場所に物体を戻して俺の攻撃を受ける危険を犯す程度の奴とは考えられない。あいつらは互いを助け合い思いやる性格だ。ならば!)

アポロンは船とは真逆の誰もいない場所の壁と、その天井に向かって攻撃を行った。

「雷刃!」

ビシュシュツ!!

「!?」

二本の輝く横長の刃の形をした雷が、それぞれ壁と天井を砕き軽い崩落が起きた。

ガラガラガラツ……。

「スネオくん!?!」

「スネオさん!」

「スネオツ!」

岩崩れがおさまると、瓦礫の中からゆつくりと岩をかき分けながらスネオが出てきた。みんなはスネオを助けるために急いで集まり、周りの瓦礫をどけた。安全ガスはダメージを無効化するだけで、個人の力が上がるわけではないためだ。

「スネオくん!」

「スネオ、大丈夫か!?!」

瓦礫の中からみんなに引っぱりだしてもらいながら、スネオはジャイアンの方をキツと見据えた。

「大丈夫か? じゃないよ全く! ジャイアンが考えなしに突っ込んでいくもんだからひどい目にあつたよ! ぼくのラジコン奇襲策を

こんなに早く使っちゃったじゃない！」

「う……す、すまねえ」

さすがのジャイアンも今回ばかりはスネオに何も言い返せなかった。

「でも無事で良かったわ」

「安全ガスのおかげだね。石ころぼうしも……もういいよね。みんなと連携ができないから」

「うん。奇襲用だったからね」

安全ガスの後に被ったためか、今の崩落により石ころぼうしは破れていた。スネオは破れた石ころぼうしを脱ぎ瓦礫の上へと置いた。

「にしても、こんなに早くぼくの居場所がバレるなんて……ほんとこの世界の出来杉くんだな」

「うん、油断できない。正に強敵だよ」

のび太とスネオは素直に相手の力を認め、慎重に対策を練ろうと考えた矢先、ドラえもんの厳しい一言が挿し込まれた。

「それに……アポロンさんにはぼくの道具の一切が効かない」

『なんだって!?!』

「そ、それじゃあどうやって勝つんだよ?」

「……わからない」

「わからない?」

「そんな!」

「でも! 邪魔をしたり攻撃を凌ぐことはできる! 今僕たちができるのはそれが精一杯だ。その中で何か活路を見出すしかない!」

「そんな無茶な!」

「だから最初に何度も行ったでしょ! 危険だって!」

「しかし、安全ガスの効果で一切ダメージを受けないというのであれば、確かにやりようはあるのかな?」

「……そうでもないぜ」

「ジャイアン?」

ジャイアンはそう言って自分の脇腹を指さした。みんなが目を凝らすと、完全防御と思われた安全カパーに王家の剣による裂け目が刻

まれていた。

「これは!？」

「そんな……」

「あの剣にもその……なんだ。無効化する？　つて力があるみてえだ」

「なんだよ……じゃあもう接近すらできないんじゃない」

スネオがガクつとうなだれたところに、テラとミヨイ、そしてムクが合流した。

「大丈夫ですか？　スネオさん!」

テラは、スネオがうなだれた理由を先の戦闘によるダメージのものと思っただけ、思いやる気持ちにはやり、かなり近い距離に一気に顔を寄せてきた。

「うわっ!　あ?　ああ……へ、平気平気!　ははは」

「そうですか……良かった」

スネオも男の子である。さすがにテラの急激な接近にはドキツとした。が、背後のジャイアンから何やらものすごい殺気を感じ、別の意味でもドキツとすることになった。

「はあ……少しは役得があってもいいでしょーに……」

「え?」

「い、いや!　こつちのこと。ははは」

テラはスネオの笑顔の意味はよく解らなかったが、大事には至っていないことを認識し、にこやかに笑って返した。

「ドラえもん様、お願いがあります」

「ミヨイさん?　ああ、腕を治さなきゃね。うんと……はい。復元光線!」

タミアラと同様、ミヨイの腕は復元光線の効果によって徐々に治っていった。

「ありがとうございます。これで皆さんと共に戦うことができます」
「頼りにしています……さて」

ドラえもんはアポロンを見上げて考えた。ひみつ道具キャンセラー内蔵の装備をまとった相手と、どう戦えば良いのか……。

(対象がキャンセルによって守られるとなると、おそらくソノウソホントの他人の行動を強制する効果の類のものは一切効かないだろう……かといって、ひみつ道具の効果によって作られた物質の攻撃、空気砲や空気ピストルも効かない……何か、何かないのか……)「どうした? 万全の体勢になつたのではないのか?」
「ぬく……」

アポロンは考え迷うドラえもんを見て大体の状況を察した。
(さつき、あいつら未来人の攻撃のうち、いくつかは間違ひなく俺に直撃していた……にもかかわらず今の俺には傷一つない。何故かはわからないが、あの眩い光によってあいつらの攻撃を無効化しているように思える。これはこの王家の正装の効果によるものと見て間違ひないだろう。そしてすぐに攻撃に転じてこないということは、さつきの俺と同じく攻めあぐねている証拠。ならば状況的に有利な今こそ攻めるとき!)

「来ないならば今度はこちらから行くぞ!!」

アポロンは不敵な笑みとともにドラえもんを狙いを定め猛スピードで空中から突進してきた。雷光が弾かれている以上当然の行動ではあったが、剣技に切り替えられたのは先の安全カバーの件を考えるにドラえもんたちにすれば嫌な誤算だった。

「接近戦?! まずい!!」

「ドラえもん!?!」

虚を付かれたドラえもんは、一瞬回避の反応が遅れた。その時、ドラえもんを庇うようにミヨイが現れアポロンの前に立ちはだかった。

「ドラえもん様! お下がりにください!!」

ミヨイが両手を腰付近に構えると両太もも側面が開き、中から二本の鉄棒が飛び出した。それらを素早くつなげて伸ばし一本の棒に仕立て、アポロンを迎え打つべく棒術で迎撃する姿勢をとった。

「邪魔だ! ミヨイ!」

ガ! キ! ギイ——ン……!!

数回の剣戟を受けた後、両者は地上で鏝迫り合いの状態になった。

「今のを止めるか、ミヨイ！」

「わたくしはアポロン様の師範でありました故、全力でのお手合わせはこれがお初となります！」

「ぬかせ!!」

二人はまるで踊っているかのように互いの武器を華麗に激しく交差させた。

「ここはミヨイさんに任せて、僕たちは一度王様のもとへ！ 体勢を立て直すんだ」

ドラえもんは掛け声に合わせて、みんなは国王のもとへ走り出した。

「行かせるか！」

逃すまいとアポロンはミヨイの持つ棒に強烈なキックを見舞い、そのまま蹴り押すと同時にその反動を利用して三角跳びを行いドラえもんたちの方に飛び上がった。

「喰らえっ！」

「うわーっ！」

ドラえもんの背後上空からアポロンの剣戟が迫る。

ガキ——ン!!

絶体絶命と思つた瞬間、アポロンの剣が弾かれる音が響いた。アポロンは空中で防御体勢を取り、そのまま着地した。

「……それがお前の本当の力か……タミアラ」

そこにはドラえもんたちを守るように刀剣を構えたタミアアラが居た。日本刀のようにも見えるその剣は紫色のオーラで纏われており、怪しげな雰囲気を漂わせていた。

「ドラえもん様、どうか早く国王様のもとへ」

タミアアラの言葉を聞き、ドラえもんは国王の状態を確認した。先のアポロンの攻撃を集中的に受けていたのか、治癒したはずの国王は再び重症を負っていた。

「そんな！ 何で?」

「王家の杖を使い、アポロン様の攻撃の殆どをご自身に引き寄せてお

られました。可能な限り他方へ攻撃が行かないよう苦慮しておりますゆえ、あのよう……」

「わかりました！ 急ぎます！」

「お願い致します」

「ミヨイ！ タミアラ！ 兄さまをお願い！」

テラはこの場を二人に託し、みんなと一緒に国王の元へ走り出した。「倒せ」とは決して口にしないテラの優しさにタミアラとミヨイは、相変わらず難しいご注文を……と互いに微笑しながら目を合わせた。

「ふう……やはりお前たちの方が侮れんな。王家の剣の前にここまでやれるとは思っても見なかったぞ」

「お褒めのお言葉感謝いたします」

「ならば褒美の一つとして、今一度お考え直して頂くことはできませんでしょうか」

「ならん。褒美を与える程のことではない」

「残念です」

「止めなければ力づくで来い！」

「御意！」

後方で再び激しい剣戟と雷光の入り乱れる轟音が聞こえ始めた頃、ドラえもんたちは重症を負っている国王と無事合流した。

◆第二十四章 『激戦』

「王様!」

「おお、きみたち……そしてテラ、よく無事で」

「お父様! お身体は大丈夫なのですか?」

「ああ……ドラえもんくんのおかげでな」

「待っててください。お医者さんカバンを出します」

国王はお医者さんカバンの効果で再び全快した。

「おお! ありがとう! しかし本当に素晴らしい君の道具は」

「でも……薬はこれで最後なんです」

「そうか……それは何ともすまないことをした。私のために二度も使わせてしまった」

「いえそんな! ……こちらこそすみませんでした。さっきの攻撃の殆どを王様が受けてくださっていたと……タミアラさんから聞きました」

「ふっふっ。若者を守るのは老いぼれの役目じゃからのお」

国王は笑いながら腰を上げゆくりと立ち上がった。

「王様、単刀直入に聞きます! アポロンさんへの効果的な攻撃はありませんか?」

「……あると言えばある」

『えっ!』

意外とも取れる国王の言葉に一同は驚いた。

『本当ですか!』

「それはどんな?」

「シンプルなものだ。ミヨイやタミアラのように肉弾戦を仕掛け、ダメージを直接与える方法じゃ」

「あ、あの武術の達人のアポロンに?」

「直接!」

「無茶だよ……」

のび太はガクツと肩を落としてため息をついた。

「地味で単純だが、それが最も効果的なんじゃ。あの王家の正装は発

掘道具に対抗するための機能が備わっている。きみらの道具の性質は発掘道具に類するようじゃな。そのせいで無効化されてしまうんじゃないだろう」

わかっけていてもかなり難しい方法だなあ、とドラえもんは苦悩の表情を浮かべた。

「だが王家の正装は、こと物理防御力に関しては特別な効果はない」「そうなるよ……ミヨイさん、タミアラさんに頼るしかないのか……」「うむ。あの二人をうまく援護するしかないんじやが、あの速さではフォローのタイミングも難しくくてな……年はとりたくないもんじやて……」

「復元光線でのフォローにも限界があるし……」

「そうなるよ、結局さっきのようにドラえもんを狙ってくるだろうね」「ドラえもんさんは私が守ります!」

盾を構えたテラが珍しく興奮気味に答えた。

「でも……何とかして元の優しい兄に戻せると良いのですが……」「うん……」

「アポロンさん……」

しずかは花畑での優しいアポロンの顔を思い浮かべながら、その時譲り受けたペンダントをギュツと握りしめた。

「!? そのペンダントは?」

「あ、これ……アポロンさんから頂いたんです」

「アポロンが? きみに渡したのか!」

「? は、はい」

「そうか……」

目を細めた国王の顔は、どことなく嬉しそうだった。

「ならば、アポロンを救うのはきみかもしれんな」

「え?」

ギギーン!!

国王の意味深な発言と共に、ミヨイとタミアラの戦況に変化が起こった。ドラえもんたちが激しい金属音の鳴る方へ視線を移すと、二人の武器はアポロンによつて弾き飛ばされ宙に舞っていた。

「なかなか楽しい余興だったが、そろそろ終いといこうか」

右拳を思いきり握り脇を締め構えるミヨイとタミアラを見て、いよいよこちらも行動を開始しなければならぬ、とドラえもんは決断した。

「作戦らしい作戦が立てられないけど、僕たちはミヨイさんとタミアラさんをフォローする役割に徹しよう！　そこから活路を……」

消極的ではあるが、現状では最も良策であろう提案を皆に言い聞かせている時、ジャイアンが割って入ってきた。

「おれがアポロンをぶん殴る！」

『ジャイアン!?』

「たけしさん？」

頼もしいその一言に一同は一瞬時が止まった。が、すぐにドラえもんが劣化の如く怒り始めた。

「またそんな無茶言つて！　絶対にダメ！　安全カバーも安全ガスもあの剣の前には効果ないんだから！」

「ああ、わかってる」

「だったら！」

「それでもだ!!」

「……」

ドラえもんは一人でもアポロンを止めに行こうとした時と同等の確固たる意志をジャイアンに感じ、じっと瞳の奥を覗き込んだ。

「……ぼくは、ただやられるだけとわかっている行動を認めるわけにはいかない」

「ああ」

「その目……何か考えがあるんだね？」

そう問われたジャイアンはニヤッと笑って自信ありげに答えた。

「おれはガキ大将だ。だがのび太とドラえもんには何だかんだでよくとっちめられたよな？」

「え？　う、うん」

「まあ……」

「だからよ。おまえらにどういふ風にやられたかはよく覚えてたりするわけよ。これは俺じゃなきやわかんねえだろ？」

「……たしかに」

ジャイアンが自分たちにやられたことを自信ありげに話す姿に妙な違和感を覚えながらも、ドラえもんとのび太は黙って聞いていた。「で、今はアポロンがガキ大将の立場なわけだ。まあ、おっかなすぎるガキ大将だよ」

そう言っただけでジャイアンは、本当に厄介な奴だぜ、という感情を込めてアポロンの方に目をやった。

「ただまあ、力の弱いほうがやることは変わらねえ……ない頭で考えて挑むだけだ。ドラえもん、アレを出してくれ」

「アレ？」

ジャイアンは自分の考えた作戦をドラえもんに伝えた。テラや国王はドラえもんの道具のことをよく知らないため、どういう内容なのか詳細はつかめないまま二人の会話を聞いていた。

「どうだ？」

「……あの剣に向っていく以上、危険なのは変わりないけど……確かかなりの確率で成功すると思う……」

「だろ？」

ジャイアンは右腕で力こぶを作りガッツポーズをとり、どんなもんだ！ とアピールした。

「待ってな、テラ。おれがああバカ兄貴をぶん殴って必ず連れて戻って来るからよ」

ジャイアンは心配そうな顔をしているテラの方を向き決死の約束をするのだった。力の込められた「連れて戻る」というジャイアンの言葉にテラは目を潤ませずにはいられなかった。

「兄をどうか……お願いします……」

「おう！」

テラのか細くも強い願いの込められた返事にジャイアンはニカッと笑い力強く答えた。

「なら、ぼくたちも援護の準備をしないとね」

「うん！」

「ええ！」

「……」

長い付き合いからなのか、スネオはその場にいる誰よりもジャイアの
このことを心配していた。

（一口にサポートと言ってもそのタイミングが難しい……みんなは
「攻撃を成功させるための」サポートを行うだろう。ならばぼくは……）
「スネオくん？」

「ん？ ああ、大丈夫、大丈夫、わかってるって。サポートでしょ？」
「おい、大丈夫かよ？ スネオ？」

「大丈夫だって。ジャイアンこそ、またぼくが助けなきやいけない状
況をつくらないようにしつかりやってよ？」

「何だところの……!?!」

ジャイアンは軽く小突くつもりで拳を振り上げた。が、そこには心
配する気持ちがひしひしと伝わってくるスネオの顔があった。

「……へっ！ このげんこつは戻ってきてからお見舞いしてやるよ」

「はあ……成功の報酬がゲンコツか……やれやれ」

「たけしさん、スネオさん……」

二人ならではの独特のやりとりをしばし眺めていたテラは、彼らの
間にある妙な絆が垣間見えた気がした。そして心の中で二人の友情
にそつと感謝するのだった。

「愚かな息子のためにキミたちを危険に巻き込んでしまい申し訳ない
……」

「王様……」

「ぼくたちも……元の優しいアポロンさんに戻って欲しいんです」

「ありがとう……」

国王の元が集まっていたみんなは、互いの意思を確認するように頷
いた後、一斉に戦闘中のアポロンたちの方を向いた。

「じゃ、みんないいね！」

「おう！」

「うん！」

「ええ！」

「はい！」

「オーケー！」

「ワン！」

「では最終決戦と行くかの！ ミヨイ！ タミアラ！ そこから離れよ！！」

国王の叫びが響き渡り、戦闘を行っていた三人は素早くその場から離脱した。

「雷獣咆哮！！」

ズドド——ン！！

三人がいた場所の地面から勢いよく間欠泉の如く雷の束が吹き出した。弾け飛ぶ小石や岩。天井を破壊したことによる岩の雨。

これらに対する耐性がアポロンにはない。それを証明するかのように、アポロンはいち早くそのエリアから離脱するように行動していた。

「チツ！ また全快していやがる！ おのれラ・ムー！！」

「アポロンよ、そろそろ幕引きといこうじゃないか……」

しばらくして破碎した石や岩の攻撃もおとなしくなり、アポロンは音もなく悠々と地面に着地した。国王と向かい合うアポロンのその顔には余裕の笑みがあつた。

「ふ、未来人たちの力はムーの力には及ばなかった。ならばラ・ムーよ。貴様を倒せば俺の勝ちということだ！」

「ふっふっ……そう、うまくいくかな？」

「たしかにな。確実な勝利のために……まずはあの未来のアンドロイドを倒さなければならんか」

アポロンはドラえもんの方を見てニヤリと笑った。

「まあ、そうなるよね。えへへ……」

「ドラちゃんさんは私が守ります！」

困り顔で苦笑いしていたドラえもんの横に、盾を構えたテラとムクが勇ましく立っていた。

「王様は私が！」

そう言つてしずかもヒラリマントを手に国王を防御する構えを見せた。

「いくぞ！ 未来人！」

「みんな、行くよ！ 攻撃開始！」

アポロンとドラえもんの掛け声により決戦の火蓋が切つて落とされた。

「ヌエイツ!!」

国王の雷撃一閃！ しかしアポロンは軽くかわす。

(良い。わしの目的はアポロンのバランスを崩すことにある。体勢を立て直す時間をつくれぬように、移動の先へ先へと雷撃を置いていくんじゃ)

「ふ……こんな攻撃、避けながらも反撃できるぞ！ 雷光!!」

バシユシユツ!!

二つの雷光がそれぞれドラえもんと国王に向かう。国王は自らの雷撃にて相殺し、ドラえもんへの攻撃はテラが防いだ。本来ならば反射した雷光がそのままこちらの攻撃に変換されるのだが、戦闘に不向きなテラに反射の精度を求められるはずもなく、跳ね返した雷光はあさつての方向に飛んでいった。

盾を使いこなせていない未熟なテラの腕をあざ笑うかのようにアポロンは嘲笑した。

「今度はこつちの番だ！ 空気砲！ ドカン！ ドカン！ ドカン!!」

ドラえもんの放った空気砲はアポロンに当たることなく全て天井に着弾した。

「ははは！ どこを狙って……!?!」

アポロンはドラえもんの攻撃の意味をすぐに理解した。砕け剥がれた天井が巨大な岩となって降り注がれた。回避しなければならぬだけの大きさと量が頭上に迫り、アポロンは不本意ながらも回避と防御行動に専念させられた。

ドラえもんは回避されることは予想していた。そのため、アポロンにダメージを与えられなかったことなど微塵も気にせず、大きな岩

にさらに空気砲をあてて細かく分断していった。それは最初からそれを狙っていたかのように冷静に行われていった。

「こしゃくなマネを！　だが、その程度の落下物を避けるなど造作もない……!?!」

アポロンはそう言い終えようとした時、降り注ぐ岩の向こうに空中で両腕をこちらに向けて構えているのび太に気がついた。

「ババババン！　バンバン！　ババン！」

のび太の叫び声とも取れる銃声の擬音が鳴り響く。その直後アポロンは後方から飛んでくる石礫によるダメージを受けた。

(後ろから!?)

振り向くアポロンにまた後ろから、向きを変えればまた死角から……アポロンはのび太の弾き飛ばした小石や岩の立体反射攻撃によつて少しづつ確実にダメージを負つていった。

(こいつ!!　どうやって!?)

「バンバン……ババン！　バン！　バンバン！」

「クツ！」

アポロンが必死に攻撃をかわしている時、スネオは空中で正確な反放射撃を行うのび太を下から見上げていた。

「は……あの反射予測はほくでも到底できる技じゃないな。ほんと天才かよ。……いや、天才通り越してバカの領域だな。あれ？　じゃあやつばバカなのか？」

地上でそんな余裕の素振りを見せるスネオとは対照的に、アポロンは只々回避に専念していた。だがこれだけ回避に専念しても完全にかわすことはできず、微量ながらも確実に自分に傷を負わせる強敵の前にアポロンは苛立ちを隠せなかった。

「この……調子に乗るなよ！　飛針雷光！」

たくさん細かな針のような雷の矢がアポロンの身体から全周に針のように放出された。のび太の攻撃の元となっていた周囲の岩、小石のほとんどがそれら雷の矢によつて撃ち抜かれ砕かれた。アポロンの周囲は粉碎した結果生じた粉塵によつて視界が遮られた。

「ハアハア……見たか！」

術の無理な行使による影響が出たのか、アポロンは肩で息をしていた。想定外の苦戦を強いられている現状を思い返しながらもアポロンは、その原因を生んでいる道具を持つドラえもんとその仲間たちの戦いぶりに対して心の内で称賛していた。

「……見事だ。見たところ武術も何も学んでいない……にもかかわらず、道具だけで俺と対等以上に渡り合うとはな……」

『え?』

確かにひみつ道具キャンセラーの存在は大きかったが、それでも戦いを工夫することで善戦はできた。でもぼくたちだけじゃこう上手くはいかなかっただろうな、とドラえもんは思っていた。

「やはり、俺の考えは正しかったわけだ。外界のやつらはいずれそれだけの力を手に入れると」

負傷しながらも不敵な笑いを浮かべ、自論の正しさを訴えるアポロンにドラえもんは即座に反論した。

「この力は人々を脅かすためのものじゃない! 人々の生活を豊かにするためのものだ!」

「ふつ、何を言うか……。現に今、俺を攻撃しているではないか……。豊かにするのだと? 聞いてあきれろ」

「それは外界が攻撃を受けるのを見過ごすわけにはいかないからだ! 守るべきものがあるなら人は戦う。そして守るためには力があるんだ!」

「それは己に危害を加えるものを倒すことは正義だと言うことか?」

「え!?!」

「ならば、なぜ俺を否定する? 外界のやつらはいずれ力を蓄えて我々に危害を加えるだろう。そうなる前にやつらを倒すことの何が悪い!!」

「そ、それは……」

「お前らの道具は俺の武器を超越している。現在の状況を見ても俺にとってお前たちは強者だ。つまりこの戦いは、強者がいずれ脅威となるであろう弱者を排除しようとしていることになるのではないか?」

「うっ……」

「それがお前たちの正義だと言うのであれば、なぜ俺の行動を咎める。俺がこれからやろうとしていることは、お前たちで言うところの正義ではないのか！ 答えろ！ 未来人！」

「ぐうぐう……言い返せない……」

「アポロンよ、それは……」

「それは違うわ!!」

しずかは一連の論理に対して答えようとする国王よりも早くアポロンの言葉を否定した。ハッキリと断言したその言葉が洞窟内に響き渡ると、みんなの動きが一斉に止まった。

「しずかちゃん……」

ドラえもんを始め全員がしずかの方に視線を集め、その動向に注目した。

「おまえか……いったい何が違うと？」

「力のある人は、力のない人の間違いを辛抱強く見守り続けることができるのよー！」

「……なに？」

「相手がまだ実際に危害を加えてきてもないのに、勝手に危害を加えるものと決めつけてはいけないわ！」

「なんだと！ アレス兄さんは殺されたんだぞ！ これが危害ではなく何なのだ！」

アポロンはアレスの話を引き合いに出したと同時にさつきまで戦っていた時と同様の攻撃的な邪気を発した。ドラえもんたちはその様に慌てふためいたが、しずかはその威圧にも臆することなく、キツとアポロンを見つめ強い意思を込めて言葉を発した。

「アレスさんのお話は聞きました。確かにとても悲しい事件だと思います……」

「ならばー！」

「でも……それは既にアレスさんが自分で解決していると思いますー！」

「アレス兄さんが……自分で？」

そのしずかの言葉を受け、アポロンの興奮が少し弱まった。

「はい。アポロンさん……それだけの力を持つあなたが尊敬するアレスさんなら、大勢の人が襲ってきても簡単に倒すことができましたんじゃないですか？」

「……」

「アレスさんはそれこそとてもお強い方だったと聞いています。でも強者だからこそ、何とか戦わずにすむ方法を考えていたのではないのでしょうか」

「……黙れ」

「そしてアポロンさん……あなた自信もこの答えに辿り着いていたんじゃないですか？」

「黙れ!!」

「確かに人は大きな力を手に入れると、その力を間違った方向に使ってしまうかも知れない。でも、そういう人が全てじゃないわ。大きな力を平和のために使おうとする人はたくさんいるのよ!」

「ぬ……ぐぐ……」

「だからお願い! 目を覚ましてアポロンさん!」

「ぐ、ぐぐ……うう……」

しずかの言葉がアポロンの頭に重く大きく響き渡ると、脳裏の奥底から閉じ込められた何かが現れ別の声が聞こえてきた。

（お前だって本当はわかっていたはずだ。認めたくなかっただけなんだろう?）

「黙れ!! 出てくるなー!」

その叫び声と同時にアポロンが身に纏っていたオーラが爆発的に膨れ上がった。その余波により周囲の空気が張り詰め、一瞬ではあったが暴風が通り過ぎて行く感覚を全員が体感した。

「キヤアツ!!」

『うわーっ!』

両手で頭を抱え突然叫びだしたアポロンを見て、ミヨイとタミアラは警戒体勢をとった。

「この力は……!?!」

「アポロン様……」

ゆつくりと両手を下げながらあらわになつていくアポロンのその眼光は以前よりも鋭さを増し、身体の周囲はより一層濃い負のオーラに覆われた。その重厚かつ冷酷な視線は、しばらくの間しずかに向いて固定されていた。

「お前の声は……俺を惑わす」

「え？」

「今の俺は、お前らの道具よりもお前の存在の方が脅威と感じている……だからまず……お前から消させてもらう!!」

そう言い終わるや否やアポロンは直接攻撃を仕掛けるべく、しずかに向かって空中から突進した。

「!？」

「アポロン様!」

「しずかちゃん! 逃げて!」

アポロンの速さは以前よりも増しており、ミヨイ、タミアラの能力をもつてしても到底間に合うタイミングではなかった。しずかは逃げることも叶わないと悟り、被弾を覚悟したその時、一つの影が目の前に割り込んできた。

ガッ! キ——ンツ!!

「……ほう」

そこにはムクの背にまたがり盾を構えてアポロンの剣を必死に受けているテラの姿があった。

「テラ、このような獣を手なずけているとは、さすがに少し驚いたぞ」

「兄さん……剣を引いてはもらえませんか？」

「それはできぬと言ったはずだ。止めたければ己の力で俺を止めてみよう!」

アポロンはそう言い放つと己の腕の力を増し、剣で盾もろともテラを押し飛ばした。

「くっ!」

ムクはテラを守るべくクッションの役割を果たすために共に吹き飛び、背中に乗るテラの姿勢が崩れぬようにその大きな身体を器用に制御し華麗に着地した。

グルルル……

先のアポロンの飛針雷光により、地面付近は背丈ほどの土煙が広範囲に漂っていた。嗅覚も使い、かろうじてアポロンの居場所を特定できていくムクは、その敵意溢れるオーラの方向に威嚇を行っていた。その隙にせずかは、周囲の土煙に紛れてアポロンから離れるように移動した。

(チッ！…これでは状況がわからん。一旦上空に上がるか)

周囲の索敵を行おうと噴煙の中から瞬時に空中に飛び上がったアポロンは、自らの身体で一筋の煙の帯を引いた。そのタイミングを待っていたかの如く、二つの影が間髪入れずその帯の先に向かって飛び出した。

「なに!?」

土煙の中から現れたのはミヨイとタミアアラであった。

『遊びは無しです！ アポロン様!』

「クッ！ きさまらー!」

ドッ！ ドッ！

ビュッ！

ガッ！

達人同士の空中戦には、他者の割り込みを許す隙など微塵もなかった。余計な介入は、むしろミヨイとタミアアラの連携を止めることになる……ドラえもんたちはそう考え、その成り行きをただ見守るしかない状態だった。

戦況は五分の状態であれば続くは続いていたが、空中での戦闘バリエーションには限界があった。徐々にミヨイ、タミアアラの攻撃パターンが読まれ始めると、形勢はアポロンが押し始めた。

「どうした？ そろそろ限界か？ 次は斜め後方からの攻撃だろうか？

ハアッ!」

余裕からか、アポロンは二人からの攻撃予測を声に出しながら雷光を放った。

バリバリ!!

雷光の直撃を受けたミヨイは空中でバランスを崩し、そのまま地面

に向かって落ちていった。

「ミヨイ!!」

そのまま地面に激突するかと思われたミヨイの下に、テラの思いが届いたかのようにクッションが一つ滑り込んだ。ミヨイを柔らかく弾き背に乗せたそのクッションは、先程までテラを背負っていたムクだった。

「ムク!」

「すごいや! ムク!」

「……あなたは、テラ王女の傍にいた?」

「ワウツ」

ムクの背に乗り何かを閃いたミヨイは、すかさずテラに対して願いを申し出た。

「テラ王女。しばらくムク殿をお貸し願えますでしょうか?」

「え!」

ミヨイからの要望なんて珍しい、と一瞬戸惑ったテラであったが、何かしらの確信を得ているミヨイの態度をみて、すぐに全てを委ねる判断に至った。

「ムク! ミヨイの力になってあげて!」

「ありがとうございますテラ王女。ムク殿、ご協力をお願いします!」

「ワンツ!」

ムクに跨るミヨイは再びアポロンを見上げた。

「ふっ、そんな獣風情が増えたところで一体何ができるといえるのか。失望させるなよミヨイ!」

「ご心配ありがとうございます、アポロン様。ですがご安心ください。その期待を裏切るようなことにはならないことをお約束します。タミアアラ!」

「承知!」

「来い!」

再びアポロンへの攻撃を試みるミヨイとタミアアラ。ミヨイはムクの背から飛び立ち、二体のアンドロイドが空中で素早い軌道変更を行い始めた。

「芸のない！ もうそのパターンは効かんと言っただろう！ そこだ
!!」

行動を予測したアポロンが雷光を放ったその先にはタミアラの姿
があった。予想通り、という満面の笑みを浮かべていたアポロンの眉
は、次の瞬間に険しく歪んだ。

バシユ！

「なに!？」

タミアラの軌道が雷光が当たる直前に変わった。その様子に驚い
た直後、アポロンは背後から背中に強烈なミヨイの蹴りを受けた。

「グッ！ ばかな!？」

「まだまだこれからですよ、アポロン様」

「くっ！ この!」

王家の剣を振り向こうとするアポロンの右腕。スピードを殺すよ
うに伸びきる前の右肘を踏み台にし、ミヨイはその場を離脱した。振
りぬく力を失ったアポロンに、休む間も与えずにタミアラのボディブ
ローが左わき腹に刺さる。

「グッ!」

タミアラはそのボディブローの反動を利用してそのまま後退。退
いたタミアラに向かってアポロンはすかさず雷光を発射するも、今度
も当たる直前に回避されるのだった。

「くっ！ ……なるほど、あの獣のせいかな」

ミヨイとタミアラはムクをもう一つの空中足場として空中戦術に
取り込んでいた。二人の類まれな戦術センスもあるが、それ以上にこ
れだけのコンビネーションにいきなり合わせられるムクにミヨイと
タミアラも驚いていた。

三人と一匹による達人同士の空中戦は、互いにダメージを負いなが
ら継続された。

しかし、新たなコンビネーションとそのバリエーションを読み切れ
ないアポロンが次第に押されていくのが周りからも伺えた。

「おのれ！ 舐めるな——っ!」

ドッ!!

疲れがピークであろうにもかかわらず、アポロンは攻撃の要となっているムクに執念の蹴りを叩き込んだ。

「キャウンッ!!」

「ムクッ!」

アポロンの直接攻撃により安全ガスは無効化され、ムクは悲痛な鳴き声と共に吹き飛ばされ壁に激突した。

『アポロン様っ!』

「ウオオ——ッ!!」

ドドッ!!

その直後、同時攻撃を仕掛けてきたミヨイ、タミアラ両者の腹部に時間差で蹴りを打ち込み、強烈な勢いで二人を吹き飛ばした。

そのまま壁に激突した二人に対して、アポロンは容赦なく即座に雷光を連続で打ち込んだ。

ドドーン……ガラガラ……

「ミヨイー・タミアラー!」

雷光によつて崩れた壁は、二人の上に積み重なるように落ち、その姿を覆い隠していった。さっきまで優勢だった戦況は一瞬にして逆転し、ミヨイ、タミアラ、そしてムクも動く気配はなかった。

「ハア……ハア……」

二人との距離が離れたことでアポロンは荒ぶる呼吸を整えようと深く深呼吸をしようと思を吸った。しかし、その隙を逃さないと言わんばかりに正面から近づく別の影に気付き、呼吸を止めて臨戦態勢へと切り替えた。その影は、拳を振り上げたジャイアンであった。

「なに!?!」

「うお——!」

タイミングは今しかない。体勢が崩れているアポロンへの決死の一撃が今、打ち込まれようとしていた。

「バカめ! キキサマらの道具は俺には効かな!」

そう言いかけたアポロンは驚愕した。ジャイアンが殴ろうとして振り上げている右の拳にはスーパーてぶくろは無かった。素の拳ならアポロンへダメージを与えることができる。それがジャイアンの

出した単純な結論だった。

「なかなかやる。だが残念だったな。貴様ごとき凡人など剣で一突きだ」

「ジャイアン！」

「ジャイアンツ！」

「たけしさん！」

「終わりだ！」

そう言うときアポロンは、バカ正直に真正面から向かってくるジャイアンに対して、ほらよ、と軽く剣を突き出した。

ビシュツ!!

「な!？」

当たらずがぬ。自信有りげにアポロンが突き出した王家の剣は、あろうことかジャイアンの身体を通り抜けていた。

(なんだ? 何が起きている?)

凄まじい速さで思考を巡らせたアポロンにはゆっくりとした時が流れていた。そんな中、ジャイアンの身体は突如アポロンの右方向へと向きを変えた。

(右? ……右に何が?)

「こんのバカ兄貴が——つ!!」

ドガツ!!

つられて右を向いたアポロンの顔面に、なんと逆方向の左から鉄拳が飛んできた。ジャイアンの渾身の一撃が、ついにアポロンの顔面に決まった。

(バカな!? なぜ……逆方向から……?)

そんな考えを抱いていた時、目の前にあったジャイアンの姿が歪んで消えた。アポロンに触れたことでジャイアンにかけられていた「いないいないシャワー」の効果が無効化されたのだ。

(幻影……!?)

アポロンはトリックを見破ったことで飛びかいていた意識をなんとかつなぎとめた。

「うっ! こいつ! まだ意識が!？」

「ジャイアン！ 早く離れて！」

「遅い！」

アポロンは残りの力を振り絞ってジャイアンの実体の方に身体をひねりながら剣を振った。

（ダメだ！ 避けきれねえ！）

『ジャイアン!!』

諦めかけていたその時、ジャイアンの目の前を物体が三つ高速で通り抜けて行った。

ドドドッ!!?

その高速の物体は、剣を持つアポロンの右手首に正確に連続で追突した。その追突された衝撃でアポロンの腕の軌道は変わり、握っていた王家の剣も手から離れ地面へと落ちていった。その三つの物体は、スネオがコントロールしていたラジコンねんどで作られた飛行機だった。

「スネオくん！」

「スネオさん！」

「おお！ 心の友よ！」

「まったく……何で誰も攻撃後のサポートを考えてないのかね。世話がやけるったら」

力の抜けたアポロンはドラえもんたちの会話を聞きながら空中を落下していた。薄れゆく意識の中、かすかにスネオの姿が目に入り、また……あいつか……とポツリと呟き、意識を失い地面に落ちた。

「アポロンさん！」

傷ついたアポロンが気がかりなはずかは、考えるよりも早く飛び出していた。

「いけません、しずかさん！ まだ危険です！」

テラのその声を聞き状況を察したみんなは、しずかを止めようと一斉に走り始めた。そんなしずかの行動を最初に止めに入ったのは、驚くことにさっきまでアポロンの攻撃によるダメージで倒れていたムクだった。ムクはテラの叫び声に反応して気を取り戻し、急ぎ主人の望む行動に出たのだった。

「ムク！」

無言で行き先を阻むムクの登場にしずかは驚いた。だがそのおかげで冷静な気持ちを取り戻すこともできた。走るのを止めたしずかの元に、次々とみんなが集まってきた。

「しずかちゃん！」

「しずかちゃんの気持ちはわかるけど、まだアポロンさんには近づかない方がいいよ」

「わたしも……そう思います」

「そうね……みんな、迷惑をかけてごめんなさい」

しずかはみんなに謝りながら、少し先に横たわっているアポロンの姿をそっと見た。アポロンはピクリとも動かなかったが、王家の正装による浮遊能力のおかげか落下によるダメージは少なそうに見え、しずかは安堵した。

「!? ミヨイさんたちは!?」

「そうだ！」

『ミヨイさーん！ タミアアラさーん！』

みんなが二人の名前を呼ぶと、互いに距離の離れた二つの岩崩れの中からゆっくりと二人が立ち上がった。

「ミヨイ、タミアアラ……」

二人はみんなが集まっていることに気付くと、すぐにそこへと向かっていった。だがその足取りは重く、お世辞にも速いとは言えない速度であった。また、意図的に解除したのか、自然とそうなったのかは定かではないが、二人の戦闘モードは解除されていた。

「無事だったのね、良かった」

「テラ王女こそ、ご無事で何よりです。しかし……どなたがアポロン様を？」

「たけしさんです。たけしさんが兄さんを止めてくださいました」

「!? あ……いや、その……はい……」

テラに話題を振られたジャイアンは、内心ドキッとして思わずシドロモドロな返答をした。

「す、すいません!!」

そう言つてジャイアンはテラやミヨイに深々と頭を下げた。ミヨイたちは互いに向き合い不思議がつたが、その意味が王子であるアポロンを殴つてしまったことに対する謝罪なのだとすぐに悟つた。

「たけしさん。謝る必要なんてどこにもありませんよ？」

「テラ王女の言うとおりでです。むしろ、あの状態のアポロン様をよくぞ止めてくださいました」

「貴方様に感服すると共に心より御礼申し上げます」

自分なんかよりも確実に格上の実力者であるミヨイとタミアラに感謝の言葉を受けたジャイアンは、返す良い言葉も見つからず只々恐縮していた。

戦闘が一区切りし平穏な空気が漂っている中、突然ムクが何かに反応した。

◆第二十五章 『レムリア』

ウウウウウ……!!

「どうしたの？ ムク」

テラがムクに尋ねるように傍に寄ると、ムクは船のある方向に向かって突然走り出し、船尾を隠すように立ち並ぶ岩壁の裏側へとその身を消した。

「な、何だお前は!? は、離さぬか!」

そんな慌てた悲鳴を上げる一人の男を口にくわえ、ムクは崖向こうからのそりと再び姿を現した。

「レムリア!」

「レムリア! お主、なぜここに?」

『え? レムリアさん!』

テラと国王に遅れて、ドラえもんたちもその人物を思い出したように反応した。

ムクはレムリアを口にくわえたままみんなの元に運んでくると、パツと口を開きレムリアを国王の眼前に差し出した。尻もちをついたレムリアは、取り繕うように急いで立ち上がった。

「これは国王様、よくぞご無事で!」

「うむ。そなたもな、レムリアよ。我が愚息が迷惑をかけた。すまぬ」

「なんと勿体なきお言葉」

レムリアは膝をつき、忠誠心を示すように国王に平伏した。スネオは崖下でのレムリアの態度が頭から離れず、一人猜疑心の目でその様子を見守っていた。

「さてレムリアよ。なぜそなたはココにおる?」

「はい。誠に申し上げにくいのですが、アポロン様にこの場に留まると命ぜられました……」

「ほう。見たところ行動に制限はかけられていないようだが……これだけ危険な状況の中、なぜ逃げようとしなかった?」

「アポロン様の命にありますれば、背くことなどありません」

淡々と言い終えたレムリアを見下ろしながら、国王は短くフツとた

め息を吐き次の質問へと移った。

「あの船を見ればわかるように、アポロンは外界侵攻を企てていた。レムリア、お主はなぜこの状況をわしに報告しなかった」

テラは思いもよらないその言葉を聞き、驚きを隠せぬまま国王に告げた。

「お父様。造船の件は既にお父様には伝えてあると聞いておりましたが?」

「なに? そうなのか? レムリア」

「ぼくたちも皆でそう聞きました」

国王はのび太の言い添えを聞き、レムリアに事の真偽を問いただした。

「はい。本来であれば、テラ王女にお伝えしたあの直後に国王様の元へ赴きご報告する予定でございました。ですが、アポロン様より急ぎの命を受けましたゆえ、ご報告に至らなかつた次第でございます。ご報告が前後する形になり誠に申し訳ございません」

「レムリア! では造船の名目の話は!」

嘘だったの? というテラのその疑いの問いには国王が答えた。

「中長期的な海洋漁業が目的……とでも言うのだろう。のう? レムリア」

「さすがは国王様。そのとおりでございます」

「それならば、ワシも納得せねばならぬからのお」

「はい。アポロン様ですから、それを見越しての名目かと」

「ふむ」

国王は気絶して横たわっているアポロンに視線を流した。そんな二人のやりとりを聞きながら、スネオはレムリアへの猜疑心を更に高めていた。

(これは……レムリアさんの口を割らせるのは難しいぞ。この人はおそらく嘘は言っていない。だからこそ突き崩せない。でもなあ……この誠実さが本当ならもっと早い段階で、それこそ造船の指示が出された時点で王様に報告できたはずなんだよな。でもしなかつた。そこが怪しいんだけど……多分、その言い訳も用意してあるんだろうな。

自分から正直に話すわけもないし……ん？ ショージキ？

何かを思い出したかのように、スネオはドラえもんをコソツと耳打ちした。

「ドラえもん、あの道具ってある？」

「え？ あの道具って？」

「えーと……何でも思ってること話しちゃうやつ」

「あー、ショージキデンパね。うん、あるよ」

「それをレムリアさんにかけてみてよ」

「え!?! でも別に何か嘘をついているようにも見えないけど？」

「まあ、ぼくの勘だけだね。でもいいじゃない。勘違いだったとしても何も起きないんだし」

「あ、それもそうか。わかった」

ドラえもんはうなずきながらポケットからショージキデンパを取り出し、レムリアに向けてそつと電波を浴びせた。

「……しかし、アポロン様が倒されるとは……とんだ誤算だな」

『!?!』

「レムリア!?!」

「レムリアよ、今何と申した？」

自分の身に何が起こしたのか理解できなかったレムリアは、驚いた表情で顔を上げ素早く両手で己の口を塞いだ。しかし、ショージキデンパの威力は凄まじく、レムリアはその力に抵抗することはできなかった。

「例え相打ちであつても国王が倒れることが絶対条件の策だったからな。さて、どのようにしてこの場を切り抜けるか」

ショージキデンパを放ったドラえもんは、ボー然としてレムリアの会話を聞いていた。その傍らスネオは、やっぱりね、とでも言うように少し荒い息を鼻から出した。

「アポロンは復讐心に捕らわれていたとはいえ、外界侵攻を目論んではいなかった。レムリアよ！ 遺跡を作動させた強い思念の正体は貴様か!!」

国王の目が疑惑から確信へと変わったことを感じとったレムリア

は、もはや隠す必要もない、というようにその表情を徐々に悪意の満ちたものへと変貌させていった。

「フフフ……もう少しというところでとんだ邪魔が入ったものだ。それがこんな子供たちというのも驚きだが、まさか発掘道具の使い手とはな……さすがに予見できないんだわ」

「アポロンさんを操っていたのはお前か!？」

レムリアは、もはや意味のないそのドラえもんの追及に取り乱しもせず、余裕をもって答えた。

「操る？ ははは、そんなことはしていない。王子のあの憎しみは本人のものだ。まあもつとも、キツカケは与えたがね」

「キツカケじゃと?」

「そうですよ、国王。例のアレスの事故の件、あれは私が仕組んだものです」

『何だって!?!』

ドラえもんたちは驚くのと同時に、心の内から憤りの感情が湧き上がってくるのを感じた。ミヨイとタミアラも、レムリアのその言葉に一瞬身体を動かすほど鋭敏な反応を見せた。

「仕組んだとはどういう事ですか？ レムリア!」

テラのやや興奮気味な問いかけにレムリアはフンと軽く口元を緩め淡々と答えていった。

「簡単なことですよテラ王女。外界で多くの大陸人に襲われた時、あえてアレスだけをそこに置き去りにしたのです」

『!?!』

「そう、大陸人に襲われたあの時……」



バシヤバシヤ

「ハアハア」

視界も悪く海も荒れるほどの大雨の中、大陸人との戦闘を繰り返しながら調査船に引き上げようと試みるアレスがそこにいた。外界調査の責任者であるアレスは、調査メンバー全員が無事撤退できるように殿を務めていた。

アレスの戦闘に関する能力はとても高く、そのおかげで殆どのメンバーは被害を受けることなく無事、調査船に戻るための小船に乗り終えていた。

「アレス兄さん！ 早くー！」

小船の上からアポロンが懸命にアレスへと声をかける。

「俺は後で行く！ 早くここから離れろ!! レムリア！ アポロンを頼むー！」

「ハッ！ さ、アポロン様！」

「いやだ！ アレス兄さんが！」

「アレス様は後ほど私が迎えに戻ります。ですからどうか！」

「レムリアの言うとおりで！ お前がそこでゴネてると時間がそれだけかかるんだぞ、アポロン！」

「でも……」

「俺なら大丈夫だ！ 死にはしない！ アポロン、俺を信じろ！」

アレスはそう言うと言と歯を見せニカツと笑った。

「きつとだよ!!」

「おう！ わかったら行け！」

「うん！」

アレスは下手に被害が出ないように小船から離れていった。その際、レムリアに自分がこれから向かう方向を手で指示した。レムリアは落ち合う場所の指示と受け取り、急いでアポロンと共にその場から離れ調査船へと引き返した。

アポロンと調査メンバーを無事調査船に送り届けたレムリアは、アレスを迎えに行くため再度小船を出した。

「ハアハア……さすがにこの悪条件の下でこの人数をいなし続けるのは難しいか……かといって危害を加えるわけにもいかん……」

逃げながらも懸命に思考をめぐらせたアレスは英断を下した。それは発掘道具による大陸人への威嚇攻撃だった。

(レムリアに預けてあるあの剣の術を発動すれば十分な威嚇効果が期待できる。逃げ出してくれば御の字、最悪でもこちらへの攻撃を躊躇させることはできるだろう。その隙に船に戻ろう)

アレスがそう考えていると、迎えに来たレムリアの小船が視界に入った。海岸線を走っていたアレスは、足を取られ速度が落ちることも気にせず、浅瀬に侵入していった。

「レムリアー！ 王家の剣をー！」

そうアレスが声をかけると、レムリアの乗った小船はアレスからずいぶん距離の離れた場所で停泊し、それ以上近寄ってくる気配はなかった。

「どうした？ レムリアー！ 早く王家の剣を！」

アレスに何と言われようともレムリアは微動だにしなかった。それどころか不敵な笑みを浮かべ、これからのアレスの行く末を楽しんでいるようにすら思えた。

大陸人たちのバシャバシャと近づいてくる水音を背後に聞きながら、アレスはそれがレムリアの謀略だということに気が付いた。

「レムリアー！ きさまー!!」

疲労の中にあつたアレスはろくに反撃もできないまま、大勢の大陸人たちとの戦鬪を余儀なくされ、その身は静かに水面下へと沈んでいった。

レムリアはその様を遠目で見ながら王家の剣を懐にしまい、自分の声が大雨に消されることを良いことに、高らかに笑いながら調査船へと戻っていくのだった。

◆ 「……ということだ諸君」

「その状況で王家の剣を……あえてアレス兄様に渡さなかつたと言うのですか！」

テラはわなわなと身体を震わせながら、レムリアに強く問いただした。

「はいそうです。ムーの民は何があつても外界の人間に危害を加えるわけには行きませんから。それが例えアレス様であつても……：：：そうですよね？ 国王？」

「……そうだ」

「その結果、王子の心が病んだだけです。仕方のないことだったので

すよ」

ショージキデンパの効果で話している以上、この会話に嘘はない。あくまでも掟を守っただけ、と言うレムリアにドラえもんたちは怒りに震えながらも何も言えなかった。がしかし、

「ふーん……で？ アレスさんを見捨てた目的は何？」

全員が怒りをあらわにしている中、一人冷静なスネオがレムリアに質問を投げかけた。

「もちろん外界侵攻のためですよ。今のこの状況を見てわかりませんか？」

「なるほどね……アポロンさんを利用するためか」

スネオの明瞭な答えにレムリアはニヤリと笑って返した。

「あなたはなかなか賢い。そのとおりです。王家の剣さえあれば外界の制圧なんてたやすいもの。しかし、アレスも王子も、どちらも外界侵攻なんて考えませんからね。だから私がそうしたくなるよう仕向けたのですよ」

「……なんて奴だ」

「アレスが死ねば王子は怒り狂うだろう。その矛先は当然“外界”へと向く。そして国王は必ずや王子の進撃を止めようとするだろう。王族同士での対決というわけだ。絶大な攻撃力を持ったもの同士での戦い……どう転んでも双方無事では済むまい。ふふふ」

「こいつ……」

レムリアは自分の立てた計画に満足するかのように小さく肩を震わせながら笑っていたが、突然その動きをピタツと止め不機嫌な顔へと豹変した。

「この先、必ず強敵となる国王を何としてもこの場で倒しておく必要があった。私はこの戦いの結果、王子の御身がどうあれ国王は倒れる……そう予想していた。実力から考えれば容易に想像つくことだったが……ここで計算外の事が起きた」

「……」

「国王が亡くなれば、王子の憎しみも更に膨れ上がったことだろう。あとは私がその気持ちをうまく利用し外界侵攻を進める算段であっ

だが……よもや計画が狂うことになるとはな。全く厄介な子供たちだ」

レムリアが事の真相を語り終えたと同時に、耐えかねたミヨイとタミアラが一気に距離を詰め攻撃を行った。

「おのれ！ レムリア卿ー！」

「貴殿という奴はー！」

ビキキツ……ギシ……ギシ……

ミヨイとタミアラは、レムリアに近づいた途端に身体が固定された。それはまるでアニメーションの一時停止のように、攻撃姿勢のまま金縛りにあつたような、そんな不自然な体勢だった。

「グツー！」

「クツ……！」

避ける素振りを微塵も見せなかったレムリアは、ゆつくりと二人に近づき、愚者を見るような目つきでタミアラの顔に右手を添えた。

「お前からアンドロイドは王族関係者には攻撃できないということをお忘れか？」

そう言いながら右の掌を頬をつたらせ顎に移動し、その人差し指でタミアラの顎をクンと軽く上げた。

「お前たちは王子の稽古師範として特別に攻撃を許可されていたに過ぎん。思い上がるな!!」

バシユシユツ！

『!?!』

ミヨイ、タミアラは、各々の眼前に突き出されたレムリアの両の掌から発せられた衝撃波でそれぞれ吹き飛ばされた。

ドドツ!! ……

「ミヨイさん！ タミアラさん！」

「レムリア！ 貴様ー！」

一連の真実を告げられた国王は、耐えかねた怒りがうねりを挙げ、すかさず王家の杖で雷による攻撃をレムリアに仕掛けた。

バリバリ！

ドド——ン!!

『うわーっ!』

「きゃあ!」

王家の杖から放たれた雷撃は、凄まじい威力を物語るようにレムリアに直撃した。

空気の震えがおさまると、ドラえもんたちはまさか、と目を疑った。そこにはまるで何事も無かったかのようにマントを羽織ったレムリアが立っていたのである。レムリアは自身を覆っていたマントを悠々と翻した。

「ヌウー・発掘道具か!?!」

口惜しそうな国王の言葉を聞いて、レムリアは余裕の笑みを浮かべた。

「はい。王子より授かりました。王家の宝具は私には扱うことはできませんが、この発掘道具ならば使うことができます。マントで術を防ぎ、この両腕のリングで攻撃を行う。物理攻撃には手を焼きますが、そのミヨイ、タミアラは私には攻撃できない……つまり、王子が居なくともこの二つの発掘道具があれば、私だけでも外界侵攻はできるというわけです」

そう言ってレムリアは洞窟内に響き渡るほどに高らかに笑った。

「宝物庫は王族にしか開けられん……そのためのアポロンか。どこまでも抜け目のない奴じゃ」

「こいつ……真正正銘のクズだな……」

「ドラえもん……何とかならないの?」

「うーん……あのマントに空気砲は効かないだろうし……」

「許せない……」

『え?!』

しずかは自分でも信じられないくらいに激しい怒りが波のように全身に広がっていくのを感じていた。肩を小刻みに震わせながら、ジヤイアンから預かっていたスーパードアを力強く右手に装着し、湧き上がる己の感情を握りしめながらレムリアへと近付いていた。

「し、しずかちゃん?」

「危ないよ!？」

のび太とドラえもんがしずかを心配して引き留めようとしたとき、スネオが二人を止めた。

「スネオくん?」

「……多分大丈夫だよ」

『ええ!』

妙な静けさが漂う中、崩れた岩の中からミヨイとタミアラが姿を現した。レムリアから距離が離れ、拘束が解けた瞬間に空中で体勢を整え、自分へのダメージを最小限に抑えていたのだ。

ミヨイは急ぎ場の状況を確認すると、しずかが一人レムリアに近づいていく様子が見えた。

(……しずか様?)

一人近づいてくる不用意な小娘を一瞬不思議に思ったレムリアだったが、怒りに震えるしずかの顔を見て、考えなしに感情任せで玉砕に来た只の愚か者か、と一笑し大きな優越感に浸っていた。

「何だお前は? まさか私と戦おうとでも言うのか?」

しずかはレムリアの問いかけにも無言を貫き、その進める足を止めなかった、その態度はレムリアの神経を逆撫でするには十分だった。

「クッ! 身のほど知らずの小娘が! 吹き飛ばべ!」

前にかざしたレムリアの両手から、先程と同じように強烈な衝撃波がしずかに対して発射された。

パキ——ン!

「な!？」

その衝撃波は、しずかの纏う安全ガスによって完全に無効化された。驚くレムリアにさらに距離を詰めていくしずか。レムリアの顔から先程までの余裕はすっかり消えていた。

「ば、ばかな! 王家の正装を纏ってもいないのに!?! わ、私の……発掘道具の攻撃が効かないだど!?!」

真正面にまで到達したしずかは足を止め、レムリアの顔を見上げハッキリと告げた。

「あなただけは……許せないわ!」

しずかはミヨイのポーズを真似るように、右拳を思いっきり握り脇を締め構えた。

(あの構えは……私の?)

「お、お前たちは……一体……何なんだ……?」

「何って? 私たちは!」

しずかはみんなの気持ち、そしてミヨイとタミアラの想いを拳に乗せ、思いっきり踏み込んだ。

「アポロンさんの友達よ!!」

ズドンツ!!

スーパードンツの威力を乗せたしずかの渾身のボディブローがレムリアの腹部に決まった。レムリアの顔が一瞬で激しく歪むとその身体はくの字に曲がり、勢いよく後方に吹き飛び壁に激突した。その様子を見ていたドラえもんたちは、普段見慣れぬしずかの行動に驚き、呆気にとられていた。

「すごい……しずかさん……ミヨイみたい」

「いい気味。いや、女の子って怖いね」

「な、なんつーか……あんまり見ない光景だな……なあ? のび太」

「う、うん……」

「しずか様……」

ハツと我に返ったしずかは、周りから注目を浴びていることに気がつき、はしたないと両手で顔を隠し恥ずかしがった。

「!? い、イヤだ……あたしったら……」

そのしずかにゆつくりと国王が近付き、やさしく肩に手を置いた。

「しずかくん、ありがとう」

「い、いえそんな、……あの……」

国王は戸惑うしずかに柔らかい笑みを送った後、倒れているレムリアに向かって歩いていった。その姿を見てミヨイも護衛すべく国王の元へと急いだ。その途中、しずかの横を通り過ぎる際にミヨイはそっと一言残すのだった。

「ありがとうございます。しずか様」

「え?」

しずかはその声を聞いてミヨイの方を振り返った。国王の横に並ぶミヨイの後ろ姿は、満身創痍であるにもかかわらず、姿勢は正しくいつも通り凜とした清らかさを漂わせていた。ただ、その言葉を発した時のミヨイは、心なしか嬉しそうな顔をしていたように見えた。

「さて……レムリアの処分をするかの……」

「はい」

壁に寄りかかり気絶しているレムリアの前にしゃがんだ国王は、彼の頬を軽く数回叩き、強引に目を覚まさせた。

「……!? こ、国王！ ミヨイ！」

「レムリアよ。発掘道具を返してもらおうか」

「クツ、ふぎけるな！ この力は私のものだ！」

「確かにその力は強大だ。だがな、彼らには勝てんよ。アポロンがそうだったようにな」

「クツ……」

「この島も直に沈む。これ以上の醜態を晒す前に、この場から早々に立ち去れ。それとも我々とまだ一戦交える気か？」

しずかから受けたダメージも深く、悔しくも観念したレムリアは、装備していた発掘道具である両手のリングとマントを外し、逃げるようにこの場から走り去っていった。

「国王様、よろしかったのですか？」

「うむ。あれでも一応ムーの国民だ。可能な限り、国民には生き延びてほしいという想いは変わらぬ。島が滅びの一途を辿っている以上、あれも脱出するのが精一杯じゃろうて。発掘道具が回収されたことで、もう悪さもできんじやろうしな」

ドド——ン……ズズ——ン……

遠くから崩落の音が聞こえ、かすかだが地面の揺れが感じ取れる。

「なんだろう？ 外が騒がしくなっているような？」

「何にしても急いでここから脱出した方が良さそうだね」

「ぼく、外の様子を見てくるよ」

のび太はタケコプターを使い、入ってきた洞窟の通路に侵入しようとした。その時、

ドドド——ン!!

ガラガラガラ……。

「うわっ!」

突如大きな地震が起き、その通路の天井が崩れ、外に繋がる道が塞がってしまった。

「危なかった……でもこれじゃここから出るのは無理だなあ……」

別の出口を探そうと一旦ドラえもんたちのところに戻ろうとしたのび太だったが、到着まであと少しのところ突然タケコプターが停止し地面に落下した。

「え? うわっ!」

ドスン!

「イテーツ! ……何だよもー!」

「もう、何やってんだよのび太くん」

「そんなこと言ったって……」

ドド——ン!!

ドドドド……ドドドド……。

「うわっ!」

「なんだなんだ!」

地響きのような轟音の中、かすかだが天井にも亀裂が走った。

「これは!?! 崩壊が始まったのか!?!」

「王様!?! 崩壊って……まさか遺跡の!?!」

のび太の問いかけに国王は静かに頷いて答えた。

「おそらくそうじゃろう。ここまでの揺れは経験したことがない。ましてや止む気配もなく断続的に続いておる……ここもそう長くはもつまい」

「なんで? ここに来て遺跡が正常に動作するなんて……」

「わからぬ……半壊していた遺跡の装置が自然に治ったとは考えにくいが……ムーの祖先が滅びの道を切望しているようにも思える」

偶然にしてはできすぎだ、と疑念を抱きながら聞いていたドラえもんとのび太は、ふと何か引つかかるように首を傾げた。

「ん? 治る?」

「治る……治る!？」

「まさか!？」

『タイムふろしきだ!!』

のび太とドラえもんは向かい合い同時に声を上げた。二人は遺跡で第三の掟を見つけた時、そのあまりの内容に驚いて急いで国王に報告しに向かった。だがその際、コントロールパネルにタイムふろしきを置きっぱなしにしていたのを思い出したのだ。

“遺跡が完全に治った”そう理解したとき、ドラえもんはいつも以上に顔が真っ青になった。

「みんな！　これから先、絶対にケガをしないで!!」

「え!？」

「なに?」

「どうしたってんだよ?」

「いいから！　ケガだけは絶対にしないで!!」

「どうしたんだよ。安全ガスがあるから平気……」

「遺跡が完全に治ったんだよ!!」

のび太の言葉を遮るようにドラえもんは叫んだ。さすがに全員、ドラえもんが言おうとしている事がわかった。遺跡の“ひみつ道具キヤンセラー”が復活しているのだ。そう理解したとき、のび太たちは大きな緊張感と共にゴクリと息を呑んだ。

アポロンが再び戦闘を開始する可能性がある今、「ひみつ道具が効かない」とは口が裂けても言えない。加えて安全ガスも効かないこの状況は、岩でも落ちてきたらそれだけでも大怪我になつてしまう。アポロンに悟られないように、かつ迅速に状況を伝える必要があつたドラえもんがみんなに送れるギリギリのメッセージだった。

「わかったなら早くアポロンさんから離れて!」

次第に大きくなる地震とドラえもんの悲痛な叫び。それら大きな音と揺れに反応したのか、気絶していたアポロンの目がゆっくりと開いていった。

◆第二十六章 『親子』

目を覚ましたアポロンは、右手を額にあて、ふらつきながらゆっくりと立ち上がった。

「アポロンさん！」

「お兄様！」

近付こうとするテラとしずかを制止するように、国王は杖を横に伸ばし、しばし待つように促した。

ドラえもんは、ひみつ道具が一切効かない現状にかなり悲観的になっていたが、同時に一つの希望も持っていた。

（ひみつ道具が使えないのはかなりまずい……でも、それなら遺跡の洗脳装置も治っているはず……お願いだ！ 元のアポロンさんに戻っててくれ！）

焦点が定まらない様子のアポロンは、ドラえもんたちの姿をかすかに認識するとカツと目を見開いた。その形相は闇の心を持ったアポロンそのものだった。

「戻って……ない!？」

「貴様ら……よくもやってくれたな！」

最悪の事態だ、とドラえもんが感じていると、離れた所に落ちていた王家の剣が、あるべき場所へと戻るようにアポロンの右手に吸い込まれていった。

「ハアツ……ハアツ……」

荒々しい呼吸は、アポロンの疲労度が相当なものであることを示していた。しかし、ドラえもんたちにもはや戦える武器はない。その恐怖心はドラえもんたちを少しづつ後退させた。

（あの女だ……あの女の声がもう一人の俺を呼び覚ます……あの女を倒せ！ 倒せ！ 倒せ!!）

本能的にその考えに行きついたアポロンは、己の鋭い視線をしずかに向けた。ドラえもんたちは怯えるしずかを守るように、恐怖心を抱きながらも素早く前に出て盾となるように身を呈して立ちはだかった。

「そうか……雷光は効かないんだったな……だが今度は油断せぬ！
行くぞ!!」

王家の剣を構えて突進するアポロン。目を閉じて成り行きに任せ
るドラえもんたち。その間にミヨイ、タミアアラがタイミングを見計
らっていたかのように奇麗に割り込んできた。

ガ、ガ、キーン!! ……

アポロンは少し押し戻されつつも、二人の攻撃を予測していたのか
少しのダメージを受けることもなく体勢を立て直し、再び攻撃の構え
をとった。

「……ほう、まだ動けたか」

そのアポロンの言葉と同時に、ミヨイとタミアアラの腰が突然落ち、
二人共片膝を付いた。

「フツ。あれだけの長時間、戦闘モードでいればエネルギーも底をつ
くというもの。当然だな」

立ち上がるうにも立ち上がれないその様子を見てアポロンは不敵
な笑みを浮かべた。ミヨイとタミアアラの身体の一部から確認できる
動作ランブなようなものが徐々に消え始め、全てが消灯すると二人は
完全に動かなくなった。

キュ——ーン……

「ミヨイ! タミアアラ!」

「ミヨイさん! タミアアラさん!」

キィ——ン……!!

「グツ!」

しずかが声を発するとアポロンの頭にズキンと激痛が走った。

「あ、頭が……出て……くるんじゃない!!」

「アポロンさん!」

キィ——ン……!!

「やめろ!! 俺の名を呼ぶな!!」

左手で頭を掻きむしるアポロンに対して、この隙を逃さんと国王が
攻撃を仕掛けた。

「アポロンー!!」

国王の王家の杖から雷撃が複数射出された。かろうじて反応し、ジャンプして空中回避に移ったアポロンだったが、予期せぬ方向から飛来してきた雷撃の直撃を受け地面に落とされた。その雷撃はテラの王家の盾により反射されたものだった。

(クツ……また同じ手を食らうとは……)

「終わりじゃ！ アポロンよ!!」

アポロンの着地の瞬間を狙い、一回り大きな雷撃を放つ国王であったが、アポロンはその雷撃を渾身の雷光で押し留めた。

バリバリバリ!!

「ヌウツ!」

「ググツ……うお——っ!!」

アポロンの叫びと共鳴するように雷光は瞬時に増大し、その凄まじい威力で国王の雷撃を貫いた。

「何だ?!」

威力の増大した雷光の直撃を受け、国王は激しく後方に吹き飛ばされた。

「お父様!」

『王様ー!!』

キィ——ン……!!

「グアツ!」

しずかの声のアポロンの脳裏に響く。反射的に左手で頭を抑えるアポロンに、間髪入れずムクが飛び込み攻撃を仕掛けた。

グワオツ!!

「!?」

ムクの飛び込みスタンプ攻撃を咄嗟のステップでかわすアポロン。それでも喰らいつくように、すかさず地面からアツパー気味に噛みつき攻撃を仕掛けるムク。ドラえもんたちは常人離れのスピードで展開されるその戦いを目で追いかけるのが精一杯だった。

ガキーン!

ムクは振り下ろされた王家の剣を啜っていた。戦いはそのまま二人の力勝負へと移行した。力の強さならムクに分があるとドラえも

んたちが思っていると、戦い慣れしているアポロンは余裕の笑みを浮かべた。

「犬如きが！ 俺と対等に戦えると思っているのか？ ただでさえデカイのが止まっててどうする!!」

そう言つて王家の剣をパツと離れたアポロンは、ムクの顔面めがけて回し蹴りを放った。その攻撃に反応したムクは、即座に口から王家の剣を離してバックジャンプし回避した。

「所詮、畜生の頭などそんなものよな」

回し蹴りをフェイクとしていたアポロンは、そのまま空中に放られた王家の剣を手にし、すぐさま空中のムクに向けて雷光を発射した。

バリバリ……!!

ギャウン！ ……

『ムク!!』

雷光の直撃を受け地面に落ちたムクは、国王と同様に大きなダメージを受けていた。

疲労状態で戦闘を続けたアポロンの動きはかなり鈍っていたが、それでもしずかを倒すべく、壁となるドラえもんたちに近づいていた。

「もう止めて！ アポロンさん!!」

キィ——ン！ ……

「グッ！ ……や、やはり、お前だけは何としても消さねばならんようだな」

動けないミヨイとタミアラの間を抜けると、そこに王家の盾を構えたテラが割つて入ってきた。

「お兄様！ おやめください！」

「お前では俺を止めることはできん……どけ！」

「嫌です！」

「アポロンさん！ お願い！ 目を覚まして！」

キィ——ン！ ……

「グッ……その声を止めるー!!」

苦悩の表情を浮かべながらアポロンは両手で王家の剣を地面に突

き刺した。するとアポロンの周囲に円形上の模様が浮かび上がり、地面の下からその円形に沿って筒状の激しい雷が間欠泉のように吹き上がった。

「きやあー!」

『うわーっ!』

ドラえもんたちとテラはその攻撃により足元の地面もろとも吹き飛ばされた。みんなの壁に守られ殆ど被害のないしずかだけが、アポロンの前に取り残される格好となった。

「アポロンさん……」

「ハア……ハア……お前の声は、もう一人の俺を呼ぶ……」

「目を覚まして……お願い!」

キィ——ン!!

「グッ! この……消えろ——!!」

アポロンはしずかに向かって雷を纏わせた王家の剣を斜め上から振り下ろした。

「しずかちゃん!」

「しずかさん!」

「アポロンさ——ん!!」

シユバ——ッ!!

「何?!」

アポロンの名を叫ぶしずかの胸元から眩い光が広がると、瞬く間に周囲一帯を包みこんだ。それはとても優しいぬくもりをその場に居る全員の心に浸透させていった。

「こ、この光は……おお……」

国王は懐かしい光を見るかのように一人感銘を受けていた。その光に包まれたムクは、何かに呼ばれたかのように目を覚まし、ゆっくりと顔を上げた。そしてアポロンは、頭の中を爽やか風が通り過ぎるような清々しい感覚を受け、身体の支配権が本来の自分へと戻っている様を感じていた。

(ぼ、ぼくは一体……!?)

その光はアポロンを正気に戻した。ゆつくりと時が流れるような

不思議な感覚の中、広がっていく眩い光の中心に薄っすらと母親の像が浮かび上がった。

(言ったでしょ？ きつとあなたを救ってくれるって)

その像を見たアポロンの心は次第に温かさで満たされていった。自分が元に戻ったと実感したアポロンは、今まさにしずかに振り下ろしている己の剣の軌道を強引に反らし、左手方向に勢いよく放り投げた。

「クッー」

ビュオツ！

飛ばされた王家の剣は調査船の側面に突き刺さり、そこから激しい炎が吹き出した。次第に炎に包まれていく調査船は、もはや航行は不可能と思えるような姿へと徐々に変貌していった。

「しずかさん……大丈夫……ですか？」

「？ ……アポロン……さん？」

「良かった……」

しずかの無事な姿を見るや否や、アポロンは身体力が抜けその場に片膝を付いた。

全員何が起きたのか理解できてはいなかったが、アポロンが自ら途中で攻撃を止めたことと、今までアポロンを覆っていた負のオーラを感じなくなったことから、元の優しいアポロンに戻ったのではないかと希望を募らせた。

「アポロンさん！ しっかりしてー！」

「だ、大丈夫です。それよりも……!?!」

ドド——ン……!!

しずかに向けたアポロンの言葉をかき消すように再び大きな地震が洞窟に響いた。激しい地面の揺れを感じると共に、悲鳴をあげるように天井に大きな亀裂が走った。

ビシッ！

ガラガラッ!!

「危ない!!」

「!?!」

ドド——ン……………

突如しずかとアポロンの居る場所の天井が崩れ落ち、二人は舞い上がる土煙に包まれ見えなくなった。

「しずかちゃん!」

「しずかさん! 兄様!!」

「いかん!」

全員満足に動ける状態ではなかったが、それでも煙が立ち上がったところに急いで集まろうと懸命に身体を動かした。そんな中ただ一人国王だけは、その疲弊しきった身体を急ぎミヨイとタミアアラの方に向けて動かしていた。

「すまぬな二人共……もう少しだけ力を貸してくれ」

動かなくなつた二人を前に国王はそうつぶやくと、二人の首の後ろに手を回しそれぞれのスイッチを押した。

キュイーン……

起動音と共に、ミヨイ、タミアアラの目に火が灯った。

「……国王様。ありがとうございます」

二人は再び命を灯してくれた国王に感謝の意を告げた。

「予備電源のため長くはもたんが……もう少しだけ二人の力を貸してもらいたい」

「何なりとご命令くださいませ」

「うむ。ミヨイよ。急いで脱出艇までの通路の確保を。タミアアラはアポロンを助けてやってくれ」

「アポロン様を? 一体どうなされたのですか?」

「詳しくは省くがアポロンは正気に戻った。ところが直後に天井から岩盤が落ちてきて、おそらく今、その下敷きになっておる。お前の力で助けてやってはくれまいか」

「御意」

「頼みましたよタミアアラ」

「わかっている。ミヨイもな」

「ええ。では!」

言うが早いかミヨイは素早く脱出艇の方に向かって行った。タミ

アラモドラえもんたちの声がする煙の中心に急ぎ向かった。

「アポロンさん!! しっかりして!!」

「お兄様! 目を覚まして!」

『せーのっ! うーん……』

「くっそっ! ビクとも……しな……い!」

煙の中心には必死にアポロンに声をかけるしずかとテラ、そして落ちてきた岩盤を懸命にどかさうとするドラえもんたちがいた。しかしひみつ道具が使えない今、彼らは岩盤一つ動かせない只の小学生に過ぎなかった。

最初はアポロンを攻撃しようとした敵意むき出しだったムクも、テラからのお願いにより懸命に岩盤をどけるために鼻先を地面につけ、頭を岩盤の下に滑り込ませようと必死だった。

「くっそ——!!」

ジャイアンが悔しがりながらも重い岩盤を何とか持ち上げようと踏ん張った時、突然岩盤の重さが感じられなくなった。

「なんだ?」

そのままめくり上がった岩盤はジャイアンたちの横に投げ捨てられると、地面に当たって複数の岩に分断された。

「みなさま、ご無事で何よりです」

『タミアラさん!』

頼れる助っ人を目の当たりにしたドラえもんたちの心に安堵感が広がった。

「はっ! アポロンさん!!」

「お兄様!」

『アポロンさん!』

しずかはうつ伏せ状態のアポロンの身体を優しく抱きかかえ、ゆっくりと仰向けに変えた。

「しっかりして! アポロンさん! 私を助けるために……」

アポロンの顔を覗き込むしずかの目から涙が溢れ出た。その涙はしずかの頬を伝って落ち、アポロンの頬へと運ばれていった。

「……ん」

「アポロンさん!!」

「兄様!!」

「アポロン様」

アポロンは目以外の部分はろくに動かすことができない状態だった。みんなの声を聞き徐々に状況を把握し始めたアポロンは、涙を流すしずかの方に目をやった。

「しずかさん……無事でしたか……良かった……」

「ごめんなさい……私のために……本当に……ごめん……なさい……」

泣きじやくるしずかを見てアポロンは少し悲しい顔になった。

(申し訳ない気持ちなのは……ぼくの方なのに……)

「……すみません……しずか……さん」

アポロンは声を絞り出しながら、震えた右手を少しづつしずかの顔に近づけていった。もう王家の剣も握れないであろうその弱々しい指でしずかの頬の涙をゆつくりと拭うのだった。

「兄様……」

「テラ……すまなかった……弱い兄を……許してくれ……」

「気をしっかりもってください! ……きつと……きつと良くなりますから!」

「そうですよ、アポロンさん!」

「気合入れろ! 兄貴だろうが!」

ジャイアンの喝のこもった言葉を聞き、アポロンはまぶたを閉じ薄っすらと笑った。

「ドラちゃん! ドラちゃんなら何とかできるでしょ?」

「しずかちゃん……」

「前だって……ペロを助けてくれたじゃない! 今回だって!」

「ごめん……ぼくにも、できないことはあるんだ……」

「そんな!」

「それに今は……道具も使えない……なんの力にもなれないんだ……ごめん……」

「ドラちゃん……お願い……お願いよ……ドラちゃん……」

ドラえもんの両肩を掴み泣き崩れるしずかをみんなはただ見守る

しかなかった。命の灯火が消えかかっているアポロンの元に、疲弊した国王がようやく到着した。テラに場所を譲られた国王は、やや険しい顔をしてアポロンを見下ろし、そのままゆっくりとその場に屈んだ。

「父上……申し訳ありません」

「……レムリアの謀略を見抜けなかったワシも同罪じゃ。お前を責める資格などない」

「お父様……兄さん……」

「私のせいで……ムー一族が……」

薄っすらと涙を流しながら後悔の念を発したアポロンを見つめながら、国王はその言を優しく否定した。

「滅びはせん」

その柔らかい物言いを聞いたアポロンは、弱々しくも閉じたまぶたをゆっくりと開き、懸命に国王の方へと目を向けた。

「確かに国は滅びるだろうが……ムー一族は滅びはせぬよ。アポロン……今のお前ならきつと大丈夫じゃ」

アポロンを始め、テラやドラえもんたちも、国王の言っている意味がよくわからなかった。なぜ絶命の危機におかれている今のアポロンに期待を寄せるのか。周りがそんな疑問を抱いている中、国王はそつと右手をアポロンの胸の上に置き、皆に言い聞かせるように語り始めた。

「しずかくんだったかな。君の持つ、誰かの助けになりたい、という気持ちとはとても素晴らしいものだ。だからこそ、最善を尽くして救えなかったとしても、それは決して悪ではない。だから自分を攻めるなんてことは絶対にしないほしい」

しずかは泣きじやくりながら国王の言葉を聞いていた。

「きみのアポロンを救いたいという想いがあのペンダントを発動させたのだ。おかげでアポロンはこうして戻ってくる事ができた。それは君にしかできなかったことじゃ。本当に……ありがとう」

そう言い終えると国王は手のひらをアポロンの胸に押し付けるように圧をかけた。すると薬指の指輪が突然眩い光を発し、二人の身体

が光りだした。

『うわっ!!』

「お父様!? 兄さん!」

ドクンツ!!

周囲にも聞こえるほどの大きな心臓の音と共にアポロンの身体が激しく弾んだ。しばらくしてその光は徐々に消えていき、何事も無かったように場は静まった。

「…………!? これは!?!」

そう言うとアポロンは素早く上半身を起こした。しかし身体にダメージは残っているらしく、無理に身体を動かした反動で激痛が走り、すぐに表情が歪んだ。

「兄さん!!」

『アポロンさん!』

「…………ぼくは大丈夫だ…………しかし、これは一体?」

「きつと王様の力です! 王様が手を置いたらアポロンさんが回復したんです!」

「スゴイです! 王様!!」

「父上が?!?! 父上!!」

アポロンの復活劇の喜びに浸っていた一同は、その叫びを聞き一斉に国王の方を振り返った。国王はうつつ向いた姿勢で膝をついたままだった。アポロンが手を差し出し肩に触れようとすると、身体がゆっくりと傾き始め、さっきまでアポロンが横たわっていた場所に入れ替わるようにして倒れこんだ。

「父上!!」

「お父様!!」

『王様ーっ!!』

場はアポロンが復活し、その入れ替わりで国王が瀕死になるという急展開となった。ドラえもんたちが動揺している中、タミアラは冷静にその場にしゃがみ、国王を仰向けにすると上半身を優しく浅い角度で起こした。

「…………無事か…………アポロンよ…………」

「父上！ これは一体!?!」

「フフ……お前ならその程度の傷、何とかなるじやろう……どうだ？ 他人に与えた傷は痛かろう?」

「え?」

「この宝具はな……ウツ！ 互いの身体の状態を……入れ替えるというものじゃ」

「!?!」

「そんな!?! お父様!」

『王様!?!』

みんなは国王のその言葉の意味をすぐに理解した。しずかはすぐに国王の指輪を確認したが、使い切りの道具のためか指輪は砕けて地面に落ちていた。指輪はもう使えないと悟ったしずかは、国王の顔を見てまた涙を流すのだった。

「王……様……」

「ふふ。言っただじやろう? ……気に病むことはない、と。国王として……いや……父親として……すべき事をしたまでじゃ……」

そうしずかをいたわった国王は、軽くむせながらもアポロンに目をやり話しを続けた。

「……しかし、お前もペンダントに救われるとは……親子じやお……」

「え?」

「昔……ワシも母さんに救われた……もつとも、お前ほどの騒ぎではなかったがな……」

「父上……」

「……アポロンよ、これから成すべきこと……わかつておるな?」

「……はい」

「この星の未来には、このように素晴らしく優しい子供たちが生まれる。それを知っているお前たちならきつと、この時代の民とも……仲間良くやっていけるじやろうて」

「……はい……」

「テラは……いるか?」

「はい……(こ)におります」

そこには複雑な心境にありながらも、涙が流れ出さぬように懸命に我慢するテラの姿があった。ゆっくりと差し出された国王の震える手に触れるようにテラが顔を近づけると、そのしわの多い大きな手はぎこちない動きで頬を撫でるのだった。

「アポロンのこと、ムー一族のこと……頼んだぞ」

「……はい……お父様……」

我慢の限界を迎え溢れんばかりの涙をこぼすテラを見て、国王はヨシヨシと頭に手をやり優しく微笑みかけた。

「……みんなも聞いて欲しい……知識とは科学とは……幸も不幸も呼び込む諸刃の剣じゃ。……だからこそ……間違った方向に使ってはならんのじゃ……ゴホツゴホツ！」

「お父様!!」

「父上！」

『王様!!』

「この指輪にしても……つい逆の使い方を思い付いてしまう……それが人間の弱さであり危うさでもあるのじゃ……それを忘れないでほしい……」

逆の使い方にならなくて良かった、と国王は言った。それは国王が自ら致命傷となるダメージをわざと負い、指輪により外傷チェンジを行うことを意味していた。そしてその使い方は、労せずして相手を倒す非情な手段であった。

人を救うこともできれば殺めることもできる。このように便利と思える道具一つとつてみても得られる結果は諸刃の剣なのだ、と国王はドラえもんたちに伝えた。

想いを告げた国王は、タミアラに預けている背中の力を抜き、まぶたを閉じてゆっくりと天井を見上げた。

「……未来の子供たちよ……よく見、そして感じてほしい。科学力を持ったムーの行く末を……。そして願わくば、君たち未来人が我々と同じ過ちを犯さんことを……切に願う……」

その言葉を最後に国王は息を引き取った。テラとしずかはその場

に泣き崩れ、ドラえもんたちも涙をこらえることはできなかつた。アポロンだけが涙を流しつつも、溢れ出てしまう感情を必死に理性で抑え込んでいた。

◆第二十七章 『師弟』

ビシッ!

ガラガラ!

ズズズ……

みんなが重い悲しみに囚われている中、容赦なく島の崩壊が進み始めた。天井のひび割れがかなりの範囲に広がり、いつ崩れ始めてもおかしくない雰囲気は洞窟内に漂っていた。

「みなさま! 急いで脱出を!」

ミヨイは、ドラえもんたちが冷静な判断ができない状況とみると、喝を入れるべくこの場の全員に強く言い放った。その言葉にいち早くテラが反応した。

「お父様をこのままにはできないわ! こんな……ここに置いていくなんて……」

そう言うのとテラは横たわる国王の胸にうつ向き、かすかに残る父親の温もりを抱くように泣き伏せた。ミヨイはその横にゆつくりとしゃがみテラを説得するのだった。

「テラ様……お気持ちは分かりますが、どうかお聞き入れください」

「いやよ!」

「国王様の願いは、アポロン様、テラ様にムーの未来を紡いでもらうことです。どうか……」

そこまでミヨイが言いかけると、テラはバツと身体を起こし、ミヨイの胸に顔をうずめるように飛び込んだ。

「……お父様は……このままなの?」

「テラ様……」

「ごめんなさい……わがままなことを言ってるのはわかっているの……」

「ただ……これではあんまりにも……」

ミヨイはテラが懸命に感情を抑えようとしている姿を見て微笑み、大丈夫です、と伝えながらテラの両肩に手をかけ、そっと身体を離れた。

「ご安心ください。みなさまが無事に脱出された後に、私、ミヨイとタ

ミアラで必ずや国王様を丁重に埋葬致します」

「脱出の後つて？ ……ミヨイ！ あなたはどうするの!？」

質問と同時にテラの目に、ミヨイの左胸上にある赤いランプが飛び込んできた。それはテラが今までに見たことのない色をしており、いつ消えてもおかしくないほど弱々しく揺らぐように点灯していた。

テラは動揺した。そしてすぐにタミアラにも目を向けた。予想はしていたが、やはりタミアラの胸のランプもミヨイと同じ色をしていた。テラの悲壮な瞳に見つめられているのに気付いたタミアラは、そつと目を閉じ軽く頭を下げた。

「そんな……急いでエネルギーを！」

懸命に何とかしようとするテラに、ミヨイは肩においた手の力を少し強め、ゆつくりと首を横に振った。

「すでに遺跡は審判を下し、島の殆どが崩壊しております。この星で私たちがエネルギーを補給できる場所はもうありません」

「……いや……」

「テラ様。どうか私たちの最後のご奉公をお受け入れください。お願いします」

「……いや……」

ドドーンツ!!

ドドドド……ドドドド……

脱出を急がせるように崩壊の音が洞窟内に響き渡る。明らかに時間のない状況になったと判断したミヨイは、テラからの返事を待たず、国王の願いを叶えるために行動を開始した。

「さあ、みなさま！ こちらです。急いでください！」

父親との別れをまだ受け入れられていないうちに、ミヨイとタミアラの行く末までも知り、茫然とするテラにアポロンが優しく声をかけた。

「行こう。ぼくたち兄妹が生き延びることが父上の供養となる。父上がかくれたこの命、決して無駄にはしない。一緒に生きよう！ テラ！」

「……兄様……」

焦点の定まらないテラは、激しい起伏の感情に流されるまま情報を整理することもできず、ただその場で呆然としていた。

そんなテラにジャイアンは何か声をかけてやりたかったが、どうにも良い言葉を見つけられずに固まっていた。それはドラえもんたちも同じだった。ムクも近寄り難い雰囲気を感じてか、悲しそうな顔をしてお座りの姿勢を保ちながらテラを見つめていた。

ドドドド……ガガガガ!!

崩壊もかなり進行し、いよいよこの洞窟内も危険と感じさせるほどの轟音を聞いたしずかは、キツと鋭い眼つきをしてテラの前に走り寄った。ややうつむき加減のテラの前に立つや否や両手で二の腕を掴み、その身体を激しく前後に揺らした。

「しつかりして！ 脱出するのよテラ！」

「……しずかさん……わたし……」

パンツ！

『!?!』

迷ったりしている時間など既にないであろうこの危機的状況の中、なおもまだ生気の戻らないテラの頬をしずかは思いつきり引っぱっていた。その展開にドラえもんたちは驚きのあまり一瞬身体がピシッと固まった。

「しずかさん……」

「文句なら後で聞いわ。あたしはアポロンさんと王様に救ってもらったこの命を無駄にしたくないの！」

「……」

「そして……王様の願いであるあなたも失いたくないの！ わかった？」

しずかは目を潤ませながら有無を言わずテラの腕を強引に引っ張り、脱出口の方へと歩き出した。やっと動き出した場の流れに、ドラえもんたちも慌てて付いていく格好となった。

（しずかさま。あなたは本当に王妃様によく似ておられる……テラ様への激励、感謝致します）

先頭でみんなを先導しているミヨイは、しずかに対して感謝の意を

心で述べた。

「ほら！ しつかり歩く！ あなたはまだ自分で歩けるだけの力があるでしょ！」

「は、はい……」

強引な手引きではあつたが、そのおかげでテラの瞳に生氣が戻りつつあつた。テラは強く腕を引っ張られながら後方に横たわる国王の方に顔を向け、最後の別れを心で呟くのだった。

(さようなら……お父様……)

ドドド……ズズズ……

崩壊の音が止む気配はなく、皆の不安を煽るかのように地鳴りの重低音が身体の芯に響いていた。

アポロンはタミアラに肩を貸してもらいながら移動していた。そのため移動の速度は遅く、テラたちの後ろに懸命につけるのが精一杯だった。その後にはドラえもんたちが殿を務めるように周囲を警戒しながら続いていた。

ドラえもんたちの移動速度もアポロンと同様に遅いものだったが、その理由は殿という役割によるものよりかは、むしろひみつ道具の一切が使えない恐怖による萎縮のためというのが正直なところだった。

「タミアラ……ぼくのせい……すまない……」

「何を謝ることがありますでしょうか。私たちは王族を守ることが使命でございます。例えその過程がどのようなものであろうと、アポロン様とテラ様さえ無事に脱出できるのであれば本望でございます」

「タミアラ……」

「さあ、もう少しでございます。急ぎましょう」

脱出艇のある秘密の船着き場に続く通路の入り口にミヨイが立っていた。その通路の壁や天井は岩肌ではなく金属でできているため、その通路の中に到達できれば、ひとまずすぐに崩れるような心配は無さそうだった。

「みなさまー！ 早く通路の中へー！」

ミヨイのかけ声と共に最初にしずかとテラが中に入り、続いて追いかけるようにムクが飛び込んだ。ムクはススッとテラの元に歩み寄

り、元氣付けるようにテラの頬を舐めた。

「ありがとう、ムク。心配かけてごめんね」

テラの気持ちが大分落ち着いた頃、アポロンがタミアラに支えられながら通路に辿り着いた。

「アポロンさん！」

「しずか様、アポロン様を頼みます」

タミアラはしすかにアポロンを預けると、後続のドラえもんたちを迎え入れるために外に出た。

「しずかさん……さつきはテラのこと、ありがとう」

「え？ さつき……!?」

アポロンのお礼の意味を理解ししずかは、感情が高ぶった自分の行動を思い出し赤面した。

テラは自分の心の弱さがみんなに迷惑をかけてしまったこと、さらには辛い行動をとらせてしまったしずかに深々と頭を下げた。

「しずかさん。わたしのせいでご迷惑をおかけしてすみませんでした」

「や、やめてよ！ あたし……その……引っぱたいちやったのに……」

最後の方はゴニョゴニョとバツの悪そうに答えたしずかにテラは小さく顔を横に振って答えた。

「そうしてもらえたおかげで、わたしは今こうしてここに立っています。ありがとうございます、しずかさん」

自分より遥かに辛い心境にあるであろうテラから許しの言葉を聞いたしずかは、その寛容さに胸を打たれ思わず抱きついた。

「しずかさん……っ」

「ごめんなさい……テラの方がいっぱい辛いはずなのに……叩いたりして……ごめんなさい……」

「……ありがとう……しずかさん」

抱き合う二人を囲うように身体を廻らせたムクは、二人の頬を優しく舐め始めた。その様子を伺っていたアポロンの口元は自然と緩んでいった。

ドゴーン!!

ビシビシッ!!

明らかに今までとは違う激しく岩が裂ける音が大音量で鳴り響いた。大きなひび割れが天井を走り、一気にドラえもんたちを追い抜いて脱出通路の上に到達した。

「みなさまー！ 早くこちらへ！」

タミアラの叫びを聞き、最後の力を振り絞ってドラえもん、ジャイアン、スネオ、のび太の四人は通路に向かって走りに入った。

「あともう少しよ！」

「みんな頑張つて！」

しずかとテラの呼びかけに答えるようにドラえもんたちは走るペースを上げた。しかし、タケコプターが使えないためにその運動神経の低さが露呈したのび太だけが、ふらふらと身体を揺らしながら懸命に進んでいた。

「みなさまー！ 早く中へ！」

タミアラの掛け声を聞き、ドラえもん、ジャイアン、スネオが次々と通路に滑り込んだ。のび太もみんなに続くべく飛び込もうとしたが、足がもつれてその場でうつ伏せに転んでしまった。

「のび太ー！ 大丈夫か!？」

「いてて……だ、大丈夫か……」

ドドーン!!

その時、倒れたのび太の真上にある通路入り口の天井が轟音と共に崩れ落ちてきた。

「うわあ——っ!？」

「のび太くん！」

「のび太さん！」

ジャイアンは急いでのび太に向かって手を伸ばした。のび太は上から迫りくる岩盤を見た恐怖から、伏せたまま必死に頭を抱えた。

ドドーン……………

天井が落ちたことにより生じた土煙のせいで周囲の視界が一時的に悪くなった。そんな中、のび太は自分の無事を確認し不思議に思うのだった。

「……あれ？ ぼく生きてる？ 良かった〜」

そう言つて立ち上がろうと上半身を起こした途端、すぐに後頭部が何かにぶつかり、再びうつ伏せでダウンした。

「痛っ！ なんて天井がこんなに低くいんだよ、も〜」

のび太が後頭部を抑えながら見上げようとすると突然誰かに腕を引っ張られた。

「え!? いたたたっ!」

身体が地面を擦る痛さでのび太は思わず声を上げた。ヘッドスライディングのような格好で岩盤の下から引っ張り出されたのび太の目の前に居たのは、腕を引いてくれていたジャイアンだった。

「ジャイアン！ ありがとう。助かったよ〜」

「……」

「どうしたの?」

ジャイアンは何も言わなかった。後ろのドラえもんたちも何かに驚くような表情で全員固まっていた。事態がつかめずキョトンと座っているのび太の横を、悲壮な表情のテラが急いで通り過ぎていった。

「ミヨイ！ タミアラ!」

のび太は嫌な考えが頭をよぎった。見たくはないという思いを懸命に振り切り、のび太は自分が居た場所を確認するため振り返った。
「!?」

そこには落ちてきた天井と思われる大きな岩盤を支えるミヨイとタミアラの姿があった。二人共膝より下は折れて破損していた。そのため片腕を地面に付き三脚のような体勢を取り強固な土台を作っていた。

落ちてきた岩盤は、残った片腕と首、そして肩を使って受け止めていた。身体の随所から火花が弾け飛び、関節のきしむ音が鈍く小さく鳴っていた。

「ミヨイさん！ タミアラさん!」

「……無事でしたか、のび太様……何よりです」

「ぼくが……ぼくがドジなばかりに……」

「これが……わたしたちの使命でございます……お気にやむことはありませぬ……」

「テラ様を……アポロン様を……どうか……頼みます」

別れが来るとは覚悟していたが、このような酷な状況になるとは考えてもいなかったテラは、少し開いた口を小刻みに揺らし、声が微塵も出ないほどに悲しみ泣いていた。

アポロンはそんなテラの頭を撫でてから、落ち込むのび太の肩に手をのせた。のび太に何かを告げることはなく、ただ優しく肩を掴んだあと、アポロンは神妙な顔つきで泣いているテラの手を引き二人の前へと歩いていった。

薄れゆく視界の中にアポロンとテラの姿を見たミヨイとタミアラは、本当に嬉しそうな笑顔へと表情を変えた。

「アポロン様、テラ様……ご無事で何よりです」

「ミヨイ、タミアラ。これまでの忠義、大儀であつた。礼を言う」

「アポロン様……勿体なきお言葉」

「目に余る光栄でございます」

アポロンはやや俯きながら奥歯を強く噛み締め、涙を溜めながら続けた。

「そしてこれは……一弟子として……二人の師範に敬意を込めて……」

アポロンは目を見開き、ミヨイとタミアラの最後の勇姿を焼き付けた後、その場で深々とお辞儀をした。

「不出来な弟子を！……ぼくを止めてくれて……救ってくれて……ありがとうございますございました！」

嗚咽混じりの言葉を発しアポロンの身は震えた。とめどなく流れる涙と共に深々と頭を下げるアポロンを見て二人は安堵した。

「本当に強くなられましたなあ……ぼっちゃん」

これが最後だということを確認たくなかったテラも、アポロンに続いてお辞儀をしながら自分の想いを二人に告げた。

「ミヨイ、タミアラ……今まで一緒に居てくれて……育ててくれて……あり……が……ごう……」

「今日まで……ミヨイはとても楽しゆうございました……テラ様」

「テラ様。国王様の……ムーの意思を……頼みます」

二人がそう言い終えるとミヨイは片目をキツと細めた。その瞬間、秘密の通路の扉が素早く閉じ、ミヨイたちへと繋がる道が完全に遮断された。僅かな時間をおいて、二人が抱えていた岩盤が地面に着いたであろう大きな振動が、壁や地面を通してみんなに伝わってきた。

ズズウウン……。

「ミヨイ！ タミアアラー！」

アポロンは泣いた。テラもアポロンの腕にしがみつき一緒に泣いた。

のび太たちもミヨイ、タミアアラに対して敬意と感謝を込め、大きな声で泣くのだった。

◆第二十八章 『脱出』

無常にも閉ざされた目の前の扉は何も語ることはない。そんなことは誰もが知っていたが、みんなミヨイとタミアラとの突然の別れに泣き崩れていた。

「ぼくは……何の役にも立てなかった！ 道具さえ……道具さえ使えれば……」

「ぼくのせいで……ぼくがこの世界に……来たいなんて言つたから！」

「あたしだって！ 助けられてばかりでこんな……何も……うつうつ……」

「……」

みんなは自分を責めた。そうすることで少しでも心の苦痛を和やらげたかった。結果どうにもならなくても、己を責めて泣きでもしなければ苦しくてどうにかなってしまいたいそうだった。

そんな沈んだ空気の中、スネオは悲しみを抱きながらもみんなに訴えかけるように口を開いた。

「……あのさあ……のび太にドラえもん……しずかちゃんも……」

スネオの呼びかけに応じるように三人はくしゃくしゃになった顔を上げた。

「悲しんでばかりいてもしょうがないし……何よりタラレバなんて、言うだけ虚しくなるだけだと思うよ」

「わかつてるよ……けど……」

「それに……ぼくたちよりもずっと辛くて悲しいのは……その二人だよ」

そう言つてスネオはアポロンとテラの方に視線を向けた。

「スネオさん……」

「それこそ自分が許せないなんて……アポロンさんが一番感じてると思う」

「スネオくん……」

「それでも立ち上がって一族の意思を継いで前に進もうとして……」

多分それってすごいことだと思う。少なくともぼくには……絶対にできない」

スネオの意見を後押しするようにジャイアンも前向きになるような発言をみんなに投げかけた。

「だな。王様も言ってたじゃねえか。「自分を攻めるな」って」

「……そうだったね」

「うん……」

「俺はバカだけどよ……今起きたことの全てを呑み込んで前に進むということがどれだけシンドイことかくらいはわかる。でもよ……それでも俺たちは進まなきゃいけないじゃねえかな。感謝の気持ちを持ってさ」

「たけしさん……」

ジャイアンとスネオに慰められるような形になり、ドラえもんたちは落ち着きを取り戻した。そのやり取りを聞いていたアポロンは、かすかな笑みを浮かべ二人に歩み寄っていった。

「スネオくん……ありがとう。君の言葉でぼくの心がどれだけ救われたか……」

「い、いえ、そんな……」

「たけしくん。君にはリーダーの資質があるんだな……敬服するよ」

「え!?! おれが……ですか?」

「ハハ、そうだよ」

自覚のないジャイアンの肩を笑いながら軽く叩いたアポロンは、まだ座り込み泣きじゃくっているテラの元に戻り手を差し出した。

「テラ……行こう外界へ」

「兄さん……」

「約束する。ぼくは絶対に居なくなったりはしない。ムーの意思を継ぎ、真のムーの願いを果たすと誓うよ。だから手伝ってくれ」

「兄さん!」

高ぶる感情のままテラはアポロンの首元に抱きついた。テラの流す涙には悲しさだけでなく、以前から心待ちにしていた嬉しさも含まれていた。

ドラえもんたちは失意の底から立ち上がろうとするその健気な兄妹の姿に励まされた。二人の力になりたい。そう心から強く思い、その願いを果たすべく島からの脱出へと気持ちを切り替えるのだった。

「そうと決まれば、早く脱出しなくちゃな！」

「うん。隔離されてるとは言え、いずれここも沈むだろうからね」

「そうね」

「脱出艇はこの先かな？」

「はい」

「あれ？ スネオくんは？」

「さつき奥に向かって走って行ったぜ」

「さすがはスネオくん……ぼくたちも急ごう！」

通路の造りはかなり近代的なおかげで島の崩壊に耐えている感じではあったが、それでも徐々に強まる激しい揺れの前に壁が歪み、塵が落ち始めて来ていた。

ドラえもんたちが急いで通路を駆け抜けるとそこは開けた空洞になつており、小さな生け簀のようなものがあつた。生け簀には現代でよく見るクルーザーに似た外観の脱出艇が浮かんでおり、甲板にはスネオが何かを探すかのように辺りを見回していた。

地鳴りが少しおさまったタイミングでみんなは急いで甲板に上がり、スネオの元へと集まつた。

「スネオくん！ どう？ 動かせそう？」

「うーん、それがね……」

先に脱出艇に乗り込んでいたスネオは何やら難解そうな顔をして答えた。

「見た目はうちのクルーザータイプに似てるんだけど、その……エンジンがかからない……というか、どうやって起動するんだろう、これ」

『ええ!?!』
「いくら近代的とはいえ起動方法や操縦方法までも一緒とは限らないか……うーん」

「そんなあ……」

「ぼくの道具も使えないし……困ったな……」

自分たちの命がかかっているため絶対に諦めるわけにはいかないドラえもんたちは、何とかならないかと必死に考えた。すると何かを思い出したようにアポロンは船首に向かって歩き出した。

「ぼくがやりましょう」

「え!？」

「アポロンさん、動かし方わかるんですか？」

「はい。おそらくですが……」

そう言っアポロンは目を閉じ、軽く右手を前に出して集中し始めた。のび太たちが見守る中、アポロンの右手に何か棒状の形が現れ始め、その形状があらわになる瞬間、強く眩い光が放たれた。

『うわっ!』

「きやあっ!」

「なんだ!？」

光が収まりみんながアポロンの右手を見ると、そこにはみんながよく知っているものが当然のように納められていた。

『王家の剣!!』

「はい。正装を身に纏っていれば、離れていても意識を集中することで呼ぶことができますのです。距離が近ければ軽い念だけで手元に呼ぶことができます」

「そうだったんだ……」

「でも、王家の剣をどうするの?」

「このくぼみに差し込むのです」

アポロンの言うとおり船首の床には低い台座のようなものがあり、その中央には何かを指すための穴が開いていた。王家の剣を両の手で逆さに握ったアポロンは、その穴に向かっておもむろに剣を突き刺した。

ゴオン……ゴゴゴ……キュイン……。

台座に刺された王家の剣は、ぼんやりと光り輝くと、その光が船の中へと流れていくのが見えた。しばらくして脱出艇の起動音らしきものが聞こえ、その音は徐々に静かになっていった。

「……止まった?」

「みたいだね」

「ダメかあ……」

「いえ、無事に起動はできたようです」

後方の操舵室を指差しアポロンが答えるとドラえもんたちは一斉に振り返った。操舵室を見ると、中にあるたくさんパネルが様々な色の光を発していた。

「電気だ！ 遺跡と同じだ！」

久しぶりの電気に感動したのび太たちは操舵室に走り込んでいった。操舵室の下にはキャビンのような部屋があり、構造も現代のクルーザーに近いものだった。

「オツケー！ これなら操縦できそうだ」

操舵ハンドルとレバーを掴み、スネオが自身ありげに答えた。

「それではスネオくん。操縦をお願いできますか？」

「任せてよ！」

アポロンから直々のお願いに気を良くしたスネオは、素早く、そして途中からはゆっくりとレバーを倒し始めた。

シユイイ——ン……

スクリユーが回り始め船がゆっくりと前進し始めると、みんなから歓声が上がった。

「やったあ！」

「スネオくん！ スゴイ！」

「ほんとね」

「やるじゃねえかスネオ！」

「いやあ、それほどでもあるけど」

みんなの歓喜の中、アポロンは船首に立ち何かを待っていた。甲板にいるテラとせずかはムクとじゃれ合い喜びながらも、アポロンのその背中が気になった。

「お兄様？ どうかなさったのですか？」

「ん？ ああ……最後の仕事が残っているからね」

アポロンは顔だけを後ろにいるテラに向け、警戒態勢を維持したまま答えた。

「最後の？」

「ムクだったかな？ すまないがテラとせずかさんを頼むよ」

グルル……

言われなくても、と言うようにムクは警戒するように返事をした。いくらテラの大事な人とはいえ、さつきまで激しい戦闘を繰り広げた相手を前にいきなり心を許すのはムクにとっていささか難しかった。そんなムクをテラはヨシヨシ、と喉元を優しくさすりながらなだめた。無理もないか、とアポロンは少し寂しげな表情になった。

ドゴ——ンツ!!

ゴゴゴ……ゴゴゴゴ!!

『うわっ!』

外へ通じる水路に振動が生じた。その衝撃で天井から複数の岩がドラえもんたちの船に向かって落ちてきた。

「スネオくん! スピードを上げて!!」

アポロンからの指示を受け、スネオはレバーを奥へと押し込んだ。船はさらに加速し、何とか岩の雨から逃れることができた。

「さすがスネオくん!」

「け、結構このスピードは怖いんだけどね……は、ははは」

お世辞にも広いとは言えない水路の中をほぼ最高速度で船を操縦しているスネオには、とてもじゃないが調子に乗っている余裕は微塵もなかった。

「出口だ!」

「やった!」

「もう少し!!」

みんなが歓喜の声を上げ、出口があと数十メートルの位置まで到達した時、再び大きな地震が起きた。

ドド——ーン!!

その衝撃で出口の天井が崩れ始めた。今にも落ちそうな岩盤は、目の前の出口を塞ぐに十分な大きさだった。あれが落ちたら助からない。ドラえもんたちもそれだけは容易に想像できた。

「くっ!……ここまで来て……」

「間に合え——っ!!」

のび太の叫びも虚しく岩盤は天井から離れ、出口を塞ぐべくその落下を開始した。

「ダメだ——っ!」

ドラえもんが悲痛な諦めの言葉を叫んだとき、意識を集中していたアポロンが王家の剣を構えた。その時、幻覚なのかその真偽はわからないが、アポロンの眼には空中に浮かぶ国王の姿がハッキリと見えた。

「父上!？」

(科学とは諸刃の剣。その心を忘れるでないぞ)

安心したようににこやかな表情で薄れていく国王の姿に涙を浮かべたアポロンは、目の前の障壁を打ち砕くべく全身全霊を込めて巨大な岩盤めがけて術を放つのだった。

「雷光——っ!」

◆第二十九章 『別れ』

スネオは島から十分程離れたところで脱出艇を停泊させた。みんなは甲板に出て脱出してきた航路を振り返ると、至るところから爆炎を上げているムーの島が目に見え込んできた。

不規則な爆発を起こしながら、ゆっくりと、そして確実に沈んでいく島の姿をみんなは静かに見送った。

各々の心には色んな想いが駆け巡り、誰一人として目の前の光景に對して言葉を発することはなかった。一つの冒険が終わろうとしている。そう実感しながらのび太は船の進路の方にふと氣をやった。

「ん？ あれは!？」

「どうした？ のび太」

「ブイだ！ タイムマシンの入り口があるブイだよ！」

『え!?!』

「どこに?」

「ほら！ あそこー！」

のび太が指差す先には、確かにこの世界に来たときに浮かべたブイの姿があつた。

「なんで？ 島からは結構な距離があつたはずなのに?」

「ブイが流されたとか?」

「そんなことはありえない！」

スネオ、のび太、ドラえもんの三人がいつもの押し問答をしていると、その話を聞いていたアポロンがその謎に関連するかも知れない、と一つの仮説を話してくれた。

「それはたぶん、ムーの島が移動しているからだと思います」

『えー!?!』

この島が浮いていたことはみんな覚えていたが、まさか島そのものが移動しているとは考え及ばず、ドラえもんたちは驚嘆の声をあげた。

「でも、なんで移動なんて?」

「それは、ムーの島が発見されるのを防ぐためだと父からは聞いておりました」

「なるほど……でもそれだと、島から出てしまった場合に戻るのが大変なんじゃ……」

「そうですね。ただ、島から外に出るものには島の航路図が渡されま
す。島は一年周期で同一航路を辿りますので、星の位置などから計算
すれば今どこに位置しているかはわかるのです」

「ふんふん、なるほど」

「？ なんだかさっぱりわからないよ」

「のび太は計算苦手だもんね」

「ちえっ」

『はははは』

スネオに小馬鹿にされたのび太は少しむくれたが、重い場の雰囲気
を変えられたことと、久しぶりにみんなの笑顔が戻ったことで「まあ
いいか」と快く思えた。

「もう必要はないものですが……」

アポロンは船室の中から一枚の羊皮紙を取ってきてのび太たちに
見せた。そこには島の航路が太平洋と思わしき場所に描かれていた。

「へー、結構な距離を移動するんだなあ」

「確かにその方が発見されにくいもんね」

「ん？ 待って！ この形って!？」

スネオの発言にドラえもんたちは今一度、目を凝らして航路を見つ
めた。

「あ!？」

「そう！ ぼくたちの知っているムー大陸の形だよ！」

「ほんとだわ！」

「すげー！ よく気づいたなスネオ！」

「ふんふん、まあね！」

「なるほど。これは島の形ではなく島の航路だったのか。実体が小さ
な島だとするなら跡形もなくなったと思われるわけだ」

ドラえもんは言葉を聞いてアポロンは未来の詳細が理解できた。自分の罪が消えることはないが、結果として歴史の一事実を辿ったのだと思えることが、わずかだが救いに感じた。

「未来にはムーの島はないんですね？」

「あつー！ い、いやその……」

バツが悪そうに答えるドラえもんの頭をのび太は軽く肘でこづいた。

「いえ、いいんです。少し……救われた気がします」

「でも……ぼくたちさえ来なければ……」

自分たちの思いつきが今の結果に繋がってると思ったのび太は罪悪感にかられ、うつむき加減でつぶやいた。

「のび太さん、それは違います」

「え？」

「あなたたちが来てくれたからこそ、ぼくはこうして戻ってこれました。あなたたちがいなければ、ぼくはあのまま鬼神の如く進撃していたことでしょう。その結果、外界は破滅の一途を辿っていたと思います」

「アポロンさん……」

「全ては心の未熟だったぼくにあります。この罪は一生をかけて償っていきます」

「でも、王様は今回の原因はレムリアさんにあったと言っていました。そんなに思いつめなくても……」

のび太の慰めの言葉に対して、アポロンは薄く目を閉じ首を振った。

「みなさんとレムリアとの会話は、意識の奥底にいた私にも聞こえていました。ですが、それでもわたしの犯したことは許されることではありません」

「……」

「島を崩壊させたにもかかわらず、自分は無事に脱出し……無関係な島の民たちを巻き込んで……挙げ句は父を……本当に悔やみきれません……」

手すりにかけてアポロンの手は悔しきで振るえていた。テラは震える兄の手にそつと自分の手を乗せて優しく答えた。

「兄さま。民たちは大丈夫です」

「テラ!? 本当なのか!」

「はい。父上は島の行く末を知っておりました。そのため城を出る時にミヨイに全島民に声明を出すように命じていたのです。近いうちに島は沈む。速やかに島から脱出せよ、と」

「……そうか……父上の先読みは相変わらず冴えていたのか……いや「洞察力」かな?」

「はい!」

父親の話が兄とできたことになのか、それとも普通に兄と会話が出てきていることになのか。真意はわからないが、テラは喜びの感情にかすかな涙をのせて元気に返事をした。

「のび太さんがそうおっしゃっていた、とミヨイから聞きました」

「え!! ぼ、ぼく!」

「のび太くん……いつの間に……」

「し、知らないよ? ホントだよ!」

懸命に否定してみせるのび太にドラえもんはさっきの仕返しとばかりに、ジーツと冷ややかな視線を向けた。

「たしか……」

◇

時は国王が出陣を決めたとき。

王室の扉が開き、中から国王が勇ましく出て来た。のび太、ドラえもん、テラとの話を終え、アポロンの暴走を止めるために出陣を決意する国王の姿がそこにはあった。

「きみたちは早く元の世界に戻った方が良い」

ドラえもんたちにそう告げ、足早に部屋を出た国王は、歩きながら後ろについてくるミヨイに対して顔の向きはそのままに指示を出した。

「ミヨイ、この戦いはワシ一人で赴く。兵は一切不要じゃ。それから兵も含む全島民に対して、大至急、島からの離脱を命ぜよ。この島は

今夜にも海に沈む、とな」

「そんな!? なぜそのような……先の第三の掟が発動すると?」

「まず間違いないだろう」

「承知致しました。ただ一つ。声明を出す前に国王様がそのお考えに至った根拠をお聞かせ願えますか」

「彼だよ」

「彼? のび太様のことですか?」

「うむ。彼はこの島が「沈む」と言った。わしは「消滅する」という情報しか与えていないのに、だ」

「たしかに……」

「ムーの技術であれば空間転移も可能じゃろうし、空から隕石の類が落ちてくるとも考えられる。無論沈むことを考えなかつたわけではない。ただわたしには選択肢が複数あつた。にもかかわらず彼はあの場で迷わず「沈む」と明言した。あれは事実、すなわちムーが滅びる事を知っている人間の発言だとわしは確信した」

「なるほど……そういうことでしたか」

「ミヨイよ。タミアラを修理し急ぎ合流せよ。わし一人では荷が重すぎる相手じゃ」

「承知致しました。それまでどうかご無事で」

「うむ」

◇

「これがわたしがミヨイから聞いた話の全てです」

「あの時点でバレてたのか……」

「さすがにそれはのび太でなくても言っちゃいそうだな」

「ぼくは言ったかどうか覚えてないよ……」

「でも、のび太さんのおかげで全島民に離島勧告を出すことができましたのですから。父に代わりお礼申し上げます。ありがとうございますました」

「ぼくもまた一つ心が救われました。のび太くん、本当にありがとう」

「い、いやあ……失敗したのにお礼を言われるなんて……何か妙な感じだなあ」

『ふふふ』

『あはは』

「あ！ そろそろブイに到着するよ！」

ここ四日程度の事なのに、海に浮かぶブイを見てなぜか懐かしく感じるドラえもんだった。

（今回の冒険はいつもと違い本当に危険がいつぱいだった。そのせいなのか、のび太くんたちは元の世界に帰れることを心の底から本当に喜んでいる。ただ……果たして戻れるのだろうか……）

ドラえもんが一人不安がっているのとブイが小さな音を立てて船底に接触した。と同時に、タイムマシンの入り口が何事もなかったように空間に姿を現した。

「え!?!」

「やった！ タイムマシンだ!?!」

「これで帰れる！ ママー!！」

「良かったわ」

「なんで……?」

喜ぶのび太たちの横で一人戸惑うドラえもん。

「あ！ じゃあ、ひみつ道具も!?!」

さっそうとポケットを覗くとそこには四次元空間が広がっていた。

「ひみつ道具も使えるようになってる！ キャンセラーの効果範囲から出た？ いや違う！ 遺跡そのものが停止したんだ！」

ドラえもんは驚きと興奮で独り言のように話し自己解決に至った。

「は〜……良かった〜……」

ドラえもんはみんなとワントンポーズれたタイミングで安堵し、フニヤフニヤと身体をくねらせその場に座り込んだ。

「どうしたんだよ？ ドラえもん」

「どうもこうもないよ！ 遺跡のキャンセラーが動いていたらタイムマシンだって動かなかったはずなんだ！」

『ええっ!?!』

「だから……動いてくれてホッとしたんだよ……良かった……ほんとに良かった……」

「そんな泣かなくても……」

「だって……道具が使えなかつたら……ぼくは……ただの短足ロボツトなんだ……」

「ドラえもん……」

「みんなをこんな危険な目に合わせてしまつて……本当に……本当に怖かつたんだ……」

「ドラちゃん……泣かないで。いつも助けてもらつてるわ、本当よ」

「そうそう。ぼくたちがここにこうやって居られるのもドラえもんのおかげだよ」

「ううっ！ のび太くくん！」

ドラえもんは泣きながらのび太に抱きついた。

（道具が使えないとわかつたとき、一番怖かつたのはドラえもんだつたんだろうなあ。頑張つてくれてありがとう、ドラえもん）

波に揺られたブイが船をノックするように船底にぶつかり、不規則な間隔で音を鳴らしていた。その音は「そろそろ帰ろう」と別れを惜しむみんなを急かしているようにも聞こえた。

「……では、みなさん。ここでお別れですね」

「……アポロンさん」

「わたしたちはもう大丈夫です。それよりもみなさん、ドラちゃんさんの道具が使える今を逃さないようにしてください」

「……本当はどこかの大陸まで送りたかつただけ……ごめんね、テラ」

「ううん……みなさんのおかげで、優しい兄さんが戻ってきたんです。お礼を言いたいのはわたしの方です」

「でも……悲しいこともたくさんあったから……その……」

「……はい……でも……今のこの状況はムーにとつての必然なんだと、今は思えます」

「テラ……」

「わたしは……兄さんと共に前に進みます。そしてムーの意思をこれからもずっと……お父様の分まで継いで守っていききたいと思います」
「強いんだなあ……テラは」

「強いだなんて……わたしは今、たくさんの強い意志に助けられこうして生きています。お父様、ミヨイ、タミアラ……」

「……うん。そうだね」

「そして……最初に助けてくれたのは、たけしさんでした」
「!？」

ドラえもんたちの後ろで聞いていたジャイアンは突然自分が話題に上がり驚いた。テラの視線に気づいたジャイアンは軽く咳き込み、照れながら視線を反らした。のび太たちはその姿をニヤニヤしながら眺めていた。

「何か言わなくていいの？ ジャイアン？」

ジャイアンの横に立ち軽く肘をあてて意地悪くツツコむスネオ。その頭に例のごとくジャイアンのゲンコツが真上から落とされようとしたその時、しずかが割って入ってきた。

「そうよ、たけしさん！ ここでお別れになるんだから！」

そう言いながらしずかは自分の思いを伝えるためにアポロンに歩み寄っていった。

「しずかさん……？」

「アポロンさん、これ……お返します」

しずかはアポロンからもらったペンダントを首から丁寧に外しアポロンに手渡した。

「お気持ち……とても嬉しかったです。ありがとうございます」

「こちらこそ……ぼくを救って頂き感謝の言葉もあります。本当にありがとうございます」

しずかはその言葉に笑顔で返した。

「そのペンダントは、これから出会う本当に相応しい女性に渡してください」

(本当に相応しい……か)

アポロンは少し寂しい顔つきになった。しずかに心から伝えたい言葉があったが、大切な人を変に惑わせたくない気持ちから簡潔に言葉をまとめて答えるにとどめた。

「……わかりました。寂しいですが、どうかお元気で」

「アポロンさんも。きっと素敵な方が現れます。あたし、そう思うんですー!」

「ありがとう。しずかさん」

二人は向き合って別れの握手を交わし優しく微笑みあった。互いの微笑みの意味は大きく異なっていたが、幸せな時間を共有できたという点に関しては二人共同じ想いだった。

「……ドラえもん、ソノウソホントを出してくれ」

「ジャイアン? う、うん。……はい」

「すまねえ」

ドラえもんから借りたソノウソホントを口に装着したジャイアンは、テラたちの前まで歩いていき真剣な眼差しを二人に向けた。

「テラ、これは?」

「ソノウソホントっていうドラちゃんさんの道具よ。言ったことの反対のことがホントになるんだって」

「そんな道具が……すごいんだな未来は」

言い方を迷っていたのか、深く考え込んでいたジャイアンがやっと口を開いた。

「二人が島を発見するのはかなり時間がかかる」

そうジャイアンが言葉を発すると、願いがかなう証のオーラが二人とムクの周りを包んで光った。その姿を見てジャイアンは少し安心した表情を浮かべた。のび太たちは後ろで聞きながら、なるほど、と感心した。

「二人は島につくまでに沢山の不運に襲われる」

「二人は島につくと最悪な出来事にあう」

「二人はこれから出会う島の民とうまくやっていけない」

「二人は……」

ジャイアンは二人とムクが無事に島に辿り着き、この先この時代で苦勞せず生きていけるようにウソを言い続けた。

「たけしさん……ありがとう……」

テラはジャイアンの優しいウソを目を閉じながら聞いた。その想いを感じれば感じるほど、これから来る悲しい別れへの辛辣な気持ち

が大きく膨れ上がり、こらえきれずに涙が瞼から流れ落ちた。

「テラ……」

のび太たちはテラの想いを知っている。その健気に流れ落ちる涙はのび太たちの目も潤ませた。みんなに背中を向けているジャイアンは、テラが涙を流す前から泣いていた。泣きながらも声を震わせないうように必死に耐えながら、二人が無事に島につけるように心苦しい言葉を言い続けた。

ジャイアンの背中にいるドラえもんたちにはジャイアンの涙は見えていない。その意地らしく振る舞うジャイアンの姿をアポロンは目を逸らさずに見つめていた。そして気が付くと敬意を込め、ジャイアンに対して自然と自らの頭を下げていた。

「……おれは……これからもずっと……」

「……たけしさん……？」

今まで続けていたウソとは明らかに違うと思える言葉をジャイアンが話し始めたため、テラはその目をゆっくりと開けた。

「ずっと……おれは……」

『ジャイアン？』

ジャイアンはそこまで話してしばらく沈黙した。小刻みに身体を震わしていたジャイアンは、突然ソノウソホントを素早く外し、心の内の想いを大声で叫んだ。

「テラのこと……絶対に忘れないから!!」
「!？」

「たけしくん……」

「たけしさん……」

『ジャイアン……』

涙しながらも懸命にニカツと歯を見せる笑顔を作ったジャイアンに、テラは嬉しさのあまり両手で口を覆っていた。

(あの笑い方!?)

アポロンは一つの思いを抱きテラを見つめた。テラは溢れる涙をそのままに精一杯の笑顔で答えるのだった。

「はい……わたしも絶対に忘れません！」

そう言つてテラは勢いよくジャイアンに抱きついた。予想外の行動にジャイアンは真つ赤になつて直立姿勢のまま固まった。ドラえもんたちも驚いた。アポロンはこんな積極的なテラを見るのが初めてのように、普段は見せない意外な驚きの表情を見せた。

「……生きる時代が違うということだが、こんなに切なく苦しいものだとは思いませんでした……」

テラはジャイアンから離れ一歩下がりながら、そうつぶやいた。

「寂しいですが……お別れですね」

「ああ……元気でな」

「はい。たけしさんも」

「おれは元気だけが取り柄だからな！」

ドンと胸を叩き笑つてみせるジャイアンに、テラも精一杯の笑顔で応えた。

「ムク！ おれの代わりにしっかりと二人を守ってくれよ！」

ワンツ！

ジャイアンに頼りの言葉をかけられたムクは、任せろ、と言うように尻尾を目一杯振りながら元気に返事をした。

「それじゃあ、行こうか」

「二人共！ 元気でね！」

「さようなら！ 素敵な時間をありがとう！」

「さよなら！」

「じゃあな!!」

ドラえもんたちは勢いよく次々とタイムマシンの入り口に入つていった。

「みなさん！ ありがとうございます！ この御恩は一生忘れません！」

「みなさん！ 本当に……本当にありがとう！」

『元気でねー!!』

その言葉を残してタイムマシンの入り口は閉じた。あの激しい戦いや絶望的な状況が嘘だったように、ドラえもんたちのタイムマシンは普段と同じように一路現代に向かつて足早に進む。

のび太たちは安堵しながらも今回の冒険ほど怖いものはないと心底感じていた。ドラえもんの道具がなければ全てが恐怖に転じる別世界。今回の旅は、しばらく冒険は控えよう、と全員に考えさせるほど強烈なインパクトを与えるものだった。

「しずかちゃん……アポロンさんにはあれで良かったの?」

ちよつと嫉妬気味に口を尖らせたのび太は、不本意ながらも我慢できずに直接しずかに聞いてみた。

「ええ。一時だけど王子様とのラブロマンスの雰囲気味わえたんだもの。十分よ」

「そうなんだ、なんか……意外」

「夢は所詮夢よ。それにアポロンさんにはもっと相応しい人が現れるわ。不思議にそう思うの」

「ふーん、そういうものなの?」

「そういうものよ」

しずかの淡白な答えが意外だったのび太であったが、その言葉を聞いて少し安心した表情をみせた。

「それより、たけしさん! とってもかっこよかったわ! あたし、聴いててキュンときちやった!」

「うっ……」

祈るように両手を組んで急に振り向いたしずかの思いもよらぬツツコミに、ジャイアンは赤面しながら慌てて背中を向けた。

「うん。さつきもソノウソホントをうまく使ってたしね」

「「いないいないシャワー」での攻撃もね。あれは持ち主のぼくでも思いつかなかったよ」

「ほんとカッコよかったよ。最後、ソノウソホントを“外した”あたりは特にね」

そう言ったスネオの頭には、例のごとくジャイアンの拳が垂直に落とされた。

「いたっ! え? なんで? 褒めたのに!」

「……なんとなくムカついた」

「何それ!? ひどいよジャイアン」

「うふふ」

「あははは」

道具が使えないとう最大級難度の冒険から帰還した一同は、ここにやっとな安心の笑いをあげた。

笑い声に包まれたタイムマシンは、皆を安全な普通の世界に戻すべくタイムホールを進んでいった。

◇

ドラえもんたちの別れの言葉を残してタイムマシンの入口は閉じた。それでもテラはみんなを見送るその手をしばらく振り続けた。場の静けさと波の音でみんなが居なくなったことに実感が湧くと、テラは隣にいるアポロンに寄りかかり目を閉じた。小粒の涙がその頬を伝ってゆつくりと流れ落ちる。

「テラ……時代は違いど想うことはできる。ぼくたちの想いが彼らの時代にまで届くように、これからできることを精一杯やっていこう」
「はい……兄さん……」

アポロンは哀しみに暮れるテラの頭を優しく撫で続けた。ムクはジャイアンに頼まれた約束を守るように、身体を廻らせ二人を優しく包み込んだ。島を襲っていた雨雲はいつしか消え、これからの航海を暗示するかのよう雲一つない空が広がっていた。

◇

たった四日間の短い、そして最も危険な冒険はこうして終わりを迎えた。

エピローグ 『現代』『過去』編

◆エピローグ：壺 『現代』篇

冒険から帰ったのび太たちは夏休みも終わりいつもの日常に戻っていた。普段同様、気の抜けた状態で社会の授業を受けていたのび太は、鼻と上唇で横になった鉛筆を支えながら窓の外を見ていた。

「では、この人物のことを誰かに説明してもらおうか……えー……野比……野比！ 聞いているのか！」

「え!? あー! はいはい! ……え……と……なんでしよう?」

そののび太の慌てつぶりを見てクラス全体がドツと笑いを起こした。

「くーっ! 六十四ページ!! その人物の説明をしなさい!」

「あーはいはい! えーつと六十四ページ、と。天照大御神という人物は太陽の神として言い伝えられており、いわゆる天気の子とも言うわ……これ……?」

「……野比? どうした? 続けなさい」

先生にそう言われたにもかかわらず、のび太はジーツと食い入るように教科書を眺め沈黙を続けた。

「このペンダント……テラだっ!!」

「何? 何を言つとるんだ? 野比」

「あれから無事、この日本に辿り着いたんだ!!」

「ええっ!」

「まさか!」

「ホントかのび太!」

のび太の言葉に反応し、しずか、スネオ、ジャイアンも教科書を凝視しだした。

「骨川! 剛田! 源くんまで……一体何を言ってるんだ?」

「わーい! わーい! あれ? こっちのこの剣って……王家の剣!?!」

「え!?! じゃあこれは……アポロンさん!」

「す、須佐之男ー!!」

「ぬぬぬ……野比! 骨川! 剛田! 源! 四人共廊下に立ってな
さーい!!」

◆エピソード：式 『過去』篇

果てしなく続くと思われた水平線は思いの外早くに途切れ、二人の目の前には大きな大陸がその姿を見せていた。アポロンは船を崖の洞窟に隠すように操縦し鮮やかに接岸してみせた。

「さて、しばらくの間に住居はこの船としても、食料の調達はしなければいけないな。テラ、危険だからここで待ってて……」

そう言いかけたアポロンの腕を掴んだテラは首を大きく左右に振った。

「わたしも行きます」

「しかし、どんな危険があるか……」

「覚悟の上です。でもこの地で今の兄さんが危険に晒されることはないと思います」

「だったら……」

「心配しているのはその逆です」

「逆?」

「はい。兄さんがわたしを守るためにこの地のものへ攻撃してしまう可能性を危惧しています」

「……」

「ですから兄さんが好戦的になったと感じたら、わたしが兄さんを引っ張ってそこから逃げます。これは一緒にいないとできませんので」

「……かなわないな……わかったよ。ぼくの監視をテラにお願いしよう」

「はい! 任せてください!」

テラは軽くガッツポーズをとって答えた。ムクもテラの意気込みに呼応するように元気に返事をした。

アポロンはフツと笑い船から降り、テラに手を差し伸べ未知なる島へと上陸した。二人とムクは岩場から近くに存在が確認できた森の方へと歩みを進めた。

「雰囲気はムーの森と変わらないな……」

「そうですね」

奥へと歩を進めていたその時、少し先の方から男性らしき人の悲鳴が聞こえた。

「人か!？」

アポロンは素早く身構え、王家の剣に手をやった。

「何かに襲われてるようです！ 行きましよう！」

「おい！ テラ！」

(全く……いつからこんな行動的になったんだ?)

アポロンは見慣れぬテラの行動に驚きを隠せなかった。ムクはテラを守るべくしつかりと離れずに並走していた。

「確かこつちの方から……」

「テラ！ こつちだ！」

アポロンは複数のオオカミに襲われている男の姿を見つけ駆け寄っていった。

「おい！ 大丈夫か!？」

「!？」

茂みから突如現れたアポロンにオオカミ達と男が反応した。男は腰を抜かして立てない様子だった。オオカミ達は狩りの邪魔をされて腹が立ったのか、標的をアポロンに変えて一斉に襲いかかってきた。

「来るか！ 受けて立つ！ 雷……」

「兄さん！ ダメです！」

そう言つてテラがアポロンの前に立ちはだかり雷光による攻撃を制止した。

「なぜだ!？」

「ここで雷光を撃つては、あの人にわたしたちは脅威と見なされます！」

「ならば直接剣で！」

「それもダメです！ 力は彼らにとって脅威として映ります！」

「では、どうしろと!？」

ムクもテラに危害を加えようとするオオカミ達に対して威嚇を行おうとしたが、すぐにテラに止められた。

「ここはわたしに任せてください。ムクも大人しくしててね」

オオカミ達の距離が徐々に近づいているにもかかわらず、テラは冷静な態度で懐からある袋を取り出し、その中に手を入れた。

「お食べなさい！」

叫ぶテラの手から放られた丸い形状の固形物が、それぞれオオカミの口の中へと収まっていった。

モグモグぐくん！

オオカミ達は思わぬエサを得たことで少し戸惑ったが、すぐに我に返り再びテラの方に走り出した。

「おすわり！」

テラの命令が響き渡るとたちまちオオカミ達はその場に座り、尻尾をパタパタと振り始めた。テラはニコリと笑い、オオカミ達に近づいて頭を撫でてやるのだった。

「これは……一体?」

「ドラちゃんさんからもらった道具よ。このお団子を食べた動物はおとなしくなって何でも言うことを聞くようになるって言ってたわ。ムクともこれで仲良くなったのよ」

アポロンは啞然としてテラを眺めていた。その堂々とした振る舞い、迷わない決断と優しい作戦……自分の兄としての威厳はどこえやら……と。

(全く……どれだけの影響をテラに与えんだ……なあ? たけしくん)

そう思いながら、にこやかにオオカミ達と戯れるテラの元へムクと共に歩み寄っていった。

「あ、あの人に自己紹介しなきゃね。仲良くなれると良いんだけど……」

「そうだね」

テラはオオカミ達に二度と人を襲わないように言い聞かせ森に逃した。二人はオオカミに襲われていた一人の男の元へと近づき、害はないという意味を込めて会釈をした。

テラは自分の胸に手をやり、わたしはテラと言います、と目の前の男に伝えた。

「I, m Terra」

「? なんじやて? あまてら……さんだか? 妙な名前じやお」

二人は男の返答を聞いて驚いた。

「たけしさん達と同じ言葉!」

「じゃあ、この大陸は彼らの!」

男は落ち着きを取り戻し、ゆつくりと立ち上がり尻の土を払った。

「いやー、助かったでよ。あんがとなあ。しかしお前さんは凄えのお。オオカミ達をあない風に手懐けるなんて初めて見たぞ。あんたーあれか? 獣の神様か何かか? はっはっはっ!」

獣の神様というフレーズがあまりにも自分にそぐわない思いから、ついテラは吹き出して笑ってしまった。

「自分のことなのになくは笑つとるんじや? それよりも弟くん! 姉ちゃんに頼ってばっかじゃ男が廃るぞ!」

「え!?!」

ぼくのこと? と疑問をいだきながら自分で自分の顔に指差すアポロンを見て、テラは後ろを向いて顔を隠しながら肩を震わせ必死に笑いをこらえていた。

「やれやれ……ま、この際、弟でもいいか。双子なんだし」

「ふふ、それもおもしろいですね」

「おれっちの村にはよお、ツクヨミさんっていう、そりやあすんごく強いお人がいてな。弟くんもおらと一緒に稽古つけてもらおうといいべさ」

「け、稽古ですか?」

「んだ」

さすがに稽古をつけてもらえと言われるとは思ひもしなかったア

ポロンは、つい驚いた高い声で返事をした。

それを横で聞いていたテラは、達人級の兄への稽古勧誘がよほど可笑しかったのか、またもや顔を横に向け笑いをこらえていた。

（やれやれ……しかし、それで仲良くなれるのならいいか）

笑いをこらえるテラの方を見ながらアポロンは小さく笑った。

「ほれ！ 助けてくれた礼ばすつから、うちの村さ来い！ しっかし面白い名前だんべなく「あまてら」さんか〜」

「あ、そのことなんですけど……」

それは正式な名前ではない、とテラが否定の言葉をかけようとした時、遠くから別の男の声が聞こえてきた。

「おーい！ どこだ〜？ 大丈夫か〜？」

「お！ ツクヨミさんだべ。おおうい！ ここにいるだ〜！」

草藪を掻き分けてアポロンたちの目の前に現れたのは、二メートル程の背丈の大男だった。助けた男の言うとおり、確かに武術の達人のように身体つきはガツシリしており、大抵の獣は太刀打ちできないであろうオーラをその風貌から醸し出していた。ボサボサの長髪は肩付近まで伸び、その前髪が目を覆い隠していた。そのため「どういう人物か判断し辛いな」とアポロンは少し警戒心を強めた。

「あれ？ アポロンにアルテミスか？」

『!?!』

突然自分たちの名前を言い当てたその男に対し、二人は瞬時に警戒体勢をとった。ムクも二人のオーラを感じ取り、低い唸り声を上げて警戒した。

「ははは！ 俺だよ！ 俺！」

そう言っただけの大男は左手で前髪を上げておデコを見せるようなポーズをとり、その顔をあらわにした。

「アレス兄さん!？」

「アレス兄様！」

「おうー！」

ニカツと歯を見せ満面の笑みを浮かべるアレス。二人の頭には様々な想いが怒涛のように押し寄せ、しばらく身体が硬直していた。

徐々にアレスが生きていたという事実を実感し始めた二人の目には、想いのこもった大粒の涙が溢れ始めた。

「ん？ どうした二人共。まさか俺を忘れちゃった……うわっ!!」

アレスが話している途中に二人は勢いよくアレスの身体に飛んで抱きついた。さすがのアレスも二人がかりのタツクルには驚いた様子で、その場で押し倒される格好となった。

二人はその絶対的な安心感から心が緩み、ただひたすら、アレスの大きな胸の中で思いつきり泣いた。

「アレス兄さん……生きてた……良かった……」

「アレス兄様……良かったです。本当に……」

泣きながら抱きつく二人を見てアレスは少し戸惑っていた。

「なんでえ、ツクヨミさんの知り合いだったんけ。道理で強いはずだ」「まあ、知り合いではあるんだが……おいおい、お前たち！ ちと大袈裟ではないか？ まるで俺が死んでみたいだぞ？」

アレスの戸惑いの言葉を聞いた二人は、涙で濡れた互いの顔を見合ひ、今度は笑いながらアレスに抱きつくのだった。

「お、おい……なんなんだ？ まったく……」

「レムリアが嘘つきで良かったですね、兄さん」

「ああ」

自分が犯してしまった罪は消えることはない。でも今はこの訪れた奇跡的な幸福に素直に感謝し、さらに前に進もうと堅く心に誓うアポロンであった。

「何があったかはわからんが……とにかく村に行こう。話はそこで聞く」

『はい』

「……あの大きい狼は？」

「あ、あの子はムクといって、わたしを守ってくれる騎士です」

ワウッ！

大人しくお座りの姿勢を保っていたムクは、テラから自分に話題が振られたと知ると、嬉しそうに尻尾を振りながら元気よく返事をした。

「騎士!? ……驚いたな。アルテミス、いつの間にそんな特技を?」

「もう! その名前で呼ばないでくださいって言ったでしょ!」

「何だ、まだこだわってんのか? いい名前だと思っぞ?」

「だって……あんまり女の子らしくないんだもの……」

「そうか? ……しかし、しばらく見ないうちに何かこう、強くなつたな、テラ。恋でもしたのか?」

「アレスの直球な質問に不意をつかれたテラは一瞬で顔が真っ赤になつた。」

「あれ? なんだ、当たりか」

「テラはあまりの恥ずかしさに声も出ず、ただひたすらアレスの身体をゲンコツで叩きまくった。」

「ははは! よし! 再会を祝して今夜は宴だな!」

「それがいいべ!」

「アポロン。お前もずいぶんと鍛えたみたいだな」

「いえ、アレス兄さん程ではありません」

「ははっ! 相変わらず固っ苦しいな、お前は!」

「そう言うとアレスは両脇にアポロン、テラを抱きかかえるように腕を回し、元気よく村のある方向に歩き始めた。」

「二人の顔に木漏れ日が落ちる。アレスの温もりに癒やされたアポロンとテラの顔には、未来ある笑顔が戻りつつあった。」

エピソード『?』篇

◆エピソード：参 『?』篇

崩壊が始まっている島の洞窟の中。さつきまでドラえもんたちがいたその場所には人の気配はなく、ただ地鳴りの音が鳴り響き、不定期に地面が揺れていた。

壁際に崩れた天井らしき岩盤の下からは四本の線が伸びていた。その線は、かなり先にある別の壁にもたれ掛かっている一人の老人の元へと続いていた。

地震が鳴り止まぬ洞窟の中、崩落も恐れずその線を辿り、余裕をもった足どりでその老人の元へと向かう二つの人影があつた。彼らが老人の元にたどり着くと、上官と思わしき人物が部下に命令した。

「全て回収しろ」

「え!? 老人だけでなく、このロボット二体もですか?」

「そうだ」

部下と思われるその男は、上司の命令に驚いたかのように咄嗟に聞き返した。二体のロボットは、老人の身体を守るように互いに向き合った姿勢で首元を合わせスクラムを組むように覆いかぶさっていた。

決して老人に圧をかけないように……その身体に触れないように……崩落から守るように……残された片腕を補助の支えとして使い、不格好ながらも懸命に強固なアーチ状を保っていた。地面に刻まれていた四本の線は、完全に停止しているその二体のロボットの膝にそれぞれ繋がっていた。

「では運びます」

部下の男が片手を前に出すと、老人とロボット二体がフワツと空中に浮いた。手も触れずにそれらをそのまま軽々と移動させ、自分たちに通ってきたであろう空間のトンネルに難なく運び入れた。

部下が言い渡された仕事をしている時、上官は周囲を念入りに見回していた。

(プロテクトの盾と……ノンプロテクトのマント、リング。ひみつ道具のルーツの数としては問題ないな。石ころぼうし、ラジコンねんど等は回収済み。あとは……タイムふろしきか)

「上官殿！ 急いでください！」

上官は部下からの声を聞くと、ゆっくりと向きを変え空間トンネルの方に向かって歩き出した。

「何をなさってたんですか？」

そう聞かれた上官は、部下が運び忘れていた老人の杖を持った右手を見せた。

「あ！ も、申し訳ありません！」

部下の肩をポンと軽く叩き、入れ替わるように上官は空間トンネルの奥に入った。部下が空間のトンネルを閉じると同時に、洞窟内には大きな揺れが起き巨大な天井が落ちてきた。凄まじい轟音と共に、洞窟は崩壊し、かすかに炎がくすぶる調査船と共にその姿を消した。

□

洞窟より運ばれた老人とロボット二体は、とある部屋に運ばれ、それぞれの台の上に寝かされていた。その部屋は台以外には何も無い、とても簡素で無機質な部屋だった。

老人たちを台に寝かせ終えた部下は、上官に問いかけた。

「上官殿、このあとはどのように？」

「まずはこの老人を生き返らせる」

「!? この世界での時間操作は禁じられているのでは？」

「この世界」ではな。ここタイムパトロール巡視艇の中は「この世界」ではない。治外法権というやつだ」

そう言って上官が台にあるボタンを押すと、横のランプが赤く灯った。しばらくしてランプが赤から青に変わると、隣のもう一つのボタンを押した。

「あ、でも逆時計だと記憶まで戻ってしまうんじゃないか……？」

「だから最初に記憶だけ複製しただろ？」

上官は最初に押したスイッチを指さして説明した。

「あ、なるほど……」

老人を戦う前の状態にまで逆時計で戻した後、最後のスイッチを押して記憶の更新を行った。

「でも、なぜ記憶を更新するのですか？」

その問いかけを聞いた上官は軽く顔を上げ、部下の方を見て答えた。

「この老人にはこの後も生きていてもらう必要がある。だが、自分の国は滅びの道を辿ったという事実だけは知っておいてもらわなければならぬ」

「はあ……」

「この老人を別の大陸に運ぶのが今回の我々の任務の一つだ。大陸に運んだ後に自分の故郷である島を探しに旅に出られては困るからな」
老人への処置が終わり、台のランプが全て消えた。しかし老人は動かない。

「……動きませんね……」

「眠らせてあるからな、当然だ。我々の姿を見られても困る」

「そういや、そうですね」

「あとは……名前だな」

「名前ですか？」

「そうだ。この老人の記憶を改ざんし、名前を変える」

そう言いながら上官は指で空中に文字を書き、老人の頭にその文字を投げ込んだ。

「ゼウス？ って、あのゼウスですか？」

「ほう……お前にしてはよく知ってたな」

「長くに伝わる伝承ですからね。流石に多少は聞き覚えが」

「そうか」

仕事を終えた上官は、部下の言葉にはあまり興味なさそうに軽く返事をしながら台から離れ、部屋の出口に向かって歩き出した。

「あれ？ ロボットの方はいいんですか？」

「ロボットはそのまま、また別の場所に運ぶ」

「別の場所ですか？」

老人のみの対応は予想してなかったのか、部下は上司についていくように急いで部屋を出た。二人は話しながらコクピットに向かう廊下を歩き出した。

「この時代から更に一万八千年前のとある惑星だ」

「別の惑星……また何でそんなところまで……」

「さあな。上が言うには、また彼らに繋がるとのことだが……それ以上は俺も知らん」

「はあー……大変な子供達ですね」

「まったくだ。頭が下がる」

「そういえば、あの場から一人逃げ去った男の処分はどうするのですか?」

「あの男は放っておいていい」

「大丈夫なんですか?」

「史実には常に語り部が必要だからな。現実離れた話は自然と伝記に変わる」

「ああ……なるほど」

廊下を歩く二人の足音が繰り返し響く中、任務に納得していたと思われた部下の足音が突然止まった。

「……? どうした?」

不自然な止まり方が気になったのか、上官も足を止めて部下の方を振り返った。

「いえ、伝記で思い出したんですけど……ゼウスとアポロンはいいんですが……何で妹がテラなんですか? 確かアルテミスじゃ?」

上官は滅多に見せないやや驚いた表情で部下の顔を見つめた。

「な、なんですか?」

「いや、よく知ってるな、と感心してたところだ。まさかお前がそういう伝記に興味があるとは……」

意外だな、と口元を緩めながら上官は再び歩き始めた。

「なんですか、もー」

部下も再び上官に追いつくように、やや急ぎ足で歩き始めた。

「アルテミスか……狩猟の女神というイメージだが……あの少女から

はそんな気配は微塵も感じなかったな」

「ですよ。まあ、伝記なんてそういうものかも知れませんが」

たしかに、と上官はフツと軽く笑った。

「……添え名というのを知ってるか？」

「添え名……別名のことですか？」

「そう。アルテミスにも幾つか添え名があつてな」

「へー」

「その一つが「アルテミス・アグロ……」

そう話しながら、二人はコクピットに繋がる階段を上がつていった。